池波正太郎

真田太平記

(二) 秘密

新潮文庫

新潮文庫

真田太平記

第二巻　秘密

池波正太郎著



新潮社

新潮文庫

真田太平記

第二巻　秘密

池波正太郎著

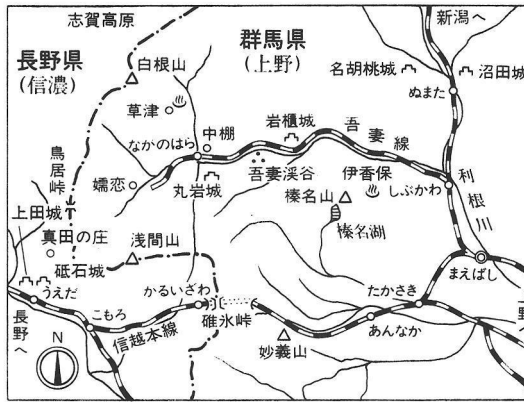


新潮社版

3912

真田太平記

第二巻・秘密


志賀高原
長野県
(信濃)
白根山
群馬県
(上野)
新潟へ
名胡桃城
沼田城
ぬまた
草津
中棚
なかのはら
岩櫃城
吾妻線
鳥居峠
嬬恋
丸岩城
吾妻渓谷
伊香保
しぶかわ
榛名山
利根川
上田城
真田の庄
浅間山
榛名湖
砥石城
うえだ
かるいざわ
まえばし
たかさき
上野へ
長野へ
こもろ
碓氷峠
信越本線
妙義山
あんなか
N

上田築城

一

ねむり燈台の淡い火影に、仰向いて寝ている女の顔が見える。
こちらから見ると、灯りの蔭になっている横顔であった。
額が張り出してい、その下に眼があるのだが、いま、その眼は閉じられている。
眼のあたりから、
（この女の顔は、すぐに、口となってしまう）
と、真田安房守昌幸は、いまさらながら、女のあるかなきかの鼻すじをたしかめつつ、
（この女は、おれが抱いた女のうちで、もっともまずい……）
などと、おもいをめぐらしていた。
そうした、埒もないことに強いて自分の念慮を向けようとしている今夜の昌幸であった。
このところ、毎夜、昌幸は熟睡したことがない。
これからの真田家を、
（どこへ、どのように持ち行くのがよいのか？）

思い惑っていた。
方法は、いくらもある。
だが、失敗はゆるされぬ。
女は、前に上州・沼田の城で昌幸の伽をしていた、お徳であった。
いま、お徳が、真田昌幸に添寝をしている寝所は、沼田城内にあるのではない。
岩櫃の城内でもなかった。
岩櫃には、昌幸の正室・山手殿が暮らしている。そこへ、お徳を迎え入れるわけにはゆかぬ。
昌幸は、両手を胸のあたりで組み合わせ、横向きになり、小柄の躰を海老のように曲げ、お徳からやや身を引いて、
（どう見ても、まずい女じゃ）
と、ながめている。
だが、お徳の躰は、
（うまい……）
のだ。
いまは、むしろ、昌幸のほうが、お徳に添寝をしてやっているようなかたちに見える。
半ば、はだけた寝衣の胸もとから、こんもりとした乳房の上部がのぞいて見え、お徳の深い寝息と共に乳房も大きく呼吸をしている。

お徳の躰は、まるで小山のように見えた。
昌幸は片肘をついて半身を起こした。
ゆっくりと波を打っているお徳の乳房が、まだうす汗にぬれている。
昌幸が右手をのばし、お徳の胸もとをひろげて、大きな肉体からはおもいもおよばぬ小さな乳首を、爪で弾いた。
「むうん……」
微かにうなったが、すぐにまた、健康そうな寝息がきこえはじめた。
ねむりに入ったら最後、この女は、
（火をかけられても、目がさめぬにちがいない）
と、昌幸はおもった。
つまらなそうに舌打ちをして、昌幸は仰向けになって寝た。
眼を閉じたが、ねむりは来ない。
このごろは折にふれて、
（去年の、いまごろは、何があったのだったか？）
そのことばかりをおもい起こそうとしている自分に気づくのだ。
去年のいまごろは……。
甲州攻めに大勝利を得た織田信長が、徳川家康の先導により、意気揚々と東海道を安土へ凱旋しつつあった。

それから二カ月もたたぬうち、中国出陣を目前にひかえ、京都の本能寺で信長は死んだ。
そして、主信長・信忠父子を討った明智日向守光秀も、すでに、この世の人ではない。
あれから、一年目の夏が、間もなくやって来ようとしていた。
「おい……これ……」
たまりかねて昌幸が、お徳の躰をゆさぶるようにした。
「むうん……」
「起きよ、これ……」
「う、う……」
「これ、おい……」
「あ……」
「酒をもってまいれ」
「お目ざめで、ござりまいたのか……」
「うむ」
お徳が、のったりと半身を起こし、
「また、今夜も、ねむられませぬか？」
「うむ……」
「いったい、どうしたことであろ」
と、お徳は、遠慮もなく粗笨な口のききようをするのだが、そのことについては一向に怒

らぬ昌幸なのである。
「どうもこうもない。ねむれぬからねむれぬのだ」
「はて……どうしたことであろ？」
また、同じことのくりかえしになってしまう。
家臣たちの前で、真田昌幸は、このような姿を見せぬ。
山手殿や、息子たちの前でもだ。
彼らは、すべて、昌幸のおもうところへ、つき従ってくれるはずだ。
昌幸を信じ、おもい迷うことは、
「いささかもない」
といった顔つきをしているのが、昌幸にも、はっきりと看取される。
それは何よりも心強いことであったし、そうした彼らの前で、おのれの迷いを、
（毛すじほども見せてはならぬ）
昌幸は、おもいきわめていた。
それだけに、お徳と二人きりになると、三十七歳にもなった真田昌幸が、童子のごとく卒直な言動をとることになるのであろうか……。
女にもよる。これまでに昌幸は、お徳へ相対しているときのような、何も彼もかなぐり捨てて素直になれた女は、ほかに、一人しかいない。
その女は、十七年前に亡くなっていた。

しかも、この寝所においてである。
お徳が、寝所から出て行った。
この屋敷は、六間ほどの小さなものだが、五人の屈強な男たちによってまもられている。
この五人は、いずれも真田家の草の者であった。
女は、お徳ひとりきりである。
屋敷は、真田の庄の近くにある。
去年。別所の安楽寺にいた向井佐平次を、昌幸の二男・真田源二郎が馬に乗せて、真田の庄へ連れて来る途中、突然、源二郎が供の家来たちからはなれ、馬を森の中へ駆け入れた。
森をぬけた源二郎は、馬をとめ、野原の彼方に見える木立の一郭を、いつまでも凝視していたことがある。
（何を見ておられるのか？）
佐平次は、不審にたえなかった。
そのとき、源二郎は佐平次に、こうささやいたはずだ。
「いまは、あの木立の中に、だれもおらぬ」
さらに、
「おれはな、あの木立の中の、小さな館で生まれたのだ」
と、いい、
「だれにも、このことをいうなよ。いわぬがよい」

佐平次へ、念を入れた。

その木立の中、だれもいなかった館の中で、一年後のいま、真田昌幸が、お徳と酒を酌みかわしている。

お徳は、真田家の鉄砲足軽で、すでに討死をとげてしまった岡内喜六の妻だった女で、喜六との間に一人の子もなかった。この夫婦は沼田でも酒好きで通っていたものだ。

酒は、当時、貴重な嗜好品であったから、喜六は、ずいぶんと苦労をして酒をのんだそうな。

「もっと、のめ」

「のんでも、よろしゅうございますか？」

「うむ」

「御屋形さま……」

「なんじゃ？」

「戦は絶えませぬなあ」

「絶ゆると見えたが、絶えぬ」

「喜六も、戦で亡くなりました」

「おう」

「可哀相に……」

「おもい出すのか、喜六を……」

「あい」
「わしと喜六と、どちらが好きか？」
「うふ、ふ、ふふ……」
「何を笑う」
「どちらも好き……」
「こやつめ、ぬけぬけと申す」
「うふ、ふ……」
ふくみ笑いをしながら、お徳が昌幸の肩をぽんと打った。
「こやつ……」
「うふ、ふ……」
「は、はは……」
などと、他愛（たわい）もない戯言（ざれごと）をかわしているうちに、いつしか昌幸も気分が和んできて、どうやらねむりにさそわれてくるのであった。
「御屋形さま……」
「うん？」
「なれど、なあ……」
「何が、どうした？」
「人は、何故、戦をするのでござりましょう？」

「ふうむ……」
「ねえ、何故？」
「わからぬ」

二

去年の本能寺の変の知らせが、中国出陣中の羽柴秀吉の耳へとどいたのは、六月三日の夜ふけだったという。

早くも翌日の夜に、このことを秀吉が知ったのは、堺の商人で、本能寺の茶会に出ていた長谷川宗仁が、急使を走らせたからだといわれる。

秀吉は、依然、備中（岡山県・西部）の高松城を水攻めにしつつ、織田信長の本陣が到着するのを待っていた。

そこへ、おもいもかけぬ変事の知らせがとどいたのである。

謀叛を起こして、信長を討った明智光秀は、すぐさま毛利方へ、

「信長を討ち取ったから、これよりは共にちからを合わせて、天下の事をはかることにいたそう」

と、使者を走らせたはずだ。

秀吉の脳裡に浮かんだのは、先ず、このことであったにちがいない。

しかし幸運にも、このとき、

「自分が切腹をして果てれば、城中の者たちの命は、たすけて下さるか？」
と、高松城将・清水宗治から秀吉へ申し込んできたのである。
高松城内の飢餓状態は、すでに限度をこえていた。
毛利の本軍が、いま、高松救援に押し寄せるための準備を急いでいることを、清水宗治としては、
「想像ができたとしても、確認することを得ぬ……」
状態であった。
まんまんたる水と大軍とに包囲されつくしている高松城内に、外からの情報は何ひとつ入らぬこと、いうをまたない。
「よし！」
羽柴秀吉は、即座に決断し、清水宗治へ、
「承知した」
と、返事をあたえた。
六月四日の朝。
清水宗治は城内から舟で水面へ漕ぎ出し、切腹した。
秀吉は約束どおり、城中の将兵を毛利方へ送り返し、同時に、毛利方との休戦交渉をおこない、備中・美作・伯耆などの国を、
「織田方へゆずりわたす」

という条件で、講和を成立せしめた。
毛利方では、信長が大軍をひきいて来攻することを知り、休戦のとりきめを急いでいたところであった。
このときの羽柴秀吉には、幸運が積み重なってきている。
それは……。
信長の背後から、絶えず、これを脅していた武田信玄・上杉謙信の両雄が相次いで急死し、一挙に幸運と栄光とが信長を見舞ったときに似て、
「恐ろしいほどの盛運よな」
と、のちに真田昌幸をして嘆ぜしめたほどのものだ。
このときにいたって、まだ、毛利方では本能寺の異変を知らぬ。
一説には、明智光秀から毛利方へさし向けた密使が、あやまって羽柴秀吉の陣中へまぎれこみ、捕らえられ、光秀の密書は皮肉にも秀吉の手へわたってしまったともいわれている。
秀吉は、少数の部隊を姫路の居城へ先発せしめ、諸般の準備をととのえさせることにし、みずからは、ゆるゆると兵をまとめ、六日の昼ごろに、備中高松を発し、姫路へ向かった。
そして、折からの豪雨をつき、
「急げ、急げ！」
猛然と進軍をつづけ、翌七日の夜ふけに、早くも姫路へ入った。
毛利方が信長の死を知ったのは、六日の夜であった。

「国が肥えていると、頭脳のはたらきが鈍くなるものじゃ」

と、真田昌幸が、このときの毛利方を評した。

羽柴秀吉は約二十里（八十キロメートル）を、まる一日で走り、姫路へ入った。

連日の疲れもあって、走りつつ秀吉は居眠りをし、何度も馬から落ちたそうな。

姫路へ着くや、八日いちにちを戦備にあて、六月九日の朝には、主・信長を弑した明智光秀を討つため、全軍をひきいて姫路を発したのである。

本能寺の事あってから、わずか七日にして、羽柴秀吉はこれだけのことを仕てのけた。

それこそ、

「あっという間もない……」

迅速さで、秀吉は主君の「敵を討つ！」という異議をさしはさむ余地のない名目のもとに、信長亡きのちの天下統一を目ざして躍り出たのであった。

「速いわ、速いわ」

真田昌幸は手を打って、秀吉の行動と決断をほめそやした。

昌幸が秀吉に、

「好意を抱いた……」

のは、実に、このときであったといわれている。

そのとき、徳川家康はどうしていたろうか。

本能寺の変があったとき、家康は穴山梅雪斎のほかに、五十名ほどの家来をつれ、堺見物

をすませたところであった。

明智軍に発見されれば、むろん、家康の命はない。

家康は伊賀の山中をぬけ、伊勢へ出て、白子の浜から舟で三河の大浜へ着き、五日の朝に岡崎の居城へもどった。

このときの脱出行は実に危険だったそうで、武田勝頼にそむき、家康の手引きをした穴山梅雪斎は伊賀の山中で狂暴な土民たちに殺害されてしまったほどだ。

羽柴秀吉と明智光秀が、京都と大坂の中間にある山崎で決戦をおこなったのは、六月十三日である。

秀吉は、四万をひきいて決戦場へおもむいた。

光秀軍は約一万六千。

たのみにしていた親友の細川藤孝・忠興父子も、大和郡山城主・筒井順慶も、光秀へ味方をせぬ。

「信長を討ち、これからは自分が天下の事をおこなう」

と、公表し、なじみ深い朝廷へもはたらきかけ、辛うじて、信長の安土を占拠するのが精一杯の光秀であった。

安土城は、このとき焼け落ちた。

明智方が焼いたともいわれ、信長の次男・織田信雄が焼きはらったともいう。明確な事情は、いまもってわからぬ。

とにかく、明智光秀はあわてた。
これほどに、羽柴秀吉の反撃が速いとおもわなかったろう。
秀吉は、毛利軍に押さえられて、うごけぬはずではなかったか……。
だが、こうなっては決戦を避けるわけにも行かぬ。
戦った。
戦って、一日で大敗し、光秀は妻子が待つ近江・坂本城へ数名の侍臣と共に落ちのびる途中、小栗栖の竹藪の道で、土民の槍に襲われて死んだ。
信長を討ってから、わずかに十日あまりで、光秀の、天下取りの野望は消滅したのであった。
光秀は、
「まるで、秀吉に天下をとらせるがために生まれてきたような男よ」
これも、真田昌幸のことばである。
はなしを、もとの寝所へもどしたい。
酒をのみ、
「さて、ねむるか」
真田昌幸が、横になると、お徳が唇をさし寄せてきた。
「もう、よいわ」
「御屋形さま、申しあぐることがございます」

「む……何じゃ？」
お徳が、何か、ささやいた。
それを聞いて驚愕した昌幸が、臥床の上へはね起きた。

三

お徳は、
「御屋形さまのお子を、身籠ったらしい……」
と、ささやいてよこしたのである。
「まことか、それは……」
「あい」
細められた女の両眼が、白く光っていて、それでいて口もとには謎めいた笑いがただよっている。
「み、身籠るはずはない」
昌幸が断定的にいった。
「何故、わたくしが身籠りませぬ？」
「岡内喜六との間に、かつて一人も、子が生まれなかったではないか」
「ふ、ふふ……」
「何が可笑しい。お前は石女のはずだ」

「だれが、そう申しました？」
「沼田では、もっぱら……」
「わたくしや喜六が、申したわけでもありませぬのに……」
「う……」
「私は、喜六との間にこそ、子がなかったのでござりますよ」
「な、なれば……」
「他の男が相手とならば、知れたものではござりませぬ」
なるほど、そういわれてみれば、そのとおりであった。
お徳も、まだ三十前の女なのだ。
「御屋形さまは、戦上手なれど、女の躰のことは、何も御承知ではない」
声音はやわらかで低く、何やら物憂げでさえあるのだが、いっていることは、まことにずけずけとしたもので、
「男は、みな、そうなのじゃ。御屋形さまと同じなのじゃ……」
「だまれ、岡内喜六は病に死んだのではない。真田家のため、立派に討死をいたしたのだ」
「あい。そのとおりでござります」
「丈夫で、たくましい男であったそうな」
「そのとおりでござります」
「それならば、何故、子が生まれなんだのじゃ。すなわち、徳が石女であったからではない

か」
「まあ……」
あきれ果てたかのように、お徳が昌幸をながめ、
「いかに丈夫な男にても、子種をもたぬ男が、ないではござりませぬ」
「ふむ……」
いわれてみれば、そうかも知れぬ。いや、そうした例は、いくらもある。
「まことか？……まことに、まことなのか？」
困惑しきって、昌幸が尚も問いかけた。
「あい」
「ふうむ……」
「お困りでござりますかえ？」
「困る……困った……」
このときの真田昌幸の困惑は、だれの目にも不可解としかおもえぬ。昌幸は戦国の武将であって、それならば子は多いほどよい。
源三郎・源二郎兄弟だとて、これより先、どのような戦乱のうちに討死をとげるか、知れたものではないのだ。
なればこそ、武将の正室は、夫の側妾を黙認せざるを得ない。
だが、昌幸は正室・山手殿の怒りを恐れている。

恐れているとしか、ほかに考えようがないではないか。
「それが、わたくしには、ふしぎでなりませぬ」
「だまれ」
「さ、どうなされます？」
「身籠った……女なら、よいのだが、生まれてきても……」
「まあ……」
つまり、側妾が生んだ子が女なら、山手殿を、
（恐れずにすむ）
ということなのか。
「わかりませぬなあ……」
「女を生め」
「何を、おおせられますことやら……」
お徳は、ふとやかな腕を寝衣の袖からむき出しにして、昌幸の膝のあたりを叩いた。
いかにも狎れ狎れしげな所作であった。
昌幸は、顔を顰めた。
沼田からこちらへ移って、お徳はいよいよ愛狎の度を深めつつあるようだ。
（こやつにも、何やら、のぞむところができたのか……）
であった。

いまの、お徳は、昌幸側室の座をあたえられているわけでもない。さりとて、一夜のなぐさみものにしているわけではないのだから、あくまでも正室の目を掠めたままにしておこうとする安房守昌幸に、このごろのお徳は、女として当然の不満をおぼえはじめたのであろうか。

（おれは、卑怯で、そうしているのではない）

では、何故か。

お徳にはいえぬが、この女の存在を山手殿が知ったなら、どのような行動に移るか知れたものではない。

極端にいうなら、

（徳のいのちが、危うい……）

ことにも、なりかねぬのである。

もよおしてきた眠気も消えてしまい、真田昌幸は両腕をくみ、お徳をにらむように見つめていた。

見返しているお徳が、突然、けたたましく笑い出した。

「これ、何を笑う」

「可笑しゅうて、可笑しゅうて……」

「ばかもの！」

「なれど、御屋形さま……ああ、もう……」

「笑うな。この夜ふけに……」
「あれ、もうすぐに、空が白みまする……」
「寝い。寝てしまえ」
「嘘でござります」
「な、なに……？」
「いままでに、申しあげたことは、みな、嘘でござりますよ」
昌幸は口を開けたまま、むしろ、呆然となった。
「あの、やはり、な……」
「う……？」
「わたしは、石女らしゅうござります」
「こやつ……」
昌幸が、お徳を突き飛ばした。
壁際へ大きな躰を打ちつけて、
「痛い……」
叫んだお徳が、そのままの姿で、また、笑いはじめた。その眼に泪がふきあがってきている。
「嘘をつくにも、ほどがある」
「おゆるしを……」

「何という女だ、おのれは……」
「ちょと、御屋形さまを弄うたのでござりますよ」
昌幸の唇から、舌打ちがもれて、
「怒るにも、怒れぬ……」
「ごきげんが、直りまいたか？」
「直るも直らぬもないわ」
「いま、すこし、酒を……」
「おう。持ってまいれ」
「あい、すぐに……」
お徳が出て行ったあと、昌幸は仰向けに寝て、安堵のためいきを吐いた。生き返ったような心地さえする。
お徳は、すぐに、もどって来た。
大きな木盃で、昌幸は、また酒をのみはじめる。
「お前も、のめ」
「おゆるし下されまいたのか？」
「ゆるすも、ゆるさぬもない」
「あれ、うれしい」
顔を近づけて来たお徳が、昌幸の、はだけた胸元へ唇をよせ、ちろちろと舌で胸毛をまさ

ぐる。
「やめぬか、よせ」
「こそばゆいのでござりますか？」
「ばか……」
お徳の、ひろやかな背中へ腕をまわしながら、昌幸は、
（たとえ、冗談にもせよ、あのようなことを口にのぼせるからには、この女、いつまでも、わしの側をはなれたくないと、おもいはじめているのではないか……）
と、おもった。
（わしのいのちさえ、はかり知れぬというのに……）
である。
織田信長死後の天下は、ふたたび、戦雲に包まれた。
真田家の動向は微妙であった。
信濃の一角を〔本拠〕にしている真田家は、かつて、武田家の威風の下に鎮定された東信濃が、ふたたび、諸将の侵入を受けて騒ぎはじめている中で、でき得るかぎり、有利な立場をつかみ取らねばならぬ。
祖父や父が苦闘した過去が、ふたたび昌幸の身にめぐって来た。
真田家の当主となって以来、昌幸にとって、はじめての困難な局面が展開しつつある。
「ああ。見よ。ついに、ねむれなんでしもうたわ」

昌幸は盃を放り捨て、臥床へ倒れた。
酔いはまわってきたが、気が冴えて、ねむれそうにもない。
「おゆるしを……」
「仕方もないやつめ」
「沼田へ、もどるがようございましょうか？」
「お前がか？」
「あい」
「ならぬ」
昌幸は、お徳の乳房へ嚙みつき、低い悲鳴を発したお徳を突き退けるようにして、
「だが、わしを嫌うているのなら、帰ってもよいのだぞ」
童子が甘えて拗ねているような口調でそういった。

四

明智日向守光秀の謀叛を、そのときまで、だれもが、
「気ぶりにも感じていなかった……」
ことを、どのようにうけとめたらよかったろう。
（わからぬ……）
真田昌幸のように、中央から遠くはなれているものにとっては、到底、そのときの光秀の

心境を知るべくもない。

いや、織田信長父子の身近に奉仕していた人びとでさえ、明確にこれを知ったわけではない。

突然、明智光秀は、

（いまなら、信長を討てる！）

と知った。

安土から近江・坂本の居城へもどり、さらに、丹波・亀山の城へ移って、中国出陣の準備にとりかかった光秀は、絶えず、安土から京都へあらわれた織田信長の指令を請いつつ、出陣の日にそなえた。

この間に、光秀の決意が凝固した。

光秀でなくとも、信長を討てたろう。

くつろいで、我が家の庭をながめている一人の男を、群れをなして暴漢が襲うのと同じことであった。

（いまなら、信長を討ち、自分が天下を……）

と、光秀は決意した。

しかし、彼に、その決意をさせたものは何かというと、真田昌幸には、すこしもわからぬ。

この点、昌幸のもとへとどけられていた情報だけでは、推測の足しにもならなかった。

ただひとつ、いまの昌幸に感じられることは、

（足利将軍と光秀との間に、何かがあったのではないか……）

このことである。

名のみの将軍だが、足利義昭は、いま、備後の鞆の津に住み暮らしている。

信長によって、京都を追われた義昭が、中国の毛利家をたよったのは当然といわねばなるまい。

武田家がほろびたのち、信長の手が中国へ伸び、毛利家も、これに応じて起つことになれば、足利義昭が毛利勢力を利し、将軍の権威をふたたび招来するため、さまざまな手段を講じたとしてもふしぎではない。

義昭は、信長に庇護されていたころから、密使を諸方へつかわし、信長打倒を策したりしている。

自分には兵もなければ実力もないだけに、戦国大名たちをうまくあやつり、彼らを戦わせ、争わせつつ力を殺いで行き、しだいに自分が擡頭しようというわけで、鞆の津に移ってからも、義昭の密使の蠢動は、おそらく熄まなかったろうとおもわれる。

そして、明智光秀は、かつて将軍義昭の側近にあった人物だ。

光秀の奔走によって、義昭は信長の庇護を得ることができたのである。

光秀は、その後、信長に属望され、織田家の人となって立身をとげた。

が、しかし、それからも、義昭と光秀との間に、切れかけた糸の一すじでも、つながっていたのではあるまいか……。

光秀は、毛利軍の援助を、
（たのみにしていた……）
としか、昌幸にはおもわれぬ。
（それでなくて、何で、あのような謀叛ができよう）
なのである。
昌幸は、織田信長を知らぬ。
声もきかず、顔を見たこともない。
激烈な性格のもちぬしで、癇癖が強く、おのれに逆らうものに対しては苛酷きわまる処罰をあたえ、一片の情も見せぬという風評もきいている。
（だが、このおれの眼でたしかめぬことには……）
何もわからぬと、昌幸はおもう。
いまは亡き武田信玄が、小姓だったころの昌幸に、
「信長というやつ。つくづく辛抱の強い男よな」
と、苦笑まじりにもらしたことがあった。
その当時の信長が、あくまでも下手から信玄の機嫌を損なわぬような外交政策をもって、のぞんでいたことを評したのであろう。
（こうなってみると、ぜひとも、信長に会うておきたかった……）
このごろの昌幸は、そこまで、おもいつめている。

一度でも、信長を見ておけば、織田家の家風も知れよう。家臣団の構成ものみこめたろう。すると、いま、真田昌幸が当面している困難に、進むべき手がかりがつかめたのではないか。

何故というなら、明智光秀が一瞬のうちにほろびさったのち、昌幸が予期していたように、織田家臣団の争いが起こり、それは現在、羽柴秀吉と柴田勝家との対立によって決着がつこうとしている。

その勝利者は、ついで、外部の諸勢力と戦わねばなるまい。

先ず、徳川家康がいる。

毛利氏も、手をつかねてはいまい。

関東の北条氏。越後の上杉氏もいる。

予想される、そうした波乱の中で、真田昌幸が、

「どう生きるか……」

であった。

「城だ！」

と、昌幸は夢の中で叫んでいる。

ねむれぬとおもい、おもいつつ眼を閉じてみると、さすがに酒の酔いがまわってきて、いつしか眠りにおちこんでいた。

千曲川を眼下にのぞむ断崖の上に、

「おれの城を、築かねばならぬ」

上田台地に自分の本城を築くことが、昌幸の念願である。その熱望は、もはや押さえ切れぬものになってきつつある。すでに、何十枚もの城の絵図が昌幸の脳裡にたたみこまれていた。

砥石や岩櫃の城があっても、敵が上田原へ押しつめて来たならば、どうしようもない。

甲斐の武田の威勢を背後にしてこそ、砥石も岩櫃も、その存在を誇示し得たのである。

去年、武田勝頼を岩櫃へ迎えようとしたときも、

「武田家を、甲斐から信濃へ移してしまえばよい」

その意気込みが、昌幸にあったのである。

だが、これからは、すべて、

「おれひとりで、おれの国を、まもりぬいて行かねばならぬ」

そうなれば、上田台地に本城を置き、上州・沼田との幹線をしっかりとむすびつけることができる。

この幹線は、上信二州をむすぶ、もっとも大きなものといってよい。

沼田城は、いま、ふたたび真田昌幸の手にもどっている。

本能寺の変を知った小田原の北条氏直は、

「機を逃すな」

すぐさま大軍をひきい、上州へ進出した。

厩橋城にあった滝川一益は、これを迎え撃ち、上州と武州の国境で北条軍に大敗してしまった。

「気の毒な……」

とおもったが、昌幸も、こうなれば黙って見ているわけにはゆかぬ。沼田城代として入って来た滝川儀太夫（一益の甥）を追いはらい、矢沢頼綱をもって入城せしめたのであった。

「もし……もし……御屋形さま……」

よびかけるお徳の声に、昌幸は目ざめた。

「何じゃ？」

「近江より、草の者が駆けつけたそうでござります」

五

真田昌幸が、館を出ると、霧のような雨がふりけむっていた。

「お供を……」

という館の草の者へ、

「かまうな」

いい捨てて、昌幸は馬にまたがった。

いま、昌幸は、ここからも近い砥石城にいる。

織田信長の死後、信濃が騒擾し出したので、沼田や岩櫃にいたのでは、

「いざとなったとき、間に合わぬ」
からであった。
砥石城は、かつて、武田・真田両家にとって、もっとも手強かった村上義清が築いた。
この城を落とすために、武田信玄も、昌幸の亡父・真田幸隆も、どれほど苦心をしたか、
「知れたものではない……」
のである。
幸隆が、忍耐づよく謀略を積みかさね、城内の村上勢を、ひそかに味方につけ、彼らの内応がなかったら、
「とても落とせなかった……」
ほどの山城であった。
現・長野県上田市の東北一里のところにある戸石山に築かれたこの城は、二つの峰にいくつもの曲輪を設け、北の峰が〔本丸〕であった。南の峰を〔米山曲輪〕といい、ここは村上時代からいまに至るまで、砥石城の兵糧が貯蔵されている。
去年、武田勝頼を岩櫃へ迎えようとしたとき、真田昌幸は、砥石城の兵糧の半分ほどを岩櫃へ移したものだ。
昌幸の居館は、山城の東麓にある。
家来たちの屋敷も、城下町も、伊勢村とよばれるこのあたりにあつまっていた。
城下町といっても、まだ、町の形態をなしてはいない。村落のようなものにすぎないのだ

が、それでも、昌幸がこちらへ移ってからは、甲斐の国からやって来た弓師や研師、桶師などが住みつき、近辺の村人も人夫に狩りあつめられ、城の修築などにはたらいている。

砥石から来た草の者は、騎乗の昌幸のうしろから、闇にとけこみ、風のようについて来ている。

お徳の館から砥石までは、南西へ一里弱というところだ。

神川のほとりまで来ると、空が白みはじめた。

そこに、昌幸の次男・源二郎信繁が、三人の家来を従え、昌幸を待ちうけていた。

長男の源三郎信幸は、依然、岩櫃に母の山手殿と暮らしている。

「父上。急なことで……さぞお疲れでしょう」

と、源二郎がいった。

その眼が笑っている。

「うるさい」

昌幸は叱りつけ、馬を打たせつつ、

「近江から、だれがまいったか」

「姉山甚八です」

源二郎は、父が留守のときは、何も彼も自分の手で切りまわしているような口をきく。

この年、真田昌幸は三十七歳。

源三郎信幸は十八歳。源二郎は十七歳となった。

そして、あれ以来、源二郎の従者となって奉公をつづけている向井佐平次は二十歳になった。

居館は、小高い丘の上に在った。

村上義清も、ここに住んでいたのである。

石垣を組み、神川から引き込んだ水が濠をみたしている。

向井佐平次が、出迎えていた。

「では、父上……」

源二郎は昌幸に一礼し、佐平次をともない、馬屋の方へ去って行った。

昌幸は、すぐに、奥へ入った。

ここは、岩櫃城内の居館ほど大きくない。

村上時代の居館は焼きはらってしまってあったので、去年の秋に、昌幸が急造したものであった。

昌幸は、湯殿で水を浴び、雨にぬれた衣服を着替え、姉山甚八の前へあらわれた。

甚八は、駆けに駆けつづけて来た。

さすがに、濃い疲労が顔にも躰にも浮き、眼球がくぼみ、唇は土気色になっていた。

「苦労であった」

「は……」

「湯漬けなど、食うたか？」

「いただきまいてござる」
「聞こう」
「二十一日に、賤ヶ岳にて戦がおこなわれ、柴田勢が敗北いたしました。柴田修理亮は北ノ庄へ引き退いたようにござります」
「ふうむ……」
「先ず、これを……」
と、甚八は、壺谷又五郎からの密書をさし出した。
この急報の内容を、まだ、小田原の北条氏政も知っていまい。
徳川家康は、いま、甲州へ入っている。
信長亡きのちの甲斐の国の鎮撫にあたっているのだ。
家康の耳へも、まだ、このことはつたわっていないのではないか……。
姉山甚八は、尾張・清洲に設けておいた忍び宿に待機してい、近江からとどけられた壺谷又五郎の密書を受け取り、すぐさま、駆けつけて来たのである。
密書を、清洲へとどけて来たのは、お江だったという。
（女ながら、目ざましきやつ……）
あらためて、昌幸はおもった。
密書は丈夫なしかも薄く漉いた紙へ細字でびっしりとしたためられ、これをかたく巻きしめた上から蠟をたらしてなおもかためたものを、甚八は頭髪の中へ隠し込んで来た。

こうした密書につかう紙も、真田の庄の草屋敷で、特別に漉いているのである。
去年も、真田昌幸は、本能寺の変をお江によって逸早く知ることを得た。
厩橋と沼田両城にいる滝川一益や滝川儀太夫よりも早く知った。
「あの折は、おどろいている間とて、なかった」
と、昌幸が述懐している。
昌幸は岩櫃から、すぐさま兵を出し、ひそかに沼田城を包囲せしめた。
そして、沼田城代・滝川儀太夫が、本能寺の事を知った厩橋の滝川一益から、
「一大事じゃ。すぐにまいれ」
と、よび出しを受け、二百騎をひきいて沼田を出るや否や、
「それ、いまだ！」
一挙に、沼田へ入城してしまったのである。
滝川勢の抵抗は、ほとんどなかった。
昌幸は、彼らを厩橋へ追いはらい、沼田城をかためた。
滝川一益には、もう、沼田をかまっているゆとりがなかった。
主・信長が変死をとげたというのならば、中央へ一時も早く駆けつけたいし、一方では北条軍が上州へ攻めかけて来るし、なれぬ国へ進駐して来たばかりのことで、武勇のほまれが高い滝川一益も、腰が据え切れなかった。
さらに、本国の伊勢・長島も気にかかるというわけで、神流川の一戦で北条氏直（氏政の

長男）と戦い、敗北するや、
「いつまでも、ここにとどまっていては、機を失う」
と断じ、伊勢・長島へ引きあげて行った。
その滝川一益は、いま、柴田修理亮勝家に同盟し、羽柴秀吉と戦っているはずであった。

六

はなしを、すこし前へもどしたい。
急死した織田信長の男子は、長男・信忠が父と共に害せられたので、次男の信雄と、三男・信孝の二人となった。
そして、長男・信忠の子の三法師（のちの秀信で、祖父・信長が死んだ去年、天正十年で三歳）がいる。
そこで、この三人のうちの、だれが信長の跡をつぎ、織田家の当主となるか、それを決めるために、信長の重臣たちが清洲の城へあつまり、会議をおこなった。
そのとき、羽柴筑前守秀吉は、
「三法師君をもって、世つぎにしたい」
主張してやまぬ。
なんといっても、羽柴秀吉が電光のように中国から引き返して来て、明智光秀を討った戦功は大きい。

柴田勝家や丹羽長秀のような、信長の重臣にくらべると、一段、低い地位にあった秀吉なのだが、いまは、これらの重臣・老臣たちに遠慮もなく、おもうままに事をすすめようとする。

秀吉は、すでに、

「亡き信長公の跡をつぐものは、三法師君でもだれでもない。それは、自分である」

の決意が牢固としていたものと見える。

のちに、秀吉は、

「……あの折、他の者にては天下の仕置きがこころもとなかった。ゆえに、自分が三法師君を擁して起ったのである」

と、いっている。

単なる〔いいわけ〕とのみ、聞くわけにもゆかぬ。

重臣の丹羽長秀が、先ず、そうおもった。

長秀は、秀吉のさそいを受け、秀吉の味方となった。

この一方で……。

信長の三男・織田信孝が柴田勝家の庇護のもとに、

「なんとしても、父上の跡をつぎたい」

と、起ちあがった。

信孝は、浅井長政に嫁ぎ、長政ほろびてのち、清洲に暮らしていた父の妹……すなわち叔

母にあたるお市の方と柴田勝家との結婚をまとめ、ここに結束をかためた。

だが、清洲の会議では羽柴秀吉の主張が通ってしまい、去年の十月には十七日間にわたり、京都の大徳寺において、織田信長の盛大な葬儀がおこなわれた。

この葬儀を主宰したのは、羽柴秀吉であった。

そのための、莫大な費用は、すべて、秀吉がまかなった。

羽柴秀吉は、いつ、これだけの財力を得たのであろうか……。

秀吉の恐るべき底力が、だれの目にもあきらかであった。

柴田勝家は、ついに、この葬儀へ顔を見せなかった。

この間。

徳川家康は、まったく、織田家へ介入していない。

先に、信長を助けて征服した甲斐や信濃を平定することに、ちからをそそぎつつある。

「あの、な……」

と、真田昌幸が、源二郎にいった。

「三河守（家康）は、な。信長公が亡きのち、自分は、もうだれの家来でもない。おのれは、おのれひとりのちからをたくわえて、天下に立ち向かって行くつもりらしい。ところで源二郎、わしは、どうしたらよい？」

こころみに、笑いかけながら問うてみると、源二郎は即座に、

「三河守殿が、もっとも、われらに近うございます」

こたえたそうな。
「だが、おりゃ、羽柴筑前が好きじゃ」
「なれど、羽柴は遠すぎまする」
「そのことよ」
「手が、のばせませぬ」
「ふむ、ふむ……」
「父上。わたくしは……」
「なんじゃ？」
「かようにおもいます」
と、源二郎信繁がいったことは、実に、おどろくべきことであった。
源二郎は、
「近きうちのことはわかりませぬが……いずれは、天下の事も羽柴と徳川に分かれましょう」
こうした、おもいきった予見を、兄の源三郎は決してのべない。いや、胸の内にもないのであろう、と、真田昌幸はおもっている。
「よし、わかった」
なぞと、昌幸は眼を細め、可愛い次男の進言を、
「ひとり前の大人……」

のものとして、一応は、うけとってやることにしているのだ。
むろん、少年のいいぐさである。
まともにはうけとらぬが、それでも、源二郎のいうことに、昌幸ほどのものが、はっとなることがたびたびあった。
（どう看ても……）
と、昌幸は自分にいいきかせる。
（兄より弟のほうが、上手のことよ）

柴田勝家は、織田家臣団の間で羽柴秀吉の人気が急激に高まってしまったので、一時は、三法師を秀吉の手にゆだね、故信長所領の国々を、それぞれの身分に応じて分け合うことに承知をした。
すなわち、尾張の国は織田信雄に、美濃の国は織田信孝に、丹波の国を羽柴秀勝（信長の四男を、秀吉が養子にもらいうけていた）に……そして、秀吉自身は山城の国を治めることになった。
山城は現・京都府である。
秀吉は、天下を押さえるために、もっとも有利な国を得たことになる。
このとき柴田勝家は、近江の長浜城を、
「もらいうけたい」

と、秀吉にいい出た。

越前の国主である柴田勝家が、以前は秀吉の城だった長浜をもらいうけたいといい出したのは、

（秀吉が承知すまい）

と、考えたからだ。

承知しなかったら、たとえ、その場においてでも、

「秀吉を討ち取ってしまおう」

勝家は、そこまで決意していたともいわれている。

いずれにせよ、勝家が秀吉へ対して抱いている不安は、非常なものだったといえる。

勝家の、このときの年齢は五十七、八ともいい、六十をこえていたともいわれる。生年月日はあきらかでない。六十前後と見てよいだろう。

柴田勝家は、織田信長の筆頭の老臣であった。人格も立派で戦功が多い。立派な重臣ではあるが、ようやく四十の半ばに達した羽柴秀吉にいわせると、

「何とて、古風なことよ」

なのであった。

勝家の目には、身分も名もないほどの下男同様だった秀吉を、主人の信長が、おもうさまにつかいまわし、どしどしと立身をさせる様子におどろきもし、その信長へぴたりと喰い入って、これまた縦横にはたらきぬく秀吉を、

「恐るべき男……」
と、看た。
ここ十年ほど、勝家自身の体面だけは、信長が重んじてくれ、重要な作戦や秘密の謀略には参画をゆるされたが、実行させてはもらえなかった。
信長が生きてあってこその、
「猿（秀吉）ではないか……」
と、この信念を勝家は崩し切れぬ。
三法師を擁した羽柴秀吉が、
「何をするか、知れたものではない。三法師君をまもるという名目のもとに、おのれが天下をつかみ取ろうとしているのではないか？」
この不安が強い。
そうなったら、
「織田家は、どうなる？」
である。
勝家は、近江・長浜をのぞむことによって秀吉との決裂をのぞんだという説もうなずけぬことはない。
すると秀吉は、意外にも、
「よろしゅうござる。長浜をさしあげましょう」

すぐに承諾してしまった。
勝家は気ぬけをしたろう。
秀吉は、その場で、こういった。
「そのかわり、長浜の城へは、あなたの御養子の勝豊殿に入っていただきたい」
「ふむ……心得た」
秀吉がこころよく長浜をゆずってくれたのだから「否」とはいえぬし、自分には越前・北ノ庄の本城があるのだから、いずれ、だれかを長浜へ入れねばならぬのだ。
秀吉が、自分の養子にゆずるという言葉には、いささかのむりもないようにおもえる。
柴田勝豊は、家来の吉田次兵衛というものの子に生まれたのを、勝家が養子にした。
しかし、ちかごろの柴田勝豊は、どうも、
（おもしろくない……）
のである。
養父の勝家が、甥の佐久間勝敏を自分のほかに養子とし、勝敏の兄・佐久間盛政を引き立て、いまや柴田家における佐久間兄弟の勢力は、勝豊をしのぐものがある。
これが勝豊には不満であった。
その不満を、すでに羽柴秀吉は察知している。
だが柴田勝家は、すこしも気づかぬ。

七

ともかく、近江・長浜を我が手にしたので、柴田勝家は、

（これならば……）

何とかなる、とおもったのではあるまいか。

長浜城を、養子の柴田勝豊にまもらせておけば、越前・北ノ庄から北近江までが、柴田勢力の下に確保されることになる。

そして、長浜からも近い美濃の岐阜城には、信長の三男・織田信孝がいる。

信孝と勝家は、すでに同盟をむすんでいる。

信長の次男・織田信雄は、尾張の国をもらいうけ、清洲城主となっていたが、信孝は、この兄と非常に仲が悪い。

父は同じ信長だが、生母は、それぞれにちがう。

この兄弟が、協力結束して父亡き後に起ちあがったら、羽柴秀吉も、あれほど迅速な擡頭ぶりを見せるわけには行かなかったろう。

織田信孝は、

「三法師は、安土へ住まうことになるわけだから、焼け落ちた安土の城の修築が成るまで、わしが手もとへ引き取り、あずかりたい」

と、羽柴秀吉へ申し出た。

「よろしゅうござる」
これにも秀吉は、決して逆らわぬ。
信孝も勝家も、
（しめた！）
と、おもったろう。
秀吉が、おのれの勢力の伸張をはかる〔道具〕として擁立している三法師を奪ってしまえば、秀吉には、
（何の名目もなくなってしまう）
と、考えたからだ。
このことを、信孝にすすめたのは柴田勝家である。
勝家は、上州から引きあげて来た滝川一益や、越中・富山城主の佐々成政をも味方に引き入れた。
滝川一益も、羽柴秀吉をこころよくおもっていない。
理由は、柴田勝家と同じものである。
織田家譜代の武将である彼らにとって、秀吉はあくまでも、
「成りあがり者……」
であった。
一益や成政のほうが、勝家よりも秀吉への闘志が旺盛であって、織田信孝ともども、

「来年の雪解けを待ち、ぜひにも羽柴筑前へ戦を仕掛け、討ち取ってしまわねばならぬ」
ということで、しきりに、勝家を煽動した。
勝家も、しだいに、その気になってきた。
この織田譜代派には、
「天下を取る」
という野望はない。
亡き信長の後の織田家をもり立て、これを存続させるためには、羽柴筑前守秀吉を、いまのうちに討ってしまわぬと、
「危ない……」
からなのだ。
彼らは、この点、まさしく秀吉の野望を、
「見ぬいていた……」
のである。
また、秀吉は、見ぬかれていることをわきまえていた。
譜代派の作戦参謀は、滝川一益であった。
一益は、甲州攻めの出陣のままで上州へ移り、本能寺の異変を知った。
これからは、
「たのみにしよう」

と、おもっていた真田昌幸に、たちまち沼田城を奪い返されてしまい、ろくに戦備もととのわぬうち、攻め寄せて来た北条軍と戦わねばならなかった。

そして、敗けた。

上州・厩橋城は、まだ完全に、滝川一益のものではなかった。

城が一つあったところで、戦はできぬ。

城には、城をかこむ領国がなくてはならぬ。

城主を敬い、城主の戦闘に必要な兵站をととのえるための領民がいなくてはならぬ。

滝川一益は、上州へ着任したばかりで、何も彼も、これからというところだったのである。

一益が、いさぎよく上州を捨てて、本領の伊勢・長島へ、

「引きあげよう」

と、決意したのは賢明であったといわねばなるまい。

それだけに、一益は、

「織田家回復のため……」

には、決死の覚悟をもってのぞんだ。

一益は、こういった。

「もはや、冬になり申した。北近江や越前が雪に埋もれていたのでは、われらも、また羽柴筑前も、兵をうごかすことはなりませぬ」

戦うとなれば、羽柴秀吉としては、まさかに旧主・織田信長の三男・信孝を攻めるわけに

はゆくまい。

なんとしても、譜代派の最高実力者である柴田勝家に勝たねばならぬ。

そのためには、雪深い北近江から越前（福井県）へ出陣しなくてはならぬ。

ゆえに、冬期の戦争は、双方にとって、

「あり得ぬ……」

ことと、滝川一益は断定をした。

そこで一益は、

「雪が解けるまでは、何としても、羽柴筑前を油断せしめておかねばなりませぬ」

と、進言をした。

そこで、柴田勝家が秀吉へ手紙をしたため、使者をもってとどけさせた。

手紙の内容は、およそ、つぎのごとくである。

「……いっさいの恨みや怒りを捨てて、これからは仲よく、三法師君をたすけまいらせよう。春になったら一堂に会し、たがいに誓いの証文をしたためようではないか」

「よろしゅうござる」

と、このときも秀吉の返事は明快をきわめている。

古風で、武骨な柴田勝家が、滝川一益にすすめられて、

「こころにもない……」

ような世辞をつかうのだから、それこそ、勝家に似合わぬことおびただしいものがある。

秀吉は破顔し、

「これは北ノ庄の古狸が、左近将監に、そそのかされたのであろうよ」

一読しただけで、看破してしまったという。

滝川一益からも、手紙が来た。

「……ちかごろ、どうも、あなたと修理亮殿（勝家）との仲がよくないという風評しきりである。織田家のためにも、このような、うわさがひろまることはまことによろしくない。どうか、仲よくしていただきたい」

と、いうものである。

秀吉は、すぐに返事を書いた。

「おっしゃるとおりであります」

というのだ。

「もちろん、自分は何ともおもってはおりませぬが、清洲のはなし合いで決めた、三法師君を安土の城へ帰していただく約束を、修理亮殿も信孝様も忘れておられるのでしょうか……安土の城も、三法師君がお住まいになれるほどの修理をほどこしてあるのです。何故、安土へ送っては下さらぬのか……織田家のことを、共に、お考え下さるのなら、まず、このことをはっきりさせていただきたい」

羽柴秀吉は、この返事をしたためたとき、すでに充分の自信を抱いていたにちがいない。

譜代派が、しきりに密使を往復させ、打ち合わせをしている間に、秀吉は豊富な財力に物

をいわせて兵站をととのえ、自分の味方をしてくれる諸大名や武将たちを、しっかりと抱え込んでしまっていたし、尾張・清洲の織田信雄へも、まんべんなく使者をつかわし、機嫌をうかがったり、豪華な贈り物をとどけさせたり、その間には、信雄がもっとも忌み嫌っている岐阜の信孝を中心にして譜代派が蠢動していることを、

「それとなく……」

ほのめかしたりして、信雄の意を買っていたのである。

八

羽柴秀吉は、織田信長の葬式がすんで約二カ月のちに、早くも近江・長浜へ進軍し、長浜を包囲してしまった。

これが、去年の十二月中旬である。

「わしに、味方なされい」

秀吉は、長浜城の柴田勝豊へ笑いかけた。

「味方して下さるなら、このまま、長浜をあなたにさしあげよう」

と、いうのだ。

勝豊は青ざめている。戦ったところで勝てるはずがない。もともと長浜の城は戦闘には、あまり役にたたぬ城だし、しかも、元は秀吉の居城だったので、秀吉の目から見ると、

「丸裸も同様……」

の、城なのだ。
敗ければ、勝豊も死を覚悟せねばならぬ。それを承知で戦って見ても、養父の柴田勝家が積雪をおかし、救援に来てくれるはずもない。
柴田勝豊が長浜城主になれたのは、秀吉の指名があったからだ。
柴田勝家は、はじめ、いま一人の養子、勝敏の兄にあたる佐久間盛政を、
「長浜へ……」
と、いい出した。
それを秀吉が説得し、勝豊に長浜をゆだねたのである。
ために、勝豊としては、
（あのような養父のために、討死をしてみたところではじまらぬ）
と、おもうにいたった。
ついに、柴田勝豊は羽柴秀吉へ降伏し、城をあけわたした。
「よろしいとも。悪しゅうは計らわぬ」
秀吉は約束どおり、そのまま、長浜を勝豊にあたえた。ただし今度は、羽柴方の将として長浜をまもることになったわけだ。
この知らせが北ノ庄へとどいたとき、
「まさかに、伊賀守（勝豊）が……」
いったなり、柴田勝家は絶句してしまった。

勝豊は、
「自分の養子である。養子が養父を裏切るわけがない」
と、勝家は単純におもいこんでいたようである。
勝家が勝豊の立場にあれば、羽柴軍と戦って殪れたろう。
自分がそうなのだから、
「他人も、そうでなくてはならぬ」
というのが、勝家の性癖であった。
柴田勝豊は、このとき、病気にかかり、京都に滞在していたという説もある。
そうかも知れぬ。
翌年の雪解けを待って開始された柴田・羽柴両軍の戦闘に、勝豊は参加していない。
そして間もなく、京都の東福寺で病歿しているのだ。
京都といえば、いまは羽柴秀吉の〔本拠〕である。そこに滞在していて、秀吉の説得をうけいれ、そのまま長浜へも帰らずに亡くなったというのは、もしやすると、秀吉出陣を待たずに、勝豊は懐柔されてしまっていたのかも知れぬ。
柴田勝家は、北ノ庄に在って焦慮しつづけた。
一時も早く、中央へ打って出たいのだが、雪解けを待つよりほかに仕方もない。
越前から北近江へかけては豪雪地帯であって、軍団をうごかせるものではなかった。
この間に、羽柴秀吉は、岐阜の織田信孝へ、

「つまらぬことはおやめなさい」
説得して、三法師を手もとへ引き取り、これを安土へ移してしまったのである。
信孝よりも、彼の重臣たちのほうが先に、羽柴秀吉へなびいてしまったのだ。
これでは、どうしようもない。
秀吉はいったん、姫路の城へ帰ったが、新しい年が明けると、七万余の大軍をひきい、京都へあらわれた。
ともかく、することなすことが実に速い。
姫路と京都と近江とを、秀吉は間断なく、軍団をひきいて、事もなげに往復する。
「伊勢を攻めよ！」
と、秀吉はいった。
伊勢・長島城の滝川一益を、柴田勝家が雪に閉じこめられている間に、
「降伏させてしまおう」
というのである。
伊勢へ入るや、秀吉は、たちまちに桑名・亀山の両城を落とし、
「自分に味方せられよ。悪しゅうはせぬゆえ……」
にこにこと滝川一益へ笑いかけたが、さすがに一益は、柴田勝豊とはちがう。
長島城にたてこもって、
「越前の国の雪解けまで、この城を持ちこたえておればよい」

落ちついてもいたし、羽柴軍の攻撃に対しては、頑強に反抗した。
そこは、故信長麾下の戦将として武勇をうたわれただけに、戦闘の基盤をもたなかった上州での敗将・滝川一益とは別人のようであった。
二月へ入ると、柴田勝家が、
「街道の雪を掻き除き、兵をすすめよ」
たまりかねて、起った。
当時の二月は、現代の三月にあたる。
勝家の居城・北ノ庄から、近江の長浜までは約百キロメートル（二十五里）ほどの道のりであった。
雪さえなければ一昼夜の強行軍で、北近江へ入れる。
雪に埋もれつくしてしまった道を、すこしずつ、柴田軍が進みはじめた。
除雪しながらの行軍であるから、一日のうちに一里、二里とすすむよりほかはない。それほどの深い雪なのである。
「おもうたより、早かったな」
と、秀吉は、伊勢の押さえを織田信雄と蒲生氏郷（近江・日野城主）にまかせ、自分は風のごとく長浜へ引き返した。
そのとき、柴田軍の先鋒部隊は、長浜の北方七里のところまで進出して来ていた。
「あのときは、いささか、わしは権六（勝家のこと）を甘く見ていたのじゃ。あわてうろた

えたところなぞはすこしも見せなんだが……実は、おどろいた。まことに危ういところであった」

と、秀吉は後年になって、述懐している。

北近江と越前の国境へ、見張りの者を出しておき、いちいち報告を受け取っていた羽柴秀吉であるが、このときは目算が狂ったようで、

「あと二日、長浜到着が遅れたなら、長浜は敵の手に落ちたやも知れぬ」

と、いっている。

秀吉は長浜へ、軍団を集結させた。

こうなっては勝家も、すぐに、攻めかけることができない。

三月に入ると、柴田軍も続々と南へ下って来た。

秀吉は、これを迎え撃つべく、長浜を発して北へ進んだ。

こうして両軍は、琵琶湖の北岸に沿った賤ヶ岳を中心に対峙したのである。

こうした両軍のうごきは、壺谷又五郎が指揮する草の者によって、いちいち、砥石城へとどけられ、真田昌幸の耳に入っている。

真田の庄や岩櫃にいる草の者の三分の二ほどが、いまは又五郎の下にはたらいているといってよい。

「羽柴筑前も、今度は、明智日向守を相手にしたときのように、何事もうまく運ぶまい」

と、昌幸はいった。

草の者の知らせによると、両軍の兵力も二万余ということで、伯仲している。
もっとも秀吉は、伊勢攻略にも兵を割いているし、岐阜へも押さえの兵を出していた。
そのうちから、一万ほどの、
「融通はつくであろうが……」
と、昌幸は看た。
ところが……。
半月ほど、柴田軍とにらみ合いのかたちになっていた羽柴秀吉が、突如、うごき出した。
柴田軍へ攻めかけたのではない。
身を転じて、岐阜城へ向かったのだ。
岐阜の織田信孝は、いったん、秀吉に降伏をしたが、柴田勝家出陣ときいて、また反抗のかたちをとった。
秀吉は、柴田軍と対峙している間の、
「ひまを見て、岐阜を落としてしまおう」
と、いうのだ。
子供の戦遊びではない。
そのようなまねが可能なものかどうか……。
「気を楽に、気を楽に、戦をするものぞ」
というのが秀吉の口癖だそうだが、目前の敵を放り出しておき、後で始末してもよい敵の

方へ、総大将みずからが出て行ったのである。

九

真田昌幸は、中央から、はるかに遠く離れた場所にいて柴田・羽柴両軍の動静を、ひとおり把握することを得た。

草の者のはたらきが、あったからである。

それだけに、

「羽柴秀吉も、こたびは、たやすく勝てまい」

と、看た。

これは、昌幸のみではなかったろう。

たとえば、中国の毛利氏なども、

「どちらが勝つ、とは決めかねる」

と、おもった。

実は、柴田勝家も手をこまぬいていたわけではない。

三月に入るや、勝家は、備後の鞆の津にいる前将軍・足利義昭の侍臣・槇島昭光へ密書をとどけ、

「……伊勢では、滝川左近将監が羽柴勢へ強く立ち向かい、勝ちすすんでおります。自分も、すでに北近江へ出陣をしています。いま、この機会を逃さず、前の将軍家より毛利公へ、こ

のことをおつたえねがいたい。いまこそ、毛利公が大軍をひきいて京へ向かわれるならば、羽柴秀吉は、ひとたまりもありませぬ」

と、すすめている。

足利義昭は、すぐさま、毛利輝元と吉川元春へ、このことを知らせ、

「上口（上方）への出陣を急がれよ。機を逸しては、のちのち悔やむことになろう。将軍家の再興も毛利家の繁栄も、いまこのときにかかっているゆえ、格別にちからをつくされたい」

と、いった。

しかし、毛利家では、これに乗らなかった。

「どちらが勝ってもよいように、双方へかけて、見合うがよい」

と、決したのである。

もし、このとき、毛利が大軍をひきいて上洛して来たら、どうなったろう。

羽柴秀吉の将来は、大きく影響をうけたにちがいない。

秀吉にとって、これは重大な局面であった。

外見には、秀吉が気楽げに見えたり、または、やたら移動したりして、何やら落ちつかず、こころもとなげに見えもしたろう。

秀吉は、賤ヶ岳の戦線をはなれ、美濃・大垣の城へ入り、岐阜攻めにとりかかろうとした。

そこへ、急報が飛来したのである。

秀吉が岐阜へ向かったのを知って、佐久間盛政が羽柴軍へ攻めかけて来たのだ。

盛政は、柴田勝家の甥にあたり、このときは加賀・尾山（いまの金沢）城主であった。先にのべたように、弟の勝敏（勝政ともいう）は勝家の養子となっているし、佐久間盛政の羽振りの大きさは、この戦闘で、勝家の代わりに〔総司令官〕をつとめていたことでも容易に察しられよう。

盛政は、大岩山に陣を構えていた羽柴方の将・中川清秀を急襲した。

激戦となったが、中川清秀は討死をとげた。

佐久間盛政は、勇躍し、さらに岩崎山の陣地も占領してしまった。

この知らせが大垣城へとどいたとき、羽柴秀吉は、すこしもおどろかず、

「よし、よし。戦は勝ったぞ」

うれしげに笑い出したというが、本当だろうか……。

そうだとしたら、このときの秀吉の胆力は、すばらしいものだ。

総大将の自分が、味方の敗報をうけ、気力が萎えてしまえば、たちまちにそれは自分の将兵に影響する。秀吉は、そうしたことを敏感に、機をのがさず、表現することができた人物である。

「足の早い者を、五十人ほどあつめよ」

と、秀吉が命じた。

あつまった五十の兵士に、

「お前たちのうち、三十人は、これより長浜へ駆けつけ、長浜の町や、近くの村から松明をたくさんにあつめさせ、これに火をつけ、村人たちに持たせて、長浜までの道すじに配っておけ」

と、指図をあたえ、

「残りの二十人は、これも長浜の村々にいいつけ、にぎり飯をたくさんつくり、道すじにおいて、すぐに食べられるようにしておけ」

と、即刻、出発せしめた。

そうしておいて秀吉は、家臣の堀尾吉晴に、

「おぬしに大垣をまかせる」

いうや、たった一人で馬へまたがり、

「つづけ」

城門を出ると、まっしぐらに走り出した。

これは、むかし、若き日の織田信長が今川義元の大軍を奇襲するため、清洲の城を只一騎で走り出したのを真似たのであろう。

あのときは秀吉も、木下藤吉郎といって、信長の一兵士にすぎなかったが、槍を担いで、信長の後を必死に追いかけたものだ。

おそらく、秀吉の胸には、二十余年前のあのときのことがおもい起こされたにちがいない。

かたちを真似るというよりも、秀吉はあのときの信長や自分の気魄を、自分にも注入し、自

分の兵士たちにもそそぎ入れたかったのであろう。
一柳直末ほか、十名ほどの家来が、あわてて秀吉の後を追った。
兵士たちの仕度も間に合わぬほどであった。
「急げ、急げ！」
将兵は、つぎつぎに仕度をととのえ、軍列もととのわぬままで大垣城を発し、秀吉の後を追った。
大垣から長浜までは、およそ十里である。
羽柴秀吉が関ヶ原を駆けぬけて近江の国へ入り、一気に長浜へ到着したとき、夜になっていた。
この秀吉と、すれちがうようにして、長浜の村人たちが松明をかかげ、にぎり飯を担ぎ、大垣の方へ急いでいる。
長浜は、前に秀吉が領主だったころ、領内の治政を領民主体のものとし、よくよく面倒を見てやっている。これは、城下町の発展のために、寛大な治政を施いたのだ。
ために、長浜の領民たちは、いまも秀吉を、
「徳としている……」
のである。
松明や、にぎり飯の協力なぞは、村人たちにとって、
「わけもないこと……」

といってよい。
後から来る一万五千の将兵を、あかるい松明の火と、にぎり飯が街道に待ち受けていた。
決戦にのぞむ大将が、このようなかたちで家来たちへ気を配った例は、かつてない。
空前絶後のことといってよい。
羽柴軍の闘志と、秀吉への忠誠が燃えあがったのは当然であった。

お江は、このありさまを、佐和山の近くで目撃していた。村人が出て行き、羽柴軍があらわれるのを、わが眼にたしかめている。
このとき、
（これは、羽柴筑前が勝つ……）
とお江は直感した。
したが、口にのぼせることをつつしんだ。
壺谷又五郎は長浜にいたが、同じように、自分の直感を真田昌幸につたえていない。
戦は、目の前にせまっている。
勝敗を見とどけてから、知らせるべきであった。
羽柴秀吉が、木之本へ着き、田上山の陣所にいる弟の秀長のところへ、
「いま、ついたぞ」
顔を見せたときには、秀長が瞠目し、

「まさかに、大垣からではありますまい」
と、いったそうな。
羽柴秀長は、秀吉の母が再婚をした筑阿弥との間に生まれた子で、秀吉にとっては父ちがいの弟になる。
ここでも、秀吉は景気よく金銀をふりまき、近辺の村人をあつめられるだけあつめ、関の声をあげさせた。
夜の闇をゆるがせてきこえる、「えい、おう！」の関の声は、柴田軍を怯えさせ、不安にさせた。
何万もの大軍が羽柴本陣へ到着したかのようにおもわれた。
同時に、賤ヶ岳の羽柴軍は、よみがえったように闘志をとりもどした。
「御大将が、新手をひきいて到着された……」
からである。
長浜の村人たちは、後続の羽柴軍と共に木之本へ向かいつつあった。その松明のおびただしい列が蜿蜒とつらなっているのを山上から見た柴田軍は、戦意を失いかけている。
翌日の戦闘は、退却する柴田軍を羽柴軍が追撃するためのものとなった。
最後には、狐塚に本陣を構えていた柴田勝家も、五十人ほどの家来にまもられただけで、北ノ庄へ逃走した。

十

柴田勝家が、北ノ庄の城に火を放ち、自殺をとげたのは、この年（天正十一年）の四月二十四日の早朝である。

勝家が北ノ庄へ逃げ帰ったとき、従うものは、わずか三千にすぎなかったという。

敗北に絶望した将兵たちは、何処へともなく姿を隠したり、羽柴軍に降伏したりしたのであろう。

「おれが家来どもも、戦に負けたときは、みな、柴田の家来のようになるのか……それをおもうと、背すじが寒くなるわい」

と、真田昌幸がいった。

お徳ひとりにである。

こうした弱音を、昌幸は男たちの前では、決して吐かぬ。

北ノ庄落城の報が、昌幸のもとへとどけられたのは、しばらくのちのことであった。

壺谷又五郎をはじめ、数人の草の者は、山に隠れ、野を走りつつ、越前北ノ庄まで潜行し、その眼で始終をたしかめただけに、

「ようも仕てのけてくれた」

昌幸は、感動した。

いまさらながら、諜報網の備えが、いかにたいせつであるかを知った。

「これからは、金銀が要ることよ」
昌幸が、ためいきまじりに、
「なれば、どうあっても、上田へ城を築かねばならぬ」
「城をつくれば、金銀が入りますのか？」
と、お徳。
「上田はひろい。城を築いて、大きな町をつくる。おれの城下町だぞ」
「あい……」
「町をつくれば、人があつまる。商売もさかんになる。わしの町にだ」
「まあ……」
「領民も増えてくるであろうし、米もたくさんに穫れよう」
信州・小県郡は、気候もおだやかで、平地もひろい。このため、これまでにも真田家の収益はすくなくなかったし、先代の幸隆は、これをよく蓄積しておいてくれた。
昌幸の代になってから、上州・沼田領を得て、さらに財力の増加を見ている。
上田へ築城し、主要往還を通じて沼田をむすぶことによって、昌幸は、
「おれが国を、ゆるぎないものにせねばならぬ」
と考えている。それも急がねばならない。
武田家がほろび、織田信長が急死し、信州の主勢力は、いまのところなくなってしまった。
そこで、越後・春日山の上杉景勝は川中島へ出兵して、これを占領し、ついで東信濃へ進

攻しつつある。

関東の北条氏政・氏直父子は、滝川一益を追いはらい、碓氷の峠をこえて、東信濃へ侵入している。

真田昌幸は、北条氏へ属して、まず、上杉景勝と戦い、この年になって埴科郡・虚空蔵山へ出陣し、上杉軍を打ち破っている。

これを見て、北条氏直は、

「東信濃をわが手におさめるためには、いまのところは、なんとしても真田をたのまねばなりませぬ」

と、小田原にいる父・氏政へ告げている。

いま、氏政は隠居し、子の氏直が北条家の当主となっていた。

この間に、東信濃の諸豪族は、昌幸に味方したり、上杉方へ転じたりして、ここ一年ほどは、絶えず小戦闘がくり返されている。

昌幸は、いそがしかった。

「何も彼も、おれ一人でやらねばならぬ」

戦場から帰って来ては、あわただしく、お徳の豊満な乳房へ顔を埋めこみ、

「ああ、面倒でたまらぬ」

とか、

「戦など、するものではないわ」

とか、
「いっそ、死にたくなってくる」
などと、なげくのである。
そのくせ、戦場の駆け引きは水際立ったもので、戦えば、
「かならず勝った」
と、いってよい。
「おれは、あの戦神のような信玄公の子飼いも同様の男よ。上杉や北条などでは、歯が立たぬわ」
と、昌幸は息子たちや、家来たちに向かってうそぶいた。
だが、なんとしても、兵力が不足している。
大戦や決戦は、
「避けねばならぬ……」
わけであった。
いま、昌幸が、徳川家康や北条氏直に従属しているのも、このためである。
徳川家康は、甲斐の国で戦い、戦いつつ、武田の旧臣たちをどしどしと召し抱え、甲斐の経略に懸命であったから、信濃へは手がまわりかねる。
ために、北条父子と同盟をむすんだ。
だからこそ、上田築城は、

（いまこそ……）

なのである。

徳川・北条の麾下にあって、小県郡をまもるという意味から、

「ぜひとも、上田へ築城したい」

と、昌幸は徳川家康に願い出ている。

北条父子は、昌幸の力量を買ってもいるし、恐れてもいる。

だから、上田築城の事については、よい返事をせぬ。

昌幸は、岩櫃城代・矢沢但馬守頼康を家康のもとへ送り、嘆願をつづけている。

「上田へ城を築かぬことには、上杉の来攻にそなえることがむずかしくなり申す」

というのである。

むろん、家康の家臣となっている昌幸の弟・真田信尹も、家康を説得してくれているにちがいない。

いまのところは真田昌幸も、家康に対して従属のかたちを取っているが、正式の同盟をむすんでいるわけではなかった。

「築城をゆるされるならば、小県郡は自分が徳川家のためにまもりぬく」

と、昌幸は条件を出している。

同盟中の北条父子には内密であった。

家康が、昌幸をたのむ意になれば、おそらく、嘆願をききとどけてくれよう。

家康とて、同盟中ではあるが、関東の北条氏を制しておく必要があるのだ。
昌幸にとって、こころ強いのは、武田の旧臣たち……ことに真田家と同族の人びとが傘下に加わりつつあることだ。この人びとの戦力は、
「まことに、たのもしい……」
ものといってよい。
「ああ……おれに二枚の翼があったら、飛んで行きたい」
昌幸がある夜、お徳の乳房の中で、くぐもった声を出した。
「あれ。どこへでござります？」
「うむ……」
「どこへ……？」
「ふん……」
昌幸は、片目をつぶって見せ、
「好いた人のところへ、よ」
と、いった。
「あれ、まあ……どこの、女ごでござりますかえ？」
「女ではないわ」
「では、男……？」
「女でなければ、男にきまっているではないか」

「まあ、いやな……」
お徳は、顔を顰めた。

十一

お徳は、昌幸が男色のことをいい出したものとおもったが、そうではない。
真田昌幸は、早くも、この時点において、羽柴秀吉を、
（わが意を得た……）
人物であると、見きわめをつけていたのだ。
（羽柴筑前の下でなら、おれも存分にはたらけよう）
このことであった。
しかし、昌幸が活躍すべき舞台は、信州・上州の一部に限られている。
天下をうごかす中央の戦局には、いまのところ、ほとんど影響をおよぼさぬ。
そのかわり、中央の政局・戦局の影響を、多大にこうむらねばならぬ。
戦国の大名や武将たちは、その生国と、その領国の如何によって、おのれの力量を左右される。
武田信玄・上杉謙信ほどの英傑が、天下人たるべき器量と実力をそなえていながら、ついに、ちからつきて、若い織田信長の独走をゆるしたのは、日本の首都（京都）への最短距離に信長がいたからであった。

このように、風土は、国と人とに強い影響をあたえずにはおかぬ。
日本の〔地理的条件〕が、日本の歴史を生み出すのと同じことなのだ。
いかに、真田昌幸が、
「おれに翼があったら、羽柴筑前のもとへ飛んで行きたい」
と、のぞんでも、昌幸は、おのれの領地や城と共に飛んで行くわけにはまいらぬ。
どうしても秀吉の側ではたらきたいというのなら、国も城も家来たちも捨て、身ひとつになり、駆けつけて行くよりほかに仕様もないのだ。
「もし……」
お徳が、昌幸にささやきかけた。
「むうん？」
「上田へ、御城を築かれましたときは、岩櫃から、御方さまをおよびなされまするか？」
「ふむ……」
「およびなされますのか？」
「うるさい。きまっておる」
「やはり……」
「上田は、おれの本城になる。そうなれば、よびよせねばならぬわ」
「私は、どうなりまする？」
「此処におれ」

「いやでござりまする」
「何……」
「沼田へ、もどりたい……」
「何故だ？」
「沼田へもどり、暮らしとうござります。前の夫と同じような、足軽でもよし、百姓でもよい。気楽な男と夫婦になり、のびのび暮らしとうござります」
「ならぬ」
「いやでござります」
「ならぬ、ならぬ！」
昌幸は大声を発し、半身を起こすと、お徳の頬を平手で叩いた。
お徳は身を転じ、昌幸へ背を向けた。
「これ……これ、徳……」
「私は、殿さまの、なぐさみものじゃ」
「ばかを申せ」
「怖い……」
「何だと？」
昌幸は、耳をうたぐった。
「怖いと、いうたな？」

「あい」
「何が怖い？」
「私のことは、岩櫃の御方さまのお耳へ入っておりまする」
「そのことか。は、はは……」
「笑いごとではござりませぬ」
「大丈夫じゃ。入ったとしても、此処におることは知れまい」
「いいえ、知れてある」
「何故、そうおもう？」
お徳は、だまった。
「何故だ？」
お徳は、こたえなかった。
それから、いくら、昌幸が語りかけても、その夜のお徳は閉じた口をひらこうとはしなかった。
「何とでもいたせ」
業を煮やし、昌幸は寝所から飛び出して、
「馬をひけい」
と、草の者に命じた。
「いずこへ？」

「砥石へもどる」
「御供を……」
「かまわぬ」
「は……」
「徳を見張っておれ。あやつめ、もしやすると、ひとりで此処を脱け出すやも知れぬ」
「心得てござります」
暗い夜道へ出てから、馬上の昌幸は深い吐息をもらした。
夜ふけだが、昌幸は松明を持たぬ。
馬は、だまっていても、昌幸を砥石へ運んでくれるのだ。
ただ一騎であるが、いずれ後方から、草の者のだれかが昌幸を見まもりつつ、砥石までついて来るにちがいなかった。
（徳め、怖いというた……）
山手殿を、恐れているからだろうか……。
岩櫃ではともかく、砥石の家来たちの中で、主の昌幸が真田の庄に近い木立の中の館へ、三日に一度通うことを知らぬ者はないといってよい。
彼らが口にのぼせる〔うわさ声〕が、岩櫃へもつたわり、山手殿の耳へ入ることは、じゅうぶんに考えられる。
お徳には「大丈夫……」といった昌幸であるが、

（いずれは、御方にも知れよう）

と、覚悟していた。

だが、知れたところで、どうなるものでもない。

昌幸ほどの男が、隠し女の一人や二人を抱えていたとしても、ふしぎはないのだ。

もし、上田築城がかない、山手殿が岩櫃から移って来たとしても、むしろ、怖いのは、（わしのほうだ……）

なのである。

お徳と山手殿の距離は、たしかにちぢまることになるが、同じ城内の、同じ館で暮らすわけではない。

（嫌なおもいをするのは、おれだけ……）

であって、お徳ではないはずだ。

一国一城の主の妻ともなれば、ひとり勝手に外出をすることもならぬ。

（それを……徳は何で、恐れる……？）

どうも、わからぬ。

この夜の、お徳の態度は、かつて昌幸に見せたことがないものだったといってよい。

たしかに、

（徳は恐れていた。怯えていた……）

のである。

（徳に、子が生まれぬかぎり、御方とて騒ぎ立てはすまい）
あらためて、そうおもったとき、昌幸は、
（もしや……？）
はっとなった。
先夜。お徳は昌幸に、
「身籠りました」
と告げ、昌幸を狼狽させた。
そして、あわてる昌幸を笑いながら、
「いまのは、嘘でございます」
といった。
そのとき、昌幸は怒るよりも安堵したのである。
だが、あのことは、
（本当のことなのではないか……？）
昌幸は、馬の背にゆられながら、そうおもい直してみた。
お徳は嘘だといったが、実は身籠っているのではないか……。
それでなければ、何も、あれほどに山手殿を恐れるはずがない。
沼田にいるときのお徳には見られなかった恐怖が、たしかに今夜、彼女の肥えた躰を硬直させ、おもいつめた両眼が光を失い、顔色は急に蒼ざめてしまったではないか。

隠し女が子を生む。
武将にとっては、何のこともないのだ。
また、生んだ子が女ならば、
（別条はない……）
わけだが、もしも男の子なら、
（またしても、あのときのことをくり返さねばならぬ）
のである。
だが、お徳はあのときのことを知るはずがない。
真田昌幸・山手殿夫妻のあのときのことを知るものは、真田家中においても五指にみたぬ。
ただし、源三郎・源二郎兄弟をのぞいてのことである。
馬がとまった。
背に乗せた主の、胸の底の動揺を敏感にくみとったらしい。
この栗毛の愛馬の名を〔残月〕とよぶ。
名をつけたのは、昌幸ではない。
次男の源二郎がつけたのを、
「おう、よい名じゃ。ようつけた」
と、昌幸は相好をくずし、よろこんだものであった。
「よし、よし……」

昌幸は、残月のくびを軽く叩いてやり、馬腹へ足を当てた。
残月が歩みはじめる。
昌幸は、胸の中が暗くなってきている。
（二度と、あのときのようなことは、くり返したくない……）
切実に、そうおもう。
（冗談ではない！）
突如、昌幸は憤然となった。
（このようなことに、おれがかまうていられるときか……真田の家も、おれが国も、消えるか残るかというときに、女どもの自儘を、ゆるしておけるものか！）
このことであった。
昌幸が殺意をおぼえたのは、このときである。
だれへの殺意か。
山手殿への殺意であった。
これは、お徳に関わることのみではない。
（御方は、この世におらぬほうがよい。真田の家のためにも、おらぬがよい）
おもいがつのるにつれて、この決意は、ぬきさしのならぬものになりかけてきた。
そのとき、彼方に、砥石城下の番所に燃える篝火が見えた。

十二

去年の秋……。

北条氏直は兵をひきいて信州の小県郡・海野平のあたりへ進軍して来た。

真田昌幸としては、これに味方せざるを得なかった。

なぜというなら、越後の上杉景勝が南下し、すでに川中島一帯を手中に入れてしまったからである。

英雄・謙信の跡をついだ上杉景勝の、信濃の国への執着は強い。

昌幸としては、北条軍と協力をして、とりあえず、上杉軍の東信濃への侵蝕をふせがねばならなかった。

川中島平は、かつて上杉・武田両軍が信濃の国を争奪するために何度も激突をくり返したところである。

川中島の海津城（現・長野市松代町）は、故武田信玄が上杉謙信を制圧するために築いた城であるが、武田家滅亡の後、早くも上杉景勝は、この城を手に入れてしまった。

川中島まで、上杉の勢力が伸びて来たことは、真田昌幸にとって、

「となりの家へ火がついた……」

ようなものである。

昌幸が北条軍に参加し、出陣したのも当然といえよう。

この間に、信濃の諸豪族は、上杉か北条の、どちらかにくみして戦わざるを得ない。
もっとも、そのときは、これといった戦闘がおこなわれなかった。
三万の北条軍は、八幡表のあたりまで進み、上杉軍と対峙したが、しばらくして、引きあげることになった。真田昌幸も同様である。
昌幸には、むり押しに戦をするつもりがなかった。
当分は、上杉・北条・徳川の三大勢力の間を、
「泳ぎまわって見る……」
つもりであったのだ。
上杉軍にしても、戦意が燃えていなかった。
川中島へ進出したのはよいが、このときの上杉景勝は、領国の越後に起こった内乱を放置しておくわけにゆかなかった。
それは、北蒲原郡の豪族・新発田治時が一党をひきいて反乱を起こしたのである。
景勝は、川中島の海津城へ、あの村上義清の子の景国を入れておき、自分は兵をひきいて越後へ引き返し、去年一杯を反乱の鎮圧についやし、今年の雪解けを待って、ふたたび、東信濃へ侵入しつつある。
北条氏直も、いつまでも上杉軍とにらみ合っているわけにはゆかぬ。
去年のそのころ……。
徳川家康は信玄亡きのちの甲斐の国へ入り、経略に奔命した。

徳川・北条両軍の小戦闘は、しばしばおこなわれた。
結局、両家は講和した。
どちらかというと、徳川家康に北条父子が圧倒されたかたちである。
休戦は、北条方から申し出たものであった。

一、北条軍の占領した信州・佐久郡と甲州・都留郡を徳川家へ引き渡す。
一、徳川家は、上州・沼田領を北条家へゆずる。

これが、講和条件である。
しかし、それは即時に実行されたわけではないのだ。
現に、沼田領は、真田昌幸がこれを手中におさめ、沼田城を確保している。
それを、昌幸へはことわりもなしに、家康が北条氏へゆずろう、などといっているのだ。
そのくせ、昌幸に対し、家康は、
「味方についてくれるなら、上州・箕輪領をさしあげよう」
などと、いってよこしている。
ところが箕輪領は、すでに北条家の支配下にある。
すべてがこうしたわけで、徳川も北条も、諸方の武将や豪族を味方につけたいばかりに、
「空手形」

を、やたらに乱発するのだ。

真田昌幸は、徳川家の臣となった弟の信尹（のぶただ）が家康にとりなしてくれていることもあり、

「御味方つかまつる」

と、申し出てはいたが、去年中は、家康の言葉も北条方の言葉も、何一つとして信用できなかった。

ともかく、結果として、徳川家康は甲斐の国へ地盤を築いた。

これは、たしかなことであろう。

ほろび去った武田家と深い婚姻関係にあった関東の北条氏政（うじまさ）・氏直父子であるが、家康の実力に負け、甲斐を放棄したといってよい。

真田昌幸の目にも、両者の実力の差は、はっきりとしていた。

どちらをえらぶか、ということになれば、当然、徳川家康である。

しかし、家康は、秀吉より近いところにいるが、まだ真田家には遠い。

真田家の身近にいる大勢力は上杉・北条である。

この二つの勢力と対抗し得る実力がなくては、彼らを押しのけて徳川家康と信頼度の高い同盟をむすぶことは不可能といってよい。

去年は、徳川・北条の講和が成立し、家康が甲州から浜松へ帰還したことによって終わった。

家康は、旧武田の家臣たちを手厚く迎え入れ、これを原動力にして甲州調略に立ち向かい、

大きな収穫を得たのであった。

羽柴秀吉が疾風のように、明智光秀を討ち、中央の檜舞台へ躍り出てしまったので、家康は、甲斐の経略によって地盤をひろげ、ちからをたくわえ、他日に備えようとしている。

これは、家康のみではない。

真田昌幸にしても、実力を温存し、他日、自分にとって、利益を得るべきときにこそ、

「戦おう」

そのつもりであった。

中央では、羽柴秀吉が急激なテンポに乗って進出し、故主・信長の跡を襲おうとしている。

中央以外の大名や武将たちは、これを見まもりつつ、うかつにうごくまいとしていた。

真田昌幸にも、行く手がしかとは見えぬのである。

十三

（なれど、去年は、まことに危うかった……）

いま、真田昌幸は、しみじみと、そうおもっている。

弟の真田隠岐守信尹の斡旋により、徳川家康へ接近しすぎたため、上州一帯の北条勢が、一時、沼田城へも攻め寄せて来たのである。

城代・矢沢頼綱が、これを撃退してくれなかったら、

（いまごろ、おれは、徳などを抱いて夜をすごしてはいられなかったろう）

なのである。

しかし、やがて徳川・北条が講和してくれたので、昌幸の立場もゆるやかになった。

そこで昌幸は、自分が支配している小県郡の平定に取りかかることができたのだ。

室賀・小泉・丸子などの強力な豪族との小戦闘が絶え間なく、いまも、つづけられている。

今年の正月の丸子城に、丸子三左衛門を攻めたときは、昌幸にとっても久しぶりの激戦であったといえよう。

こうして、一応は小県郡を平定するや、昌幸は、川中島の豪族たちへ手をのばした。

いま、川中島は上杉景勝の支配下にある。

けれども、以前は武田家の傘下に在ったわけだから、昌幸にも顔なじみの豪族が多いのだ。

昌幸は、巧妙に、徳川家康を利用した。

「自分は、徳川家の代わりに、おぬしたちへはたらきかけているのだ」

と、昌幸はいった。

草の者が活躍したことは、いうまでもない。

「近いうちに、家康公は川中島へ出馬なされよう。そうなってからでは遅い。いまのうちに、自分とちからを合わせ、北信濃を上杉から取り返しておこうではないか」

この昌幸の声に、川中島平の諸将は、かなり動揺したようだ。

上杉景勝としても、

「気が気ではなかった……」

に、ちがいない。

こうして、今年の春から、上杉家の反攻が開始されたのである。

昌幸の弟・隠岐守信尹は、こうした兄の功績を、徳川家康の耳へぬけ目なくつたえている。

信尹は、いま、加津野隠岐守という名で家康に仕えているが、しばらくは〔真田信尹〕の名をもって、彼をよぶことにしたい。

上杉景勝は、川中島平の海津城の防備をきびしくすると共に、猛然として東信濃へ進み、虚空蔵山へ城を築いた。

ここは、埴科・小県両郡の郡境である。

上田平にも近い。

真田昌幸の砥石城から太郎山を経て、尾根づたいに虚空蔵山を攻めることができる。

地形は、昌幸が熟知していた。

上杉景勝が、虚空蔵山の城の備えをかためつつあるときに、昌幸は数度にわたって、これを奇襲し、大打撃をあたえている。

だが、上杉勢を徹底的に追い退けるまでにはゆかなかった。

昌幸が、

「上田平へ、城を築く……」

ことを急いでいるのは、このためなのである。

徳川家康からは、まだ、上田築城を、
「ゆるす」
とは、いって来ていない。
昌幸は、岩櫃城代の矢沢頼康を浜松へ送って嘆願しているが、家康の返事はなかった。
昌幸は、あせりをおぼえている。
虚空蔵山を攻めたときに、上田平の西方の高地へ、一応、兵站基地として砦のようなものをつくっておいた。
このあたりは、むかし、豪族・小泉氏の砦があったところだし、ある程度の形容をなしている。
だが、昌幸がのぞんでいるのは、この小さな砦の東方へ接して、本格的な、
（おれの城を築く……）
ことにあった。
（もはや、浜松からのゆるしを待ってはおられぬ。かまわず、城を築いてしまおう）
昌幸は、そこまで、おもいつめていた。
北条軍が東信濃から引きあげてしまったいま、上杉軍の南下をふせぐためには、
（おれ一人で、してのけねばならぬ）
のであった。
いまは夏だ。

昌幸は秋を待っている。上田平には深い積雪はない。
信濃の国の中でも、このあたりはもっとも温暖なところだ。秋から冬にかけて、
（なんとしても、築城に取りかかりたい）
のである。
秋になると、間もなく雪に埋もれる越後からの、大量の上杉軍の出兵は、先ずないと看てよい。
（まったく、もって、女どものさわぎに関わり合うている暇はないのだ）
お徳と、いさかいをして砥石城へもどった真田昌幸は、それから十日ほど、木立の中の館へ足を向けなかった。
十二日目に、草の者が昌幸のもとへあらわれた。
お徳が、あきらかに、
「悪阻をおこした……」
と、いうのである。
（やはり、身籠っていたのか……）
昌幸は、凝然となった。
「よし。これからも、よくよく気をつけて、徳から目をはなすな」
昌幸は、草の者にいった。
「で、徳は、どのような様子だ？」

「変わりなきように、お見うけいたしまいた」
「さようか……変わりない……」
「はい」
館を囲む木立や、ごく近辺の野道などへ出ることは、お徳にもゆるされている。
そうしたときにも、ひそかに草の者がお徳の身をまもり、あたりへ注意ぶかい視線を向けていることは、むろんのことであった。
お徳は、館にいる草の者たちの食事の世話なども好んでしているし、ことに縫い物が好きな女ゆえ、針をもたせておけば、
「飽きることを知らぬ……」
のである。
ちかごろ、真田昌幸が肌につけるものは、ほとんど、お徳が縫いあげていた。
「では、頼むぞ」
と、草の者にいってから、昌幸は、
「しばらくは行けぬ。そのつもりでいてくれい」
「はい。その旨を……？」
「いや、徳にはだまっておれ」
「心得まいた」

十四

女忍びのお江が、砥石へあらわれたのは、それから三日後の夕暮れであった。

居館裏手の濠にかかる〔はね橋〕の前にある番小屋に、このとき詰めていたのは、向井佐平次であった。

真田源二郎は昨日の朝、岩櫃へ出かけた。

「兄上のお顔を、しばらく見ておりませぬゆえ……」

という源二郎へ、昌幸が、

「益体もないことよ」

「何故です、父上……？」

「子供でもあるまいに……兄の顔を見たとて何になろう」

たとえ一日でも、源二郎が傍にいないとおもうと、昌幸は、さびしいのである。

この正月。

十七歳になった源二郎信繁は、丸子攻めで初陣をした。

昌幸は、

「まだ早い」

と、いい、

「兄の源三郎が出陣もせぬうちに、弟のお前を出すわけにはゆかぬぞ」

めずらしく、昌幸は源三郎を重んじるような口ぶりになった。
いかに源二郎がせがんでも、初陣をゆるさぬ。
「小戦の初陣など、するものではない」
そして昌幸は、砥石を南下し、千曲川をわたって四里ほどのところにある丸子城へ攻めかけたわけだが、そのあとから源二郎は向井佐平次のみを従え、追って来たのである。
槍や太刀はたずさえていたが、申しわけ程度の軽武装で、二人は戦場へ突入して行った。
「源二郎様が、えらく、おはたらきでござりました」
と、戦が終わってから家来に告げられ、
「な、何と申す……」
真田昌幸は、唖然となった。
源二郎は、敵の首級三を得た。
「仕方のないやつ……」
顔を顰めはしたが、おもいもかけず、このようなかたちで、愛する次男の初陣が無事にすみ、
（おれのせがれとして、相応のはたらきをしてのけた……）
ことは、昌幸にとって満足だったのであろう。
昌幸の陣へあらわれた源二郎は、幸運にも、二、三の軽傷を負ったのみである。
だが、さすがに顔色は鉛色に変じ、しきりに胴ぶるいをしながら、引きつれたようなうす

笑いをうかべているのが、昌幸にとっては、むしろ可憐に見えた。
「父のいいつけにそむいたな！」
昌幸は、いきなり、怒鳴りつけた。
「はい」
いつもの源二郎に似合わぬ神妙さで、くびをたれたが、つぶやくように、
「いつかは、近きうちに、初陣をせねばなりませぬ。源二郎は、待っていられませんでした。早く……一日も早く、初陣をすませたかったのです」
「ふむ……」
武将の子であるからには、当然のことなのだが、はじめて戦場へ出て生死をかけ、敵と闘うことがたやすいわけのものではない。
敵の……他人の肉体を刃物で突き、斬り、殺すことなのである。または、敵の刃物がおのれの躰を抉り、切断するやも知れぬことなのだ。
われから、のぞむことといえようか。
いや、のぞむのぞまぬにかかわらず、大将の子息がどうあっても通過せねばならぬ、これは関門であった。
源二郎としては、一日も早く、この関門を通りぬけたかったのであろう。
その気持は、昌幸にも経験がないことではなかった。
「どうだな、いまの気持は？」

「安堵して、おります」
「恐ろしくはなかったろう。いや、恐ろしいとおもう間とてなかったろうが……」
「はい」
「無我夢中のことよ」
「いかにも、そのとおりでした」
「槍を揮う腕にも、駆けまわる足にも、応えがなく、ただもう、ふわふわと、おのれの躰が宙に浮いているような……」
「はい、はいっ」
「運のよいやつめが……」
そこで、ようやくに、昌幸は破顔した。
源二郎の初陣については、家来たちもおどろき、ついで源二郎らしい勇敢なはたらきを見たことで、
「めでたい」
「さすがに、な……」
たのもしさをおぼえたのであろう。
苦戦の末の勝利を忘れたかのように、真田勢はよろこびの声をあげた。
源二郎も源二郎だが、向井佐平次のはたらきぶりについても、
「あれほどのやつとはおもわなんだ」

「か細げな、たよりなげな若者を、源二郎様が拾うて来られたとおもうていたが、よ」
佐平次にして見れば、去年の高遠城で、怒濤が押しかぶさって来たかとおもわれる織田の大軍を迎え撃ったときにくらべると、丸子攻めの戦闘では、あまり圧迫感をおぼえなかった。
（攻めると守るのちがいは、これほどに大きいものか……）
と、おもった。
長槍を揮って、佐平次は敵を叩きつけた。
馬上の敵には、敵を突くよりも馬を突いた。馬の足を叩き撲り、槍が折れると、あたりに落ちている敵の槍を拾って闘った。
丸子方の武士で、勇名のきこえが高かった深山甚右衛門というのが、源二郎の馬側へせまり、太刀をつけようとしたとき、駆け寄った向井佐平次が下から馬上の深山の太股を槍で突きつらぬき、馬の背へ串刺しにしてしまったのを、数人の真田勢が目撃している。
「見誤ったぞ、お前を……」
と、真田昌幸も瞠目し、微傷だに負わぬ佐平次を、さも、ふしぎそうにながめやり、
「戦うていて、目が見えたか？」
「はい。高遠の折には盲目同様でござりましたが……」
「ほう……」
「目の中へ、いちめんの霧のようなものがかかり、敵味方の雄叫びも鬨の声も、まるで、夢の中にきこえるようにおもわれました」

「なるほど」
砥石へ帰ると、昌幸は、すぐさま、
「佐平次。源二郎の守をしていることはない。取り立ててつかわそう」
といい、源二郎も、しきりにすすめたが、
「いえ、私めは、どこまでも源二郎様のお側につきそうていたいとおもいまする。そのようになし下されますよう」
向井佐平次は、いい張ってやまなかった。
「私は、戦がきらいなのでござります」
と、これは、昌幸の前を下がって来てから、源二郎のみへもらした言葉であった。

昨日。
真田源二郎が岩櫃へおもむいたとき、佐平次は砥石に残った。
「たまさかのことだ。おれが居ぬ間に、のびのびとしておれ」
源二郎は、そういって、佐平次の眼の底をのぞきこむように凝視した。
何故か、向井佐平次のくびすじへ見る見る血の色がのぼった。
「いえ……」
もぞもぞと、何かいいかける佐平次へ、源二郎がいった。
「わかっている」

「はあ……」
「わかっているということだ」
「な、何を……」
「いうな。悪しゅうは計らぬ。安心しておれ」
すると、佐平次はうつむいた。
依然、顔を赤らめたままである。
「ふ、ふふ……」
源二郎のふくみ笑いには、佐平次への好意がただよっていた。
そして今日。
日暮れ前から、佐平次は裏門の番小屋へ入った。
源二郎の用事のないとき、佐平次は、この番小屋へ来て、番をつとめることがある。
これは、我からのぞんですることだ。
陣笠をかぶり、槍を持ち、合わせて二名の番兵が、居館のまわりにある七カ所の番小屋を交替で警備していた。
いまは戦時といってよい。
城下の周辺には、さらにきびしい警備がなされている。
そのとき佐平次は、別の一人の番兵と入れ替わり、番小屋の中から濠端へ歩み出たところであった。

と、彼方の木戸で板木が鳴った。
これは異常を知らせたものではない。
木戸へさしかかった者を、
「異常なし」
と、みとめ、これを居館の裏手へ通したという合図なのである。
木戸口を入って来たのは、小さな荷を背負い、笠をかぶった一人の女だ。
女は、夏の夕闇の中を音もなく、こちらへ近寄って来る。
旅の女らしい。
佐平次は、女を待ちかまえた。
女が立ちどまり、こちらを見た。
笠の内の顔は日に灼けつくしているらしく、夕闇の中では見わけにくい。
「おお……佐平次どのか」
声をかけてきたのは、女のほうからであった。

十五

「あっ……」
その一声で、旅の女がだれであるかを向井佐平次は知った。
「お、お江どの……」

「おお、おお……」

うなずきつつ、つかつかと歩み寄ったお江が、手をのばし佐平次の陣笠を除って見て、

「元気でいましたのう」

たくましくもふとやかな双腕に、しっかりと、佐平次の肩を掻き抱いた。

どちらかといえば細身の躰だけに、佐平次がお江のひろやかな胸の中へ、埋まったように見えた。

このときの、佐平次が感じたものを、どのように表現したらよいだろう。

すくなくとも、一年前に生身の男として抱き合い、はげしい愛撫をかわし合った相手への情感はわきあがって来なかったといってよい。

そのかわり、まるで肉親の……姉か母にあたたかく抱きかかえられたような、なつかしさが胸にこみあげてきて、

「う、う……」

佐平次は声をつまらせた。

汗をまじえた濃厚な、お江の体臭までも、むかし、幼少のころ、畑から帰って来た亡母のそれを想い起こさせたのである。

「どうした、泣いているのか？」

お江の声は、かすれてはいても力強い。

「ふ、ふふ……まるで、赤子のような……」

「ぶじで、う、嬉しい」
「おお、おお」
番小屋にいた足軽が外へ出て来て、二人のありさまに瞠目した。
「これ、佐平次……」
と、その足軽が、
「その女ごは？」
「あ……」
あわてて飛びはなれた佐平次にかわり、お江が、
「壺谷又五郎どのが手の者じゃ」
堂々と、胸を張っていう。
こうしたところが、真田家の草の者の、他家の忍びの者とはちがうところなのだ。
足軽もまた、又五郎の名をきいただけで、
「あ、これは……」
かたちをあらため、一礼した。
「佐平次どのは、いま、番をしていやるのかえ？」
佐平次が、はにかんだような、うなずき方をした。
「よし、よし」
佐平次の肩を叩きつつ、

「私も、これより御屋形さまへ申しあぐることがある。のちに、ゆるりと……な……」
いうや、お江は裏門へ入りかけた。
「お江どの。おれが案内する」
「そうかえ」
足軽へ槍をあずけ、佐平次は先に立って裏門の内へ入った。
土塀に沿って両側に、家来たちの長屋がならび、正面には大きな馬小屋が見えた。
門内の小屋にいた足軽たちへ、
「壺谷又五郎さまからの御使者だ」
と、佐平次がいい、
「さ、こちらへ……」
お江をいざなった。
いまは真田の草の者になりきっているお江だが、ほとんど他国へ出ていたので、上州・沼田以外の真田家のものには、ほとんど、顔を知られていない。
屋敷の内に、濠で囲まれた一郭がある。
ここを「御主殿」と、家来たちはよんでいる。
すなわち、真田安房守昌幸の〔居住区〕という意味だ。
昌幸が、こういう名称をつけてよばせるのも、故武田信玄が古府中に構えていた居館の名称を、そのまま踏襲しているわけであった。

向井佐平次は、主殿につめていた昌幸の侍臣にお江を引き合わせ、
「では、お江どの。のちほどに……」
「おお、佐平次どのは、この屋敷内に暮らしてか？」
「源二郎様のお側に」
「そうか、わかった……」
お江が奥へ消えるのを見送ってから、佐平次は裏門の番小屋へもどって行った。

真田昌幸は、お江が来たと知って、駆けるようにあらわれた。
ここにも、昌幸の寝間に接して、岩櫃城内の居館と同じような〔地炉ノ間〕が設けてあった。
「おう、もどったか。久しいな」
「御きげんよくおわしまして……」
「うむ、うむ、去年より、手ひどくはたらかせたとな。すまぬとおもうているぞ」
このねぎらいの言葉も、一国一城の主が忍びの者へなど、
「かけるはずがない……」
性質のものなのだ。
「お前が女だけに、おれはな、どのような褒美をとらせたらよいのか、と、思案にあまっている。遠慮なく、申してみてくれい」

お江は、うすく笑ったのみで、
「さて、御屋形さま……」
「うむ？」
「まず、矢沢但馬守さまよりの御伝言を……」
「ふうむ……お江は、浜松におったのか」
「はい」
「待て。それよりも、先に、汗を洗いながし、湯漬けでも腹に入れたがよいわ」
「それは、のちほどに」
「さようか」
「申しあげまする」
岩櫃城代の矢沢但馬守頼康は、いま、昌幸の命をうけて浜松へおもむき、徳川家康に、
「上田平へ築城の儀を、おゆるし下さるよう……」
懇願をつづけている。
昌幸の弟・隠岐守信尹も、これを側面からたすけていたが、家康からの返事は、あいまいなものであった。
真田昌幸が上田へ築城することは、越後の上杉景勝へ対し、大きな牽制力となる。もっとも、それは、あくまでも昌幸を徳川の味方と考えてのことだが。
家康は北条父子との間に和睦をむすんだ。

しかも、この秋には、自分のむすめ督姫と、北条氏直との婚儀がととのうはずだ。
この婚姻関係によって、徳川・北条両家は、さらに深くむすびつくことになる。
家康は、上信二州において、いまのところ北条父子と、
「争いたくはない……」
のである。
その方へ、むだな消耗をしたくはない。
いずれは来るべき期に備え、ちからをたくわえておかねばならぬと、おもいきわめたのであろうか……。
昌幸の願いをゆるすことにふみ切れぬのは、
「どうも、北条から口入れがあったらしゅうおもわれる」
と、隠岐守信尹が、矢沢頼康にいったそうな。
北条父子は、これまでに、真田昌幸という武将の、端倪すべからざる相貌を、
「嫌というほど……」
に、見せつけられている。
沼田城の攻防だけでも、北条方は、真田昌幸に先を取られて来た。
「真田に、そのような城を構えられては、行く末どのようなことに……」
北条父子が、そうおもうのもむりはなかった。
今度も、織田信長の死後、北条軍が信濃へ進出したとき、真田昌幸は、

「御味方つかまつる」

と、いい出た。

そして、越後の上杉景勝の南下を、北条軍のちからを借りて防いだ、ともいえるのである。

それでいながら、北条父子には一言の断りもなく、密かに弟の隠岐守をもって、徳川家康へ、

「款を通じた……」

ではないか。

油断も隙もあったものではない。

徳川と戦うことをやめ、和睦をしたからよいようなものの、もしも、いまなお、徳川との交戦がつづけられているとしたら、昌幸の上田築城は北条父子にとって、非常な脅威となる。

こうしたいきさつを、徳川家康もよくわきまえている。

「なればこそ、御返事をいただけぬのであろう」

なのである。

また、家康も北条方から昌幸についてくわしく告げられ、

（さほどの男に、この上、新しい城をもたせては……？）

危ぶみはじめたのやも知れぬ。

交渉は、行き詰まった。

「お指図を……」

と、矢沢頼康が昌幸にいってよこしたのだ。

「ふうむ……」

真田昌幸の顔面に、突然、血がのぼった。

立ちあがった昌幸は、二度三度と足を踏み鳴らし、

「もはや、待てぬわ！」

ほとばしるように、いった。

「待てぬ、とおおせられますのか？」

「お江。気の毒じゃが、明日、また、浜松へ引き返してくれるか。この使いは、やはり、お前にたのむほうがよい」

「心得まいた」

「三十郎（頼康）に、こう申せ。もはや徳川へも北条へも気がねはせぬ。機（とき）をえらび、今年のうちに、おれ独りの考えで、上田平へ城を築くと、な」

「まあ……」

「おどろいたか」

「いいえ。お見あげ申してござります」

「どうで、またぞろ乱世よ。やって見て、家がほろびてしまうのなれば、それまでのことだ」

「はい」
「ただし、隠岐守へは、あくまでも内密にいたせと、三十郎に申しておけ。あの弟めは、いざとなると、この兄よりも徳川へ忠義だてをしかねぬ」
「それはもう……隠岐守さまは徳川の家来となられたのでござりますもの」
お江は、平然といった。

十六

戌ノ刻（午後八時）に、向井佐平次は次の足軽と交替し、裏門外の番小屋から屋敷内へもどった。
いま、佐平次は、御主殿の中にある真田源二郎の居室の近くで寝起きをしていた。
源二郎の部屋と小廊下をへだてた板敷きの小部屋が、それであった。
源二郎に仕えるようになってから一年の間に、衣類も増えたし、
「さ、これもやる。あれもつかわす」
つぎからつぎへと、源二郎が刀をくれる、槍をくれる、革足袋のようなものまで、
「佐平次に、ちょうどよいだろう」
気前もよく、下げわたしてくれるのだ。
大きな木箱が二つ、部屋に置いてあり、その中には戦場へ出るときの、二枚胴の腹当てや陣笠などもしまいこんである。

館の内には、日中の熱気が、まだこもっていた。
高原の山岳に囲まれた岩櫃城にくらべると、このあたりは信濃の国といっても、夏の暑気が相当にきびしい。
（だが、古府中とは、くらべものにならぬ）
と、佐平次はおもった。
夏の古府中（甲府）は盆地だけに、風が絶えた夜などは、寝苦しくてたまらなかったものだ。
佐平次は源二郎の居室をのぞいて見た。
源二郎は、三日ほど後に、岩櫃から帰って来よう。
異状がないのをたしかめてから、小廊下へもどった。
前方は壁に突き当たり、左へ折れると大廊下へ出る。
大廊下に面した〔地炉ノ間〕で、お江はまだ、真田昌幸と語り合っているらしい。
佐平次は、小廊下をもどった。
自分の部屋の前を行きすぎ、左へ折れると、そこが裏手への戸口で、戸口の傍の、板張りの小部屋に警衛の足軽が二名、ひかえていた。
その一人が、
「おう、佐平次か。何処へ行く？」
「水を浴びに……」

「行って来い。今日は、また、ひどく暑かったのう」
「うむ……」
「先刻、裏門の外で、女の草の者と抱き合うていたとな」
「知っているのか、もう……」
「うわさがひろまるのは早いぞ」
「あの人は、おれの、いのちの恩人だ」
「ほう、そうか……」
「まるで、母に出会うたような、おもいがした」
「そうか、ふうん……」
足軽（あしがる）は、勝手がちがったような顔色になり、
「そりゃ、よかったのう」
「うむ……では、行って来る」
「ゆるりと汗をながして来い」
すると、別の一人が、ふくみ笑いをして、
「佐平次。待っているげな」
と、いってよこした。
「だれが？」
「もよが、よ」

「いうな……」

佐平次が、顔をうつむけていい、外へ出て行った。

二人の足軽の笑声が、佐平次の背中を追って来た。

その笑声には、彼らの好意がふくまれている。

佐平次は、前面の板塀に沿って左へ折れた。

そこに柵が設けられていた。しかし番小屋もなく、番兵も立ってはいない。

柵の向こうは、大台所や、薪小屋、蔵などがたちならぶ裏手にあり、大きな石井戸もある。

夏の闇が、ここまで来ると、いくらか明るい。

小者や下女たちが、まだ起きてい、一日の労働の後の躰をやすめながら、それぞれに語り合っていた。

砥石城の南の峰の〔米山曲輪〕へつづく山肌が、くろぐろとせまり、山百合の匂いがあたりにたちこめている。

「佐平次どの……」

木立の蔭から、若い女があらわれ、駆け寄って来た。

「もよどの……」

抱き合って、二人は烈しく、唇を吸い合う。

これから先の、男女が分け入るべき道へ、二人はまだ、足を踏み入れてはいない。

それだけに、唇でかわし合う愛撫がひたむきで、もよが、あまりに強く吸うときは、佐平

次の唇が腫れてくるほどであった。
「口を、蠅に嚙まれたのか、佐平次」
などと、源二郎が弄うのである。
（源二郎様は、おれと、もよどののことを知っておられる……）
と、佐平次はおもっている。
しかし、あきらかに、源二郎は佐平次ともよを好意の目でながめていた。
もよの父親は、草の者の一人で、名を赤井喜六といい、二年前に病歿した。
母親は、もよが十歳の折に亡くなっている。
佐平次が、まず、もよに関心をもったのは、七歳のときに母を亡くした自分との境遇がよく似ていることであり、母亡きのち、自分を育ててくれた叔母のもよと名が同じだったからでもある。
そのころの若い男にとり、若い女に接近して行く理由とはずみは、これだけのことでじゅうぶんだったといえよう。
父の喜六が亡くなった後、もよは岩櫃の城へ引き取られた。
侍女ではないが、労働ばかりしている下女でもない。
もよは、源二郎のための縫い物をすべて受けもっていたし、部屋へ来て、身のまわりの世話をすることもあった。
源二郎が父・昌幸と、砥石へ移るのと共に、もよも移った。砥石は、もよが生まれ育った

真田の庄の〔草屋敷〕にも近い。
「源二郎さまは、まだ、おもどりなされませぬか？」
「うむ……」
「源二郎さまがおわさぬと、私は佐平次どのに会う折がのうて……」
と、もよが甘えかかり、ふくらみきった胸を佐平次へ押しつけてくる。
もよは、佐平次より二つ下の十八歳であった。
「おれもだ、もよどの……」
佐平次は、もよの胸乳へ手をさし入れかけたが、
「や……？」
急に、手を引きこめ、あたりの気配をうかがった。
だれかが、闇の底から自分たちを見ているような気がしたからである。

十七

「佐平次どの。どうなされた？」
「叱っ……」
「もし……」
「たれかに見られているような……」
低い佐平次の声に、もよはおびえるどころか、むしろ、ほこらしげに、

「見られても見られなくとも、佐平次どのと私のことは、この館のだれもが知っていること」

と、いったのである。

そうでないとはいいきれぬ。

館の足軽たちや小者などが、自分ともよを見る眼の色で、それは佐平次にもわかる。

もよは、肌色の浅黒い痩せた小柄な躰つきだが、乳房のふくらみは大きい。

よくはたらくし、

「二日や三日ほどなら、はたらきづめにはたらいて、ねむらなくとも平気……」

だと、もよは自分でもいう。

よほど、健康に自信をもっているらしい。

顔だちは、美しくもなく、醜くもなかった。

早くに父母を失っているだけあって、何事にもしっかりとしてい、岩櫃にいたころのもよを知っている真田源三郎も、

「もよは、おれと同年なのだが、とても、そうはおもえぬ、四、五歳は年上に見える」

と、弟・源二郎へ洩らしたことがあるそうな。

どちらかというと、十八歳の若さにしては老成の気味がある源三郎信幸でさえ、そのように見ているのだから、源二郎はもとより、もよより二歳上の向井佐平次でさえも、

（とても、年下にはおもえぬ……）

のである。

この砥石の館では、あまり侍女がいない。

岩櫃が真田家の本城ならば、砥石は出城といってよい。

その出城へ、主の真田安房守昌幸が腰を据え、外敵に備えているのであった。

油断や隙を見せると、たちまちに、上杉景勝の侵攻をゆるすことになるというのであれば、いまの砥石は戦時下にあるといってよい。

居館にはたらく女たちも、男同様に、多忙な日々をすごしているのだ。

砥石の館にいる女たちの大半は、真田の庄の草屋敷から来ている。

その中には、草の者の夫が他国に出ている女もいる。夫を失った寡婦もいて、もよが最年少であった。

だが、もよは、たとえ短い年月であっても、岩櫃の館に奉公をし、

「若君」

とよばれる源二郎信繁の、身のまわりの世話をしてきたというので、年上の女たちも一目を置いているのだ。

もよが、女たちに種々の指図をあたえたり、針ノ間とよばれる板敷きの部屋で、おどろくべき速度でもって昌幸や源二郎の肌着を縫いあげる態を垣間見たときなど、

（これが十八のむすめか……？）

佐平次は、瞠目したものである。

つまり佐平次は、そうしたむすめに、こころをひかれる性質の男だったといえよう。
もよもまた、そうした性質の男を好むむすめだったのである。
この館で、共に源二郎へ仕えるようになって間もなく、もよは密かに佐平次の肌着を縫いあげてくれた。
夜に入り、自分の部屋で肌着をひろげて見ると、背のあたりに黒糸で〔佐〕の一字が縫い取りにしてあった。
このときから、もよを見る佐平次の眼が熱してきたのだ。
「たれも、見てはいませぬ」
もよが、そういって、佐平次を木蔭へいざなった。
闇の中に、山百合の花の香りが濃密にたちこめている。
「そのようだな」
「もし……もし、佐平次どの」
もよは、草の上へ腰をおろした佐平次へ、またも汗ばんだ身を投げかけてきた。
夢中で息をあらげ、佐平次の唇を吸いにくる。唇を吸い合うことは佐平次が教えたのだ。
それまでのもよは、
（何も知らなかった……）
のである。
それは佐平次が、よくわきまえていることなのだが、いったん官能の甘美な疼きをおぼえ

こむと、もよはむすめらしい大胆さで佐平次の愛撫をもとめた。
そのくせ、若い佐平次がたまりかねて、かたく脹ったもよの乳房から、手を下方へ移してゆくと、
「いや、いや」
もよは断固として下肢を閉じ、佐平次を突き退ける。
今夜も、同じであった。
「おれは……おれは、な……」
佐平次は、苦しげに喘いだ。
お江によって、女の躰を知る前の佐平次だったら、このように苦しまなかったろう。
だが、傷ついた身の自分をつれて山野を逃げまわりつつ、お江は存分に佐平次の男を目ざめさせてくれた。
こうなれば当然、禁欲は苦しい。
もっとも、若者にとっての禁欲は、かなり可能なものであって、もよという対象がなければ、佐平次もこれほど苦しまなかったろう。
もよは早く源二郎に願い、夫婦にしてもらいたいという。それは佐平次がいい出すべきなのだから、そうしてくれぬ以上、身はゆるさぬというのだ。
「いや、いや……」
もよが、はね起きて駆け去った。

佐平次は重苦しげな吐息を何度も吐き、石井戸へ行き、気が狂ったように水を浴びた。

大台所の灯も消えている。

御主殿へもどると、裏手の戸口にいた足軽(あしがる)が、

「長かったのう、佐平次……」

「そうか……」

「待っていたか？」

「だれが？」

「もよが、よ」

「知らぬ」

自分の小部屋へもどり、佐平次は身を横たえた。

全身の汗が引き、さすがに涼しい。

躰(からだ)が凍りつくほどに水をかぶってきたのである。

（お江どのは、まだ、御屋形(おやかた)様のもとにいるのか……？）

今度は、そのことばかりをおもいつめていた。

先刻、お江が裏門へあらわれたときは、いささかも欲情をおぼえずに抱き合ったのに、いまの佐平次は、お江のみっしりと肉の充(み)ちた躰が、

（欲しい。欲しくてならぬ……）

のであった。

その一方で、もよのことを想いうかべ、

（おれは、女の躰でさえあれば、どの女の躰でもよいと考えているのか……なんという嫌なやつだ）

自分が、あさましくなってくるのだ。

そのころ……。

お江は、すでに〔地炉ノ間〕から姿を消している。

佐平次には、

「のちほど、ゆるりと会おう」

と、いいおいて真田昌幸のもとへおもむいたお江が、まだ、佐平次へは何の伝えもない。

（お江どのは、おれがここにいることを聞き、忍んで来てくれるつもりやも知れぬ）

そうおもうと、頭が熱してきて、ねむれるものではなかった。

十八

「おい、おい……」

戸口で、男の声がし、佐平次は目ざめた。

裏手口を警備している足軽の声であった。

昨夜の足軽とは、すでに交替をすませてある。

「あ……」
はね起きた佐平次へ、
「おい、佐平次。何刻とおもっているのだ。もうすぐに辰ノ刻（午前八時）だぞ」
「まことか……」
「源二郎様がお留守ゆえ、見とがめられずにすんだのだ。早く起きぬか」
「す、すまぬ」
「御屋形様が、およびじゃ」
「おれを？」
「うむ。地炉ノ間へ来い、とおおせある」
「そ、そうか」
あわてて、佐平次は布で顔をこすり、髪をととのえ、身仕度をして小廊下へ出た。
なるほど、日は昇りきっている。
（御屋形様が、おれに何用なのか？）
かつてないことであった。
地炉ノ間の外の廊下へ来て、
「向井佐平次でござります」
声をかけると、真田昌幸が、
「入れ」

「はい」
入って来た佐平次をじろりと見やって、
「寝すごしたのか」
「は……いえ……」
「源二郎がおらぬとおもい、懈怠しおったな」
ぴしりときめつけられては、
「恐れいりまする」
うなだれるよりほかにはなかった。
「これより、岩櫃へおもむき、源二郎をよびもどしてまいれ」
「はい」
「さよう……」
寸時、昌幸は眼を閉じたが、今度は吐き捨てるように、
「源三郎も共にと申せ」
「これより、すぐさま……」
「待て」
「は……？」
「お江は、昨夜のうちに発ったぞ」
「あ……」

信じられぬという顔つきになった佐平次へ、昌幸が、はじめて微笑を送ってよこした。
「汝がことを、よろしゅうたのむと、お江は申していたぞ」
「は、はい」
「これ、佐平次。汝は、この館におる女と、ねんごろじゃとな」
「あ……」
「お江から聞いたぞ」
佐平次は蒼ざめた。
何で、お江が、もよと自分のことを知っているのか……。
「相手は、もよじゃと、な」
「は……」
「添わせてやってくれと、お江からのたのみじゃ。汝、お江にもよとのことを願うたのだな」
「あ……」
「よし。かなえてやろう」
ほとんど、佐平次が口をきく間とてなかった。
「さ、行け。一時も早く源三郎・源二郎に、砥石へもどれとつたえよ」
廊下を出て、向井佐平次は茫然となっていた。
（昨夜。もよと語り合うていたとき、何やら人の気配がしたような……もしや、あのとき、

お江どのに見られていたのではあるまいか……？）

お江なら不可能ではない。

それにしても、昨日のことが、まるで夢のように果敢なくおもわれた。

おそらく、新たな秘命を帯び、お江は一夜をやすむ間もなく引き返して行ったのであろうが、それにしても、

（あまりに、情がなさすぎる……）

ではないか。

また、もよとのことにしてもそうだ。

もよに、こころをひかれたといっても、まだ二十歳の若者にすぎぬ佐平次だけに、夫婦になろうとまでは、おもいつめていなかったのである。

蒼ざめて、泪ぐんで、向井佐平次は岩櫃へ向かう身仕度をし、馬小屋へ向かった。

早くも、馬小屋の前に、小者が馬を引き出して佐平次を待っていた。

佐平次が乗馬をおぼえたのは、源二郎に教えられたからである。

馬にまたがり、佐平次は裏門から走り出て行った。

佐平次が去ってのちも、真田昌幸は地炉ノ間に引きこもったままである。

昌幸の前には、何枚もの絵図面がひろげられていた。

上田平へ築こうとする城の絵図面であった。

昌幸は昨夜、お江に、

「壺谷又五郎に、すぐさま、砥石へもどるよう、つたえてくれい」
と、いった。
昌幸が、いま、上田平へ築こうとしている城は〔山城〕ではない。
台地ではあるが、高い山の上の城ではない。
だから、防禦のための城ではないことになる。
そこに、昌幸の意欲がこめられていた。
昌幸は敬慕してやまぬ、故武田信玄にならい、
「上田平へ進み、守るよりも攻めよう！」
と、覚悟したのだ。
昨夜までの昌幸は、迷っていた。
家康・北条の二大勢力を、
「つかずはなれずに……」
あやなしつつ、越後の上杉景勝に備えるための築城をすることにである。
現に、徳川家康は昌幸の熱望に許可をあたえていない。
それを無視して、築城にふみ切ろうと決意したのは、昨夜の、お江からの報告を受けたからである。
築城嘆願のため、浜松へさしむけた岩櫃城代・矢沢頼康が徳川家との交渉に行き詰まり、指図をうながしていると聞いたとき、勃然として、昌幸は決断した。

（何故に、家康は、おれの築城をゆるさぬのか……）

である。

こころよく、家康が、

「城を築け」

と、いってくれたなら、

（おれは、家康の天下取りに、骨身を惜しまぬつもりでおったのに……）

である。

（おれほどの、心強い味方があろうか。それなのに家康は、何故、ためらうのか……）

である。

壺谷又五郎によると、徳川家康は、賤ヶ岳から越前・北ノ庄にいたる戦争で、柴田勝家を敗北せしめた羽柴筑前守秀吉へ、ねんごろな祝辞を送ったという。

（喰えぬやつめ）

と、昌幸は、いま、家康を警戒しはじめている。

弟・信尹を通じて忠誠を誓いはしたが、

（いざともなると家康には、この身をまかせられぬような……）

おもいがしてきている。

又五郎が探ったところによると、家康が、信長亡きのちの天下を、

「わがものに……」

と、うごきはじめていることは歴然たるものがあるそうな。
甲州の経略によって実力を層倍のものとした家康は、さらに近いうち、みずから甲州へ足を運び、経略の完璧を期するつもりらしい。
いまのところ、徳川家康は浜松を本城としているが、その他の属城の防備をかためるため、昼夜兼行で修築をおこなっているという。
それでいて羽柴秀吉へは、
「このたびの戦勝は、まことに、めでたいかぎりでござる」
と、わざわざ使者をつかわしている。
こういうときの家康の心理が、長年にわたり、武田信玄の側近くにつかえていた真田昌幸には、
（手に取るごとくに……）
よくわかるのだ。
かつて、信玄に対する織田信長がそうであった。
昌幸の看るところ、秀吉と家康の激突は、
「間近い」
と、いってよい。
家康は、東信濃までは、とても手がまわり切れまい。
その隙に、城を築いてしまうのだ。

ともかく、上杉景勝の侵攻を押さえるために、砥石を最前線としていては、こころもとない。

砥石を、真田の庄を、岩櫃をまもるためには、何としても上田まで進出したいのである。

それも〔出城〕ではない。

上田に〔本城〕を構えるのだ。

真田昌幸は地炉ノ間を飛び出し、

「馬をひけ！」

と、叫んだ。

城を築くために、これまで何度も足を運び、検べつくして来た上田平を見たくなったのである。

城を築くだけではない。そこに真田の城下町をつくりあげ、諸方から商人をまねき寄せ、わが家の財力を富ませることを考えねばならぬ。

角兵衛出奔

一

ねむっている間に、自分で夜着を剝いでしまったらしい。

秋も深まったいまは、上野の国・吾妻の山中にある岩櫃城だけに、夜ふけの気温は冬のものといってよい。

するどい冷気に、樋口角兵衛は目ざめ、胴ぶるいをして、夜着を引きかぶった。

角兵衛は、十三歳になった。現代の十二歳である。去年、父の樋口下総守が武田勝頼に従い、共に自刃して果てた知らせが岩櫃にとどいたときから見ると、躰が一まわりも大きくなっている。

もともと、すぐれた体軀をしている角兵衛だけに、いまは十三の少年ともおもえぬ。

先日も、父・安房守昌幸の代わりに岩櫃へ在城している真田源三郎が、

「どれ、角よ。おれとならんで見よ。背くらべをしよう」

角兵衛とならんで見て、

「や、おれより一寸は背丈が伸びた。おどろいたやつよ」

あきれ顔に、いったものだ。
この一年の角兵衛は山野を駆けまわって躰を鍛え、家来たちにせがんでは刀槍の術を熱心に習ったりしたためか、筋骨もたくましくなった。
角兵衛の体温は高い。
厳寒のころでも、一枚の夜具に躰を包んでさえいれば、全身が汗ばみ、
「爪先を出しておらぬと、よう、ねむれませぬ」
と、源三郎信幸にいったこともある。
気がつくと、角兵衛は寝衣も半ば剝いでいた。
これでは、さすがに躰も冷える。
引きかぶった夜具の中で、目を閉じようとしたとき、
（あれは、なんだ？）
板戸の向こうの母・久野の部屋から、女の声が聞こえた。
母の声ではない。
真田昌幸の妻・山手殿の声であった。
（いまごろ、何をしにまいられたのか……？）
押しころしたような山手殿の声が、何やら緊迫している。
夜ふけなのだ。
（徒事ではない）

と、角兵衛はおもった。

「それは、まことのことでございますか。信じられませぬが……」

と、母の声がした。

母の久野は山手殿の妹だから、角兵衛にとって、山手殿は、

「実の伯母」

になるわけだ。

「まことじゃ」

「まさか、に……」

「口惜しいか、そなたも……さぞ口惜しいことであろう」

久野は、沈黙した。

「殿にも、困ったものじゃ」

山手殿の声が、怒りにふるえている。

角兵衛は息をつめ、臥床から半身を乗り出した。

「殿は、その隠し女を、砥石の近くの……ほれ、前に、あの女が息を引きとった館へ住まわせているそうな」

隠し女とは、だれのことか。死んだあの女とはだれのことか。

「わたくしは、よい」

と、山手殿が、

「隠し女のことはよいが、女の腹の中にいる子はゆるせぬ」
「ま……そ、それは、まことで？」
「身ごもったそうな」
「はあ……」
「もしも、隠し女が男子を生んだとあれば、殿の御仕打ちがどのようなものになるか、いまより知れてあることじゃ。そうなれば、いよいよ、源三郎の肩身がせまくなるにちがいない」
いいつのる山手殿に、久野は、もう、こたえようとせぬ。
「そなたには、子が生まれずにすみ、何よりであった。もしも、そなたが殿の子を……男の子を生んだとあらば、わが妹とて容赦はせぬ」
「いえ……もはや、わたくしは……」
「そうであろ。そうでのうては困る」
「は、はい」
角兵衛は惑乱していた。
おもいもかけぬ秘密の深淵を、のぞき見てしまったのではないか。
（母が、殿の子を生むようなことを、したらしい……）
どうも、そのようである。
それは以前のことらしい。いまの母は、真田昌幸との関係を、

「もはや、わたくしは……」
と、いった。
そのかわりに、
（殿が隠し女を砥石の近くの館に住まわせている。女は身ごもっている、殿の子を……）
であった。
「久野は、その隠し女のことを知りませぬか？」
「知るはずも、ございませぬ」
「ふうむ」
「御方さまは、どうして、そのようなことを御存知なのでございますか？」
これに対して、山手殿は微かに笑ったようだ。
「殿は、わたくしを見縊っておらるるが、わたくしにも味方はある」
山手殿は、そういった。
「御方さま……」
「久野。このことは口外せぬがよい。わかっていような」
「はい」
「わたくしにとって、そなたは実の妹じゃ。これよりは何事にも、姉にそむいてもろうては困る。よいか」
と、山手殿の声が、いかにも姉妹の情のこもったものになった。

伯母の、このようにやさしい声を、角兵衛は耳にしたおぼえがないといってよい。もっとも、山手殿は、角兵衛に対して意地の悪い仕打ちをしたり、叱りつけたりしたことが、ほとんどなかった。

これまでに、三度ほど、角兵衛は山手殿から、

「そなたは、末たのもしゅうおもえる」

と、いわれた。

まだ、武田家がほろびずにいたころ、九歳の角兵衛が狂い馬を叩き伏せ、押さえこんだときの恐るべき膂力を、

（たのもしい）

と、看たのであろうか。

それから、また、行く末、くれぐれも、

「そなたは、真田家の長子たる源三郎のちからになってもらいたい」

とも、いわれた。

そのたびに角兵衛は、京の都から届いたらしい美しい歌留多や、衣服や、ときには拵えも見事な短刀を、伯母からいただいたりした。

そうしたときの、山手殿の態度や声には、やさしさというよりも、むしろきびしいものがふくまれていて、角兵衛は子供心に、

（自分は、御方さまから、たよりにされている……）

ことを直感したのである。

そのころは、父の樋口下総守も、武田勝頼の侍臣として健在でいたし、角兵衛は当然、父亡きのちは樋口家をつぎ、武田勝頼に仕えるはずであった。

真田家も、また、武田麾下の武将であったのだから、山手殿は、

「同じ武田家に仕える親族として、源三郎と、いつまでも仲よく、ちからになってもらいたい」

と、いったわけである。

ゆえに角兵衛は、山手殿に嫌悪を抱いていない。

山手殿から、属望されていることを、少年ながら、いまもほこりにおもっている。

伯父にあたる真田昌幸も、好きだ。

すくなくとも昌幸は、長男・源三郎より角兵衛に関心をもっているらしく、昌幸は昌幸で、何かにつけて、角兵衛を次男の源二郎へ近づけようとする。

岩櫃から砥石へ移るときも、昌幸は角兵衛に、

「どうじゃ。源二郎も、わしと共に砥石へ行くのだぞ。お前もついて来ぬか」

しきりにすすめたものである。

これに対し、山手殿は、

「角兵衛は、この岩櫃にいたがようございます」

断固として、はねつけた。

また、角兵衛も、どちらかといえば、源二郎より源三郎のほうが、
「好き……」
なのである。
それは、もしやすると、真田昌幸の愛情を一身にあつめているかのような源二郎信繁への、少年らしい羨望が、一種の妬ましげなおもいに変わりつつあったからかもしれぬ。
間もなく、山手殿は久野の部屋から去った。
侍女たちは、遠ざけられていた。
角兵衛をそのままにしておいたのは、よく寝入っているとおもいこんでいたからであろう。
山手殿を廊下へ送って出た久野は、もどって来て境の板戸を開けた。
角兵衛は、わざと寝息をたてた。
板戸が閉まり、廊下から侍女たちが入ってきて、久野の寝仕度の介添をしはじめたようである。
角兵衛の興奮は、容易にさめなかった。
山手殿が、
「その隠し女に、もしも男の子が生まれたとなれば……いよいよ、源三郎の肩身がせまくなるにちがいない」
と、いった言葉を、角兵衛は何度も反芻してみた。
少年の角兵衛にも、その言葉の底に潜む異常さが、不気味であった。

（何故、男の子が生まれると、源三の兄上が困るのか？）

どうも、わからぬ。

源三郎・源二郎の兄弟は従兄になるわけだが、角兵衛は二人とも「兄上」と、よんでいる。

侍女が去ったのち、久野は身を横たえようともせず、沈思しているらしい。

母の嘆息が角兵衛の耳へつたわってきた。

（真田の家には、おれのわからぬことが、たくさんにあるようだ）

おもい疲れて、角兵衛はねむりへ落ちた。

二

翌朝。

角兵衛が目ざめたとき、岩櫃城内は、あわただしげな人の足音や、声にみたされてい、武装の騎馬武者が、つぎつぎに城門から飛び出して行った。

空は鏡のように晴れわたっている。

紅葉の名残が山肌へ、赤茶けた色になって未練がましくしがみついており、強い風が落葉を吹きつけてきた。

起き出して来た角兵衛に、母の久野が、

「戦が、はじまるらしい。早う身仕度を……」

といった。

久野の眼が、赤く腫れあがっている。
「母上。お眼が……」
「昨夜は、よう、ねむれなんだので……」
角兵衛は目を伏せた。
「角兵衛は、よう、やすんでいたようじゃな」
「はい。夢ばかり、見ていました」
「ほ……どのような夢？」
「亡き父上の夢を」
「父上が、どのような」
「忘れてしまいました」
すぐに角兵衛は、源三郎信幸の部屋へ駆けつけて行った。
「おお、角か」
源三郎は、家来に介添えさせて、甲冑を身につけているところであった。
「兄上。戦と、か？」
「わからぬ。この近くの者どもが、さわぎはじめたらしい」
吾妻郡の豪族たちは、ほとんど真田家に屈服しているはずであるが、ときに、さわぎ出すことがある。
彼らは、正しい情報網をもっていない。

それだけに、織田信長歿後の、天下の趨勢をよくつかみきれず、関東の北条や越後の上杉の煽動に、

「わけもなく、乗ってしまう……」

のである。

「何、大丈夫だ。さほどのことはあるまい」

源三郎は、あくまでも落ちつきはらっている。

「角よ。ともあれ、腹ごしらえをしておけ」

微笑が、いつものようにあたたかかった。

角兵衛は、源三郎信幸を、

（真の兄のごとく……）

に、おもっていた。

源二郎信繁が角兵衛を見る眼つきにはいつも、揶揄がただよっている。

「この大食らいめが……」

とか、

「これ、角。糞力のみにては立派な大将になれぬぞ」

とか、

「お前の頭の仕組みは、ひとつ、何かが不足しているらしい」

とか、さも、おもしろげにいってよこす。

（おりゃ、源二兄上は、きらいじゃ）

角兵衛は、このところ、源二郎が父・昌幸と共に砥石へ移っているので、おもいきり源三郎へ甘えることができたし、

（源二兄上など、二度と岩櫃へ帰って来ぬ方がよい）

そうおもっているのだ。

「兄上……」

「なにか？」

「すこし、おはなし申すことがあります」

「お前が……あらたまって、おれに？」

「はい」

「何のことだ？」

「あの……」

「あの、だと？」

「二人きりで、おはなしをしたい」

源三郎が、にこりとして、

「後にしろ。おれは、いま、忙しい」

角兵衛が源三郎に、はなしたかったのは、

（新しい男の子が真田家に生まれると、源三兄上は、何故、肩身がせまくなるのか？）

そのことを訊きたいという衝動に、突然、駆られたからである。
「角よ。身仕度をしておけ。さ、行け」
「はい」
角兵衛は廊下を駆けもどり、久野に、
「母上、具足を……」
と、叫んだ。
久野が驚愕し、
「戦か？」
「大丈夫、なれども、仕度だけはしておけと……」
「源三郎殿が？」
「はい」
三の丸のあたりから、緊迫した人馬の響みが風に乗って、この中城曲輪へもはっきりとつたわって来る。
岩櫃城代の矢沢但馬守頼康は、早くも武装し、本丸の櫓の上へ立ち、城の防備を指揮していた。
矢沢頼康は、砥石にあらわれたお江が浜松へもどると、すぐさま、砥石へ引き返し、真田昌幸と密談を終え、岩櫃へ帰って来たのである。
「但馬」

と、よびかけながら、真田源三郎が櫓へのぼって来た。
「これは、源三郎様」
「丸岩の城から、羽尾勢が押し出してまいったと？」
「さよう」
矢沢頼康は、いささかも動揺していない。
丸岩城は、長野原・横壁の西南方にある山城だ。
岩櫃城の西方約四里のところにある丸岩城は、もと、羽尾幸全のもので、去年の天下騒乱後は、湯本・鎌原・西窪などの諸将が交代で城をまもり、信州・砥石と上州・岩櫃間の要路を保持してきた。
信長の死後、真田昌幸は、これらの豪族たちと、
「結束して、事にあたろうではないか」
と、よびかけ、同盟に成功した。
ところが今年の春になり、羽尾幸全の遺子・源六郎が吾妻郡へ侵入し、丸岩城を奪い取ってしまったのだ。
羽尾氏は、むかし、岩櫃城主だった斎藤憲広と共に、武田信玄の吾妻郡侵入をふせぎ、真田幸隆によって岩櫃が攻め落とされたとき、越後の上杉謙信をたより、落ちて行った。
こうしたわけで、今度も、羽尾源六郎が吾妻郡へ侵入したのは、上杉景勝の応援があったからだ。

源六郎にしてみれば、吾妻は父祖の地である。
これを奪い返し、源六郎が羽尾家を再興させようという情熱に燃えているところは、かつて沼田城を奪回しようとして、真田昌幸に殪された沼田平八郎そのものといってよい。
「砥石の父上の御指図を待ってもいられまい」
と、源三郎信幸が櫓の上でつぶやいた。

三

羽尾源六郎は、北信濃・高井郡の豪族たちをあつめ、須坂・菅平を経て鳥居峠を越え、吾妻へ侵入して来た。
羽尾源六郎を応援している上杉景勝は、
「場合によっては……」
羽尾勢進撃の補給を援けると共に、その後から大軍を投入し、真田勢力の背後をおびやかすつもりらしい。
それだけに、羽尾源六郎も必死なのである。
自分が、丸岩城を死守せぬかぎり、上杉景勝からも見はなされてしまいかねない。
景勝は、千曲川沿いに進撃し、いわば真田の表口から攻めかけたが、真田昌幸自身が砥石に腰を据えているので、つけこむ隙がなかった。
そこで、北方の高原地帯から、今度は岩櫃をねらってうごきはじめた。

羽尾源六郎はその先鋒をつとめているわけであった。
同時に、上杉景勝は、上田平に近い虚空蔵山の砦へも兵力を増強し、真田昌幸を牽制している。
昌幸も、いまは懸命である。
なぜならば、上杉勢の侵攻を押さえつつ、上田築城の工事を急いでいるからだ。
このため、むしろ、岩櫃から約一千の兵が砥石へ向け、投入されているほどなのである。
沼田城の兵力は割くことができない。
「おれの躰が二つ、ほしい」
と、昌幸はいった。
この夏……。
源三郎・源二郎の兄弟を岩櫃から急遽よびつけたとき、
「源三郎に岩櫃をまかせておくのは、こころもとない」
はっきりと、源三郎の前で昌幸はいった。
そのときは、まだ、岩櫃城代の矢沢頼康が浜松からもどっていなかった。
そこで昌幸は、前に砥石城代をつとめていた池田長門守を、
「源三郎に添えて、岩櫃へ……」
と、いい出した。
それを聞いて、源二郎が笑い出した。

源三郎は、無言で微笑している。
「おのれ、何が可笑しいのだ」
「長門守殿が岩櫃へ出向いたところで、同じことです、父上」
「何と申す」
「指図をなさるのは、つまるところ、兄上。なれば、むだだと申したのです」
十八歳の源三郎信幸が、立派に指揮を取り、岩櫃をまもりぬくことに、すこしも不足はない、と、弟・源二郎がいうのだ。
昌幸は、池田長門守をよんで、このことを、
「いかがおもう？」
問うや、長門守が破顔し、
「それがしがはたらく場所は砥石でござる。岩櫃へまいったとて、為すところを知りませぬ」
と、いうではないか。
昌幸は、渋面をつくった。
それほどのことは、昌幸もわきまえているのだ。
そもそも、源三郎を岩櫃へよびつけたのも、矢沢頼康が帰るまでは、
「お前が、おれの代わりに岩櫃をまもるのだ」
と、命じ、そのための打ち合わせをおこなうためだったのである。

そのくせ、源三郎のことになると、いちいち、難癖をつけてからでないと、おさまらぬらしい。

源三郎は岩櫃城の機能を知りつくしてい、吾妻高原一帯の地勢をよく心得ている。

だが、池田長門守は、これまでに岩櫃へ出向いたことが、ほとんどない。

源三郎信幸は、十二歳のときに、早くも初陣をしたと、向井佐平次は源二郎に聞かされていた。

「だがな、佐平次、兄上は、そのとき、敵の首を一つも取らなんだそうだ。いや、そこが兄上のえらいところよ。わしは丸子の戦に初陣し、敵の首を得たが、大将たるものの初陣には、敵の首など、どうでもよいことが、いまになって、よくわかった」

源二郎は、そういった。

その言葉の意味が、いまもって、佐平次にはわからぬ。

（おれは、初陣で首を取った源二郎様のほうが、えらいとおもうが……？）

であった。

源三郎が十二歳の初陣というと、天正五年のことになる。

武田勝頼も、織田信長も、まだ生きていて、信長は近江に安土城を築いたばかりだ。

武田家は、長篠の戦に惨敗したのち、尚も、東海地方への進出をあきらめず、徳川家康との間に、しばしば小戦闘が繰り返されていたから、おそらく源三郎は、そうした小戦に初陣をしたのであろう。

源三郎が敵の首を一つも得なかったと聞き、真田昌幸が、
「おのれは戦陣で、居ねむりでもしていたのか！」
叱りつけるや、源三郎は平然と、
「戦のありさまを、つぶさにながめてまいりました」
と、こたえた。
それを聞いて、なおも昌幸が怒り出すかとおもったら、
「む……」
苦にがしげに押し黙ってしまい、
「よいわ。行け」
手を振って、源三郎を解放したという。

丸岩城が羽尾源六郎に奪われたのは、春のころだから、源三郎の責任ではない。
ただ、あまりに放置しておくと、上杉景勝が吾妻へ兵力を投入せぬものでもない。
そうなると、岩櫃・砥石間の連絡が、
「絶たれる……」
ことになりかねない。
それを、昌幸は恐れている。
恐れながらも、上田築城の工事は昼夜兼行でおこないつつあった。

近辺から工事の人足を駆り出し、兵たちも泥まみれになってはたらき、昌幸自身が先頭に立ち、石を運び、土を掘った。

作事の大工は、武田家滅亡後に、甲斐の国から真田昌幸のもとへ移って来た者や、信濃の深志（現・松本市）からもよび寄せ、地元からもあつめられるだけあつめた。

「急げ。急げ！」

である。

昌幸は、部隊をひきい、砥石を出て、ほとんど夜も築城の工事からはなれなかった。

松明や篝火が天を焦がし、ほとんど臨戦態勢のうちに、工事がすすめられている。

越後の上杉景勝も、はじめは、うかつに兵を出せぬ状態であった。

それが、昌幸に幸いした。

越前・北ノ庄に柴田勝家を討った羽柴秀吉は、丹羽長秀らをもって、北国の押さえとし、さらに、上杉家へ対し、

「柴田勝家を討つに際し、そこもとは兵を出すと約束をしたのに、何故、出兵をしなかったか！」

威しつけて来た。

上杉景勝も、こうなると、信濃へばかり目を向けてはいられない。

羽柴勢力が北国一帯を制し、越後境まで伸張して来ることへ、景勝も対処せねばならぬ。

天下は、

「さらに、変わりつつある」

と、いってよい。

壺谷又五郎が指揮する草の者たちの報告は、つぎつぎに砥石へとどけられた。

その一は……。

織田信長の三男・信孝の自殺である。

信孝は、柴田勝家と同盟し、羽柴勢力の打倒をはかった。

いったんは、秀吉に降伏のかたちを見せたけれども、ふたたび岐阜城に立てこもっていたのである。

信孝の兄・信雄（信長の次男）は秀吉と同盟をしているわけだから、四月の末になると、兵をひきいて美濃へ入り、岐阜城を取り囲んだ。

柴田勝家の敗北は、すでに岐阜へもきこえている。

信孝の家臣たちの大半は、城を脱け出し、姿をくらましてしまった。

信雄は、

「城を明けわたし、尾張の内海へ移れ」

と、信孝に命じた。

こうなっては兄に反抗するわけにもゆかず、いわれるままに信孝は、城を出て尾張へ移った。

すると、信雄が、

「腹を切れ」
と、いってよこした。
これにもさからうことができぬ。
二十六歳の信孝は、野間の大御堂寺へ入り、ついに切腹して果てたのである。
死に際して信孝がよんだ歌が残っている。つぎのごとくだ。

昔より、主を討つみの野間なれば、やがて報いん羽柴筑前

信孝は信長の妾腹であったし、父が急死したのちは、ことごとに不利な立場にあったらしい。
壺谷又五郎によると、智もあり、勇もあって、
「行く末は、すぐれたる大将の器量をそなえていた」
という。
だからこそ、羽柴秀吉は信孝の一命を断たせたのであろうか。

四

そして……。
あの滝川一益も、秀吉に降伏した。

一益は伊勢・長島城に立てこもり、抗戦をしたが、柴田勝家も織田信孝もほろび消えたとなっては、まったくの孤立無援である。

秀吉は、

「しばらくは、伊勢の神戸にいるがよい」

といい、一益に死をあたえなかった。

それを聞いて、真田昌幸は、

「なるほど、さすがのことよ」

うれしげに、何度もうなずいた。

自分が上州から、

「追い退けた……」

かたちの滝川一益だが、昌幸は、いまも、その人柄を好ましくおもっている。

一益は、故国の伊勢へ引き返し、あれだけ勇猛に戦い、秀吉をなやました。

その一益を、秀吉が、

「助けてやった……」

ことに、昌幸は感動をした。

それは、自分が一益を看る目も、秀吉のそれも、同じであったということになる。

昌幸が秀吉へ抱きつつある好感が、このとき倍加したといってよい。

のちに、秀吉は、一益に三千石をあたえ越前・大野へ引退せしめたが、次男一時へは一万

二千石をあたえている。
滝川一益は、三年後の秋に死んだ。
この間。真田昌幸は、越前・大野にさびしく暮らしている一益へ、たびたび使者をつかわし、ねんごろになぐさめつづける。
こうした真田と滝川の間の、ふしぎな友好はのちになって一つの結実を生むことになるのだ。

夏がすぎようとするころには、上杉景勝も秀吉に屈服したかたちになった。
これは、昌幸を、かなり焦慮させたようである。
景勝が、ふたたび、東信濃侵入へちからをそそぐ結果となるからであった。
いま、丸岩城の羽尾源六郎が攻勢に出て来たのも、そのあらわれではないか……。
丸岩城の北の山裾が吾妻渓谷へ落ち込むところ、吾妻川の対岸の王城山の山裾に、
「中棚の砦」
と、よばれる真田家の出城がある。
これは、丸岩の敵を牽制するためのものだが、羽尾源六郎は、この日の払暁に、みずから兵をひきい、吾妻川をわたって攻めかけて来た。
砦は、まだ、落ちていない。
砦の真田勢は必死に戦っている。

砦から岩櫃城へ、敵の奇襲を告げる使者が駆けこんで来て間もなく、樋口角兵衛は目ざめたのであった。

真田源三郎は、

「先ず、備えをいたせ」

と、下知し、ついで、七百の兵をひきいて、

「おれが中棚へ出張ろう」

城代・矢沢頼康へ申し出た。

但馬守頼康は、

「いや、それがしがまいりましょう」

「城代が城を留守にしてよいものか。つまらぬことをいう」

「なれど……」

矢沢頼康にしてみれば、真田家の世子である源三郎信幸の身に、

（万一の事があっては……）

の、懸念がある。

しかし、その一方では、

（源三郎様ならば、案ずることもあるまい）

妙な、自信のようなものがあった。

理由あってのことではない。

頼康が、平常に接している源三郎の印象から得たものだ。
頼康の目には、源三郎が十八歳の若者だという感じが、まったくしない。
また、自分が城代を命じられていて、実際に城代としての役目を果たしていながら、矢沢頼康はすこしも城代だという気が起こらぬ。
（岩櫃の城代は、源三郎様……）
だという意識が、無意識のうちにあるのだ。
源三郎は頼康のすることに、いっさい、口出しをせぬ。
事が重いとき、頼康はかならず、源三郎に、
「このようにしても、よろしゅうござるか？」
とか、
「いかが、はからいましょう？」
とか、念を入れる。
だが、これまでに、源三郎が意見がましいことをいったことは一度もなかった。
「御城代のよきように……」
と、源三郎はいうのみである。
ただ、小戦闘が起こったりすれば、
「おれが出張ろう」
であった。

これは、矢沢頼康を、あくまでも城代として城にとどめておかねばならぬと、おもいきわめているからであろう。

その源三郎の意思を、頼康はひしひしと身に感じている。

大分に前のことだが、沼田城代をつとめている父・矢沢薩摩守頼綱へ、

「殿は、源三郎様のすぐれた天性を、おみとめではござらぬ」

と、頼康が不満げにいい出たことがあった。

すると、矢沢頼綱は、

「おろかなことを……」

苦笑をうかべ、我が子の抗議を一蹴してしまった。

「なれど、そのように相見えます」

「お前の見間ちがいじゃ」

「さようでござろうか？」

「いますこし、心して物事を看よ」

「なれど……」

「申すな。岩櫃城代たるお前が、そのようなことを、たとえ父のわしにもせよ、軽々しく口にのぼせるということがあろうか。きっと、つつしめ」

きびしく、父に叱りつけられたが、矢沢頼康のおもいは、いまも変わっていなかった。

（殿は、もしやして、弟御の源二郎信繁様に、跡をゆずられるおつもりではないのか……？）

この不安が、いまも、櫓の上に源三郎と立ちならび、七百の将兵が出動の準備をおこなう態を見おろしている矢沢頼康の脳裡をかすめた。

源三郎が真田昌幸の長男である以上、いかに昌幸が源二郎を可愛くおもっていても、これに家督をゆずることはゆるされるものでない。

ないが、しかし、

（ないだけに……）

矢沢頼康の不安は、なかなかに消えないのだ。

「では、出てまいる」

源三郎の声に、頼康は我に返った。

櫓の上から、源三郎が家来へ、

「角兵衛の仕度がととのうていたら、連れてまいれ、おれが初陣をさせてやる」

と、いった。

五

それから間もなく、真田源三郎は、七百余をひきいて岩櫃の城門を出た。

樋口角兵衛が、源三郎と肩をならべている。

角兵衛は、真田昌幸からもらっておいた色々威胴丸の具足を身につけ、その派手やかな武装が彼の初陣を一層ひきたてていた。

それに頭成の兜をかぶり、馬にまたがったところは、大兵だけに堂々たるもので、とても十三歳の少年とは見えぬ。

角兵衛は長さ二メートル、直径三センチほどの鉄棒を小脇に掻いこみ、初陣の興奮で満面に血をのぼせている。

「角よ。おれから、はなれるな」

源三郎が笑いかけて、

「おれが、よしというまで、その鉄棒を振りまわしてはならぬぞ」

「は……」

鉄棒は、角兵衛が日常に好んでつかう。日に数百回を振って疲れることを知らない。

「おれのいうことを聞かぬと、もう、可愛くおもわぬ」

「あ、兄上……」

「よいか」

椎実形の鉄の兜の眉庇の下から、源三郎の眼が、するどく角兵衛を見据えた。

角兵衛にとって、源三郎の、このように怖い目を見たのは、はじめてといってよい。

近年に至って武将たちの間に流行しはじめた黒い南蛮胴の具足に身をかためた源三郎信幸の姿も、また、到底十八の若年とはおもえなかった。

岩櫃から、中棚の砦までは四里余。

吾妻川に沿った道は幅四メートルほどだが、もしも、敵の一部が邀撃にあらわれるとする

と、これはまことに戦いにくい。
源三郎は、部隊の三分の一ほどを、吾妻川の川原へ分けた。
川原づたいに進むと、速度が落ちる。
しかし、源三郎は、
「あわてずに来い」
と、命じた。
渓谷の両側は、山また山であった。
霧がながれ、川原へ移動して行く兵たちの姿を、たちまちに隠してしまった。
源三郎は鞭を揮って、
「角兵衛。はなれるなよ」
と、疾駆しつつ、
「今日は、戦がどのようなものか、見ておればよい」
「はい」
不満そうな角兵衛であったが、あくまでも源三郎に対しては、どこまでも素直なのだ。
一里ほども行くと、ようやくに霧がはれてきはじめた。
川原がひろくなっている上ノ郷のあたりへ来たとき、源三郎信幸は、
「物見を出せ」
と、いった。

十名ほどの物見が、馬を煽って駆けぬけて行く。
にぶい日の光が谷間へ射し込んで来た。
「藤兵衛をよべ」
源三郎が、一部の兵を川原づたいに進めておいてから、部将の一人である高森藤兵衛をまねき、
「物見の知らせがあってからのことだが……」
「は？」
「おぬし、燕峠の下のあたりから、山の尾根づたいに、丸岩城へ攻めかけい」
「何と、申されます……？」
藤兵衛は耳をうたぐった。
「道は、ついているはず」
「はい。なれど、いまの場合は中棚の砦を……」
「それは、おれがやる。何も、丸岩城を攻め落とせとはいわぬ。低い山の尾根を、われらの兵が丸岩へ向かうのを見れば、中棚を攻めている羽尾勢も、うかうかとしてはいられまい」
「あ……」
「わかったか」
「わかり申した」
「よし。先へ進め」

「はっ」

高森藤兵衛は二百余の兵をひきいて、南面の山道へのぼって行った。

これは、吾妻川を見下ろせるほどの低い尾根道をすこしずつ、のぼりつめながら、丸岩城攻撃の姿勢を敵に見せなくてはならぬ。

丸岩城の羽尾勢は、合わせて二千に足るまい。

そのうちの半数が、中棚の砦を攻めているらしい。

中棚の砦に立てこもり、防戦中の真田勢は約三百であった。

「よし。では、まいるぞ」

馬腹を蹴った源三郎が、川原から道へ躍りあがり、

「急げ！」

はじめて叫んだ。

角兵衛の巨体が、胴ぶるいをしている。

歯と歯が打ち当たり、音をたてているのが、自分でもわかった。

（おれは、これほどに臆病だったのか……）

そうおもったが、しかし、いよいよ戦場が間近になったから恐ろしい、ということでもないのだ。

角兵衛は、闘志に燃えている。

戦って死ぬることもあるなどと、おもっても見ない。

前を駆けている源三郎が、角兵衛を振り返って見て、にやりと笑った。
「よい面がまえだぞ、角兵衛。それなら大丈夫だ」
凛々と声を張って、源三郎が、
「それが初陣の面がまえというものよ」
「はい」
何やら、ほめられたような気がして、角兵衛は勇み立った。
（源三の兄上のためなら、おれは、どんなことでもする。今日、兄上のために討死をしてもよいのだ）
と、切におもう。
角兵衛の年ごろに初陣をさせると、少年だけに、さして死の恐怖を深刻に感じないといわれている。
だが、胴ぶるいはやまなかった。
疾走する馬上に躰がゆれていながら、その揺れとは別に躰がふるえているのが、自分でもはっきりとわかる。
（これが、武者ぶるいというものなのか……どうも、そうらしい）
そうだ、と、おもいこむことにした。
二人、四人と、物見の兵が引き返して来た。
敵には、こちらを迎撃する余裕はないらしい。

三方から中棚の砦を囲み、猛然と攻めつけているのだが、
「まだ、砦は落ちませぬ」
「よし。行け」
中棚の砦へ入れてある兵力はすくないが、砦の防備だけは念入りにしてある。
これならば、
（間に合う）
と、源三郎はおもった。
山肌が両側にせまってきて、川原づたいに進む兵たちは、またも、道へのぼって来た。
源三郎は、五十人で編成してある鉄砲隊を、みずから指揮することにした。
岩櫃にある鉄砲は、わずかに、これだけである。
その鉄砲を、すべて持って来たことになる。
真田家の鉄砲の大半は、真田昌幸が砥石へ運んでしまった。
上杉勢の侵攻を喰いとめつつ、上田築城をおこなうため、昌幸は、真田家の武力・財力を砥石へ移し、本心ではなかったにせよ、
「上田に城を得るためには、たとえ、岩櫃が落ちてもよい」
とまで、いったそうである。
これを聞いた岩櫃在城の家来たちの中には、
「殿も、ずいぶんと、おもいきったことをおおせある」

「この城には嫡男の源三郎様も、また山手の御方様もおわすというのに……」
不満の声が高かったようだ。

六

山峡の道を、一里も駆けぬけたろうか……。
また、南側に川原がひろがってきはじめた。
源三郎は鉄砲隊をひきいて、川原へ下った。
中棚の砦は、半里の彼方にある。
この辺りまで来ると、彼方の戦闘の響みが、渓谷を縫って耳へつたわってきた。
鉄砲隊のほかに二百の兵を川原へおろした源三郎は、残る三百を道へ残し、これを服部七左衛門という部将にあたえ、
「先へ出て突きまくれ。そして、おれが追いついたなら、鉄砲の弾丸道を開けよ」
「心得申した」
服部は長槍を振りかざし、二百の槍組をひきいて、
「つづけ！」
まっしぐらに走り出した。
敵が、川原へ下りて来るのが見えはじめた。
敵も、岩櫃からの救援を、むろん、計算に入れていたのだろうが、それまでには中棚の砦

を落としてしまうつもりであった。
羽尾源六郎は、主力の千余をひきいて攻めかけて来たのである。
このとき、丸岩城の羽尾勢は五百そこそこだったという。
つまり、羽尾源六郎は岩櫃城の隙をうかがい、全力を投じて中棚の砦を奪い取る決意だったと看てよい。
それだけに、対岸の山の尾根を真田勢の旗指物がつらなって南方へ進んでいると聞いたときには、
「あっ……」
愕然となった。
岩櫃の真田勢は、中棚の砦を、
「見殺しにしても、丸岩を攻めようとしている……」
と、看たからである。
これでは、羽尾勢が中棚へ攻めかけた間隙をつかんで、真田勢が丸岩城へ押しつめようとしていることになる。
「いかぬ」
羽尾源六郎は、狼狽した。
中棚の砦も、
「ひともみで落とせる……」

と、おもっていたのだが、いざ攻めつけてみると、山の斜面を利用して塀を立てまわし、空濠をめぐらせ、二重三重の防備がととのっている上、空濠を一つ一つ潰し、攻め取っているうち、羽尾勢は、おもいがけぬほどの犠牲を出してしまった。

いささか、もてあまし気味だったが、

「いま一息……」

で、中棚の砦も危うかったのだ。

羽尾勢は三ノ木戸・二ノ木戸を攻め落とし、一ノ木戸まで肉薄していたからである。

そこへ、物見が、

「岩櫃の真田勢が、丸岩へ向かっております」

と、告げたのであった。

丸岩城を攻め落とされたなら、こちらが中棚を取ったところで、どうしようもないではないか。

こちらが攻め、破壊した敵の砦の中で孤立してしまうだけのことだ。

「引けい。引けい」

あわてて、羽尾源六郎が下知をした。

山腹をのぼり、砦の上から攻めかけていた羽尾勢は、

「何故、いまここで、引かねばならぬのだ？」

「いま一息だというに……」

残念なのだが、仕方もない。
どう見ても、岩櫃を出た真田勢は、中棚を見捨てて、自分たちの本拠へ殺到しかけているとしかおもえぬ。まさかに、丸岩へ向かいつつある真田勢が、二百余の部隊だとは知らなかった。丸岩を攻めるからには千以上の兵力が必要なはずだ。
そこで、羽尾勢が、いっせいに引き退きかけたとき、真田源三郎が戦場へ到着したのである。
いや、源三郎より先に、服部七左衛門の槍組が、
「えい、えい！」
「おう！」
声をそろえて押し進んで来て、
「それっ！」
服部が先頭に立ち、錐をもみこむように、羽尾勢へ突入した。
何といっても、山峡の戦場である。
まるで、
「芋を洗う……」
ような混戦・乱戦となった。
こうなると、このあたりの地形の戦闘に馴れた真田勢が有利である。
しかも、新手であった。

「うわあ！」
鬨の声をあげて押し込んで来る三百の真田勢が、羽尾方には五百にも七百にもおもえた。
「味方じゃ」
「間に合うてくれたぞ」
「さすがは、源三郎様だ」
兵力は半減していたが、砦の中で苦戦をつづけつつあった真田勢も、山腹から引きあげようとする敵を、
「一人も逃がすな！」
とばかり、木戸を押し開いて打って出た。
そこへ、源三郎信幸が川原へあらわれた。
敵が川原へ引き退いて来た。
服部の槍組は川原へ下りず、まっしぐらに中棚の砦を目ざして突き進んでいる。
これなら、弾丸道を開けさせる必要もない。
「撃て！」
源三郎は、五十の鉄砲組を二段に分け、川をわたろうとしている敵めがけて発砲させた。
おもしろいように、撃たれた敵兵が吾妻川へ落ち込む。
槍組が進み出て、弾丸込めをする鉄砲組を援護する。
敵は、対岸の道を西へ逃走しつつあった。

ともかく、このせまい山峡で新手の攻撃を受けてはたまったものではない。数町、西へ逃げてから、川をわたり、ゆるやかな斜面に通っている山道を南へ……丸岩城へ撤退しなくてはならぬ。

またしても、鉄砲の一斉射撃がおこなわれた。

その響音が渓谷に谺すると、到底、五十挺の鉄砲だとはおもえなかった。二百も三百もの鉄砲隊があらわれたような感じをうける。

砦を攻めていた羽尾勢が、山の斜面を逃げ下って来るのを、

「一人も逃すな！」

と、服部隊が長柄を揮って叩きつけ、突きまくった。

風が出て来た。

日が厚い雲の層に隠れ、灰色に翳った谷間の戦場に、落葉が雨のようにふりそそぎはじめた。

源三郎は、使番に、

「服部七左衛門に、深追いをするなと申せ」

と、下知をした。

そのときであった。

斜め後方の混戦の渦の中から、十数名の騎馬武者が駆けあらわれ、たちまちに吾妻川をわたり、こちらへ突き進んで来るのが見えた。

「若殿……」
「敵が……」
源三郎へ大声に知らせつつ、川の岸辺へ駆け向かって槍をつけた五、六名の兵たちを、敵の騎馬武者は猛然と蹴散らした。
勝ちに乗じた余裕があって、源三郎のまわりには、八名ほどの家来がつきそっているだけだ。
あたりはみな、味方だとばかりおもっていて、そこにおもわぬ油断が生じたのである。
十余名の敵は、対岸に見えた六文銭の聯連旗から、
「真田の大将……」
と看て、決死の突撃を敢行したにちがいない。
「あっ……」
「若殿が危ない……」
気づいた真田勢が川原の東と西から、いっせいに駆け寄ったけれども、間に合うものではなかった。
源三郎が身につけている白の陣羽織と、角兵衛の大きな姿が乗馬と共に大きくゆれうごき、それを敵の騎馬武者が押し包んだかのように見えた。
源三郎につきそった家来たちが、前へ出て若い主を庇い、槍や太刀を構えたのを、敵は突き崩し、はね退け、馬蹄にかけて蹴倒した。

六文銭の旗連旗が、黒い敵の突進に押し倒された。
「あっ……」
そこへ駆け寄りながらも、真田勢は蒼ざめたにちがいない。
川原には血のにおいがたちのぼり、敵に蹴散らされた兵たちが叩き潰されたかのように倒れている。
敵の騎馬武者も二名ほど、馬と共に倒れ伏していた。

七

樋口角兵衛が馬から飛び下りたのは、その瞬間であった。
真田源三郎は槍を構え、殺到する敵の騎馬武者に備えつつ、
「角兵衛、逃げよ」
と、叫んだ。
そのときには角兵衛が、源三郎の馬前へ躍り出していた。
「あっ、これ……」
左手で馬の手綱を引きしぼった源三郎の眼に、角兵衛が得意の鉄棒を振りかざし、われから敵へ突き込んで行く姿がとらえられた。
「あっ……あっ……」
このときは冷静な源三郎信幸が、

（しまった。角兵衛が討たれる……）

と、おもったそうな。

敵は、大きな黒いかたまりとなって、角兵衛を押し包むかに見えた。

転瞬……。

馬の悲鳴があがった。

一頭、二頭、三頭の敵の馬が、悲鳴を発して、横ざまに転倒したのである。

角兵衛の鉄棒が、馬の脚を叩き撲ったのだ。

落馬した敵の頭を兜の上から、角兵衛の鉄棒が叩き、打ち、撲りつけた。

源三郎の側面から襲いかかった敵は、

「む！」

あざやかに頭上で槍をさばき、源三郎が突き入れた穂先に顎のあたりを突き刺され、馬から転げ落ちた。

角兵衛の巨体が躍動している。

うなりを発して、右に左に、角兵衛の鉄棒が敵の馬の脚を打ちはらった。

転倒する馬と、落馬する味方の士に阻まれ、後続の騎馬武者がたちまちに乱れ立った。

源三郎は馬首をめぐらし、角兵衛の右側へ出て、また一人、敵を突き落としている。

そこへ……。

駆けつけて来た真田勢が、敵を包みこみ、いっせいに突きかかった。

危急は去った。
敵の騎馬武者は、一人残らず討ち取られたのである。
「か、角……」
よびかけて、源三郎が絶句した。
角兵衛は振り向き、無邪気に笑った。
「角……」
「兄上」
「おのれ、ようも仕てのけた」
「はい」
と、角兵衛は、源三郎にほめられたことを肯定している。
「なんというやつだ、おのれは……」
「はい」
「恐ろしいやつだ」
「馬の脚は、敵の槍先よりも、脆い」
と、臆面もなく、十三歳の角兵衛がいってのけた。
「むう……」
またしても、信幸が絶句した。
敵を打ち殪した真田の士たちも、角兵衛を見まもって声がない。

のちに、角兵衛がいうところによれば、源三郎・源二郎兄弟に、馬術や槍術を教えられ、鍛えられたときのほうが、

「もっと、怖かった……」

のだそうな。

そして、九歳の折に、古府中の城下外れで狂い馬と闘い、これを押さえつけたときにくらべると、

「呆気もないほどに、手ごたえはありませぬでした」

と、角兵衛がいってのけたものである。

ともあれ、少年の初陣にしては、稀代の武勇を発揮したといえる。

このことを聞いたとき、真田昌幸も、

「まさか、角めが……嘘を申すな」

笑い飛ばして、なかなかに信じきれなかったようだ。

これほどに豪勇の天性をそなえていた樋口角兵衛が、以後、数十年にわたり、真田家との間に奇怪な宿命をもつことになろうとは、だれが想像し得たろう。

羽尾勢が、中棚の砦を撤退し……というよりも、這う這うの体で丸岩城への山道へ逃げこんだとき、

「追うな」

源三郎信幸は、追撃を中止させた。
そして、丸岩城へ向かうと見せた高森藤兵衛の一隊へも、
「引き返せ」
と、使番を走らせた。
「いまこのときこそ、羽尾勢を叩きのめしておかなくては……」
部将たちの中に、源三郎へ進言するものがいた。
「ならぬ」
一言のもとに、源三郎は、これをしりぞけた。
強い音声ではなく、あくまでも、しずかにいうのだが、そうしたときの源三郎には、歴戦の部将たちに有無をいわせぬものがあった。
切れ長の両眼が、冷厳ともいえる光をたたえ、相手の眼を凝と見据えてくるとき、相手がたとえば、
（まだ戦陣の事にくわしいわけでもない、お年若のくせに……）
と、反駁のおもいをもったにせよ、それが声にはならぬ。
そのうちに、
（これは……もしや、自分の考えが間違うているのでは？）
と、自省しはじめる自分に気づく。
このときも、そうであった。

こちらの中棚の砦が、丸岩城への備えとして設けられたのなら、丸岩城もまた、中棚の砦に対しての備えがあるのだ。

中棚の砦を〔基地〕にした真田勢が、いつ、丸岩へ攻めかけて来るか、

「知れたものではない」

のである。

羽尾源六郎は、いわば越後の上杉景勝の〔尖兵〕として、敵中へ入りこんでいるのだから、丸岩の山城を中心にして、いくつもの防禦地点を設け、山道の途中には塀を立てまわした小型の砦のようなものさえある。

だから、もし、真田勢が追撃をおこなって、山道へ入ったとしたら、おもいがけぬ反撃を受けたにちがいない。

あとになって、追撃を主張した部将たちも、

（なるほど……）

と、おもいおよんだ。

短時間のうちに、あまりにもあざやかに敵を打ち払うことができたので、彼らが意気込んだのもむりはないけれども、考えてみれば、彼らも丸岩城の防禦がどのようなものかを知らぬではなかったのだ。

岩櫃にいる草の者が、丸岩周辺の様子を探りとり、この報告は中棚の砦へもとどけられていた。

それにもかかわらず、敵のうごきを事前に察知することができなかったというのは、中棚の砦が丸岩城の、

「備えにはならなかった……」

ことになる。

羽尾源六郎は夜陰に丸岩を出て、おそらく松明もつけず、中棚にもっとも近い砦まで来て、将兵を集結させ、夜明けを待ち、一挙に攻めかけて来たのであろう。

そのうごきが、つかめなかった。

中棚へは二名の草の者も派遣されていたし、見張りの兵も毎日毎夜、警戒を怠らぬはずなのに、今度の不慮をまねいたのは〔油断〕の一語につきる。

中棚の守将・福場八郎左衛門は、

「責任は、わしにある」

と、いい、源三郎がひきいる援軍が敵を追い退けたのを見とどけてから、砦の中で切腹をして果てていた。

中棚の砦の将兵は、死傷合わせて八十七名である。

源三郎は、福場以下の遺体を岩櫃へ運ぶことにした。

山から下りて来た高森藤兵衛へ、

「おぬしが、このまま、中棚を守ってくれ」

と、源三郎が命じた。

高森がひきいていた二百余の部隊も、中棚へ残ることになった。
このときの戦闘で、羽尾勢は三百に近い死体を遺棄したまま、逃走した。
この夜。源三郎は中棚の砦に泊した。
「角は、岩櫃へもどれ」
「明日、兄上と共にもどります」
「ならぬ」
「何故……？」
「母ごが案じておわす。早く、無事な顔を見せてやれ」
このようなときにも、源三郎は角兵衛の母であり、自分には叔母にあたる久野（ひさの）の胸の内を推しはかっている。
角兵衛は岩櫃へもどる二百の部隊と共に去った。
山峡の夕闇（ゆうやみ）は、夜のそれのように濃かった。
角兵衛の、顎の張った大きな顔に血がこびりついていた。
敵の返り血である。
角兵衛自身は、微傷すら負っていなかった。
「角よ……」
「はい？」
「今日は、お前に、このいのちを助けてもろうたな」

源三郎が笑いかけると、角兵衛はうれしげに、そして少年らしい含羞を見せて巨体を捩った。

「なれど、おれの傍についておれと命じたはずだ」

「はい……」

「それなのに、おれのゆるしもなしに前へ出た」

「はい」

「怪しからぬことだ」

にわかに、源三郎の顔から笑いが消えたので、角兵衛はうなだれた。

だが、岩櫃へ向かう途中で、服部七左衛門が、

「若よ、見事なおはたらきだったそうで……見ていた者から聞き申したが、いや、何ともおどろき入った」

この少年が、あれだけの豪勇を発揮したとは到底おもえぬ……という驚嘆の色をはっきりと顔に見せた服部七左衛門へうなずいて見せてから、角兵衛は馬上に胸を張った。

（おれが、あのようにはたらかなんだら、源三の兄上も、いまごろは、この世の人ではなかったやも知れぬ）

勃然と、角兵衛はそう感じた。

（おれが、源三の兄上を助けた……）

愉快である。

得意になった角兵衛は馬を進ませつつ、両手に鉄棒を振りかざし、くるくると振りまわしはじめた。

こうしたところは、いかにも無邪気な少年に見える。

服部七左衛門も、兵たちも、声をそろえて笑い出した。

八

源三郎は、この日の戦闘の模様をくわしく書きのべた手紙を、中棚から砥石の父・昌幸のもとへ届けさせた。

昌幸は、その手紙を読み終えたとき、

「源三め、ようも我から出張った」

と、めずらしく、源三郎をほめたそうである。

これがもし、矢沢頼康が中棚へ出て行ったとしたら、

「城代が城を留守にして何となる。源三郎が何故、出張らなかったのだ。臆病者め」

ほどのことは、いったにちがいない。

源三郎は手紙の中で、従弟・樋口角兵衛に、

「初陣をさせ、それがしの傍へ引き添わせておきました」

と、父へ知らせはしたが、角兵衛の奮戦ぶりについては一語もふれなかった。

しかし、昌幸と源二郎信繁が、戦闘の模様を逐一聞くものだから、手紙を届けに砥石へ駆

けつけた使者が、ついつい、角兵衛のことも、くわしく、口頭で報告をしてしまったのである。

源三郎は、使者にも、

「父上には、角兵衛がことを申すな」

と、念を入れておいたのだが、使者は興奮にさそわれ、うっかりと、

「その折、角兵衛様が、敵の馬を……」

と、口をすべらせたものだから、源二郎がだまっていない。

「馬を、何とした？」

「は……それが……」

「申せ。角が、馬と力くらべでもしたと申すのか？」

「いえ。鉄棒をもって……」

「ふむ。鉄棒で？」

「馬の脚を……」

こうなれば、使者も語らざるを得なかったろう。

「ほう……」

さすがの真田昌幸も、しばらくは呆然となって、

「あの、角がのう……」

いったきり、言葉が出なかった。

「父上……父上……」
「む？」
「末恐ろしきやつです、角兵衛は……」
「ふむ……」
「何となされました？」
「怪しからぬ」
「角が、ですか？」
「いや、源三めがじゃ」
「兄上の、どこが怪しからぬのです。立派なものではありませぬか。さすがは兄上です」
「だまれ！」
「はい」
「だまれと申しておる。はいとこたえるな」
源二郎はだまった。
うつむいて、目が笑っている。
「角兵衛は、まだ十三の童児にすぎぬ。しかも、亡き樋口下総守の忘れ形見だ。おれは下総守に代わって、角兵衛を育てている。それを、父のおれにもはからず、おのれの専断で初陣をゆるすなどとは、もってのほかだ」
と、昌幸が咆哮した。

使者は顔面蒼白となってうなだれ、突いた両手が、わなわなとふるえ出した。
源二郎が、それに気づき、
「下がって、父上の沙汰を待て」
と、ささやいた。
「お前も下がれ」
昌幸が源二郎に、
「早う、行けい」
「はい」
使者をうながし、源二郎は地炉ノ間から出て行った。
昌幸は源三郎へあてた叱責の手紙を書きはじめた。
すぐさま、自身で岩櫃へ駆けつけたかったのであろうが、いまは一日も砥石と上田を留守にすることはできなかった。
駆けつけたかったのは、源三郎を、わが口頭で叱りつけるためばかりではない。
「たとえ、岩櫃を敵に奪われても……」
と、口ではいったものの、昌幸にとって、岩櫃には妻もいるし、長男もいる。甥の角兵衛もいる。それに、これまでは昌幸が全力をかたむけて整備した城なのである。
これを本当に敵の手へゆだねたら、やはり、
「大変なこと……」

に、なるわけであった。
ゆえに、自分の目で岩櫃や中棚の情況をたしかめたかったのであろう。
使者が持ち帰った父・昌幸の手紙を読み終えて、源三郎が使者に、
「口の軽いやつだ」
「は……」
「角兵衛がことを、父上に申したな」
「お、恐れいりましてござります」
「たよりないやつめ」
「は……」
「おれが何故、父上に申してはならぬというたか、おのれにもわかったであろう」
「わ、わかりまいた」
「二度と、おれのいいつけにそむいてはならぬ」
「はっ……」
「これでもし、おれが気の荒い男であって見よ。おのれの首は胴についておらぬぞ」
「は、はい」
「よし。行け」
大の男の家来が、十八歳の〔若殿〕にたしなめられ、泣きながら部屋を出て行った。
すでに源三郎は、岩櫃へもどっている。

使者と入れかわりに、城代・矢沢頼康があらわれ、
「殿から、何とでござった？」
「いや、別に……岩櫃には、矢沢但馬守がおるゆえ、案ずることもないとおもうていたが、こたびのことは、まことに遺憾であったとのおおせだ」
「これは……」
頼康は、恐縮した。
「まことに、もって、それがしの不覚でござった」
「それだけのこと」
こういって源三郎は、事もなげに父の手紙を、ふところへ仕舞った。

九

壺谷又五郎の密書をたずさえた草の者の姉山甚八が、砥石へあらわれたのは、ちょうど、そのころであった。
真田昌幸は、この日も、上田築城の工事を指揮していたが、
「何、甚八が帰ったか……」
知らせをうけるや、すぐさま馬へ飛び乗り、砥石の居館へ駆けもどって来た。
「何ぞ、急な事でも起こったか？」
「いえ、いまのところは別に……」

いいさして、甚八は昌幸の前で、髪の中へ隠してあった密書を抜き出した。
うすくて丈夫な紙二枚へ、又五郎は小さな文字をびっしりと書きこんでいる。
これを、細く、かたく巻きしめ、その上から蠟をかけまわしてあった。
甚八は、小さな刃物で蠟をほぐしてから、密書を昌幸へ差し出した。
一読して、昌幸が、
「ほう……」
何やら、感嘆の声を発し、
「まことか？」
と、甚八へ念を入れた。
「はい」
甚八が、大きくうなずいて見せる。
「ふむ……」
そこで昌幸は、いま一度、丹念に密書を読み直し、
「羽柴筑前も、わしと同じようなおもいをしているらしい」
うれしげに、つぶやいたものである。
その密書は、羽柴筑前守秀吉が、近いうちに大坂へ、巨大な本城を構えようとしていることを知らせて来たものである。
「……このことは、いささか前から耳に入っておりまいたが、いよいよ、筑前守は大坂へ、

たくさんに人をつかわし、築城の仕度にかかりまいた」

と、壺谷又五郎は密書にしたためている。

今年の四月二十四日に、越前・北ノ庄を攻め落とし、柴田勝家を滅亡せしめたのち、秀吉は、織田信孝を切腹させ、佐久間盛政や、勝家の子の柴田権六などの処刑をおこない、ついで柴田方の滝川一益を屈服させた。

今度の戦争は、単に、羽柴秀吉と柴田勝家が局地的な戦闘をおこなったにすぎぬようにもおもえるが、そうでない。

秀吉は、勝家を討ちほろぼしたことによって、その背後にある信長の三男・織田信孝を中心に結束していた織田家の重臣層を掃討したことになる。

これは秀吉が、

「故織田信長の後継者」

としての第一歩を、ふみ出したことになるわけであった。

これから先のことは、もとよりわからぬが、秀吉としては、ふみ出した第一歩を猛然として先へ押し進める決意をかためている。

それが、

「大坂築城」

となってあらわれたのだ。

これまでの秀吉の城は、播磨の国・姫路にあった。

姫路城は、信長が中国攻略の拠点として、秀吉にあたえたものである。
しかし、いまの秀吉は、今度の戦勝によって、山城・大和・河内・和泉・摂津から北陸・山陰・山陽の諸国を合わせ、約二十カ国を勢力下に置くことを得た。
これは、旧主・織田信長の遺領の大半を、
「手中におさめた……」
ことになるのである。
秀吉は、いま、城を人にあたえる立場になった。
当然、中央へ進出して〔本城〕を構えなければならぬ。
それにしても、
「大坂にとは、おもいおよばなんだ」
真田昌幸は、又五郎の密書を読み、その築城のスケールの巨大さに瞠目した。
まだ、工事にかかっているわけではないが、秀吉の家来が大坂へあらわれ、早くも縄張りの下見をおこなっているらしい。
それは、もう、秀吉の脳裡に大坂築城の設計図が描かれていることを意味する。
この間にも羽柴秀吉は、もと明智光秀の居城だった坂本城にいたかとおもえば、京都へあらわれて、旧主・信長の一周忌の法会を大徳寺でおこなった。
そして、つぎの日には早くも大坂へあらわれ、新しい城や城下町の構想を実現すべく、精力的に指示をあたえ、ついで姫路へもどり、もどったかとおもうと、たちまちに、また、大

坂へ立ちもどったりしている。

つぎの日には京都。翌日には京都を発し、馬を飛ばして近江・坂本城へ入るというありさまなのだ。

こうした多忙の中に、今度の戦争で手柄をたてた武将や家来たちを表頌し、つぎつぎに政令を発したりして、

「さすがに、それがしも、羽柴筑前のうごきを追いかねるありさまにて……」

と、壺谷又五郎がいっている。

秀吉は、急いでいる。

ここを先途と、急いでいる。

相次ぐ戦勝を天下に誇示し、一日も早く、自分が信長の後継者として充分な実力をもっていることを見せねばならぬ。

又五郎が看るところでは、

「まだまだ、羽柴が天下人となることはむずかしく……」

とのことだ。

中国の毛利はさておき、当面、秀吉がもっとも警戒しているのは、徳川家康その人といってよい。

家康は、ぬけ目なく、秀吉の戦勝を祝う使者をさしむけたりしているが、だからといって、秀吉が天下人となることをみとめたわけではない。

秀吉の大坂築城は、こうした情況をわきまえた上で、急がねばならないのだ。
築城のスケールのちがいはあっても、真田昌幸が、越後の上杉と関東の北条に備え、上田へ進出して本城を構えることを急いでいる心理は秀吉と、同じものだと、昌幸はいいたいのであろう。
「なれど、ちからの桁がちがうわい」
昌幸は、苦笑をもらした。
武力というよりも、財力の差が、あまりにもちがいすぎる。
去年と今年と、相次ぐ戦争に勝ちぬいてきたこともあろうけれども、又五郎の報告によれば、何千何万の労力をたちどころに調達し、縦横に金銀を利用し、人を物資を、
「おもうさまに……」
うごかしている羽柴秀吉の財力を、昌幸は、
「恐るべきこと……」
と、看もし、また、
「うらやましい」
と、おもった。
「その態を、この目で見とどけたいほど……」
なのである。
報告を終えた姉山甚八へ、昌幸が、

「三日ほど、砥石におれ」
と、いった。
昌幸は、壺谷又五郎へあたえる指示を、よくよく考えるつもりらしい。
「お江は、どうしておる？」
「さて……？」
「お前には、わからぬのか」
「浜松へまいっておるように、聞いております」
「なるほど……」
お江は、又五郎の指示により、又五郎に代わって浜松城下にいるらしい。
又五郎はいま、京・大坂から近江にかけて、およそ十二名ほどの草の者をつかい、羽柴秀吉を中心に、諸方の情報をあつめたり、探ったりしているのだ。
いま一つ、壺谷又五郎は、昌幸に対して入費の不足をうったえてきている。
昌幸も、手もとは苦しいが、なんとしても、草の者の活動には金銀を惜しまぬつもりであった。
姉山甚八が〔地炉ノ間〕から出て行った後も、真田昌幸は、又五郎からの密書を何度も読み返している。
「殿……」
廊下に、声がした。

「何じゃ？」
「草の者の、山田弥助がまいっておりますが……」
「通せ」
「はっ」
すぐに、弥助が〔地炉ノ間〕へあらわれ、平伏をした。
弥助は、真田の庄に近い森の中の屋敷に住むお徳の身をまもっている草の者であった。
壺谷又五郎やお江と共に、武田家から身柄を移した忍びの者の数少ない中の一人なのである。
「急なことか？」
「いえ……お徳様からの御伝言でござります」
「何じゃ？」
うるさそうに、昌幸が顔を顰めた。
「ちかごろ、御屋形様が、お運びになりませぬので……」
「それが、どうした」
「お徳様が、ぜひにも一度、お運びをと……」
「ばかもの」
「はっ……」
「徳に申せ。おれは、いま、城を築いているのだぞ。そのためには、まるで野陣を張るよう

にして上田へ詰めきっておるのだ。戦をしておるのも同じことだと申しておけ」
「はっ。なれど……」
「何……」
「お徳様は、御懐妊にて……」
「む……」
昌幸は、苦にがしげに、押し黙った。
お徳が弥助にもらしたところによると、産月は来年の初夏のころだそうな。
いまのところ、お徳が身ごもったことを砥石では、だれも知らぬ。源二郎信繁ですら知らぬ。
それなのに、遠くはなれた岩櫃の城にいる昌幸の妻・山手殿の耳へは、これが、ひそかにとどいているのだ。

十

砥石の居館を出た草の者・山田弥助は、お徳が住む屋敷へ駆けもどりつつある。
半里ほども闇を切って駆けていた弥助が、急に足をとめた。
道の右側が竹藪である。
竹藪へ、弥助が入って行くと、
「ここでござる」

ささやいて、立ちあがった者がいる。
「おう、平左か……」
「さようで」
この男は、やはり草の者の一人だが、砥石にも岩櫃にもいない。真田の庄の〔草屋敷〕にいる。
草の者にも、いろいろの階級があって、平左は、
「下忍び」
とよばれ、たとえば姉山甚八や山田弥助などの下ばたらきをする。
「平左。これから岩櫃へ走ってくれい」
「ようござる」
「岩櫃の御方様から、まだ、何の御指図もないのだ」
「それは、それは……」
「だから、おれも困っている」
「ふむ、ふむ……」
「もしも、御屋形様が、お徳様の身柄を、何処ぞへお隠しなさるようなことがあると……とても、おれ一人では手が出ぬようなことに、なるやも知れぬ」
「いかさま」
「御方様が、お徳様を害すおつもりなれば、いまのうちだ。そのように、御方様へおつたえ

してくれい」
「心得た」
「それに、いまひとつ……」
「何でござる」
「もしも、おれがお徳様を手にかけるようなことになったとき、これは、かならず仕とめる。失敗はない」
「それは、もう……」
「そのときは、余人に気づかれぬように仕てのけるつもりだが……。お徳様のまわりには、おれのほかにも草の者がいる。いずれは、気づかれてしまうにちがいない」
「いかさま。では、お徳様を討ち取られたときは、すぐさま、お逃げなさる……」
「そうだ。そうするよりほかに道はない。だから……だからな、平左。そうなったときの、おれの身柄のことを、岩櫃の御方様は、どのようにしてまもって下さるか、それをしっかりと、聞いて来てもらいたい。わかるな、平左」
「心得た。なれど、弥助どの。わしの身柄は大丈夫なので？」
「お前は下忍びだ。すこしも責任はない。おれも、御方様も、お前のことを口に出したりはせぬ。ただ、草屋敷の者たちに気取られぬよう……」
「それは大丈夫でござる。わしは、いつも、山へ入って薬草の面倒を見たりしているので、三日や四日は山の小屋で暮らすことが多い」

「そうだったな」
「では、行ってまいる」
「たのむぞ」
「連絡のことは、いつものごとく……」
「わかった」
平左は、一足先に竹藪を出て、闇に消えた。
それから、しばらくして、屋敷へもどった山田弥助は、お徳に真田昌幸のことばをつたえていた。
「弥助。どうであった？」
「お徳様。御屋形様には、何やら御分別がおありのようでござる」
「お城を築いておられることは、わたくしもようわきまえている。なれど、腹の中の子の事が気にかかってなりませぬ、と、御屋形さまへしかとつたえてくれましたかえ？」
「はい。たしかに……」
「何と申されてじゃ」
「お子を、お産みになった上のことじゃ、と、おおせられまいた」
「では、産んでもよいということかえ？」
「はい」
お徳は、哀しげな笑いを、いくぶん窶れた顔にうかべて、

「と申しても……産むよりほかに道はないのじゃ。これが女の躰の哀しさじゃもの」

と、いった。

お徳は、

（そのようなことはあるまい……）

と、おもいながらも、いま、懐妊している自分が砥石の近くにかくまわれてい、真田昌幸の寵愛をうけていることを、

（もしも、岩櫃の御方さまが知ったなら……）

その一事を恐れている。

山田弥助などは、山手殿が夫・昌幸の隠女に対し、異常なまでに神経を尖らせていることを、単に、女の嫉妬とのみ考えているようだ。

けれども、お徳は、昌幸の口から、もっと深い事情と理由を聞かされている。

（産まれた子が、女の子ならば……）

先ず、危険はないと看てよい。

しかし、男の子ならば、自分の身に危難がふりかかるであろうことを、お徳は予感していた。

いや、産まれてからでは遅い。

産まれる前に、山手殿は始末をつけようとするであろう。

「なに、この屋敷の事は岩櫃に知られてあるはずがない」

昌幸は、お徳にそういってあるが、内心、忸怩としたものがあった。
なにぶん、お徳を隠している屋敷が屋敷なのである。
山手殿は、十余年前に、この屋敷の存在を知っているのだ。
もっとも、それは、お徳に関してのことではなかったが……。
ところで、一時は真田昌幸も、妻の山手殿を、
（このさい、ひそかに殺害してしまったほうが、真田の家のためにはよいのではないか……）
おもいついたこともあったが、さすがに、そこまでは踏み切れなかった。
いまは上田築城の事で、お徳にかまう暇はないが、おそらく年内には、源二郎をつれて、砥石から上田へ引き移ることができよう。
それからでも間に合う。
上田へ移って城の工事をつづけながら、いったん、お徳を、
（どこぞ、別の場所へ隠し、子を産ませよう）
と、昌幸はおもっている。
その場所も、決めたわけではないが、昌幸の脳裡にうかんでいた。
お徳が臥床へ身を横たえたころ、上州・岩櫃の城では騒ぎが起こっていた。
樋口角兵衛が、この日の午後、馬に乗って城を出たきり、まだ帰って来ないことがわかったからだ。
角兵衛が、日暮れまで、城の近くで馬を乗りまわしていることはめずらしくない。

それで、つい、気にとめなかったわけだが、夜に入ってなお、帰城せぬということは、時が時だけに、打ち捨てておくわけにはゆかぬ。

襲う

一

信州・砥石から上州・岩櫃までは、真田の庄を経て、鳥居峠を越え、吾妻川に沿った山道を東へすすむわけだが、約十六里の道程である。

岩櫃からの急使が、樋口角兵衛が行方知れずになったことを、砥石へ知らせるべく城を出たのは、翌早朝のことだ。

使者は、騎乗である。

空も晴れあがってきたし、その日のうちには、真田の庄まで下れるはずであった。

中棚の砦の攻略に失敗した羽尾源六郎は、いまや、丸岩城にたてこもったまま、身うごきもならぬ。

兵力の損耗は、おびただしいものがあった。

それに引きかえて、中棚の砦は兵力も増強され、

「父上の御指図があらば、いつにても、丸岩へ攻めかけよう」

と、真田源三郎信幸は、岩櫃城代・矢沢頼康に語っている。

岩櫃から真田、砥石への交通は以前のままに安全となった。
真田家の砦というか、小さな基地のようなものは、中棚から菅平口へかけて三カ所ほどある。
人や馬の乗りつぎもできるし、山道も整備されている。
ところで……。
岩櫃からの急使は、日が暮れて真田の庄へ下りて来るまでの間に、草の者の平左を見かけていない。
前夜、平左は山田弥助に、真田昌幸夫人・山手殿への連絡をたのまれ、夜道をかけて、岩櫃へ向かったはずである。
どこかで行きちがったものか。それとも平左は、草の者だけが知っている間道を鹿か山犬のように走って行ったからなのか……。
夜に入って砥石へ到着した急使は、真田昌幸が上田築城の現場に泊まりこんでいると聞き、
「では、すぐさま」
行きかけるのへ、駆けあらわれた真田源二郎が、
「いったい、何があったのだ？」
「はっ。角兵衛さまが、行方知れずと相なりました」
「なんだと……」
源二郎の顔が、一瞬、硬直した。めずらしいことではある。

「まことか？」
「はい」
使者が語るのを聞き終えてから、源二郎は、家来三名をつけて、岩櫃からの使者を上田へ送った。
家来たちへ、源二郎は、
「父上の御指図を、よく、うけたまわってまいれ」
と、命じた。
「佐平次。佐平次……」
廊下を大声で呼ばわりながら、源二郎が居間へ入ったので、向井佐平次は、すぐさま自分の部屋から飛び出して行った。
「いかがなされまいた？」
「佐平次。岩櫃のな、角兵衛が行方知れずになったそうな」
「何と申されます……」
樋口角兵衛を、まだ佐平次は一度も見ていない。
しかし、源二郎が、さも、おもしろそうに語る角兵衛のことは、
（そのような大力の少年が、世にいるのだろうか……？）
と、佐平次も、深い興味をよせていた。
古府中にいたころ、九歳の角兵衛が狂い馬の足を腕で払い、投げ倒した事実にも驚嘆した

が、現に、先頃は、中棚の戦闘で、だれの目にも、
（信じられぬ……）
ほどの、凄まじい初陣ぶりを見せたというではないか。
「もしや、丸岩の羽尾勢にでも……？」
「佐平次。角兵衛はな、勝手知ったる岩櫃の近くで、敵に捕まるようなやつではないのだ」
「ははあ……」
「やつはな、われから姿をくらましたのだ。われから身を隠したのだ」
ほとんど断定的に、源二郎がいうのである。
こういうときの源二郎信繁には、一つ年上の兄・源三郎の老成さはない。
十七歳になって、いくらか大人びてきた顔が、少年らしい興奮をおぼえると、平常は細い両眼が爛々と光り、ふとい鼻すじを左手指でつまむようにしながら言動に熱中しはじめるのであった。
「なぜ、そのようなことを角兵衛様が……」
「ふん、ふん……」
しきりに、源二郎はうなずく。
うなずきつつ、電光のように、つぎからつぎへ何やら考えが浮かんでくるらしく、何かいいかける佐平次に、
「酒を、そっと、もらって来い」

と、いった。
酒は、戦国の世において貴重なものである。
戦乱が日本に絶え、酒造がさかんになって、男たちが何時でも好き自由にのめるようになるのは、ずっと後年のことだ。
「もよにたのめ」
「はあ……」
大台所には食糧や酒を管理している家来が二人もいるのだ。
だが、もよならば塩部屋や蔵への出入りが可能である。
「さ、早く行け。酒をのんでから、お前と出かけねばならぬ」
「どちらへ？」
「ま、よいわ。もしやすると、おもしろいものを見せてやれる」
「何をでございます」
「それよりもな、佐平次。父上は、お前ともよを、近いうちに夫婦（めおと）にして下さるとよ」
「えっ……まことで？」
「うれしいか」
「はあ……」
赤くなって、佐平次がうつむくのへ、源二郎が、
「お前は、もよに、もう、手をつけたのか？」

「いえ……とんでもないことでございます」
「うそをつけ」
「うそではございませぬ」
夫婦になるまでは、もよが身をゆるさぬことを、佐平次から聞き出すと、源二郎は大声を発して笑いこけた。
「源二郎様……何が、おかしいのでございます。おやめ下されませい」
「怒るな。早く、酒をたのむ」
ちかごろは父の昌幸が酒の相手をさせるものだから、源二郎はすっかり、味をおぼえてしまったらしい。
居間を出て行きかける向井佐平次に、源二郎が、こういった。
「鞍掛八郎に、ここへ来いと申しつたえよ」
鞍掛八郎は、砥石の居館に詰めている草の者であった。
夜ふけてから……。
真田源二郎は、向井佐平次と鞍掛八郎の二人を連れ、
「真田の庄へまいる」
と、いい置き、砥石の居館から徒歩で出て行った。
その、すこし前に、上田からもどって来た家来たちが、真田昌幸の言葉を源二郎へつたえている。

「別に指図はない」
と、いうのである。
岩櫃から来た使者は、上田にとどまっているそうな。
この夜。源二郎と佐平次は真田の庄の、旧居館に泊まったが、鞍掛八郎のみは何処かへ出て行ったきり、もどって来なかった。
真田の庄には、家臣たちの屋敷も残されてい、留守をまもる家族たちがいる。
源二郎は折にふれて、真田の庄の古びた旧居館へあらわれては、日をすごすことがめずらしくない。

二

鞍掛八郎が真田の庄へもどったのは、翌朝になってからだ。
佐平次に、ゆり起こされた源二郎は、
「八郎を、これへ……」
と、いった。
この居館は、あまり大きいものではない。
居館の背後の山に、むかしは真田家の城もあった。
源二郎には祖父にあたる真田幸隆の時代に、村上義清や諏訪頼重などの信濃の武将に攻めこまれ、一族が真田の庄を捨てて、上州へ脱出したこともある。

その折、城も居館も、村上勢に占拠されたり、焼き払われたりしたが、真田幸隆が武田信玄に拾われ、東信濃平定の先鋒として村上義清を放逐し、故郷へ帰ることを得てから、真田の庄もよみがえったのである。

「父上は、どうじゃ？」

問いかける源二郎へ、鞍掛八郎が、

「まだ、上田におわします」

「砥石へ、もどらぬとな」

「はい。なれど、昨夜、岩櫃から駆けつけてまいりました使者は、今朝も暗いうちに上田を発ち、岩櫃へ向かったようでござります」

そこまで聞いて、向井佐平次は源二郎の寝間を出て行った。源二郎の朝餉の仕度をするためであった。

「ふうむ……では、父上は、直に、岩櫃の兄上へ御指図をなされたのだな」

「さように心得ます」

角兵衛が行方不明との知らせをうけたとき、真田昌幸は、

「あの、たわけめが……」

と、角兵衛をののしり、

「放っておけい。わしは、それどころではない」

夜になっているというのに、半武装で、千曲川をのぞむ断崖の上へ立ち、濠をかためる石

垣の工事を指揮しつづけていたというのだ。

実際、上田城の完成は、昌幸にとって、

「一刻を争う……」

ものだったのである。

完成とはゆかぬまでも、敵が何処から攻撃を仕掛けて来ても、これをもちこたえられるほどには城を築いてしまわねばならぬ。

いまの昌幸は、そのことだけで、

「この頭は、いっぱいなのだ」

と、いうわけだ。

だからといって、昌幸は角兵衛への愛情が消えたというのではない。

なればこそ、使者を一夜、上田へとどめておき、岩櫃の源三郎信幸や矢沢頼康へ、しかるべく指図をあたえたのであろう。

おそらく、昌幸が使者へ托した手紙には、

「わしが、このようにして昼夜の区別もなく、必死に城を築いているという最中に、おのれたちは油断のままに失敗を重ね、それですむとおもうのか！

すぐる中棚のことといい、こたびは角兵衛のことといい、こころに隙があればこそ、面倒な事が起こるのだ。自分は、いま、すこしも手がはなせぬ。角兵衛ひとりを探し出すに何の手間暇が要ろうか！」

怒気を発して、岩櫃の失態を責めたにちがいなかった。
こうした前夜の、上田での様子は、昨夜から今朝にかけて、鞍掛八郎が、上田で聞きこんで来たのだ。
そのくせ昌幸は、たまさかに砥石へ帰り一泊した折など、
「どうじゃ。明日は父と共に上田へ行かぬか？」
と、源二郎をさそい、
「いえ、私は、父上御苦心の城が、出来上がるのを待って、見にまいります。そのほうが、たのしみです」
源二郎がこたえると、満面を笑みくずし、
「さようか。ふむ、なるほど……よし、よし。お前の目をみはらせるような城を築いて見せるわ。ま、たのしみにしておれ」
うれしげにいい、日々、あそび暮らしている源二郎を咎めようともせぬ。

それから間もなく、鞍掛八郎は何処かへ去った。
源二郎は朝餉をすませ、前夜から命じておいた焼き餅を笹の葉に包ませたものを佐平次にもたせ、
「さ、出かけよう」
「どちらへ？」

「ついてまいれ。いずれ、わかることだ。いまに、おもしろいものを見せてやる」
「昨夜も、そのように申されまいたが……」
「そうだったかな」
居館を出るとき、源二郎は、見送りに出た家来たちへ、
「すこし野遊びをしてから、砥石へもどる」
と、いっておいた。
真田の庄を出て、南へ向かうと、前面の左寄りに松尾山が見える。ここにも真田の城があったのだ。
「こちらだ、佐平次」
源二郎は、松尾山の東側から山道へ分け入った。
土塁の跡も見える。
朽ちかけた木戸もあった。
どこもかしこも落葉に埋めつくされている。
松尾山の城は、すでに廃城となっていた。
松尾山は、いまの真田家にとって、何の戦略的な意味をもたぬ。
冷たい朝の大気を、真田源二郎は胸いっぱいに吸いこみ、
「ああ……こころもちがよいな」
童子のように、無邪気な嘆声をあげる。

「このような山道を、いずこへまいられます？」
「いちいち、うるさいな、佐平次」
「なれど……」
「だまって、ついてまいれ」
落葉は、黄と赤と茶の諧調もあざやかに、厚く重く地上をおおいつくしていた。
ツピン、ツピン……。
高く澄んだ鳥の声がする。
「あれは、小雀でございましょう。甲斐におりましたとき、よく聞こえました」
佐平次がそういうと、源二郎は、さも得意げに、
「お前は何も知らぬな」
「いえ。たしかに、小雀の鳴き声でございます」
「ちがう。あの声は、日雀というのだ。小雀とよく似ているが、ちがう。姿が似ているので、よく、鳴き声までも間ちがえるのだ」
「ははあ……」
佐平次は、源二郎の意外な一面を見たおもいがした。
（おくわしいな、鳥のことなども……）
であった。
「平たい面つきの、とぼけた姿の鳥よ、日雀は……」

「ははあ……」

どこを、どう通っているのか、佐平次にはわからなかった。

のぼりきった太陽が、しだいに左手へまわっているのを見ると、山道は南を目ざしているらしい。

また、土塁の跡があった。

その向こうが、空濠になっている。

源二郎は、

「危ないぞ、佐平次。気をつけよ」

声をかけて、空濠へ飛び下り、

「ツピン、ツピン……」

と、日雀の鳴き声をまねてみせた。

空濠をしばらく行き、また、山道へ這いあがった。

前方に、杉の林が見える。

その中へ、源二郎は入って行く。

と……。

木蔭から、突然、人影があらわれた。

「あっ……」

おもわず叫び、佐平次は脇差の柄へ手をかけると、

「あは、はは……」
源二郎が、また、笑った。
「あわてるな、八郎だ」
鞍掛八郎が、林の中で源二郎を待っていたのである。
「八郎。どうだ？」
「まだ、見えませぬ」
「よし。急ごう」
林をぬけ、道もない斜面を三人は下りはじめた。
芒の群れが、三人の姿を完全に隠している。
（何が、まだ、見えぬのか？）
佐平次の不審はつのるばかりであった。
（何を、急ぐのか？）
これも、わからぬ。
「源二郎様……」
先に立っていた鞍掛八郎が、足をとめ、
「しばらく、此処に……」
「よし。待っている」
「すぐに、もどりまする」

八郎の姿を、芒の群れがのみこんだ。
空は、今日も鏡のように晴れわたっている。
「焼き餅を出せ」
と、源二郎が佐平次にいった。

三

源二郎は焼き餅を食べ終え、佐平次が差し出した水筒の水を、
「うまい」
喉を鳴らして、のんだ。
見事な細工の竹製の水筒は黒漆がかけられてい、金箔で真田家の家紋・六文銭が浮き出している。
これは、源二郎が十六歳の元服の折に、父・安房守昌幸から贈られたものであった。
源二郎は、これを愛用し、片時も手ばなさぬ。
居館の、自分の部屋にいても、この水筒へは、
「いつも、新しい水をいれておけ」
と、佐平次に命じ、何かにつけては、のむのである。
「お前も、焼き餅を食べろ」
「はい」

「いまのうちに、腹ごしらえをしておいたほうがよい」
「これから、いったい、何が起こるのでございますか？」
佐平次は、焼き餅を頬張りながら問いかけて見た。
「ツピン……ツピン、ピン……」
源二郎は、恍け顔をして、また、日雀の鳴き声をまねた。
「教えて下さいませぬか？」
「ツピン、ツピン……」
と、そのとき、芒の中から、鞍掛八郎があらわれた。
「源二郎様……」
よびかけた八郎へ、
「どうだ？」
と、源二郎が尋く。
八郎は、大きなうなずきをもって、答えに代えた。
「よし」
源二郎は緊迫の表情をうかべ、
「佐平次。まいるぞ」
「はい」
あわてて、佐平次は焼き餅と水筒を革袋の中へしまいこんだ。

「おしずかに……」
「わかっている、八郎」
「さ、こちらへ……」
八郎の後から、源二郎と佐平次は芒の群れへ分け入って行った。
日は中天に在る。
日射しに、芒の穂が白く光って見えた。
芒の中を、三人は、ゆっくりと下って行く。
芒の群れの向こうに、遠く、山肌がのぞまれた。
それは、砥石城の峰つづきの山であった。
（すると、ここは？）
佐平次が、はっとしたとき、前を行く鞍掛八郎が突然、身を屈めた。
源二郎も佐平次も、それにならった。
ここは、どうも、烏帽子山とよばれる山の、西側の山裾らしい。
（と、すれば……）
山裾の向こうは、木立に囲まれたお徳が住む屋敷のはずである。
この付近へは、源二郎の供をして、何度も馬でやって来ているだけに、佐平次も地形をのみこんでいる。
「ごらんなされ」

鞍掛八郎が芒の穂の隙間から、彼方を指した。
そこは、お徳の屋敷の側面にあたっている。
このあたりに多い欅の木立の間から、屋敷の甍屋根の一部が見えた。
だが、八郎が指し示したのは、欅の木立の中に、うずくまっている人影なのである。
一人だ。
大男である。
三十メートルほど離れているだけに、どのような男か、佐平次の目に定かではなかった。
大男は袴を股のあたりまでたくしあげ、足ごしらえもしっかりとかためてあるようだ。
「ほう……」
声にはならぬほどの声で、
「来たな、角兵衛……」
と、源二郎がいった。
佐平次は、おどろいた。
「源二郎様、あのお方が？」
「うむ……」
うなずいた源二郎が、
「どうだ、佐平次。あれで、まだ、十三の子供よ」
「ははあ……」

まさに、巨きい。
顔は塗り笠に隠れて、よく見えなかったが、どう見ても、
（あれは、子供の躰つきではない……）
のである。
「源二郎様。角兵衛様は何故、ここへ？」
「わからぬか？」
「わかりませぬ」
「わかるまいな」
そのあと、源二郎は沈黙した。
十七歳の少年とはおもえぬ大人びた源二郎の横顔は、佐平次の重ねての問いかけをゆるさぬきびしさに引きしまっている。
樋口角兵衛は、凝と、うずくまったまま動かぬ。
鞍掛八郎も、身じろぎひとつせぬ。
佐平次は、何か、息苦しくなってきた。
「八郎……」
「はい？」
「角めは、夜になるのを待つつもりなのだろうか？」
「さように、おもえまする」

「ばかめが……」
八郎と佐平次は、顔を見合わせた。
角兵衛は、腰に大小の刀をさしこんでいる。
「いかが、なされます？」
「八郎。ま、急ぐな。夜に入るまでには、大分に間がある」
「はい」
「すこし、考えてみようではないか。どうだ、八郎」
「はい……」

四

木蔭にうずくまっていた角兵衛の躰が、うごきはじめたのは、それから間もなくのことである。
「やつめ、何をするつもりか？」
と、源二郎が鞍掛八郎へささやいた。
「さて……？」
角兵衛は、欅の根もとへ身を伏せるようにした。
「あ……」
佐平次は、おどろいた。

その腕を、源二郎がつかみ、
「ばかもの」
低く、叱りつけた。
いつの間にか、角兵衛は大刀を引きぬいていたのである。
風が出てきた。
芒の穂がゆれている。
「八郎。行け」
源二郎の声に、うなずいた八郎が芒の中を右へ消えた。
八郎は、腰に大きな革袋を下げていた。
「角兵衛様は、何をしようと……？」
「知れたことだ」
「お徳様の屋敷へ……」
「うむ」
源二郎の肯定に、迷いはなかった。
（では、角兵衛様は、お徳様を討つおつもりなのか……？）
真田昌幸が、岩櫃城にいる正室・山手殿に内密で、お徳を、此処に隠していることは向井佐平次も知っている。
これまでに、二度ほど、源二郎の供をして、お徳の屋敷へ来たこともあった。

そうしたとき、源二郎は、
「しばらく、待っておれ」
と、佐平次を草の者たちがいる部屋へ残し、自分は、お徳の居間へ行き、何やら親しげに語り合っているらしかった。
お徳も、こうした源二郎の来訪が、よほどにうれしいらしく、昌幸のためのものばかりでなく、源二郎の肌着から帯、小袖（こそで）なども縫いあげ、砥石へ届けさせたりしているようである。
源二郎は、お徳の過去も、よく知っているらしい。
その上で、いまは昌幸のほかに、
「だれ一人、たよるものとてない……」
お徳へ、いろいろと気をつかい、親切にしてやっているのだ。
何やら、品物や衣類のようなものを入れた木箱を、
「そっとな、だれにも知れぬよう、これを、お徳どのへ届けてくれ」
佐平次に、いいつけたこともあった。
「あ……源二郎様」
おもわず、佐平次は、腰を浮かせた。
なんと、木立の向こうから、お徳があらわれたからだ。
屋敷の東面にあたる此処は、お徳にとって、
（人目にふれぬ……）

憩いの場所だといえよう。

そもそも、屋敷は四方を木立に囲まれてい、塀のようなものはない。

屋敷といっても、大きな農家のようなもので、塀や濠などをめぐらしたら、近辺の村人たちがかえって奇異の目を向けるだろう。

だからこそ昌幸は、自分がえらんだ草の者五名をもって、お徳の身を護らせているのだ。

それならば、いま、このときも、何処かで草の者がお徳を見まもっているはずである。

しかし、それらしい姿は見えぬ。

お徳は、ゆっくりと木立をぬけ、木立と芒の群れの間にある小さな草原へさしかかりつつあった。

立ちどまったお徳が、双腕を大きく伸ばし、空を仰いでいる。

晩秋の日の光がみちあふれている草原へ、お徳が足をふみ入れた。

佐平次は、しばらく、お徳の姿を見ていない。

顔も躰も……ことに肩から腕のあたりが、おどろくほどに、窶れてい、そのかわりに腹部のふくらみが、もはや、だれの目にもあきらかである。

（身ごもっておられたのだな、やはり……）

これまでは、砥石の居館内で、ひそひそとささやかれる足軽たちのうわさばなしだけが耳に入っていた。

源二郎も、お徳懐妊のことについては、佐平次に一言も洩らしていない。

木蔭の角兵衛が、ぬっと立ちあがったのは、このときである。
佐平次は息をのんだ。
立ちあがった樋口角兵衛の巨体は、むしろ、あきれるほどのものであった。
すでに、木立をぬけたお徳は、角兵衛へ背中を向けていることになる。
お徳は、草に腰をおろし、ぼんやりとあらぬ方をながめているかのようだ。
角兵衛の手の刀が、煌りと光った。
真田源二郎は、頬のあたりをひくひくと痙攣させ、角兵衛を凝視していた。
佐平次が、これまでに見たこともない必死の形相である。
源二郎は、このときまで堪えに堪えていたらしくおもわれる。
では、
（何に、堪えていたのか。何を待っていたのか……？）
そのことを、いまは考える余裕とてなかった。
「佐平次、よいか……」
ぎゅっと、佐平次の腕をつかみしめた源二郎が、
「よいか。おれが飛び出したら、お前は、まっしぐらに、お徳どのへ走り寄り、この芒の中へ隠せ」
と、いった。
「はい」

角兵衛が、あたりをうかがいながら、すこしずつ木蔭から身をはなし、お徳の背後へ近寄ろうとしている。

「行くぞ！」

叫びざま、源二郎が芒の中から躍り出した。

同時に、佐平次も走り出て、お徳へ駆け寄った。

佐平次は、源二郎を見てはいない。

お徳だけを目ざして、駆けに駆けた。

距離にして二十メートルには足らなかったろうが、佐平次にとっては、その三倍も五倍も駆けたようなおもいがした。

お徳が烈しく頸を振って佐平次を見、横合いを走りぬけた源二郎を見て、

「あっ……」

大きく口を開けて、悲鳴に近い声をあげた。

佐平次が、お徳へ飛びついた。

「な、何をなさる……」

「源二郎様のおいいつけです。危ない。早く……早く……」

あとのことはよくおぼえていない。

佐平次は、お徳を抱きかかえるようにして草原を突っ切り、芒の群れの中へ飛びこんだ。

真田源二郎は、お徳の横合いを走りぬけざま、
「角。やめろ！」
と、両手をひろげつつ、角兵衛の前へ走り寄った。
源二郎の出現には、さすがの角兵衛も、おどろいたらしい。
「げ、源二兄上……」
「やめい！」
「う……」
立ちどまったが、たちまちに、角兵衛の巨きな両眼へ光が加わってきて、
「おどきなされ」
噛みつくように、いった。
「ばかもの」
「ばかではありませぬ」
「おのれ、何をするつもりだ」
「あの女を、殺す」
「おのれは、やはり、ばかだ」
「あの女がいては、真田家のためになりません」
「子供が、何をいう」
「うるさい！」

と、今度は角兵衛が、源二郎を怒鳴りつけた。
顎の張り出した大きな顔には、うすい髭さえ浮き出していた。とにかく、これが十三の少年だとは、源二郎ですらおもえなくなってくる。
目の前の堂々たる体軀は、どちらかといえば小柄な源二郎を圧倒し、角兵衛の爛々たる双眸が、源二郎を見下ろしているのだ。
「退け、兄上」
「退かぬ」
いった瞬間、源二郎は角兵衛に突き飛ばされた。
凄まじいちからであった。
源二郎の躰は、鞠を投げられたかのように飛んで、草原へ叩きつけられた。
「女め！」
わめきざま、角兵衛は、猛然と、芒の中へ隠れた佐平次とお徳を追わんとした。
そのとき、これまで何処に隠れていたものか、鞍掛八郎が草原へあらわれた。
身を低めて走って来た八郎は、人の姿ともおもわれなかった。
まるで、野生の獣のような速さで角兵衛にせまり、ぱっと何かを投げつけた。
投げたときは、これを見ていた佐平次の目に、
（何か、黒い、小さな荷物のようなもの……）
としか映らなかったが、それが空間に大きくひろがり、生きもののように角兵衛の頭上へ

落ちてきた。
投げ網であった。
魚を漁るように投げられた網が、角兵衛の巨体を包み込んだ。
「ああっ……」
驚愕し、ふり向きかけた角兵衛の足を、鞍掛八郎が棍棒で払った。
網に絡められて手足の自由を失った角兵衛は、横ざまに倒れた。
八郎が、上から飛びかかった。
と……。
木立の中から走り出て来た人影がある。
昌幸に命じられ、お徳を護っている草の者の山田弥助であった。
「いかがなされました」
叫びながら駆け寄って来た弥助へ、ようやく草原に立ちあがった真田源二郎が、
「おお、弥助か。大変なことになってな」
「何事で？」
「お徳どのの身が危なかった」
「何と、申されまする？」
「曲者は、いま、八郎の投げ網で捕らえたぞ」
山田弥助の顔は、あきらかに色を失っていた。

それまでは笑顔になっていた源二郎が、身をひねって、腰の大刀を抜き打ちに弥助へあびせた。

「うわ……」

したたかに肩先を切り割られた弥助へ、

「おぼえがあろう」

と源二郎がいった。

血を振り撒きながら、弥助は、逃げようとしたが、もう遅かった。背中を斬られ、倒れた弥助の喉へ、源二郎はとどめの切先を突き入れた。

五

「どうだ、これで、よかったろうか？」

と、源二郎が鞍掛八郎へ声をかけた。

八郎は、投げ網の上から、角兵衛の巨体の急所へ細引縄を打ち、身うごきもできぬようにしてしまった。

あれほどの怪力のもちぬしである角兵衛を、まさに、

「手玉に取る……」

といってよいほどの速さと軽さで、取り押さえてしまったのである。

「ま……こういたすより仕方もございますまい」

八郎は、そうこたえ、網の中で、わずかにもがいている角兵衛へ、
「おゆるしを……」
頭を下げた。
角兵衛は、得体の知れぬ叫びをあげつづけていた。
顔面が紅潮し、巨大な両眼が顔からはなれ、生きもののように網の目を破って飛び出して来そうにおもえた。
刀身をぬぐって鞘におさめた源二郎が、角兵衛へ近寄り、
「角は、いま、おれが成敗をした草の者と、気脈を通じていたのだな」
「知らぬぞ！」
「だまれ、角。おのれは、何と恐ろしいやつだ」
「知らぬ。草の者なぞは知らぬ！」
「では、おのれの一存で仕てのけたというのか？」
「当たり前のことです。源二兄上。おれは、何事にも、自分のおもうままにする。いつでも……」
「だまれ！」
源二郎が叱りつけ、舌打ちをした。
木立を駆けぬけて、四人の草の者があらわれ、このありさまを見て立ちすくんでいる。
「弥助の死骸を埋めておけ」

と、鞍掛八郎がいった。
草の者たちは、うなずき合い、源二郎に斬られた山田弥助の死体を木立の中へ運び去った。
「源二兄上。あの女を生かしておいては、御家の為にならぬ。なればこそ、角兵衛は……」
網の中で、わめきつづける角兵衛を源二郎が蹴りつけた。
「な、なにをなさる！」
「真田家のために、生かしておいて困るのは、どうやら角兵衛、おのれらしい」
「何といわれます！」
「おのれの頭脳の仕組みは、子供のくせに、どこかが狂うているのだ」
「気ちがいだと申されるのか！」
「そうだ」
「兄上とて、容赦しませぬ」
「大人ぶった口をきくな」
源二郎が、なおも叫ぶ角兵衛から離れ、
「八郎。角めを見張っておれ」
「はい」
お徳が、向井佐平次の腕にささえられ、芒の中から出て来た。
源二郎は駆け寄って、
「お徳どの。さぞ、おどろかれたろうな？」

お徳は生気が失せて、紙のような顔色となっていたが、ちらりと角兵衛を見やってから、無言のまま、歩みはじめた。

お徳を両脇から抱えるようにして、源二郎と佐平次は木立へ入って行った。

四人の草の者が、山田弥助の死体を埋めている。

「浅く埋めておけ、父上が死体をお調べなさるやも知れぬゆえ……」

草の者たちは、悚然としていた。

敏感な彼らは、早くも、この事態がどのようなものかを察知したものと見える。

（きっと、山田弥助殿が、この屋敷にかくまわれているお徳様のことを、岩櫃の御方様へ密かに告げたのだろう）

と、感じはじめている。

そのことを、弥助と共に暮らしていながら、今日まで、すこしも気づかなかった自分たちを責めているのだ。

源二郎は、あえて、彼らを叱らなかった。

のちに、父の昌幸が、四人の草の者の油断に激怒したとき、源二郎は、

「あの五人は、父上が特に、えらんだ者たちではありませぬか。となれば、父上も油断をしておられたことになります」

といった。

これには昌幸も、返す言葉がなかった。

「父上もわからなんだことが、なんで、他の四人の草の者にわかりましょう」
「う……」
「それに、草の者たちが、たがいに疑いの目を向け合うようになっては、肝心のときに、はたらきが鈍るものだと、壺谷又五郎も申しておりました。私はむしろ、弥助に騙されていた四人をよしとおもいます」
「それにしても、あれほど申しておいたに、お徳は何故、独りきりで裏へ出て行ったのじゃ」
「独りではありませぬ。弥助が見張っていたのです」
「ふむ……」
「そこへ、突然、角兵衛が襲いかかりました」
「おのれ、角めが……」
「弥助は、それと気づきましたが、出て行かなかったのです」
「何故だ？」
「角兵衛が、お徳どのを襲うたことは、取りも直さず、岩櫃の母上の……」
「何を申す」
「母上が、お徳どのを殺害せよと、角兵衛に申されたとはおもいませぬが……角めは、父上の隠し女を……」
「やめい。もう、よいわ」

しかし、源二郎は、山田弥助が山手殿の密命を受け、お徳の身辺の仔細を岩櫃へ知らせていたことを、よくも知っていたものだ。

「いつ、知ったのじゃ？」

昌幸が尋くと、源二郎が、

「弥助を斬る直前に知りました」

「何じゃと……？」

どうも、わからぬ。

角兵衛が岩櫃から姿を消したと聞いたとき、源二郎は、

（お徳どのの、身ごもっていることが、岩櫃へ知れたのではあるまいか……）

と、直感したそうな。

それを知った角兵衛が、お徳を殺害に向かいつつあるのではないか。

（角ならば、やりかねぬ）

そうおもった。

こういうところに、真田源二郎という十七歳の若者の、恐ろしいまでに鋭敏な洞察力を見ることができる。

それは源二郎がかねてから、母の山手殿をはじめ、角兵衛、その母の久野。それから兄の源三郎信幸と自分との関係。父・昌幸の言動に対する角兵衛の反応などを、微細に看取っていたからであろう。

山田弥助の密告がなくとも、砥石にいる家来たちの大半は、昌幸がお徳の屋敷へ通っていることを知っている。だから、早晩に岩櫃へも、

（知れるにきまっている……）

と、源二郎は考えていた。

岩櫃の母が、父の隠し女が子を生むことに対し、異常な関心と警戒を抱いていることを、源二郎はだれよりも深い関心をもってながめてきた。

（これは、おれだけにしか、わからぬこと……）

と、いってもよい。

（角兵衛は、岩櫃の母上や兄上のためなら、すぐにでも、一命を投げ打つだろう）

と、感じてもいた。

そこで、熟考した結果、たとえ、無駄になってもよいとおもい、鞍掛八郎と向井佐平次をつれ、お徳の屋敷を裏山から見張ることにした。

角兵衛が屋敷内へ潜入するとなれば、裏山からと看た。他の方角からでは、屋敷の草の者に発見されてしまうだろう。

鞍掛八郎も、これに同意してくれた。

しかし、すでに角兵衛が裏山へ到着していようとはおもわなかった。やはり、角兵衛は夜を待って潜入するつもりだったのである。

源二郎は、できるなら、だれの目にもふれさせずに角兵衛を捕らえたかった。

ところが、おもいもかけずに、お徳が裏山の草原へ出て来た。
これは角兵衛にとっても、意外なことであったろう。
そこで、あのようなことになったわけだが……。
八郎の投げ網に角兵衛が捕らえられたとき、木立から「いかがなされました」と叫びつつ、飛び出して来た山田弥助の蒼ざめた顔色を見た瞬間に、源二郎は、
（そうか……弥助が岩櫃へ内通していたのか……）
と、わかった。
弥助は、
（いま、出て行かぬと、お徳様の見張りを怠っていたことになる……）
そうおもい、飛び出して来たにちがいない。
お徳が裏山の日だまりへ出て、しばらくは空をながめ、気を晴らすことは草の者も、みな、わきまえている。
あのとき、弥助は、ちょうど見張りの番に当たっていたが、よもや岩櫃から、角兵衛が刺客となってあらわれようとは、おもいもかけぬことだったろう。
岩櫃の山手殿からの密命があり次第、お徳は自分の手で暗殺するつもりの、山田弥助だったのである。
「弥助を何故、その場にて斬り捨てたのだ。父はな、弥助を取り調べたかったのじゃ」
と、昌幸が詰るのへ、源二郎は、

「さようにおもいました。なればこそ、すぐさま、この手にかけたのです」
「何と申す……？」
「弥助を責めたてて、知らぬでもよいことまで、父上のお耳へ入ってはならぬと存じました」
「何じゃと……」
「弥助が、私の手にかかったと知れば、弥助に同意の者は、だまっていても行いをあらためましょう。これは弥助たちが敵方に通じていたというわけのものではありませぬ。どこまでも内々のことです。なれば、そのようにおさめたほうがよいのではありませぬか。いかが？」
反問されて、真田昌幸は瞠目し、
「お前というやつは、何というやつじゃ」
あきれ果てたかのように、つぶやいたのである。

秘密

一

真田昌幸は、結局、源二郎の進言を採り入れることにした。

けれども、懐妊中のお徳を、このまま自分の身近な場所へ置いては、

（まずいことになろう……）

と、おもわざるを得ない。

山田弥助のほかにも、岩櫃の妻と通じている者が、

（いないとはいえぬ……）

のである。

いや、たしかにいるはずだ。

弥助と妻との間の連絡をつけている者が、たしかにいる。いなくてはならない。

源二郎は、そうした者たちを、

「いまのところは、見逃しておいたほうがよい」

と、いう。

そのことを昌幸が、何処(どこ)までも糾明するとなれば、必然、山手殿の身へ、
「累がおよぶ……」
ことになるからだ。
そうなると、真田家に内紛が起こりかねない。
一時は昌幸も、ひそかに妻を殺害してしまいたいとおもったこともあったが、いまは、さすがに、
（この、おれにも責任(せめ)がある……）
と、反省している。
そこで、昌幸が源二郎に、
「では、角兵衛(かくべえ)の身を、いかがいたす？」
「しばらくは、砥石(といし)へ押しこめておいたほうがよいとおもいます」
「岩櫃へは、何と申しつたえるつもりだ？」
「上田築城の工事を見物にまいった、とでも申しておけばよいとおもいます」
「ばかな……それですむことか」
「いえ、岩櫃には兄上がおられます。兄上が母上や叔母上へは、うまく取りなしてくれましょう」
「ふうむ……」
昌幸は不快げに沈黙した。

すると源二郎が、すぐさま、はなしを変えた。
「父上は、先ほど、お徳どのを何処かへ移そうと申されまいたな？」
「む……いかにも」
「何処へ移されます？」
「さればよ……」
「沼田へで？」
「沼田とて、安心はならぬわ」
矢沢薩摩守が城代をつとめている沼田城にも、山手殿に通じている者がいないとはいい切れぬ。
昌幸は思案したあげくに、
「どうじゃ。お徳を名胡桃へ預けては……」
と、いい出した。
「これは……」
源二郎が目を輝かせ、
「なるほど、よいおもいつきです、父上」
「そうおもうか」
「はい」
「よし。それに決めたぞ」

「名胡桃へは、私がまいりましょう」
「お前が、徳を送りとどける……？」
「はい」
「ならぬわ。このような役目に、おれのせがれが立つことはない」
「いえ、そのほうがよいのです。おまかせ下さい。私が草の者を宰領し、お徳どのを無事に送りとどけます」
源二郎は、強引に父を説き伏せてしまった。
ところで、お徳が、これから護送されておもむこうとする名胡桃とは何処なのだろうか。
それは、上州・沼田の北西一里余のところにある名胡桃城をさす。
名胡桃に城が築かれたのは、
「二百何十年も前のことらしい」
と、兄・源三郎信幸から、源二郎は聞かされたことがある。
以後の名胡桃は、沼田氏の支城として存続した。
沼田氏十二代の万鬼斎顕泰が亡び、沼田家の内紛によって、沼田城も名胡桃城も、越後の上杉謙信の管理下におかれた。
そのとき、名胡桃の城代をつとめていたのが、鈴木主水であった。
沼田氏の家臣だった鈴木主水は、主家がほろびてのちも、上杉謙信から名胡桃城をまかせられたことになる。

ついで、謙信が歿したのち、沼田城は、真田昌幸の手に落ちた。
昌幸は、沼田へ挨拶にあらわれた鈴木主水を引見し、しばらく語り合ったのちに、
「名胡桃の城は、これまでどおり、おぬしに守っていただこう」
と、いった。
そして昌幸は、天正九年の春に、沼田万鬼斎の子・平八郎が沼田へ攻めかけて来たときも、名胡桃の鈴木主水に対しては、すこしも警戒の色を見せなかった。
ほんらいならば、旧主の子が、故国の城を奪い返しにあらわれたのだから、鈴木主水も沼田平八郎の呼びかけに応じ、沼田攻撃に参加すべきであろう。
しかし主水は、平八郎の使者を迎えても、
「われらは、いま、真田安房守様が寄騎でござる」
と、いい切って、使者を帰し、このことをすぐさま、真田昌幸へ報告している。
鈴木主水は、真田家の沼田進駐に際し、安房守昌幸が、自分を引見して、たちまちに自分の真意を受け容れてくれ、名胡桃の城にも領地にも手をつけず、何事も従来どおりに、自分へまかせてくれた温情と信頼に応えたのであった。
鈴木主水の、こうした表裏のない戦国の武将としてのいさぎよい態度は、さらに昌幸をよろこばせ、信頼の度を深めるにいたったのである。
今度の上田築城に際しても、鈴木主水は二百余の士卒を上田へ送り、
「お使い下され」

と、いってよこした。
また、領地から適当な岩石や木材を運ばせたり、懸命に昌幸を助けようと神経を配っている。
主従となってからの年月は浅い昌幸と主水であったが、
「名胡桃の主は、こころよいやつだ」
真田昌幸は、何かにつけて鈴木主水をほめ、
「いまの世にめずらしい、折り目も正しい男よ」
と、主水の正直な人柄に好意を寄せている。
その、鈴木主水の城へ、
「しばらくの間、お徳をあずけよう」
というのだから、源二郎が父の〔妙案〕に、手を打ったのもうなずけよう。

二

樋口角兵衛は、砥石城の〔米山曲輪〕の下にある番所を改造した〔締まり所〕へ押し込められた。
締まり所といっても、牢屋ではない。
寝具も運び、机なども入れ、人ひとりが住むに不自由のないほどにして、そのかわり、板壁も補強し、出入り口には頑丈な牢格子をつけた。
生半な壁や戸では、角兵衛に打ち破られてしまうおそれがある。

「あれは、岩櫃におられる角兵衛さまではないか」
「いったい、何があったのだ？」
締まり所の警固を命じられた士卒が、不審そうにささやき合った。
締まり所へ押しこまれてからの角兵衛は、終始、無言であった。
罪人というわけではないのだから、食事も源二郎と同じものだし、髪の手入れもできるのだが、角兵衛は躰の垢を落とそうともせず、大きな桶に湯を入れたものを番兵が牢格子の中へ運び込んでも、じろりと見やっただけで、手をつけようとせぬ。
髪も髭ものびほうだいであった。
五日もすると、
「いや、どうも、締まり所の中の臭さはどうだ」
「髭がのびてきて、青ぐろい顔つきになられて、凄まじい目つきでおれたちを睨まれる」
「あれが、十三の子供だとは到底おもえぬわい」
「どうも、いやな御役目だのう」
「いつまで、あの締まり所に角兵衛さまを押しこめておくのだろうか……？」
「それは御屋形様が、お決めになることよ」
番兵たちも、困っている。
角兵衛も食事だけは、きれいに平らげてしまう。そこはやはり、食べざかりの少年なのである。

とにかく、一日中、口もきかずに独りきりで板壁をにらみつけたまま、身じろぎもせぬ。
この様子を源二郎から聞いた真田昌幸が、
「あの、あばれ者が……」
信じられぬという顔つきになって、
「すりゃ、まことのことか？」
「はい。私も見てまいりました」
「ふうむ……」
「父上も一度、行ってごらんなされ」
「そのような暇とてないわ」
昌幸は、角兵衛が、
（前非を悔いておるらしい……）
と、おもった。
「やはり、締まり所へ押しこめてよかった。これからは角めも、あのようなまねはすまい」
「いや、父上。ちがいます」
「何……？」
「ともあれ、ごらんなさるがよい。あの態は、十三の子供が前非を悔いている態ではありませぬ」
「では、何だと申す？」

「そこがよく、私にもわかりませぬ。何やら奇怪な……」
「奇怪じゃと……？」
「さよう。角兵衛には、われらが量りかねる何ものかが潜んでおります。あの恐ろしいほどの怪力にしても、得体の知れぬ頭脳のはたらきにしても……父上も、さようおもわれませぬか？」
そういわれてみると、
（なるほど……角めは常の少年ではない。これより先、どのようになることか……？）
昌幸も何か、空恐ろしいようなおもいがした。
すでに、岩櫃へは使者を走らせ、樋口角兵衛が無事で、砥石にいることをつたえさせた。
父・昌幸の簡単きわまる知らせを受けた真田源三郎は、
「さようか。それで安心をいたした」
にっこりとして、使者へ、
「父上に申しあげてくれい。この上は源三郎、何事も父上の御指図を待っております、とな」
と、いった。
上田へもどった使者が、源三郎の言葉をつたえると、
「さようか。それでよし」
源三郎のことになると渋面をつくらずにはいられぬらしい昌幸も、このときは破顔し、さ

も安心したように、何度もうなずいたという。

この間に……。

お徳の名胡桃護送への準備が密かにすすめられている。

ある日、忽然として、

「お徳さまの姿が消えた……」

ということにせねばならぬ。

準備は、お徳の屋敷内ですすめられた。

すべての指図は、源二郎と鞍掛八郎がした。

お徳をまもり、名胡桃まで行くのは、源二郎と向井佐平次。それに鞍掛八郎が、これまでお徳の屋敷にいた四人の草の者を指揮して従う。同勢はこの七名であった。

八郎が工夫をして、馬の背へ小さな輿のようなものをつけ、お徳を乗せて行くことにした。

道筋は、上田から軽井沢を経て上信国境の碓氷峠を越え、安中のあたりから榛名山裾を東へまわり、沼田を経て名胡桃城まで、およそ三十三里である。

お徳一行の出発に先立ち、真田昌幸は、沼田城代・矢沢薩摩守と、名胡桃城代・鈴木主水へ急使を飛ばした。

これは、源二郎とお徳の一行が隠密裡に名胡桃へ向かうことを、つたえさせたのである。

もっとも源二郎は、

（沼田へは立ち寄らぬ……）

つもりであった。
それにしても、昌幸としては、やはり不安であったのだろう。
お徳を護送するため、とはいわなかったが、それとなく匂わせ、表向きは、
「源二郎が小人数の供をつれて名胡桃へ向かうゆえ、道中、何かと手配りをたのむ」
と、いい送ったのだ。

一行の出発は、角兵衛がお徳を襲ってから七日目の夜ふけに決まった。
その前日。
上田から砥石へもどって来た真田昌幸は、源二郎をつれて、米山曲輪の締まり所へ、角兵衛を見に出向いた。
散り積もった落葉の道をのぼりながら、昌幸が、
「源二郎。角兵衛を、いつまで此処に置いておくつもりだ？」
「は、はは……」
「何を笑う」
「それは、父上が、お決めなさることです」
昌幸は黙った。
さすがの昌幸も、角兵衛の始末を、
（どうつけたらよいのか……？）

と、迷っている。

それどころではないのだ。いまは一日も早く、上田の城を築いてしまわなくてはならぬ。

「父上……」

源二郎が昌幸の胸底を看とおしたように、

「私が、名胡桃の帰りに、岩櫃へ寄ってまいります。そして兄上と、いろいろに談合してまいりましょう」

「ふむ……」

「そのかわり父上。上田の城が、すべて出来あがったときにはすぐさま、岩櫃から母上をお迎えなさることです」

「それは……ふむ……そのつもりでおるわ」

「そうなれば、自然に、何事もおさまりましょう」

「そうなれば、よいのだが……」

だが、名胡桃へ預けたお徳が生んだ子の始末は、どうするかであった。

そこまでは、いま、考えている余裕もない昌幸なのだ。

締まり所の前の木戸が前方に見えて来た。

供もつれずにのぼって来た安房守昌幸父子を見て、番兵があわてて飛び出して来た。

「かまうな。そのほうたちは此処からうごくな」

と、源二郎がいい、昌幸を締まり所へ案内した。

まだ、木々に残っている葉が、山風に吹き払われ、音をたてて締まり所の屋根や羽目に打ち当たる。それはまるで、落葉がたてる音ともおもえなかった。

締まり所の土間へ踏み込んだ真田昌幸が、牢格子の間から、

「角よ。どうだな……？」

声をかけた。

角兵衛が、くるりと背を向け、返事もしてよこさぬ。

「臭い……」

と、昌幸が顔を顰めた。

源二郎は苦笑し、

「これ、角兵衛。父上に返答をせぬか」

「うるさい！」

角兵衛が切りつけるように、叫んだ。

昌幸は顔の色を変えていた。

「おのれは、何という……」

いいさした昌幸へ、

「伯父上。いや、御屋形」

と、角兵衛が向き直り、刺々しく、しかも妙にあらたまった口調で、

「あなたさまの御長男は、どなたです。うけたまわりたい」

「何を申すか、こやつ……」
「御長男は、岩櫃に在す源三郎信幸様に間ちがいない。それとも、ちがうと申されますか」
昌幸は押し黙り、角兵衛をにらみすえた。
昌幸にかわって源二郎が、
「いかにも、そのとおりだ。わかりきったることを何故に聞く」
「うるさい！」
源二郎も、むっとなった。
「源二兄上に聞いているのではない。おりゃ、真田安房守様に問うている」
角兵衛が、ぬっと立ちあがり、牢格子の傍へ近寄って来た。
昌幸も源二郎も、角兵衛の巨体からたちのぼる異臭に辟易し、後へ退った。
「安房守様に申しあぐる。真田家の世継ぎは御長男・源三郎様でござる。もしも、世の道理をわきまえず、そこにおる小賢しき者を世継ぎとなさるときは、この樋口角兵衛、天魔の使いともなって、どこまでも、あなたさまをお怨み申す。たとえ、小賢しき者の素首を捩じ切っても邪魔いたす！」
締まり所の板壁が割れ返るような大音声であった。
真田昌幸が激昂し、太刀の柄へ手をかけた腕を押さえ、源二郎は締まり所の外へ連れ出した。
彼方の番所から出て来る人影もない。

「おのれ、角めが……」
「父上。おわかりになりましたか」
「むう……」
父と子は、しばらくの間、其処へ立ちつくしたまま、空を仰いでいる。
昌幸が平静を取りもどし、にやりとなって、
「なるほど、角めは化け物じゃ」
つぶやいたとき、締まり所の内で、角兵衛の泣き声が起こった。
噦りあげるように、たよりなげな、その泣き声は別人のものとしか考えられない。それはまさに、十三歳の少年の泣き声であった。
昌幸は、源二郎と顔を見合わせ、唖然となった。

三

この日。
真田昌幸は、お徳の屋敷へも立ち寄っている。
源二郎と向井佐平次だけが供をした。
昌幸は、酒を出させて、お徳と共に一刻（二時間）ほどをすごしたろうか。
源二郎が遠慮をして、
「私は、佐平次と共に待っています」

そういうと、昌幸は、
「いや、おれの側にいてくれい」
と、いった。
お徳と二人きりになって、また、何かと掻き口説かれるのをきらったものであろう。
しかし、お徳は落ちつきを取りもどしていたようである。
「名胡桃へ行き、安心して、子を生めい」
と、昌幸は、お徳をはげました。
「いずれにせよ、お前は、もはや、われらの身内も同然なのだ。ここに、ほかならぬ源二郎もいる。その前で、おれが申していることだ。わかるか？」
「はい」
お徳は、頭を下げ、
「源二さま。かたじけのうございます」
と、いった。
「うむ。それでよし。よし、よし」
昌幸は、何やら感動をおぼえたようで、目を屢叩いた。
源二郎が、この場にいて、お徳をもふくめて、このような情景が生まれたことが、安房守昌幸を何やら特殊の想いにさそうらしかった。
はじめ、お徳は、独りきりで名胡桃の城へ送りこまれることを心細がっていたようである。

けれども、真田源二郎がみずから、護送の指揮をとり、つきそって来てくれると聞いてから、

「もったいないこと……」

と、恐縮しながらも、急に、元気づいてきた。

むろん、源二郎は、お徳と共に名胡桃へ滞在するわけではない。送りとどけたのちは、すぐ砥石へ引き返すわけだが、そこまで源二郎が、自分に対し、親身の情をしめしてくれようとはおもっていなかったのであろう。

（源二郎さまがおいでなさるかぎり、私の身も……）

やみやみと危険にさらされることはない、と、お徳は信じるようになった。

それは、源二郎が、角兵衛の襲撃を、それこそ、

（身をもって……）

防いでくれた一事を見てもわかる。

お徳は、真田昌幸の隠し女であって、正式にみとめられた〔側室〕ではない。もとは沼田にいた鉄砲足軽の女房だった女で、見るからに土くさい。

そのことを、お徳は、よくよく自覚しているだけに、源二郎が、

（何故、私のようなものを、たいせつにして下さるのだろう？）

ふしぎでならないのだ。

昌幸と共に、お徳の屋敷を出ると、源二郎は、

「お徳どの。では、明夜……」
笑顔で、うなずいて見せ、
「この屋敷へ、いずれまた、もどることもあろうと、おもうていられるがよい」
昌幸には聞こえぬように、ささやいたものである。
懐妊中の、面変わりして窶れたお徳の顔に、見る見る血の色がのぼった。
「源二さま。うれしゅうございます」
「父上も、それをのぞんでおられる。大丈夫だ、お徳どの」
「はい……」
真田昌幸は、砥石の居館へもどらず、単騎で上田へ向かった。
「源二郎、では、たのむぞ」
「はい」
「岩櫃の源三郎に会うたら、上田の模様なども、くわしくつたえておけ」
「心得ました」
「では……」
昌幸は、軽く馬腹を蹴って、源二郎と佐平次を置いたまま、木立に沿った道を駆け去った。
「佐平次。さ、帰ろう」
馬首をめぐらして源二郎が、
「今夜は、ゆるりと、もよに別れを惜しんでおけ」

「はい。そういたします」
「こやつ。ぬけぬけと……」
もよは、まだ、佐平次に身をゆるしていない。
源二郎も昌幸も、二人が夫婦になることをゆるしてくれているのに、もよは、
「かための盃を、かわさぬうちは……」
身をゆるさぬといい張ってやまない。なかなかに強情なところがあるのだ。
「このところ、暖かく晴れわたった日がつづくな」
「はい。名胡桃へ到着いたしますまで、このままの日和がつづきますと、よいのでございますが……」
「そのことよ。せめて、碓氷の峠を越えるまではな」
源二郎が大人びた口調で、
「なにぶん、お徳どのは身重ゆえ……」
と、つぶやいた。
佐平次にしても、源二郎がお徳を、母か姉のように、大事にあつかうことを、
（はて……？）
いささか、不審をおぼえている。
そしてまた、安房守昌幸が、これをみとめていて、お徳のことについては、すべて源二郎にまかせている様子も、不審であった。

源二郎が、いかに利発な天性をそなえているといっても、十七歳の若者にすぎない。それが父と、父の隠し女の間に入り、二人のために、何かと気をくばり、事をはかるというのが、そもそも、

（おかしい……？）

のである。

それにしても、源二郎の供をして、まだ見も知らぬ上州へ旅立つことは、佐平次の胸を躍らせた。

四

お徳護送の一行は、当日の夜ふけに出発と決めていたが、鞍掛八郎の進言で、翌未明となった。

お徳が乗る輿をつけた馬の手綱を、二人の草の者がひき、他の二人は一行の前後を警戒する。そして、源二郎信繁と向井佐平次、鞍掛八郎が馬に乗った。

四人の草の者は、いざというとき、馬が駆け足になっても、走ることにおいて退けはとらぬ。だが、佐平次に彼らのまねはできない。

源二郎は父・昌幸と、樋口角兵衛が押しこめられている締まり所をおとずれた翌日……すなわち出発の前日に、

「八郎と佐平次をつれて、岩櫃へまいる」

と、いいおき、砥石の居館を出て、お徳の屋敷へ入り、翌朝を待った。
すでに、準備はととのっている。
その日の未明……。
一行は、たちこめた霧の中を発足した。
夜が明ける前に、
「上田をはなれてしまえばよい」
のである。
朝陽がのぼりきったとき、早くも一行は、上田を東へはなれること三里の地点に達していた。
武士の姿をしているのは、源二郎のみであった。
佐平次も八郎も、いまのところは馬から下りている。お徳をのぞく六名は、いずれも源二郎の従者に見えた。
今日も好晴である。
千曲川を右手に見下ろす道は、しだいにのぼり、浅間山の腰へさしかかりつつあった。
源二郎は時折、馬を寄せて行き、輿の中のお徳へ、
「気分は、いかが？」
とか、
「胸苦しくおぼえるときは、遠慮のう申されるがよい」

などと、こまやかに気をつかっている。
お徳は、むしろ、久しぶりにひろい天地へ出たものだから、
「気も、晴れ晴れといたします」
と、源二郎にこたえたのが、いつわりではなかった。
昼すぎに、一行は小諸へさしかかった。
小諸は、浅間山麓の台地にある。
千曲川は西から南へながれ、南佐久の山間をさかのぼって甲武信岳に達する。
その山の向こうは、甲斐の国であった。
このように、甲信二州をむすぶ要衝であるから、武田信玄は天文十二年に、この地を手におさめるや、本格的な築城をして、信州侵略の根拠地とした。
千曲川をのぞむ断崖の上に構えられた小諸城は、いま、徳川家康麾下の依田康国がまもっている。
武田家がほろびてのち、小諸城は、あの滝川一益のものとなったわけだが、織田信長が変死したのち、一益が兵をひきいて上信二州を去ったので、たちまち関東の北条軍が侵入し、城をおさめてしまった。
しかし、その後に、徳川・北条両軍が、このあたりから甲州にかけて戦闘をくり返しているうち、徳川方の依田信蕃が北条勢を追い退け、小諸へ入城した。
現城主・依田康国は、信蕃の長男である。

先行していた草の者が駆けもどって来て、鞍掛八郎に何か告げた。
うなずいた八郎が、源二郎の側へ馬を寄せて来て、
「やはり、小諸は避けて通りましたほうが、ようござります」
「さようか……」
「むりをなさらぬほうが……」
「よし、わかった」
草の者が先導し、一行は、浅間の山腹にうねりくねっている細い道をのぼりはじめた。
小諸の城下へかかって、もしも城兵などに見とがめられたら、源二郎は、
「真田安房守が次男である」
堂々と名乗って通るつもりであった。
いまのところ、真田家は徳川家康へ、
「款を通じている……」
かたちになっていることだし、おそらく、小諸の依田康国は、真田昌幸の上田築城の模様を探り、これを家康のもとへ報告しているにちがいない。
だが、家康は、別に昌幸をとがめようとはしていない。
だから、小諸をぬけることについては、案じることもないだろうが、なにぶんにも、お徳を人の目にふれさせぬよう、名胡桃へ送りとどけたい。
避けて通れるものなら、そのほうがよいのである。

浅間山が、澄みわたった大空へ、しずかに煙をあげてい、風は絶えていたが、大気は冷え冷えと張りつめている。

「いまに、な……」

と、源二郎が佐平次にいった。

「いまに、小諸の城も父上のものになるだろう」

「まことで？」

「うむ。上田と沼田をむすぶ途々（みちみち）は、みな、わがものにしておかぬといけない」

「ははあ……」

「そして、な……」

「はい？」

「いずれは……」

いいさして、源二郎が口をとざし、たのしげに微笑をうかべた。

（いずれは、なんと……？）

佐平次は、源二郎が口をひらくのを待った。

源二郎は、いつまでもだまっていて、佐平次が忘れかけたとき、急に、

「佐平次は、いずれ、もよと共に、沼田の城で暮らすことになるだろう」

「私が、沼田へ……？」

「うむ」

「源二郎様のお側についてでございますか？」
「お前が、おれの側をはなれぬというならばのことだ」
「はなれませぬ」
「何十年も、先のことよ」
「何十年……」
「さよう。さ、急ごう。お前も馬へ乗れ」
ひとりで何も彼も、のみこんでいるような顔つきの源二郎であった。
一行は、小諸の北方を迂回し、夕暮れ近くになってから、長倉の里へ下って来た。
長倉の村外れにある寺へ泊まるのだ。
この寺は、真田の草の者たちが以前から利用している。
「なんという、お寺でございますか？」
「佐平次。おれも知らぬ」
沼田と砥石間の連絡をするために、こうした場所を、真田家では用意してある。草の者が使者となる場合は、ほとんど、宿泊をせずに走りきってしまうが、家来たちでは、どうしても二泊はせねばならない。
双方が荷物を運んだり、人数を送ったりするときは、岩櫃城を中心にして事を運ぶのである。けれども、冬になって吾妻の高原が雪に閉ざされてしまうと、まことに不便なのだ。いずれにせよ、上田の城が完成したあかつきには、いま、源二郎一行がすすんでいる道を利用

しなくてはなるまい。
この道は、上州・甲州・信州をむすんで、往古からひらけている。
源二郎が放言したように、小諸城を、わがものにしなくとも、これからの真田家にとって、どうしても必要な本道なのだ。
そうなれば当然、真田昌幸は、徳川家康と事をかまえてはならないはずである、と、向井佐平次はおもった。

長倉の寺へ泊まった翌日、一行は軽井沢を経て、碓氷の峠を越えた。
さいわいに晴天がつづいている。
だが、峠を越えるときに、雪が風に乗って吹きつけてきた。
碓氷峠は、上信二州の国境である。
吹きつけてくる雪も、激しいものではなく、上州側へ下るころには、青空ものぞいてきたし、
「あ……」
おもわず佐平次が声をあげたほどに、寒気が消えていった。
下るにつれて、日ざしもあたたかく、何か輿の中へ語りかける源二郎にこたえて、お徳の笑い声もきこえた。
この日は、安中の外れにある法正寺という寺へ泊まった。

安中にも、以前は城があった。
城主を安中忠成といい、武田家にしたがって長篠の戦争に出陣し、忠成以下、一騎も帰らなかったという。
それほどに、織田信長に長篠で大敗を喫した武田家の傷は大きく深かったのである。
安中の城は、無人のままに、荒廃しつくしている。
「長篠では、おれの伯父上が二人も討死された……」
と、源二郎が、法正寺へ泊まった夜、佐平次と鞍掛八郎に、
「おもえば、恐ろしい戦であったのだな。武田家にとっては、取り返しのつかぬ戦であった……なれど、伯父上たちが討死をされたものだから、おれの父上が真田家の当主となったのだ」
さも、おかしそうに源二郎が、
「父上が当主になったからこそ、上田に城を築くことにもなったし、また、おれたちがこうして、お徳どのを名胡桃へ送りとどけることにもなる。まことにふしぎなことよ」
いいながら、佐平次の頭を軽く叩いて、
「おれが、すぐ死ぬと、お前の運命も、また変わることになる」
「何を申されます」
「怒ったのか、佐平次」
「行く先のことは、すこしもわかりませぬ。それが人でございます」

「ほう……申したな、佐平次」
「はい、申しました」
「さとりきったことを申すではないか」
「ですが、そのとおりだとおもいます」
すると、傍で聞いていたお徳が、
「まこと、佐平次どのの申されるとおり……」
しみじみと、相槌をうったのである。

五

翌日も、快晴であった。
「まことに、幸先のよい旅立ちでしたな」
大人びた口調で、源二郎がお徳へ、
「これから先は、吉事のみが待っているとおもわれよ」
「はい。かたじけのうございます」
「源二郎、お徳どのの身については、かならず悪しゅうは計らいませぬ。案じられるな」
「はい」
「安心をして、丈夫なお子を産んで下され」
などと、いかにも落ちつきはらった態で、お徳に語りかけている源二郎を見ていると、

（まことに源二郎さまは、十七歳なのだろうか……）

佐平次は、到底、信じられぬようなおもいがした。

安中を発した一行は、榛名の山裾を東へすすむ。

この近くには、箕輪城があって、いまは関東の北条氏が手中におさめている。

ここは、小諸よりもなお、避けて通らねばならぬ。

二十年ほど前まで、箕輪の城主は長野業正という大名であった。

長野業正は、そのころ、凋落の一途をたどっていた関東管領の上杉氏をたすけ、上州の地に君臨し、

「上野の国の黄斑」

と、よばれたほどの人物である。

黄斑とは〔虎〕のことだ。

業正は、武田信玄や北条氏の侵略と戦い、関東管領家が越後の上杉謙信のもとへ亡命してからは、謙信麾下の雄将として、執拗に攻めかける武田軍をよく防いだものだ。

永禄四年に、長野業正が病歿してのち、箕輪城は、ついに武田軍の猛攻をうけて落城した。

以後は、武田氏の支配下におかれたが、武田がほろびてのち、織田信長によって上信二州に封じられた滝川一益が、これをおさめた。

それからは、小諸城の場合と同じで、一益が去ったのち、すかさず箕輪城を落としたのは、北条軍である。

いま、箕輪城主は北条氏尭だ。

氏尭は、北条氏康の六男にあたり、いまの小田原城主・北条氏直の叔父ということになる。

織田信長亡きのちの小諸城と箕輪城……この二つの城の現状を看ても、おのずから上州と信州の二国が、どのような状態にあるかが知れよう。

小諸は、徳川家康の手につかみとられた。

箕輪は、北条氏政・氏直の手中に帰した。

そして、小諸も箕輪も、上信二国にとっては要衝の地なのである。

砥石・上田と岩櫃・沼田をむすぶ真田昌幸の勢力も、この二つの城が、それぞれに異なる大勢力の下に押さえられていたのでは、

「おもうさま、身うごきもならぬ」

のである。

徳川家康は、武田家滅亡後の甲州を、素早く経略したが、上信二州へは、手がまわらなくなってきた。

信長の跡を襲い、天下を掌握しようとしている羽柴秀吉の決意は、だれの目にもあきらかとなった。

中央の政局は目まぐるしくうごきつつあった。

秀吉と伯仲の実力をもつ家康としては、おそらく、このまま、膝を折って、秀吉に屈服するわけにはゆくまい。

そこで、上信二国へ手がまわりかねる徳川家康の間隙を、北条父子がねらっている。
家康は北条父子を圧倒して、武田家の、
「大きな遺産」
を、引き継いだかたちになった。
すでに、甲州は家康のものとなったのである。
真田家の草の者の報告によると、小田原城下は、戦備を充実させるための、あわただしい気配が濃厚であるそうな。
北条方の動静は、むろん、徳川家康の耳へも入っている。
ために、家康は、
（いまのところは、真田昌幸をもって、北条父子の押さえにしておこう）
と、考えているらしい。
けれども、慎重な家康は、昌幸に対し、はっきりとした言質をあたえていない。
上田築城のことについても、昌幸の報告をうけている家康だが、
「黙認」
の、かたちをとっているのである。
「徳川も北条も、悪賢いやつどもよ」
と、昌幸は、どちらにせよ、二つの大勢力を利用し、家康と北条父子が自分を間にして牽制し合っているのに乗じ、

「ともあれ、上田の城を築いてしまわぬことには、われらのふところが浅くて戦することもならぬ」

と断じ、築城に踏み切ったのであった。

安中を出発した源二郎一行は、箕輪城からなるべく離れ、南へ迂回しつつ、やがて、赤城山と榛名山にはさまれた細長い盆地を、今度は北へ向かってすすみはじめる。

利根川は、この盆地をながれていた。

去年まで、滝川一益が入っていた厩橋（現・前橋市）の城も近い。

厩橋城も、また、いまは北条軍が入っているのだ。

「油断は、なりませぬ」

と、鞍掛八郎は、お徳にも輿を下りてもらった。

輿は、折りたたむようにして、馬の背へ乗せてある。

「急がずともよい」

源二郎が、八郎に命じた。

「心得まいた」

草の者二人が、絶えず先行した。

鞍掛八郎は、このあたりの地形に精通しているらしい。

たくみに一行をいざない、台地の下の木蔭やら、榛名の山麓の森の中をぬけて行く。

箕輪と厩橋両城にはさまれた地点をぬけて行くわけだが、向井佐平次は、どこをどのようにすすんでいるのか、すこしもわからなかった。

昨日、奇怪な山容の妙義山を、はじめて見たときには、その姿をたのしむ余裕もあったが、今日の榛名・赤城の山容を目には見ても、緊張のあまり、これという感懐もわいてはこない。

真田源二郎も馬から下りて、歩みをすすめながら、

「佐平次。これでお前は、上野の国の三名山を見たことになる。よかったな」

悠々たるものであった。

六

夜の闇が下りてから、源二郎一行は、ようやく、厩橋と箕輪の城を後にすることができた。

「もう、大丈夫でござります」

と、告げる鞍掛八郎の声も、あかるい。

お徳は、ふたたび馬上の輿に乗せられている。

「今夜は、野宿をするのか？」

「いえ、源二郎様。おまかせ下さいますよう。いま、しばらく御辛抱を……」

そのときは闇の中の右手から、利根の川音がきこえていたようだ。

「こちらへ……」

八郎にみちびかれ、一行は、道を右へとってすすむ。雑木林の中の細い道であった。

それから、どれほどかかったろう。
何度も曲がり、木立やら畑の中やらをぬけて行くと、道が、しだいにのぼりはじめた。
「八郎。これは、榛名の山へ向かっているのか？」
「さようで……なれど、いますこしでござります」
そこへ、先行していた草の者が、音もなく駆けもどって来た。
「どうだ？」
と、八郎。
「沼田から、草の者が出て来てくれましたぞ」
「そうか、そうか」
前方の森の中に松明の火が見えた。
と、おもうと……。
たちまちに黒い影が立ち、駆け寄って来て、源二郎の馬前へ平伏をした。
鞍掛八郎が、五人のうちの頭らしい中年の男を、
「源二郎様。これは、沼田の御城につめております草の者にて、間野兵介でござります」
「おお、さようか。大儀であったな」
源二郎が大様に、ねぎらった。
「おそれいりたてまつる」
と、間野兵介が、

「安中をお発ちあそばされまいたときより、われら五人、ひそかに、おん後を……」
もしも、源二郎一行が危害に出合うときは、すぐさま駆けあらわれて、闘う手筈になっていたらしい。
これは、真田昌幸から急使を受けた沼田城代・矢沢薩摩守の配慮によるものであった。
同じ上州でも、北条方の統治している地帯へ、迎えの者を堂々とさし向けることは、はばかられる。そこで矢沢薩摩守は、草の者をさしむけ、蔭ながら源二郎一行を護衛させようとしたのだ。
間野兵介は、草の者の一人へ、
「すぐさま、沼田の御城代様へ、このことをお知らせ申せ」
と、命じた。
そして、残る三名と共に先へ立ち、一行を案内した。
森をぬけると、草原が左右にひろがってい、正面に屋敷の門が見えた。
このあたりの名主であり、地侍でもある吉岡源五兵衛の屋敷であった。
吉岡源五兵衛は、真田家が沼田へ進出して以来、安房守昌幸に忠誠を誓い、沼田平八郎が沼田城へ攻め寄せて来たときなどは、
「われらをたすけ、ずいぶんと、はたらいてくれましてござります」
と、兵介がいった。
源二郎の前へあらわれた吉岡源五兵衛は白髪の老人で、六十をこえて見えるが、血色もよ

く、矍鑠としている。
「厄介をかける。かたじけない」
源二郎は、丁重に挨拶をした。
こういうときの源二郎は、いささかも高ぶったところがなく、それでいて、行く末は一城の主となるだけの威厳があって、
（たのもしい……）
と、向井佐平次は、うれしかった。
熱い粥に、酒。大きな地炉に燃える火。もう、何もいうことはない。
さいわいに、お徳の躰に変調がなく、むしろ、日ごとに元気がよくなるようで、あたたかい粥を何度も替えては食べる。
「よう、食べなさる」
源二郎が、あきれ顔にいうと、
「いえ……お腹の子が、食べるのでございます」
「ほう……そうしたものか……」
「はい」
「ともあれ、無事に、ここまで来て何より。明日は名胡桃へ到着します。もう、大丈夫だ」
「御苦労を、おかけ申しました」
「なに、なに、わけもないこと」

ともかく、源二郎がお徳をいたわり、はげます様子は、佐平次から見ても、(徒事ではない……)のである。

お徳が、寝間へ引き取ったのち、佐平次が鞍掛八郎などと共に、源二郎の前から引き下がろうとするのへ、

「佐平次は、おれと共にねむれ」

「は……」

「かまわぬ。まいれ」

別の寝間へ、源二郎は佐平次と入った。

臥床に入ると、佐平次は、たちまち眠りへ落ちこみそうになった。

「おい、これ……」

「あ……」

「ねむいのか?」

「はあ……」

「むりもない。さぞ、疲れたろう」

「いえ……あの、何か、うけたまわることが?」

「いや、さしたることではない」

「お申しつけ下さい」

「いや、用事ではない。ただ……ただ、お前に……」
「私に？」
「佐平次は、いつまでも、おれとはなれぬか？」
「何度も、申しあげましたとおりでございます」
「うむ……となれば、一心同体だ。何かあったときに、お前が知っていてくれぬと困ることもある。お前は我が身を立てることをのぞまぬという。そして、どこまでも、おれの側に引きそうていてくれるという。その決心に変わりはないか？」
「ございませぬ。そのほうが気も楽々といたしますゆえ……これは、私の我儘でございます」
「お前ほどの男なれば、何十人もの家来を抱えて、父上に御奉公が出来よう。それを、のぞまぬか？」
「のぞみませぬ。同じことでございます」
「ふうむ……」
源二郎は、しばらく、だまっていた。
ややあって、若い主の声を待っていた佐平次へ、
「よし、よし。今夜はねむれ」
闇の中から、まるで老人のように、しわがれた源二郎の声がきこえた。
おもわず佐平次は、半身を起こした。

源二郎の声だとは、どうしても、おもえなかったからである。つくり声をして、
（おれを弄うておいでなさるのか……？）
と、感じた。
ねむり燈台の微かな灯影に、源二郎の目を閉じた横顔が浮かんでいる。
「ねむれ、佐平次」
目を閉じたまま、源二郎がいった。
その声も、まるで病魔と闘う老人の苦闘のうめきのようであった。
「はい」
と、こたえ、臥床に身を横たえ、
（源二郎様とは、いったい、どのようなお人なのか……？）
草の者のお江に変幻をおぼえたときよりも、佐平次の困惑は烈しかった。
十七歳の若者……というよりは、源二郎が、まだ少年の殻からぬけ出しきれぬ年齢であることを、二十歳になった佐平次は、よくわきまえている。事実、そうした無邪気な源二郎に接することが多い。
また、源二郎の機智に富んだ言動や、大人もおよばぬ神経のはたらきに驚嘆し、瞠目したことは、これまで数えきれなかったが……。
今夜のように、苦悩の表情を、顔にも声にも露呈させている源二郎信繁を見るのは、はじめてであった。

（なぜだ……？　どうしてなのか？）

おもいながらも向井佐平次は、抵抗しがたい疲労にさそわれ、深い眠りに落ちていったのである。

七

翌朝。

真田源二郎は、快活そのものであった。

みずから、お徳の手をとって、馬上の輿へ乗せてやり、

「今日いちにちの辛抱でござる」

と、はげました。

一行は、榛名山の東麓を北へすすんだ。

また、間野兵介によると、沼田からも人数が出て、源二郎たちが名胡桃へ到着するまで、

「蔭ながら、おまもりいたす手筈になっております」

とのことだ。

しかし、輿の中にお徳がいることを知っているのは、城代・矢沢薩摩守と草の者だけらしい。

その他の沼田の家来たちは、

「源二郎様が、おしのびで名胡桃へ向かわれる……」

と、おもっているのであろう。

朝の日がのぼるころ、早くも一行は、利根川と吾妻川の合流地点へさしかかった。

ここまで来れば、岩櫃から沼田へ何度も往復したことがある源二郎信繁にも、なじみのふかい景観となった。

榛名山と小野子山にはさまれた山道を、吾妻川に沿って西へのぼりつめて行けば約十四里にして岩櫃城へ達するのである。

この日の一行は、行く手に何の不安もない。

真田の領内へ入ったのである。

利根川を見下ろす山沿いの道は平坦であった。

川の向こうは赤城の麓で、その山裾が北へ落ちこむところ、片品川をへだてた台地に、沼田城は在った。

沼田城から出た草の者は、間野兵介のみが一行に引きそい、他の三名は前後をかためているらしい。

昼すぎに、前方右手に盆地がひらけてきた。

三方を山々にかこまれた沼田盆地である。

「なるほど、赤城の山は、ひろくて、大きゅうございますなあ……」

向井佐平次も今日は、こころゆくまで、赤城山の威容に見とれた。

「いつの日か、お前も、もよと共に、あの山をながめて暮らすことになろう」

またしても源二郎が、予言めいたことをいい出した。
佐平次が、ふりむいた源二郎を強い視線で見返すと、
「ふっふふ……お前たちにも、そのときは五人ほども、子が生まれていよう」
顔は笑っていたが、源二郎の両眼は笑っていない。眼だけが硬い光をたたえていた。
（おもわせぶりなことばかり、申される……）
佐平次は、不快になってきて、源二郎から目を逸らした。
「見よ。佐平次。あれが、沼田城だ」
源二郎が鞭をあげて、前方を指した。
城は、盆地南面の丘陵の上に築かれていた。
北に薄根川、南に片品川。そして西には大利根のながれを見下ろす台地へ、佐平次の目にも、
（なるほど、これは……）
と、うなずかせるほどの威容を見せている沼田城であった。
三方がひらけているだけに、一層、城構えの見事さがわかる。砥石城のように細長い山の諸方へ曲輪が散開しており、山そのものが城であるのとちがい、城の全容がはっきりとのぞまれる。
真田昌幸が、この城を必死に手ばなすまいとする情熱は、佐平次の胸にも強烈につたわってきた。

織田信長が死んでのち、北条軍は厩橋の滝川一益を追いはらい、猛然と沼田へ攻めかけて来たものだ。

矢沢薩摩守頼綱が、岩櫃にいた昌幸に代わって、指揮をとり、これを迎撃した。

昌幸は、叔父にあたる矢沢頼綱に絶対の信頼をかけていて、

「薩摩守がすることは、おれと同じことだ。あの叔父ごが負くるなら、おれが沼田にいたとて負くることになるわ」

岩櫃から援兵を送りはしたが、平然と、沼田の勝利を信じて、うたがわなかったという。

果たして、北条軍は沼田を攻め切れず、厩橋へしりぞいた。

以来、沼田と厩橋は、

「にらみ合い……」

の、かたちをつづけている。

なればこそ、源二郎一行が厩橋を通過するについて、草の者たちの活動を必要としたのだ。

「去年、北条勢が沼田へ攻めて来たときは、矢沢の大叔父が、みずから、小焼松を揮って戦われ、敵の首を十五も取られたそうな」

馬にゆられつつ、源二郎が両眼を輝かせ、誇らしげにいう。

「こだいまつ、と、申されますのは？」

「うん。佐平次には、まだ、はなしていなかったな」

「はい」

〔小焼松〕とは、矢沢薩摩守の愛槍の〔号〕である。
この槍の穂先が、松明のように光って見えるので、薩摩守頼綱はこの号をつけた。
去年の、ちょうどいまごろであったが……。
北条軍は、北条氏邦が指揮する三千五百をもって沼田へ攻めかけて来た。
このとき、矢沢頼綱は、わずか五百の兵をひきい、沼須ヶ原へ打って出て、敵将・猪俣能登守が指揮する千五百の軍勢と激突した。
ときに、薩摩守頼綱は五十二歳であったが、
「さんざんに敵を打ち破り、真田勢は、敵の首を合わせて三百も打ち取った……」
といわれるほどの戦果をあげ、颯爽と沼田城内へ引きあげたという。
「さすがは、大叔父じゃ」
源二郎は大よろこびであった。
源二郎も、兄・源三郎も、この大叔父の手で刀槍のつかい方を教えられ、馬術の指導もうけた。
それだけに源二郎は、老いた大叔父の武勇が愉快でもあり、誇らしくもあったのだ。
沼田城が後方へ遠ざかるにつれて、利根の川原が、ひろびろと前面に展開してきた。
「間もなく、名胡桃でございます」
と、鞍掛八郎がいった。
沼田へは何度も来ている源二郎だが、名胡桃の城を見るのは、はじめてである。城主・鈴

木主水の顔も、まだ知っていなかった。

そのとき、先行していた草の者二人が駆けもどり、

「名胡桃の城より、お迎えの人数が出ておりまする」

と、告げた。

鈴木主水の名代として、家臣・師田頼母が二十騎を引きつれ、山腹の道を整然と近づいて来る。

源二郎が、お徳の輿へ馬を寄せ、

「間もなくでござる」

声をかけて、先頭へ出た。

師田頼母は、五十前後の偉丈夫で、源二郎を見るや、すぐさま馬を下りて、

「あるじの名代にて、お迎えにまかり出ました」

「大儀でござる」

頼母は、お徳護送の事情をある程度、わきまえているらしい。鈴木主水から意をふくめられていると見え、心得顔に一行の前後をまもらせ、案内に立った。

利根川に沿った道と別れ、ゆるやかに傾斜している山腹を、道はうねり曲がってつづく。

この道が平坦に均されていて、道幅もひろいのは、絶えず手入れがおこなわれているからだ。

しばらく行くと、前方の高処に物見の櫓があらわれ、柵をまわした木戸や番所も見えた。

師田頼母は、番所での休息をすすめたが、

「いや、このまま……」
源二郎は辞退をした。
番所を通過すると、小さな盆地が目の前にひらけてきた。
侍屋敷や民家の屋根が遠くに見え、左方に、名胡桃の土塁や、櫓がのぞまれた。
こんもりとした杜に包まれた小さな城である。
「鈴木主水殿には、たしか、お子が一人、おわしたはずだが……」
はなしかける源二郎へ、師田頼母が、
「はい。小太郎と申されます」
「ほう。可愛い名でござるな。まだ、幼いとか……」
「ようやく、十歳になられまいて……」
鈴木主水は二人の男子と一人の女子を病死させてしまい、幼い男子が一人だけ残った、と、耳にしたことがある源二郎であった。

八

上越線の、群馬県・沼田駅の一つ先に〔後閑〕という駅がある。
むかしは山間の小駅で、ここから三国街道を七里。湯宿・猿ヶ京などの鄙びた山の湯を経て、三国峠の谷底にある法師の湯まで、バスが通じていた。そのころの法師の湯は、ただ一軒の宿に電気もひけぬほどの山奥で、春先になると、丸太造りの大きな浴槽の向こうから、

「あれまあ、これ、きれいな蛇だねえ」

などという宿の女中たちの声が、のんびりときこえてきたものだ。

春になると穴から這い出して来て、浴舎の梁に巻きついている青い蛇が、湯気にあたって浴槽の中へ落ちてくるのである。私も透明な温泉の中を泳ぐ蛇を何度か見た。

青葉のころに行くと、躰中が真っ青に染まってしまいそうな深い深い谷底であった。

夜ふけの炉端で、宿の主人が餅を焼いてくれながら、

「この上の三国峠を越えて、越後の国から、上杉謙信公が関東へ出陣なされたのです」

などと、少年の私に、はなしてきかせてくれた。

そうしたときの、頭が痛くなるほどの静寂の中で、女中たちが打ってまわる火の番の拍子木の音が廊下をわたって行った。

いまは、もう、都会の子から見れば、おそろしいほどに神秘的だった山奥の湯の宿の、深沈たるおもむきは消し飛んでしまった。近くに人造湖ができてからは、沿道に大きな観光旅館がたちならび、後閑から三国峠を越えて越後へ通ずる舗装道路が完成すると、観光シーズンには観光バスが列をなして往来するようになった。

上杉謙信の軍団が、この三国街道を通って、たびたび関東へあらわれたのは、やはり、沼田城を我が手におさめてからのことであったろう。街道の途中には、上杉方の基地になっていた城址もある。

そのころの名胡桃城は、いうまでもなく、上杉方の属城であった。

ところで……。

鈴木主水の〔名胡桃城〕は、現・後閑駅に近い月夜野町の嘴状に突き出している崖上へ築かれていた。

真田源二郎一行が城へ近づきつつある小盆地は、この崖の上ということになる。

いまも、畑の中に、大手門があったとおもわれる場所や、城の外郭の〔外曲輪〕や〔北曲輪〕が、畑と化していながらも濠の跡をとどめ、さらに、三の丸・二の丸・本丸と分け入って行くと、往時を偲ばせる深い濠の跡が歴然としている。

本丸は小さな郭で、その先に、堀切りをへだてて〔物見の郭〕がある。

ここに立つと、東南から北西にかけて利根川がながれ、川の対岸の左手に後閑の駅が遠くのぞまれる。列車が行く姿を追って沼田の方をながめると、沼田城は山に隠れ、もはや見えぬ。

源二郎一行は、この山の道を通って、名胡桃城へ到着したのであった。

城主・鈴木主水の居館は、城内・二の丸にあった。

低い石垣を組み、土塀をめぐらせた居館は、がっしりとした造りであるが、まことに質素なものだし、

（砥石の御館のほうが、ずいぶんと立派だ）

佐平次は、そうおもった。

そのかわり、城を幾重にも囲む土居や、塗塀などは堅固をきわめている。砥石や岩櫃のような山城ではないので、小さくとも、いざ敵が攻めかけて来たときの備えには、（よほどに、念を入れてある……）

と、佐平次にも看てとれた。

源二郎とお徳を迎えた鈴木主水は、このとき四十二歳で、妻の栄子は二歳年長だそうな。栄子は〔二の丸〕の居館の北側にある〔北曲輪〕の館に住み暮らしており、お徳もそこで、これからの日々を送ることになるらしい。

源二郎と初対面のあいさつがすむや、鈴木主水が、

「ほう……」

まじまじと源二郎をながめ、

「安房守様の若きころを見るおもいがいたします」

といった。

「さほどに、父の顔と似ておりますか？」

「はい」

「似てはおらぬはずだが……」

「いや、似ておわす。声も、そのままでござる」

主水も、どちらかといえば小柄であるが、みごとな筋肉によろわれた体軀は巌のようにたくましい。

源二郎は初対面だが、兄・源三郎信幸は、たしか沼田と名胡桃で、二度ほど鈴木主水に会っており、

「さよう……鈴木主水という人は、地に根を生やしたように歩む人よ」

と、源二郎に語ったことがある。

彫りのふかい顔だちで、笑うと右の頬に靨が生まれた。声音は低く物静かでありながら、一語一語にちからがこもっている。

源二郎は、また、兄の言葉をおもい出した。

「いかにも父上がたのみになさるお人だ。なれど、もしも父上の代わりに岩櫃や砥石の主となったとすれば、いささか、危うい。何故というに、大きな城をもち、大きな敵を相手にするときは、戦う前に敵の餌食となりそうな気がする。父上の下にいてこその鈴木主水だ。それをまた、あの仁は、よう心得ている」

と、源三郎はいった。

そのときに、また、

「主水殿は、何人も子をうしなわれたが、ただ一人残った男の子が、それは可愛い。名胡桃へおもむいた折に見たが……さよう、白い兎の子のように愛らしい子よ」

と、主水の子の小太郎についてふれたが、その後も、名胡桃城から岩櫃へ使者が来るたびに、源三郎は、

「白毫子は、元気にしておられるか？」

と、問うのを常とした。

〔白毫子〕とは白うさぎのことで、一城の主の跡つぎである男子の愛称としては、あまりに優美温和にすぎる。

「うさぎの子では、戦にも出られませぬな、兄上」

「さようさ。源二郎。鈴木主水殿は、先に子たちを病に失うたが、あの白毫子も何やら弱々しげに見ゆる。それで、おれも案じているのだ」

父・昌幸が、たのみにしている城将だけに、鈴木主水の跡をつぐべき男子の健康を、源三郎は、いつも気にかけていたということになる。

主水の妻が、小太郎をつれて、主殿の広間にあらわれたとき、

（なるほど……）

源二郎は、あやうく膝を打ちそうになった。

（まさに、白毫子……）

と、いってよい。

小太郎は、当年十歳だというが、七歳ほどにしかおもえぬ小さくて細い躰つきで、そのかわり、母・栄子そのままの美しく白い顔だちをしている。

主水の妻も、どちらかといえば病弱のように看えた。

これは、のちにわかったことだが、栄子は、主水の妻となってより、寝込むようなことは一度もなかったそうな。だからといって健康な躰のもちぬしではない。つまり、気を張りつ

め、おのが肉体の脆弱を懸命に克服してきたにちがいない。
子たちは、いずれも、栄子の体質を受けついでしまったのであろうか。
「小太郎忠重でございます」
少女のように、やさしげな声で、小太郎が源二郎へあいさつをした。
「おお、これが白毫子どのか……」
と、いいかけて、源二郎は、あわてて口を噤んだ。
事実、性質も温順で、武術や学問にはげむ様子もなく、馬にも乗れぬ小太郎を、家来たちは、
「当代様の跡は、とても、つげまい」
「まことにのう」
「この名胡桃の城も、当代様かぎりになるやも知れぬ」
ひそかに、ささやき合っていたのである。
一方、鈴木主水にしてみれば、
（小太郎を失っては、一大事……）
だというおもいがある。
それならば、側室に子を生ませればよいようなものだが、主水は、栄子を妻にしてより、他の女には目もくれぬ。
「われらの父上とは、だいぶんにちがうお人だ」

と、源三郎が苦笑まじりに弟へ語ったものだ。
それだけに主水は、うかつに馬へ乗せたり、槍を持たせたりして、小太郎に万一のことがあってはと、危惧するのだ。
「なに、急かずともよい。一城の主は、何も刀槍をとって戦うことはないのじゃ」
内心はともかく、
「当代様が、あのように甘やかしてはいかぬ」
という重臣たちの声を耳にしても、主水は平然として、我が子を溺愛しつづけてきた。
ここ数年は寝込まぬようだが、幼年のころの小太郎は、やはり病弱であったらしい。
この小太郎が、真田源二郎や向井佐平次がこの世を去ってのち、数十年を生き残り、八十五歳の長寿をたもつことになろうとは、このとき、だれが予想し得たろう。
この夜。
寝所へ引き取ってから、源二郎が佐平次に、
「あの白うさぎを、見たか」
「はい」
「こころもとないな」
「いかにも、そのようにおもえまいた」
「なれど、可愛い」
「はい」

「まるで、玩具のような子よ」
「これは、また……」
「なれど、主水殿は、まさに、たのもしき仁だ」
「はい」
「なれど、気の毒よ」
「は……？」
「白うさぎを飼うてみたところで、はじまるまい」
「そのように申されては……」
ずけずけという源二郎に、佐平次はあきれて、
「お声が、高うございます」
「お……わかった」
「いつ、お発ちになられますか？」
「白うさぎに遊びたわむれているわけにもゆくまいが……お徳どのも、おれがすぐに去っては心細かろう。二日、三日ほどは、この城にとどまっていようか」
「それが、ようございます」
「なれど……」
「は？」
「可愛いな。あの小太郎。兄上が、彼奴を可愛くおもう気もちがわかってきた。おとなしゅ

うて、それに人なつかしげなところもあり、ふしぎに物怖じをせぬ」
「さようでござりますか……」
「なれど、あれでは、やはり、物の役にたたぬなあ……」

九

源二郎は、三夜を名胡桃城に泊した。
この間、鞍掛八郎らは沼田と岩櫃城へ、一行が無事に到着したことを告げ、すぐに引き返して来た。
北の曲輪にある主水夫人・栄子の館へ引きとられたお徳には、二名の侍女がつき、栄子も細やかに気をくばってくれる。
四人の子を生み、そのうちの三人まで病死させてしまった栄子だけに、
「腹の中の子には、いまが、まことに、たいせつのとき……」
と、お徳が口にするものまで、気をくばってくれる。
「落ちつけそうですか。いかが？」
源二郎が尋くと、
「ただ、もったいのうございます」
お徳は、たちまちに泪ぐんだ。
「それならばよい。父上も安心をなされよう」

「御屋形さまへ、くれぐれも、よしなに……」
「心得ている。では、お徳どの。私は明朝、名胡桃を発ってよろしいか？」
「重ね重ね、ごめんどうばかり、おかけいたしまして……」
「なんの。私も実は、これほどに名胡桃の居心地がよいとはおもわなんだ。いずれも親切な人ばかりだし、それも上辺だけのものではないことが、お徳どのにもおわかりとおもう」
「はい」
「月に一度、とはまいるまいが……さよう、三月に一度は、鞍掛八郎を、この名胡桃の城へさしむけますゆえ、その折に、何なりと申しきけられたい」
「ま……そのような、めんどうをおかけせずとも……」
「いや、これは私が好んですることだ。父上には申しにくいことでも、八郎を通じて、この源二郎へ遠慮なく申されるがよい」
「かたじけのうございます」
真田の庄に近い、あの木立にかこまれた屋敷の寝間で、真田昌幸とたわむれていたときのお徳とは別人のように、いまは弱々しく、しおらしいのである。
もとは、沼田城の鉄砲足軽・岡内喜六の女房で、戦がないときは夫と共に畑仕事もしたし、牛や馬のあつかいにもなれているほどのお徳である。真田昌幸は、若くはないが、この女の大らかな野性を愛し、
「どうにも、お徳とは、はなれがたい……」

というので、岩櫃から砥石へ移るときも、ひそかに沼田からよび寄せたのであった。
夜になって、主殿の広間で、源二郎のために送別の宴がおこなわれた。
お徳も、その席へ出ようとしたが、主水夫人は、
「そのように、気づかいをせぬほうがよい」
そういって、北の曲輪へとどめておいた。
そのことを栄子の口からきいて、源二郎は、
（これならば、大丈夫……）
いよいよ、心強くおもったのである。
栄子は、岩櫃城と同じ吾妻郡の中山城主・中山安芸守の女に生まれ、鈴木主水に嫁いだのだが、実家の中山城は、いま、北条家に奪い取られたかたちになっている。
中山城は吾妻郡の東端にあって、岩櫃からは遠く、沼田城に近い。このように、真田領へも北条方の楔が一つ二つは打ちこまれているのだ。
栄子の弟で、中山城にいた九兵衛実光も、いまは、名胡桃城へ身を寄せていた。
源二郎へ、あいさつにあらわれた中山九兵衛は、まだ四十前だというが、五十をこえて見えるし、顔貌は曇っていて、生気が感じられぬ。
鈴木主水は、居城をうしなった、この義弟にあわれみをかけているようであった。
十七歳の源二郎が、大人ぶった態度で、義兄の主水と語り合うさまを、中山九兵衛は軽んじた眼ざしをちらちらとむけながら、無言で酒をのみつづけている。

あきらかに、九兵衛は、
（小童が、よい気なものじゃ）
と、おもっているらしい。
その胸底のおもいが、すぐ、眼の色にあらわれてしまう。
（肚の浅い男だな……）
と、源二郎は、九兵衛を看ていたが、そのおもいを気振りにも見せぬのである。
向井佐平次は、身分が低いので宴席へ出てはいない。
先に寝所へ行き、源二郎の寝仕度をととのえていると、やがて、
「ああ……酔うた……」
上機嫌の源二郎が、あらわれた。
二年ほど前から兄と共に〔盗み酒〕の味をおぼえている源二郎だけに、わるびれもせず、盃を重ねたものだから、
「これは、お強い」
と、鈴木主水もおどろいたらしい。
「明日の朝は早うございます。すぐに、おやすみを……」
「いや。佐平次。その前に、はなすことがある」
「明日にても、ようございましょう」
「いや、今夜がよい。明日になると、また気が変わるやもしれぬ」

「はあ……？」
「その前に、水をもってきてくれ」
いったい、あらたまって、源二郎は何をはなそうというのか……。
気をもたせるようなことをいい出しては、あいまいに言葉をにごしてしまうことが多い源二郎だけに、佐平次は、さして気にもとめず、水差しに水をくんで寝所へもどって行った。
すると、源二郎が緊迫した表情で端座しているではないか。
一瞬、佐平次は、いつものときとちがう感じがした。
うまそうに水をのんでから、
「さて、佐平次。お前が、おれと生死を共にしてくれようという心底、いよいよ、はきとのみこめた」
「いまさら、何を申されます」
「なれば佐平次。お前にも、よくよく、のみこんでおいてもらいたいことがある。このようなことを、声をひそめて大仰に密事めかして打ちあけるのも面映ゆいが……やはり、お前の胸に、しまっておいてもらわねばなるまい」
源二郎の声には、何かしみじみとしたものがこもっている。佐平次は、かたちをあらためずにはいられなかった。
「それは、おれの出生についてだが……」
と、源二郎が語りはじめた。

十

「兄上と、おれとは、腹ちがいの兄弟なのだ」
源二郎がそういったとき、おどろきはしたが、佐平次がうけた衝撃は、それほど強烈なものではなかったといってよい。
それは、無意識のうちに、これまでの源二郎の言動から、
（もしや……？）
と、感じていたからであろう。
いや、意識の底で、その予感がねむっていたというほうが適切かも知れぬ。
しかし、そのつぎに、源二郎信繁（のぶしげ）がいい出た言葉は佐平次にとって、
（おもいもおよばぬこと……）
であった。
「兄上とおれとは、同じ年に生まれたのだ」
と、源二郎はいったのである。
「わかるか？」
「は……？」
「いちいち、くわしいことは申さぬ。なれど、このことを、おぼえておいてくれ」
「はあ……」

「おれが生みの母はな、身分の卑しい女だったそうな。これは、おれが申すのではない。他の人の口が申すのだ」

佐平次は、瞠目したまま、声を失った。

「このことを、真田家の中で知るものは、すくない。すくないが、ひそかに人の口にはのぼっていよう」

「……」

「おれの生母は、おれが生まれる一年前に、男子を生んでいる」

「あ……」

「なれど、この兄が生まれ落ちたとき、もはや息は通うておらなんだそうな。このことは、父上から聞いた。そして母は、おれを生んで間もなく、亡くなられた。美しいが、病弱のひとであったらしい。おれが生まれたのは、あの屋敷においてだ」

「あの屋敷……？」

「これまで、お徳殿が住み暮らしていた屋敷よ」

「はあ……」

源二郎の口調は、すこしも深刻なものではない。あるがままをあるがままに、淡々として語っているのだ。

だが、さすがに向井佐平次の五体は緊張に強張り、喉が痛むように乾いてきた。

源二郎が兄・源三郎と同年だとすると、永禄九年の生まれで、十八歳ということになる。

父の真田昌幸は、当時、武田信玄の寵愛をうけ、二人の兄が健在だったので、信玄が甲斐の名家である〔武藤〕の姓をあたえて一家を立てさせ、名も武藤喜兵衛とあらため、前年の正月に正室・山手殿を迎えたばかりであった。

昌幸は、いまの源三郎信幸と同年の十八歳で結婚し、その翌年に、男子の出生を見た。

源二郎の言葉が、真ならば同時に、それぞれにちがう女の腹から二人の男子が生まれたことになるし、その前年には、ひそかに一人の男子が出生し、死亡しているのだ。

源二郎は、わが生母を、

「身分の卑しい女……」

と、いった。

となれば、妾腹の子である。

それが、源三郎と共に、正室・山手殿の子とされている。

こうしたことは、当時の武士の家にあって、異常なことではない。異常なことではないのだから、これを秘密にすることもない。

真田昌幸の跡つぎは、正室が生んだ源三郎と決まっているのだし、そうなれば弟の源二郎が妾腹の子であったとしても、恥じることもなければ怪しいこともない。

「ともあれ……」

と、源二郎は微笑をうかべ、

「今夜は、これだけのことを、お前に申しておく」

「は……」

「いま、ひとつ。お前が心得ておいてもらいたいのは、真田家の跡取りは、岩櫃の兄上であるということだ。おれは、兄上を、こころから敬うている。あのようなお人は、めったに、この世に生まれ出るものではない。はきと申すなれば、父上など、足もとにも寄れぬお人だ」

源二郎も、ずいぶんと、おもいきったことを口にのぼせるではないか。

佐平次は、呆気にとられた。

真田昌幸が、

（目に入れても痛まぬ……）

ほどに愛している源二郎が、このように自分を評しているのを聞いたなら、

（安房守様は、どのようなお顔になられようか……）

と、佐平次はおもった。

また、このように何の斟酌もなく、自分ひとりを相手に、物をいってくれた源二郎の信頼に、佐平次は、

（おれはおれなりに、何としてもおこたえしよう）

と、決意したのである。

「真田家は、兄上あってこそ、行く末もめでたい。おれは兄上をたすけ、いつにても死ぬるつもりだ。このことも忘れまいぞ、佐平次」

「はい」

源二郎にしては、当然のことを、くどいほどに念を押す。そこには何か、（それだけの理由がある……）に、ちがいない。

砥石にいても、真田安房守昌幸が、源二郎を溺愛していることは、だれの目にもあきらかであった。

それにくらべると、岩櫃の城をまもる長男・源三郎信幸へ対しての昌幸は、冷たいといわぬまでも、ほとんど関心をしめさぬ。源三郎のことを口にのぼせるときは、憎々しげにとはいえぬが、たしかに余所余所しい。

叱りつけはしても、ほめることは、ほとんどない。

渋面をつくって向かい合うことはあっても、源三郎に笑いかけることがない。

そして源二郎信繁へ対するときの真田昌幸の反応は、すべて、この反対になるのであった。

「いつか、お前には、このことを申しつたえておきたいとおもっていたのだが……今夜、胸の内にあるものを吐いて、よい気もちだ」

源二郎は、うれしげにいったが、急に顔色をあらため、

「これより先、もしも、おれが、いま申したことを忘れたるような振る舞いがあるときは、かならず、今夜のことを、お前がおれにおもい出させてくれなくてはならぬぞ。よいか」

「はい」

「それが、おれへの忠義とおもうてくれ、たのむ」
「は……」
おもわず、佐平次は両手をつかえていた。
そして、
（これは、容易ならぬこと……）
だと、直感をした。

十一

この夜……。
源二郎と同じ部屋で、臥床へ入った佐平次であったが、目が冴えて、ねむれるものではなかった。
源二郎は、何やら、安心をしきったような寝息をすこやかにたてている。
（まことなのか……？）
平常が平常だけに、
（源二郎様は、おれを弄うておられるのではないか……？）
そうおもう一方では、これまで佐平次の胸の底にわだかまっていた不審が、
（なるほど……）
一度に、はれたおもいがしないでもない。

当時の、くわしい事情を、佐平次は知るべくもないが、源二郎を生んだ女性は、真田昌幸と山手殿の結婚によって甲斐の古府中城下にいられなくなり、真田の庄へ送りとどけられ、（あの屋敷にかくまわれて、源二郎様を生んだ……）のであろう。

それより先に、死産したという男子は、おそらく、古府中において、ひそかにほうむられたに相違ない。

真田昌幸にとって、山手殿との結婚は、武田信玄の主命によるものであったという。

昌幸にしてみれば、山手殿よりも、源二郎の生母のほうに濃やかな男の愛をかたむけていたのではあるまいか……。

佐平次は、そのようにおもえてならぬ。

なればこそ、昌幸は、正室が生んだ源三郎よりも、つい、源二郎のほうへ父性の愛をかたむけてしまうことになるのではないか……。

同じ年に、どちらが先に生まれたものか、それは知らぬが、気性の強い山手殿は、わが腹をいためた源三郎信幸を真田家の世嗣ぎにのぞみ、昌幸も、これを承知せざるを得なかった。

そして、死産した男子が昌幸にとっては、初の男子であり、そのつぎに源二郎が生まれ、源三郎が出生したのではないか、とさえおもわれる。

だから、弟のほうが源二郎で、兄が源三郎なのか……。

そのようにも、佐平次には考えられた。

昌幸は、夫人に対し、愛する源二郎の名をもって、
（おれが世嗣ぎにしたいのは、こちらのほうなのだぞ）
と、示唆しているのやも知れぬ。
また、いま一つ、佐平次は気にかかることがあった。
まだ、顔を見たことはないが、源二郎が折にふれて、
「岩櫃の姉上……」
などと、いい出すことがある。
すると、岩櫃城には、源三郎、源二郎兄弟の姉がいることになる。
「姉上は、おれより二歳上で……」
と、いうのを耳にしたこともある。
すると、兄弟の姉は、永禄七年の生まれだ。
真田昌幸が、山手殿と結婚をする前の、十八歳のときの子になる。
すると、この女子も、源二郎の生母の腹から生まれたものか……。
そのことについて、源二郎は、まったく佐平次に語っていない。
では、別の女性が生んだものか……。
そうなると、真田昌幸は、十六、七歳のころから、まわりの女たちへ手をつけていたことになる。
（真田安房守様とは、どうも、大変な御方だ）

二十歳にもなって、まだお江の肌身しか知らぬ向井佐平次から見ると、これは、おどろくべきことなのである。

いずれにせよ、一介の長柄足軽の子に生まれた佐平次とちがい、一国一城の武将ともなれば、佐平次などの想像をこえた親族の成り立ちがあることを、

（おれは知った……）

のであった。

昌幸夫人の山手殿が、どのような女性かは、まだ佐平次は知っていない。

上田の城が成ったとき、山手殿も岩櫃から引き移って来るという。

そうなると、源三郎信幸は、どうするのであろう。

源二郎は、いつか、

「兄上も、母上と共に上田へ移られよう」

と、洩らしたことがある。

そのとき、源二郎の双眸に、何か沈痛の色が在ったのを、佐平次はおぼえている。

（御屋形様は、いまも源二郎様を、折あらば世嗣ぎになさろうと、お考えなのだろうか……？）

どうも、そうらしい。

だからこそ、源二郎は、側につきそう自分へ、あのような重い密事を打ちあけたのであろう。

（これから先、何が起こるか知れたものではない）
佐平次は興奮をしてきた。
「おい……これ……」
突然、源二郎の声が聞こえた。
「あ……お目ざめで……」
「お前が、しきりに寝返りをしたり、妙なうなり声を発するものだから、目がさめてしもうたぞ」
「あ……」
「どうした？」
「いえ、別に……」
ねむり燈台の暗い灯影に、彼方の源二郎の横顔が見える。
どのような表情をうかべているのか、定かではなかったが、声音は屈託もない。
「佐平次……」
「はい？」
「何も、案ずることはない」
「はあ……」
「お前に、あのようなことを打ちあけずとも、よかったやも知れぬ。なれど、あのことは、家中の中にも知っているものが多いと、おれはおもう。知ってはいても口外はせぬだけのこ

とだ」
「はい」
「なれば、お前には、おれの口からはきとつたえておきたかったのだ。兄上も、おれも、このことについては気にもならぬが……何か、真田家に、揉め事でも起こったとき、お前が心得ていてもらわぬと、急の場の役に立たぬゆえ、な」
「うけたまわって、ありがたく存じます」
「なあに……」
「お目をさまさせて申しわけもございませぬ」
「たとえば、こたびのこともそうだ」
「は……？」
「お徳殿のこと、よ。おれが従弟の角兵衛が、ただ一人で岩櫃を脱け出し、父上の子を身ごもったお徳殿を、ひそかに殺害しようとしたのではないか。な、わかるか……」
「は……」
「わけのわからぬ男や女もいて、余計なまねをしかねぬ。こうしたときに、お前が、おれや兄上の身の上のことを、いささかはわきまえていてもらうとよいとおもうたまでなのだ」
「はい」
「さ、ねむれ。明日は、早いぞ」

翌朝になって、名胡桃城を出立する時もせまってからだが、
「そうだ」
真田源二郎が、急に、おもいついたらしい。
「小太郎殿を、よんでいただきたい」
と、いい、すぐにあらわれた小太郎へ、
「岩櫃の城へ、これから共にまいらぬか、いかが？」
「まことでございますか？」
「まことだ。岩櫃の兄上が、よろこばれよう」
「うれしゅうございます」
白くて細い小太郎の面に、血の色がのぼった。
躰つきが小さく、たよりなげで、十歳の少年には到底見えぬ小太郎だが、言動ははきはきとしており、言葉づかいも、むしろ大人びているのだ。
「すぐに、父上へ申しあげて……」
「おお、そうなされ」
小太郎は、廊下を駆け去った。
「兄上に会うことが、よほど、うれしいと見えるな、佐平次」
「さようで……」
源三郎が、鈴木主水の、ただ一人の男子である小太郎を可愛くおもい、何かにつけて、こ

ころにかけ、京の都から取り寄せた玩具や、美しい加留多や、筆紙などを送りとどけてやったりするので、小太郎も源三郎を慕っている。

名胡桃から岩櫃へ立ち寄る源二郎一行を、鈴木主水は二十名の騎士に護らせることにした。

「おかまい下されるな」

「いや、そうはなりませぬ」

むろん、道を避けて行くのだが、途中には、北条方に接収された中山城がある。

そこで鈴木主水は、護衛の人数をつけてくれようというのだ。

それだけに、たいせつな息子を、気軽に岩櫃へ出してやることが、主水には不安だったらしい。

「ご案じ下されるな。かならず無事に、小太郎殿を送り返します」

源二郎が、主水を説きつけてやったので、

「それでは、おまかせいたそう」

ようやくに、主水はゆるしてくれた。

源二郎は、お徳を乗せて来た輿へ、小太郎を乗せようとしたが、そこはさすがに武将の子である。

「大丈夫でございます」

と、小太郎は、肉置きのうすい肩をそびやかし、馬にまたがった。

一行は、のちの三国街道を西へ二里ほどすすみ、須川川に沿って左手の山道を大道峠を越

え、さらに南下し、岩櫃城の北側へ出ることになった。これが、いまの名胡桃と岩櫃をむすぶ道であった。

大道峠には、小さな砦のようなものもあり、ここに岩櫃・名胡桃の両城から、合わせて五十人ほどの兵が詰めている。

城を出て行く源二郎に、お徳は城門の櫓の上から手をかかげ、打ち振った。

源二郎も、鞭をあげ、これにこたえつつ、遠ざかって行く。

この二人の様子を、向井佐平次は、昨日までとはまったくちがった目で見まもったのである。

戦雲

一

向井佐平次は、もよと、はじめて夫婦の契りを交わした夜のことを、
（無我夢中だったので……）
よく、おぼえていない。
年が明けて天正十二年（西暦一五八四年）になると、上田の城も、どうやら形をととのえ、
「まず、わしが引き移るぞ」
と、真田安房守昌幸が、上田城・本丸に完成した居館へ移り住んだ。
部分的な工事が完成するのは、
「今年一杯はかかろう」
とのことであった。
昌幸に従って、砥石からも家臣たちが引き移ったが、源二郎信繁は、まだ数カ月を砥石の館で暮らすことになった。
城内本丸に、源三郎・源二郎のための、別棟の居館が建てられつつあり、それが完成した

あかつきに、兄弟は上田城へ移ることになっている。
もっとも、真田昌幸は、
「源三郎は当分、岩櫃にいてもらわねばなるまい」
などと、例によって、この長男や妻の山手殿を疎むような口ぶりなのである。
昌幸は上田へ移る三日ほど前に、源二郎の口ぞえもあったので、わざわざ、佐平次ともよをよび、
「夫婦のかためをいたせ」
と、まことに簡略な盃事をさせてくれ、その席へも出てくれた。
新夫婦には時服一揃と、新婦には短刀一振があたえられ、さらに佐平次へ、
「源二郎に従うて戦陣へ出るとき、これを身につけよ」
昌幸は新しい具足を贈った。
足軽の武装ではない。ひとかどの武士が身につけるものである。
佐平次の身寄りは、だれ一人としていない。
もよの叔父にあたる横沢与七という草の者が、この席へまねかれ、
「御屋形様に、このようなおめぐみをうけて、お前は、何というしあわせものじゃ、亡くなった父も母も、さぞ、よろこんでいよう」
涕涙して熄まなかった。
横沢与七は、真田の草屋敷にいて、佐平次も何度か会っている。

五十前後の、がっしりとした躰つきの与七は、草の者の中でも、よく知られた男で、
「見たところは、変哲もないが、与七は若いころに、草の者としてずいぶんとはたらいたらしい。戦忍びとして戦陣に出たものだから、躰中に数え切れぬほどの傷痕が残っているぞ」
と、源二郎がいっていた。
佐平次には、あくまでも腰が低く、夫婦の盃事をした日に、横沢与七は両手をついて、深ぶかと佐平次の前へ頭をたれ、
「どうぞ、末長う、もよがことをおたのみ申しまする」
佐平次が狼狽するほどに、丁重なあいさつをした。
ときに向井佐平次は二十一歳。もよは十九歳である。
佐平次が、お江にたすけられ、信州・高遠城を脱出したときから、まる二年の歳月がすぎ去っていた。
二人が住み暮らす場所は、これまでの佐平次の小部屋ではなく、大台所に近い二間つづきの小屋があたえられた。
二年前に佐平次は、お江によって、いわゆる「ひとり前の男……」にされたわけだが、いざとなると、身を硬くし、緊張しきっているもよの躰を、どのようにあつかったらよいのかと、あわててしまい、
（女の躰というものは、みな、同じようなものとばかりおもうていたが……これは……）
ただもう、満身を汗にぬらすばかりであったが、そこは男と女のことだ。

たがいに若々しい裸身を抱き合い、唇を吸い合っているのだから、
（なるように、なった……）
ことはいうまでもない。
むしろ、事が終わり、新妻が安堵のためいきを吐いて、
「佐平次どの、うれしい……」
細い躰に似合わぬ豊満な乳房を、わが胸へ押しつけてきたとき、佐平次は強い感動をおぼえた。
もよの裸身は、木の実のようなにおいがした。
お江の成熟しきった、なまなましい体臭とは、
（まったく、ちがう）
のである。
強いていうならば、二年前のあのとき、織田の大軍に包囲されつくした高遠城で、死を覚悟しながら、萌え出ようとする草の芽をふくんだ土の香りを夜の闇の中に嗅いだときの……そのようなにおいであった。
「あのとき、死なずにいて、よかった……」
おぼえず、佐平次がつぶやくのを聞いたもよが、恍惚とした半眼の表情となり、
「あのとき……？」
「高遠の合戦のことよ」

「あ……」
「あのとき、討死をしていたら、こうして、もよと夫婦にはなれなんだものな」
「あい……お江どのの、おかげじゃとおもいます」
「うむ……」
「何を、考えているのです？」
「いや、別に……」
ふと脳裡へうかんだお江の面影を絶ち切って、佐平次は新婦の乳房へ顔を埋めた。
翌朝になって……。
源二郎の居室へ挨拶に出向くと、
「これ、佐平次。近う来い」
源二郎が手招いた。
「は……？」
「どうであった？」
「何がでございます？」
「昨夜のことよ」
「と、申されますのは？」
「おのれ、興ざめなことを申す。もよは、どうであったと尋いているのだ。どのようにいたした？　どのようにあつこうた？」

「はあ……」
「はじめての夜ゆえ、おれも案じていたのだぞ」
と、源二郎は勿体をつけていう。
顔を赤らめながら、佐平次が、
「大事、ございませぬ」
「ほう……落ちついているではないか」
「男と女なれば、だれも、いたさねばならぬことでございます。源二郎様も、そのことは御承知でございましょう」
何気なくいったのだが、源二郎が、おもいがけなくそわそわとして、
「うむ。それは、そうだが……」
このとき、佐平次は、
（まだ、源二郎様は女を知らぬのではないか……？）
と、直感をした。
あれほどに大人びた言動をするのだから、すでに、侍女の一人や二人に、
（お手を、つけられているにちがいない）
そうおもっていた佐平次だけに、これは意外であった。
源二郎の顔からくびすじのあたりへ、真っ赤に血の色がのぼっている。
「源二郎様……」

「う……」
と、顔をそむけて、
「去ね」
源二郎が手を振った。
佐平次は、笑いを噛みころしつつ、廊下へ出た。

二

信越線・上田駅に下車し、駅前の広場をぬけ、北方へのぼる坂道を十分も行くと、上田城の大手口へ達する。
坂道といっても、この大通りは現代の上田市のメーン・ストリートで、ここ十年ほどの間に、上田市は見ちがえるような繁華な都市となった。
真田昌幸築城のときからの、古い町すじである海野町・原町も、このあたりにある。
そのころ、現代の上田駅は、千曲川の川原であったろう。千曲川のながれは、もっと上田市の近くまでせまっていて、上田城下は断崖の上に在ったのだ。
さて……。
いまも〔大手口〕とよばれる地点は、ちょうど大通りの坂をのぼりきったあたりで、その左側（西側）は、もう上田城の〔三の丸〕であった。旧三の丸一帯は官庁や学校がならんでおり、なおも西へすすめば、旧二の丸へ達する。市民会館や博物館・運動場などが設けられ

た二の丸をすぎると、本丸の入り口になる。

高い石垣の両側に二重二階の、入母屋造りの櫓が見える。寛永のころに上田城主だった仙石忠政の改築による櫓だ。本丸の西端に残る西櫓も同様である。

本丸の城門は、すでにないが、そのあたりの北側の石垣に目立って大きな縦横三メートル余におよぶ大石が一つ、組みこまれている。これは真田昌幸が、みずから太郎山の石切り場からえらび、城の〔要石〕にしたものだそうな。

現在の本丸は一万一千四百九十四平方メートル（三千四百八十七坪）で、二の丸は八万三千九百八十五平方メートル（二万五千四百五十坪）となっているが、おそらく、昌幸が、はじめて築城したときも、同じスケールをもっていたにちがいない。

昌幸は取りあえず、本丸と二の丸を築き、砥石から引き移ったのであろう。

本丸の周囲は、幅三十メートルから四十メートルの深い濠が東・北・西の三方をめぐっており、南面は断崖となり、すぐ直下を千曲川がながれていたのである。

このあたりは〔尼ヶ淵〕とよばれていたので、上田城は一名〔尼ヶ淵城〕とも称した。

真田昌幸は、はじめ、上田城の大手を北面に設けた。

大手口が東面に変わったのは、三の丸の整備が終わった一年後のことであろう。

城の北面は千メートル余をへだてて、早くも太郎山の山裾に達する。上田築城のための木材や石の大半は、この海抜千百六十余メートルの太郎山から切り出された。西に虚空蔵山、東に東太郎山、北に大峰山の三支峰をもつ太郎山は、上田城下の北方に立ちはだかり、あた

たかく城下を抱きかかえている。この山峰あるために、上田は冬も暖かく、現代も、他国の人びとの、

「上田へ住みついたら、もう、他の土地へは住めなくなる」

という声を聞くことが、めずらしくない。

真田昌幸は、自領の諸方から、人びとを城下へまねき、町割りをしたが、甲斐の国から移住して来た者も少なくなかった。そうした人びとも、おそらく、この城下の、

「住みやすく、暮らしやすい」

ことを、すぐさま、さとったにちがいない。

このとき、真田安房守昌幸の所領は、信州・小県郡で三万八千石、上州・沼田領として二万七千石、合わせて六万五千石ほどだったといわれている。

徳川家康も、天正十二年の年が明けると、真田昌幸の所領を、はっきりとみとめてくれたし、上田築城についても正式の許可をあたえ、四隣の豪族たちへも、

「真田の築城を助けよ」

と、命じた。

昌幸の弟で、いまは徳川の臣となっている隠岐守信尹が、主人・家康と兄との間を懸命に取りもった功績も大きかった。

一時は、さまざまな事態に押しはさまれ、ただならぬ憂悶から、正室・山手殿へまで、

（めんどうな女じゃ。かくなれば、ひそかに殺害してしまおうか……？）

一時は、そうおもいつめたほどの真田昌幸であったが、

「やはり、おもいきって、上田築城へ踏み切ったことがよかった。おれの、これからの道が、ようやくにひらけた」

ちかごろは、何につけても上機嫌であった。

上田城は、山城ではない。

ひろびろとした台地に築かれた平城である。

これからの大名・武将の城は、

「押し寄せる敵を防ぎ、敵と戦うためばかりのものではない」

と、昌幸は、かねがね源二郎にもいっていた。

「敵が、わが居城まで押し詰めて来るようになれば、もはや如何ともしがたい」

というのが、故武田信玄の持論であって、信玄の古府中城は、城というよりも、むしろ居館であった。信玄の側近く仕えていた昌幸だけに、信玄の影響を早くからうけて、

「ひろい平地に城を構え、町割りをして、商工の業を盛んにしなくてはならぬ。それには何としても、自分は上田へ城を築かねばならぬ」

と、おもいきわめるに至った。

弓や槍だけで、

「戦が、できるものではない」

のである。

刀槍で、山の上の城を攻め落とすだけでは、これからの戦争の勝敗はつかぬ。現に、武田家が滅びたときも、高遠城の攻防は別として、総大将・武田勝頼は城にこもって戦うこともなく、敗北した。

近年は〔鉄砲〕という火器が、戦闘には、

「欠くべからざるもの」

となってきて、この最新兵器を購うためには莫大な費用がかかる。

日本の戦争も政治も、中央へしぼられてきてスケールが大きくなり、中央のくわしい情報が、どうしても必要になってくる。

真田昌幸が、故主・武田信玄を見ならい、草の者を中心とする情報網をととのえるための費用も、

「一戦も二戦もできる……」

ほどに大きいのだ。

だから、どうしても財力がなくては、

「生き残れぬ……」

のである。

城のまわりに町をひらき、商工業を発展させ、領地の耕地を増やして収穫をはかる。

それでなくては、もはや大名・武将の存続はないといってよい。

信州・小県郡は、更級・埴科両郡の東南にあり、千曲川の両辺に渉って佐久郡に至る五十

方里がそれで、上田・塩田の両盆地は、信濃の国の中でも屈指の実りゆたかな土地である。

しかも、上州・沼田という要衝を所有している真田昌幸だけに、

「これは、うるさくいわず、安房守にまかせ、安房守の勢力を利して、関東の北条父子が上信二州へ進出することを押さえたほうがよい」

徳川家康も、そのように、こころをきめたのであろう。

去年の秋に……。

家康は、自分のむすめ・督姫を、小田原の北条氏直へ嫁さしめ、北条家と同盟をむすんでいる。

自分が羽柴秀吉とならんで中央進出を果たすためには、どうしても、背後の北条父子と争うわけにはまいらぬ。

しかし、北条父子に関東から上信二州へ、大きく進出されることは、家康にとって、

「はなはだ、おもしろくない」

ことなのだ。

そこで、家康は、

「真田安房守を傘下におさめ、北条の進出を押さえさせよう」

と、考えている。

安房守昌幸が、上田と沼田を確保しているからには、この上の、北条軍の侵入を決してゆるすまい。

上州・沼田を中心にした真田・北条両家の、過去の争乱や確執を、家康は充分にわきまえている。

その家康が、真田昌幸へ、上田と沼田を安堵したことを、北条父子は、むろん、こころよくおもってはいないだろう。

春が近づいてきて、ともあれ自分だけは上田城へ引き移った真田昌幸のもとへ、名胡桃城の鈴木主水の重臣・師田頼母があらわれ、

「すぐさま馳せ参じ、御祝を申しのべねばならぬところなれど、ちかごろ、またしても、中山城の北条勢がこなたの様子をしきりに窺いはじめ、油断がなりませぬゆえ、城を留守にすることができませぬ」

と、主水の言葉をつたえた。

鈴木主水は祝儀の品々を三頭の馬の背に積み、贈って来た。

「いつもながら、主水殿のこころ入れ、かたじけない。くれぐれもよろしゅう、つたえてもらいたい」

「心得まいた」

「ときに頼母……」

「は？」

「徳は、いかがしておろうか？」

「おすこやかにおわします」
「産月も近いはずだが……」
「御案じなされることはござりませぬ」
お徳は、名胡桃へ移ってより、一度も、昌幸へ便りをよこさぬが、このときもそうであった。
昌幸は、いささか、そのことがさびしかったようだ。
師田頼母一行は、この夜を上田城に泊まり、翌朝、砥石を経て名胡桃への帰途についたのだが……。
砥石の〔締まり所〕に、まだ押しこめられていた樋口角兵衛が脱走したのは、同じ朝であった。

三

お徳を単身で襲撃し、源二郎と鞍掛八郎に捕らえられた樋口角兵衛は、あれから砥石城・米山曲輪の締まり所へ押しこめられたままであった。
お徳が名胡桃へ移ったのち、
「角めを、岩櫃へもどそうか……」
と、真田昌幸がいい出したことがある。
すると、岩櫃城の源三郎信幸が、めずらしく、

「いま、しばらくの間、父上のもとにおとどめおき下され」
強く反対をした。
「源三郎め、おのれの責任を逃れようとするか？」
昌幸は例によって、信幸の言葉をつたえに来た使者の前で、この長男の悪口をいいたてたが、結局は源三郎のいうとおりにした。
角兵衛が、砥石の締まり所に押しこめられていることは、すでに岩櫃のだれもが知っていた。
くわしい事情を知らぬ者は、
「何故、そのような……？」
と、訝ったろうが、事情を知る者は何もいわずに沈黙してしまった。
源三郎は、この事件の背後にあるものを、深く追求しようとしない。
生母の山手殿を取り巻く家来たちや、一部の草の者についても、そのまま放置しておいた。
源二郎に成敗された草の者・山田弥助と山手殿の連絡をしていた平左も処罰をうけなかった。
平左は、いま、真田の庄の草屋敷に閉じこもり、不安に戦いていることだろう。
いや、平左のみではない。山手殿も静まり返ってしまった。そして時折、源三郎を見ると、
「砥石から、何やらいってはまいらぬか？」
尋ねることがある。
「何やらとは、何のことです、母上」

「いえ、別に……」
「角兵衛がことでしょうか？」
「いえ、いえ……」
烈しくかぶりを振り、山手殿は、
「そのようなことではない。ただ、砥石におられる殿の御様子を知りたかったのみじゃ。ちかごろは上田へ泊まりつづけておられるとか……さぞ、お疲れのことであろうとおもうて……」
などと、めずらしく能弁になって、夫・昌幸の身を心配したりするさまが、いかにもわざとらしい。
昌幸の怒りが自分の身辺へかかり、自分の密命によってうごいていた者たちへ累がおよぶことを、さすがに怖れていたのであろう。
ところが、昌幸も源三郎も、角兵衛の事件については、いっさい不問のかたちをとった。
それが山手殿にも、密事に加わった者たちにも、ひどく不気味に感じられるのだ。
山手殿一派は、真田昌幸が長男・源三郎を排し、二男・源二郎を世嗣ぎにするのではないか、それはゆるせぬことだというので、ついつい、つまらぬことを密かに計画したりする。
砥石にいる昌幸と源二郎の言動を絶えず探り取っていないと安心ができぬ。
それゆえ、手なずけた草の者をつかい、暗躍させたりするのである。
いまのところ、昌幸は、自分の世嗣ぎは長男・源三郎信幸と定めてあるし、源三郎・源二

郎兄弟の仲もよい。

（なれど、殿は何をなさるか底の知れぬお方じゃ）

と、山手殿はおもっている。

「源三郎を世嗣ぎに定めたのも、亡き武田の御屋形さま（信玄）の、きびしい、おいいつけがあったからなのじゃ。その御屋形さまも亡くなられ、御当代さまと共に武田の御家もほろび絶えたからには、いつまた、殿のおこころが変わるやも知れぬ」

いつであったか、角兵衛の母でもあり、自分の妹でもある久野に、山手殿は、そう洩らしたことがあった。

昌幸は昌幸で、

「おれは、それどころではないのだ」

上田築城に没頭している態を見せているが、内心では反省することもあったらしい。

すべては、自分の好色から出たことである。いや、好色はかまわぬとしても、その好色の結果がスムーズに通って行く家でなくてはならぬ。

そこが、どうも、うまくまいらぬ。

つまりは、正妻の山手殿との、結婚当初からのつまずきが、いまも尾を引き、妻の疑惑が解けぬままに深められていったのである。

また、山手殿の疑惑が、

「まったく、根も葉もないこと……」

だとは、いえぬところも、たしかにあるのだ。
自分の若いころに引きくらべて、源三郎を看ると、
（途方もなく、えらいやつが、おれの子に生まれたものだ）
長男の、すぐれた天性をみとめぬわけにはゆかぬ。自分の跡つぎとして申し分のない長男であった。
それでいて、なお、
（でき得るものならば……おれの跡つぎは、源二郎にさせたい）
ふと、おもわぬことが、ないとはいえないのである。
これは、いったい何故なのか……。
（長男を産んだ女が可愛くもない女で、二男を産んで、すでに亡くなった女が愛しいからなのか……？）
男とは、そうした生きものなのか、どうか、それは昌幸にもわからぬ。
ともあれ、源三郎にくらべると、樋口角兵衛のほうが、
（まだしも、可愛い……）
のである。
だからといって、源三郎が憎いのではない。
源三郎も正しく、自分の血をわけた子である。
だが、源三郎と向かい合っていると、

（とても、かなわぬ）

ようなおもいがしてくる。

少年のころから老成の風があり、しずやかに自分を見つめてくる深い光をたたえた長男の眼の色に、昌幸は、たじろぐことが多かった。

叱りつけても、怒鳴っても、源三郎は平然とうけながし、ほとんど、

（取り合おうともせぬ……）

ように、昌幸は感じている。

それが、いらだたしい。

奔放で、ときには、父子ともども無邪気になってあそべる源二郎とのちがいが、そこにある。

ところで……。

樋口角兵衛が生まれた十四年前のことを、真田昌幸は忘れていない。

そのころはまだ、武田信玄も生きていて、武田家の栄光は天下を圧していた。

角兵衛の母・久野は、樋口下総守の妻であった。

昌幸の妻の妹である久野が、角兵衛を産んだとき、古府中の城下に屋敷を構え〔武藤喜兵衛〕と名乗っていた昌幸へ、

「角兵衛は、殿のお子でございますよ」

ふくみ笑いと共に、ささやいたことがある。

そのとき、人の妻であり、義妹でもある久野と、昌幸は通じ合っていたのだ。

四

年が明けて十四歳になった樋口角兵衛は、締まり所を警固している士卒にいわせると、
「気味がわるいほど、しずかになられた」
そうである。
牢格子があり、外へ出られないだけで、食事や寝具についても、相応なものをあたえ、罪人のあつかいとはいえなかった。
このごろの角兵衛は、湯をあたえれば躰も清めるし、髭も剃るようになった。
つまり、素直になったように見える。
前非を悔い、反省をしているように感じられた。
喚いたり叫んだり、暴れたりしなくなったかわりに、無口になった。警固の者にはほとんど口をきかぬし、十日に一度ほど、真田源二郎があらわれて語りかけても、面を伏せて返事をしない。
昌幸は、去年に一度、締まり所を訪れ、角兵衛の狂態に接してから、
「もはや、懲りたわ」
よほどに閉口してしまったらしく、すべてを源二郎にまかせていた。
しかし、角兵衛がおとなしくなったと聞くや、

「そろそろ、出してやってもよいのではないか……？」
「父上。角を出して、どうなされます？」
「岩櫃では、いま、しばらく、こちらへ置いてもらいたいと申してきている」
「兄上が、そのように申されるなら、そうしたほうがよいとおもいます」
「ふうむ……」
「兄上は、いま、岩櫃の母上や叔母上、家来たちのうごきを見まもっているのでしょう。そこへ角兵衛をもどしてはなりますまい」
「おれも、そのようにおもう。なれば、締まり所から出してやり、砥石の、お前のもとで暮らさせてやりたい」
「まだ、早うござる」
「何故だ？」
「あのような気ちがいの相手をするのは、ごめんです」
「お前は、角がきらいなのだな」
「きらいというのではありません。角めには道理が通りませぬ。どこか、頭のはたらきが狂うていることはたしかです」
「むう……」
真田昌幸は、苦い顔をした。
久野が、ひそかに打ち明けたことは、昌幸のみがわきまえていることだ。久野との過去の

関係を察知している山手殿さえ、このことは知るまい。
昌幸も、はじめのうちは、
（まさか……？）
疑念を生じたものだが、久野は、はっきりと、
「女の身に、おぼえあることでございます」
いい張ってやまなかった。
そして、生まれた角兵衛の顔の、どこを取って見ても、父・下総守との相似点がない。
どちらかといえば、
（おれに、似ていないこともない……）
ようにおもえてきた。
角兵衛が生まれてから、昌幸は久野との関係を絶った。
当時、古府中城下の昌幸の屋敷と樋口下総守邸とは道ひとつへだてた近間にあり、久野と昌幸は、双方の侍女や家来を仲立ちにし、はげしいときは夜毎に、昌幸が樋口邸へ忍んで行き、久野と密会していたものだ。
それを山手殿が知り、久野は、この姉からきびしく叱責された。山手殿が、このとき、あくまでも事を穏便に、ひそかに決着させたのは、やはり実の妹の行く末をおもったからであろう。
昌幸も、当分の間は、山手殿に頭が上がらなかった。

ところが、武田家が滅亡してしまい、樋口下総守が武田勝頼に従って、天目山に死んだとなれば、久野・角兵衛の母子は、

（どこまでも、おれが面倒を見てやらねばならぬ）

ことになり、当惑しながらも、昌幸の胸は弾まないものでもない。

それは、やはり、角兵衛が自分の子だと信じられるようになっていたからであろう。

岩櫃にいたときも、ふと、久野の目と昌幸の目が合うようなとき、

「……」

久野は、無言の声を両眼の色にあらわし、

（角兵衛は、殿の御子でございますよ）

と、語りかけてくるのであった。

その朝。

米山曲輪の締まり所へ、番卒二名が角兵衛の食事を運んで行くと、牢格子の中に、角兵衛の姿が見えぬ。

めずらしいことではない。奥に設けてある厠へ入り、用を足していることがあるのだ。

番卒たちは、奥の板戸の向こうに人の気配を感じた。

「う、うう……」

厠で、角兵衛の唸り声がきこえるではないか。

「もし、角兵衛様……」
「いかが、なされまいた？」
口ぐちに声をかけると、
「あ……あっ、あっ、……」
唸り声が突如、苦痛の叫びに変わった。
「角兵衛様……」
番卒の一人が、おもわず、牢格子の錠を外しかけた。
厠からきこえる、ただならぬ苦痛の声だけに、角兵衛が急に発病したとおもったのである。
「待て」
別の番卒が、錠を外しかけた番卒をとめた。自分たちだけで、勝手なことをしてはならぬ。
ともかく、木戸の番小屋へ知らせてからにしようというわけだ。
と、そのとき……。
「うわあ……」
凄まじい絶叫が厠で起こり、角兵衛の巨体が打ち倒れたかのような物音がきこえた。
「これは、いかぬ」
「うむ」
うなずき合った番卒二人が、あわてて錠を外し、牢格子の中へ飛び込んだ。
転瞬……。

厠の板戸が強烈な勢いで突き破られ、黒い大きな塊が風を巻いて躍り出した。
樋口角兵衛であった。
二人の番卒は、角兵衛に撲り倒され、気絶をした。
角兵衛は、朝餉を腹へつめこみ、番卒が身につけていた刀を奪い、牢格子の外に立てかけてあった槍をつかみ、土間から外へ出た。
このときから、角兵衛の姿が消えたのである。
米山曲輪の木戸にいた他の士卒は、角兵衛を見ていない。息を吹きかえし、締まり所から駆けもどって来た二人の番卒の報告により、はじめて角兵衛脱走を知ったのであった。
角兵衛は、米山曲輪の上へ上へとのぼり、砥石の山城へ分け入り、そこから山づたいに何処かへ逃げ去ったと看てよい。
いまの砥石城は、ほとんど〔廃城〕に近かった。
米山曲輪のあたりでは、食糧や兵器を格納してある蔵や建物もあって、士卒が詰めているけれども、山上の曲輪には人影が絶えて久しい。
角兵衛脱走の知らせをうけたとき、真田源二郎信繁は、砥石の居館で、上田から来た師田頼母と語り合っていたが、
「よし。すぐに追え」
と、命じておき、顔色も変えずにもどって来て、頼母との会話をつづけ、名胡桃のお徳への贈り物などをわたし、すこしもあわてることなく、頼母一行が名胡桃城へ出発するのを見

送ってのちに、
「角めのことは、まだ、上田の父上に知らせてはいまいな？」
「はい」
「よし。父上には、おれが知らせる。馬をひけい！」
「はっ」
そこへ、砥石に詰めている草の者の鞍掛八郎が駆けつけて来た。
「八郎、聞いたか？」
「はい」
「すぐに追え。たのむぞ」
「心得まいた」
出て行きかける八郎へ、源二郎が、
「あ、待て」
「は……？」
「手にあまらば、討ち取ってよい」
「な、何とおおせられます……？」
「討て。かまわぬ」
「なれど、それは……」
「おれが責任を負う。どうあっても捕らえることができぬときは、討て！」

断固とした口調であった。
「いや、それは……」
と、鞍掛八郎も然る者である。
「見かけたるときは、かならず、捕らえまする」
「捕らえるに、こしたことはない」
「はい。大丈夫でござります」
「よし。行け」
「では……」
八郎の後から、源二郎も居館を出て、ひき出されて来た馬へまたがった。
この馬は、前に父・昌幸の愛馬だった「残月」である。
角兵衛を捕らえたときに、昌幸が、
「苦労をかけた」
と、源二郎をねぎらい、
「何か、ほしいものはないか？」
「では、残月をいただきたく……」
「よし。つかわそう」
と、父がくれたのである。
角兵衛の追跡は、草の者にまかせることにした。

草の者が発見できなければ、
（おれが探したところで、見つかるものではない）
と、源二郎はおもっている。
「それっ！」
馬腹を蹴って、源二郎は砥石の居館を走り出た。

五

その後、半月を経ても、樋口角兵衛の行方は知れなかった。
砥石の居館の庭の、みごとな桜の老樹の蕾がふくらみきって、いまにも花をひらこうという日のことであったが……。
草の者の奥村弥五兵衛が上田城へ駆けつけて来て、壺谷又五郎の密書をとどけ、すぐにまた引き返して行った。
その翌日には、また草の者・小助が、上田城へあらわれた。
「小助も、すぐに引き返して行ったらしい。何事だろう？」
と、真田源二郎が佐平次にいった。
「はあ……」
向井佐平次は、気が乗らぬ返事をする。
「おのれが……」

源二郎は、舌打ちをした。
いま、佐平次はもよとの蜜月に酔っている。
源二郎の側にいても、どことなく、ぼんやりとしていることが多いのだ。
「これ佐平次。おのれは、もよに、骨抜きにされたか……」
「は……？」
「夜な夜な、ろくにねむりもせぬのではないか、これ……」
「はい」
「こやつ。仕方のないやつだ」
「いずこへ、まいられますか？」
「上田の城へまいる」
「お供を……」
「よいわ。もよに鼻毛でも抜かれておれ」
佐平次を残し、源二郎は騎乗で上田へ駆け向かった。
東太郎山の裾を南へまわると、彼方に、上田城の櫓がのぞまれる。
これは、源二郎に、
（真田家の新しい城ができた）
という感慨を、いつも、よび起こさせる。
これまでのような、山城ではないだけに、近づくにつれて城の全貌がはっきりとのぞまれ

る。いかにも、それが城らしいのである。
山城だと、石垣も櫓も、山肌や樹林の中に埋もれてしまい、城というよりも、山そのものの感じがするのだ。
北の大手口から、源二郎は駆け入った。
城の内外では、まだ、工事がつづけられている。
二の丸の馬屋の前で、残月から飛び下りた源二郎は、本丸の木の香も濃い居館へ入って行った。
折しも、浜松の徳川家康の使者が、帰ったばかりだという。
「おお、いま、砥石へ迎えにやろうとおもうていたところだ」
と、真田昌幸が源二郎にいった。
上田城・本丸の居館も、岩櫃城のそれに、よく似ている。
例によって〔地炉ノ間〕が設けられており、昌幸は、そこにいた。
「浜松からの急使とか……？」
「うむ。いよいよ、また戦じゃ」
「われらも？」
「いやいや」
かぶりを振った安房守昌幸が、
「そう、やすやすと戦ができるものか」

と、哄笑した。

戦争は、徳川家康と羽柴秀吉によって、おこなわれる。

出陣に際して家康は、北条父子が、これ以上、上信二州を侵略せぬよう、安房守昌幸へ、

「たのむ」

と、いってよこしたのである。

そのかわり「出陣せよ」との要請はなかった。

北条氏と婚姻の関係をむすんだとはいえ、いざとなれば、そのようなものが何のたのみにもならぬことは、いうまでもない。

上信二州のみではなく、甲州・駿河・伊豆の国境の守備をきびしくして、家康は出陣したにちがいない。

北条氏の侵略に長けていることは、関東北条氏の祖・北条早雲以来の伝統であるから、いまの家康にとって、まさに、

「後門の狼」

なのである。

隙を見せさえすれば、たちまちに飛びかかって来るのだ。

ところで、家康と秀吉の確執は、年が明けて間もなく、昌幸の耳へもきこえていた。

これは、浜松にいる弟の隠岐守信尹が密かに知らせてよこしたのである。

去年。羽柴秀吉が、織田信長の三男・信孝と、織田家の老臣・柴田勝家の同盟を武力によ

って打ち破ったとき、
「めでとうござる」
と、家康は、秀吉へ祝詞を送っている。
そのときの、徳川家康の肚の底に在ったものはうかがうべくもないが、しかし、羽柴秀吉は、信長の遺子・織田信雄をたすけて、勝家・信孝を討ったのである。
となれば、故信長の二男である信雄に協力をして、
「天下の事をおこなう」
ことになると、一応は看てよい。
家康・秀吉の心底はさておき、おそらく信雄自身は、そのつもりでいたにちがいない。
また信雄は、父・信長と兄・信忠が亡きのち、何かにつけて徳川家康をたのみ、いろいろと相談をもちかけてきた。
だからこそ、家康も、信雄をたすけて戦った秀吉へ祝詞をのべたのであろう。
いまの織田信雄は、自害させた弟・信孝の旧領（伊勢）と滝川一益の所領を併有し、尾張・清洲（現・愛知県清洲町）の城主となっている。
ときに、二十七歳であった。
羽柴秀吉は、旧主・信長の孫にあたる三法師を、
「信雄様と共に、おまもりする」
という立場をとっているが、何分にも、三法師は幼い。まだ五歳である。

だから、当然、信雄としては、
「まず、自分が亡父の跡をつぎ、のちに、亡兄の遺子である三法師へゆずりわたしてもよい」
そのつもりになってきている。
けれども、羽柴秀吉に、
「そのつもりはない」
のである。
秀吉は、このとき、はっきりと自分の天下を目ざして進みはじめていた。
気も遠くなるほどの費用を惜しみなく投じ、大坂に築きつつある城のスケールの雄大さが、あからさまに、秀吉の野心をしめしているではないか。
信雄も、気が気ではない。
そこで秀吉は、まず、信雄の家臣たちから懐柔することにした。
信雄の重臣である岡田重孝・津川義冬・浅井長時・滝川三郎兵衛などを招いては歓待し、
「いまの信雄様には、天下を治めるだけのちからはない。そうなっては、ふたたび、天下も乱れようし、ひいては織田家のためにも、よろしくないことになる」
しきりに、説いたという。
その真偽はさておき、秀吉が、この四人の重臣と、ひそかに懇談していたことは事実であった。

すると、四人の中の滝川三郎兵衛が、
「実は……」
と、主の織田信雄へ、このことを密告したものである。
信雄は、激怒した。
そして、岡田・津川・浅井の三老臣を長島の城へよびよせ、酒宴をひらき、油断をさせておいて討ち取ったという。
その翌日に、早くも徳川家康は兵をひきい、織田信雄を援けるための出陣をしている。
家康と信雄との間には、すでに密接な連絡がついていたのだ。
羽柴秀吉は、おそらく、
「このときを待っていた……」
のであろう。
信雄の老臣たちを、わざわざ、近江の園城寺へ招いて密談をかわしたり、煽動的な風説を信雄の耳へとどくように仕向けたりしていたのである。
「信雄の方から、戦を仕かけて来るのなら、自分が、これを防ぎ戦うに何のふしぎもなく、戦争の名目が一応は立つ」
と、秀吉は考えていた。
徳川家康の老練な目から見ると、その秀吉の肚は、
「見えすいている」

ことだし、また、家康がそうおもっていることを、秀吉はよくわきまえているのだ。

「さて、源二郎……」

と、真田安房守昌幸が、両眼を輝かせて、

「この戦、どちらが勝つとおもうな？」

「さて……」

今度ばかりは、さすがの源二郎にも見当がつきかねた。

「おれも、よ」

昌幸も、いままでに入って来た情報から推し量っても、帰趨がわかりかねた。

「いずれにせよ、おもしろいことになった。そうおもわぬか」

「はあ……」

「いずれにせよ、われらは、この戦が終わってのちの備えをしておかねばならぬ。いまのうちにだ」

「はい……」

「いずれにせよ、他国で戦が起こるたびに、われらは浮かび上がることよ」

昌幸は満足そうに、家来をよび、酒の仕度を命じた。

六

酒盃をかたむけながらも、安房守昌幸は、つぎつぎに指令を下した。
急使が、つぎつぎに上田城から馬を駆って走り出て行く。
まず、沼田へ……。
つぎに岩櫃へ、である。
「北条勢の侵入に対して、備えをかためよ」
このことであった。
徳川家康は、武田家がほろびてのちの北条父子との争乱をおさめたとき、
「上州・沼田は、そちらへさしあげよう」
と、約束をしている。
しかし、真田昌幸は、
「沼田は、自分が武力によって我が物とした城であるから、ゆずりわたすわけにはまいらぬ」
との態度を、くずさぬ。
どうしてもほしければ「攻めかけて来い！」と、いわぬばかりであった。
北条父子は、家康との同盟が成ってから、何度も、
「約束を、どうしてくれる？」
せまってきたが、家康は、そのたびに、はっきりとしたこたえをしめさぬ。
今度の出陣に際しても、家康は北条父子に申し入れた。

「援軍をたのむ」
すると、北条氏直は、
「先年以来の約定は、どうして下さるのか？」
と、いってよこした。
今度も、また、家康の態度は煮え切らなかった。
それはそうであろう。
北条父子へ援軍をたのむ一方では、ひそかに真田昌幸へ急使をつかわし、
「北条方の上信二州への侵入に、気をつけてもらいたい」
と、いってよこしているのだ。
家康は、老獪である。
いまのところは、真田昌幸も、その老獪さに、
「乗せられていることよ」
うそぶいているのであった。
昌幸の急使は、小諸城へも駆けつけて行った。
小諸は、徳川方の依田信蕃の長男・源十郎康国がまもっている。
小諸との連絡を密にして、いつでも、上州の地へ出兵できるよう、諸般の準備をととのえておかねばならぬからだ。
そして、昌幸自身も、本軍をひきいて、いつでも出陣ができるように、臨戦態勢に入った

のである。
「父上……」
「なんじゃ？」
「こうなりますと、角兵衛どころではありませぬな」
「いや、源二郎……」
昌幸は、烈しく否定をした。
「草の者は手をゆるめずに、角兵衛を探さねばならぬぞ。そのほうは、お前にまかせよう」
「はあ……」
「浮かぬ顔だな」
「気ちがい犬を相手にするのは、気がすすみませぬ」
「う……」
昌幸は、いやな顔つきになり、しばらく沈黙していたが、
「気ちがい犬でも、お前には、同じ血をひいた従弟ではないか……」
つぶやくように、いった。
これは、昌幸が「おれの血をひいている」といったのではない。
「お前を産んだ母の妹の子ではないか……」
と、いったのである。
ところが源二郎は、自分の生母が山手殿でないことを承知しているし、昌幸も、そのこと

をわきまえているはずだ。源二郎出生の秘密を源二郎へ打ち明けたのは、昌幸自身なのだから……。

それなのに、いま、昌幸は、源二郎が山手殿の腹から生まれたようなことをぬけぬけといい出した。

源二郎は、だまって、父の酒盃をわが手に取り、酒をのみほした。

昌幸は、だまっている。

横目で、酒をのむ源二郎を見ている。

酒盃を置いた源二郎が、父の顔へ視線を移すと、安房守昌幸は気まりのわるそうな笑いをうかべ、

「もっと、のめ」

「かまいませぬか」

「よいとも」

「父上。もしも、草の者が角兵衛を捕らえましたら、何となされます？」

「さて、な……」

「岩櫃へ、おもどしになりますか？」

「さて、むずかしい……」

「岩櫃の母上や兄上は、いつ、上田へ移られます？」

「天下が、また、騒がしくなったからには、源三郎を岩櫃から引きはなすことができなくな

った」

一理あることだが、昌幸にとっては、長男・源三郎が岩櫃にいる以上、正室の山手殿も、そのままにしておく名目が立つわけであった。

とにかく、真田昌幸は、正室と同じ居館に暮らすのを好まない。

「角めは、この、上田へ引き取るつもりだ」

「父上。それは、まことで？」

「そういたすよりほかに、道はあるまい」

「それならば、よいとおもいます」

源二郎が、意外に賛同をした。

源二郎は源二郎なりに、おもうところがあったのだろう。

「ともあれ、私が角めの面倒を見るのは、もう、いやでござる」

「わかった」

この日から、上田も砥石も、緊迫の色に包まれた。

二日、三日とたつうちに、沼田からも、岩櫃からも急使が駆けつけて来るし、小諸の依田康国からも、頻繁に使者が到着する。

小諸からの報告によると、北条父子は、上州の勢力を強固にするため、早くも北条方の諸城や砦へ、兵員を送りこみはじめたらしい。

徳川家康は、本軍をひきいて尾張・清洲の城へ入り、織田信雄と共に軍議をひらいた。

家康としては、織田信長の遺子を援けて戦うのだから、開戦の名目は羽柴秀吉よりも立派なものであった。

そこで、四国の長宗我部、紀州の雑賀党や、前には柴田勝家の与力だった佐々成政や、美濃の森長可、近江佐和山（彦根）城主の堀秀政。それに、いまは岐阜の城をまもっている池田恒興などへ、

「味方をするよう……」

に、よびかけた。

森長可と堀秀政は、これをはねつけて、羽柴秀吉軍へ参加したが、池田恒興は、おもい迷ったらしい。

池田は、故信長の乳母の子で、織田家とは縁が深いし、戦功も多い。信長が本能寺に殪れてのちは、勝家・秀吉・長秀と共に、宿老四人のうちの一人であった。それだけに苦悩したのであろうが、秀吉も、こうした池田恒興の態度を見逃さずに圧力をかけて来たので、ついに、秀吉軍へ参加した。

そうなれば、二心のないことを秀吉にしめさなくてはならぬ。

そこで池田恒興は、美濃と尾張の国境をながれる木曾川のほとりにある犬山城を奇襲し、これを攻め落とした。

犬山城は、織田信雄の武将がまもっていたのである。

羽柴秀吉は大坂城を発し、大軍をひきいて犬山城まで進出して来た。

七

犬山の城が羽柴方に奪取されたときいて、清洲に集結した徳川軍は、いろめきわたった。
徳川家康の家臣・榊原康政は、
「かくなれば、一時も早く、小牧山へお進みあるべきと存じます」
と、進言した。
小牧山は、清洲の北方二里半のところにある孤山だ。
標高は、わずか八十六メートルだが、尾張平野を見霽かして、
「国中一円、眼中にあり。敵に取り巻かれては、一大事でござる」
榊原康政の言葉に、家康は深くうなずいた。
小牧山には、むかし、織田信長が清洲にいたころ、砦を築いた。その後、信長が美濃へ進出するにおよび、いつしか廃墟と化していたのである。
「よし。なれば、小牧山へ本陣を立てよう」
家康は即断し、榊原康政を小牧山へ急行せしめた。
康政は、すぐさま小牧山を占拠し、城塁を修築し、柵をめぐらした。
大坂から駆けつけて来た羽柴秀吉が犬山城へ入ったのは、それから五日のちであった。
このとき、榊原康政の進言をいれなかったら、以後の戦局は、
「どのようになったか、知れたものではなかった」

のちに、徳川家康が、そういっている。
羽柴秀吉は、まさに、立ち遅れた。
つまり、それだけ、家康と織田信雄の連携が緊密であったことになる。
兵をめぐらすことの速さにおいて、
「だれにも負けはとらぬ……」
秀吉も、このときばかりは間に合わなかった。
織田信雄も、小牧山へ移り、家康と共に戦うことになった。
これが、三月二十九日のことだ。
四月に入って、両軍の小競り合いが諸方におこなわれ、戦機は、しだいに熟しつつあった。
羽柴秀吉の総軍は、十二万余といわれた。
先陣が美濃から尾張へ進むとき、後陣は山科から宇治のあたりまで、蜿蜒と充満していたそうな。
これに対し、徳川・織田の連合軍は一万七千である。
家康が、三万に近い兵力を甲・信・駿・遠の諸州に配置し、背景をかためておいたからだ。
敵は約七倍の大軍なのだが、家康と信雄は、ほとんど自分の領国へ敵を引きつけて戦うのだから、連絡は緊密にたもたれているし、兵站が安定をしている。
食糧の補給も、兵力の移動も速い。
それに引きかえて羽柴軍は、兵站線がのびきってしまった。

秀吉は犬山城へ入ったものの、
「うかつに攻め切れぬ」
と、感じたらしい。
犬山と小牧山とは、わずか二里半をへだてたのみだが、徳川・織田方の諸将が、しきりに後方を攪乱するので、秀吉も、おもいきって決戦へもちこめなかった。
秀吉は犬山城を出て、楽田のあたりへ陣地をかまえ、家康とにらみ合ったまま、持久戦のかたちになった。
いち早く、犬山城を攻め取った池田恒興が、秀吉に、
「このまま、時をすごしておられては、御威信にかかわります」
と、いい出した。
家康と信雄を、秀吉が、
「もてあましている……」
ことが諸方へ知れわたると、徳川・織田方の味方が増えるばかりになる。
それでなくとも、秀吉が大坂を出るや、徳川・織田の呼びかけに応じた紀州の根来の僧兵や、雑賀の門徒などが蜂起し、さらに四国の長宗我部元親も、二百の兵船を出し、堺へ攻めかけて来た。
秀吉は、これらの攻撃を打ち破って、決戦場へ駆けつけたわけだが、これ以上、家康をもちあつかっていれば、どのようなことになるか知れたものではない。

ゆえに、池田恒興は、

「このさい、自分が部隊をひきい、ひそかに、家康の本国（三河）へ攻めこめば、家康は、あわてて小牧山をはなれ、三河へ引き返すに相違ござらぬ。そのとき、筑前殿が織田勢をもみつぶし、さらに……」

さらに、余勢を駆って徳川家康の背後から攻めかければ、大勝利はうたがいもないことだと、力説した。

「ふうむ……」

秀吉は、池田恒興の興奮しきった顔をながめ、返事をためらった。

池田は、亡き主人（信長）の乳兄弟ではあるが、いまの秀吉にとっては、別に何のつながりもない。しかも、今度の戦がはじまるまでは、織田信雄の傘下にあった武将で、それが信雄のたのみを、

「おもい迷ったあげく……」

に、はねつけて、秀吉の味方となった。

それだけに、池田は、

（何としても、大手柄をたてて……）

秀吉の気に入られなくてはならぬ、と、あせっている。

それが、秀吉には、よく看てとれた。

池田の作戦も、秀吉から看ると、あまり上等なものとはおもわれぬ。単純にすぎるのだ。

池田が考えていることなど、徳川家康は充分に、
（わきまえていよう）
なのである。
秀吉が浮かぬ顔をしているので、池田恒興はなおも、必死に喰い下がってきた。
池田は武勇の将ではあるが、責任ある作戦を遂行するだけの器量をそなえているとはおもえぬ。
いまから、このように興奮している池田恒興の、汗がにじんだ真っ赤な顔をながめて、秀吉は、
「ま、急くな」
と、いった。
しかし、池田は、執拗にいい張って、引き下がらなかった。
「ふむ……」
そのうちに、秀吉のこころが、うごいてきた。
池田の熱弁に、ほだされたのではない。ともかく、このままでは、いつまでたっても戦機がつかめぬ。
思慮は浅いが、犬山城を早くも攻め取ってくれた池田恒興の勇猛さを買って、何とか戦機をつかみたいとおもいはじめた。
そこで秀吉は、

「それならば、三河の……家康の岡崎城を目ざし、まっしぐらに進め」
「承知つかまつった」
「なれど、かたく申しておくぞ」
「は……？」
「途中、何ものにも目をくれるな。それが守れるか？」
「かしこまった」
秀吉は、二万四千をあたえ、池田のほかに、森長可・堀秀政・長谷川秀一の部将をつけ、さらに、自分の近親にあたる三好秀次を総指揮官に任じ、ひそかに犬山城を出発せしめた。
これが四月六日の深夜である。
この三河侵入軍は、二ノ宮から大草の山地をぬけ、小牧山の東方二里のあたりをかすめるようにして南下し、関田へ出て、ここに野営をした。
羽柴秀吉は、侵入軍の潜行をたすけ、七日朝から小牧山へ攻撃を仕掛けた。
だが……。
侵入軍の行動のすべてが、徳川家康の耳へ入ってしまっている。
のちに、草の者・お江が、上田城へあらわれ、真田昌幸に語ったところによれば、徳川に雇われた伊賀の忍びたちが、羽柴軍の行動をあますところなく探りつくし、順次、家康の耳へとどけたからだという。
徳川家康の諜報網は、

「羽柴方の、およびもつかぬ……」
ほどに、とのえられていた、と、お江は昌幸に告げた。
「伊賀忍びにまじり、武田忍びも、いささかは、はたらいておりましたようで」
「そりゃ、まことか？」
「はい」
武田家がほろびたのち、その下につかえていた忍びたちの一部が、徳川家へ吸収されているらしい。考えて見れば、家康の庇護をうけている武田の遺臣も、すくなくないのだから、それも当然といえよう。
現に、真田昌幸の弟・隠岐守信尹も、そのひとりではないか。

八

徳川家康は、三河侵入軍のうごきを知るや、迷うことなく、織田信雄と共に約一万三千をひきいて小牧山の本陣を発し、南下した。
小牧山は、酒井忠次、本多忠勝などが、約四千をひきいて守ることになった。
ところで、かの池田恒興だが……。
いよいよ、三河の国へ入り、岡崎城を目ざして進軍するうち、途中の岩崎城の近くへさしかかった。
岩崎城は、徳川方の丹羽氏次の小城だ。

氏次は、いま、小牧へ出陣しているので、弟の丹羽氏重が、これを守っていた。
城兵は、合わせて三百に足らぬ。
しかし、丹羽氏重は若いだけに、
「羽柴勢が城下を行きすぎるのを、だまって見ているわけにはゆかぬぞ！」
敢然と、出撃したものだ。
もとより、侵入軍は、これを相手にせぬ。
兵力が、あまりにもちがいすぎるし、目ざすところは、岡崎城なのである。
そのとき、異変が起こった。
嘲笑をあびせて通りすぎようとした侵入軍へ、丹羽氏重が攻めかかり、まず、鉄砲隊が出て、射撃を浴びせた。
鉄砲隊といっても、
「高が知れた……」
ものなのだが、どうしたはずみか、その一弾が、池田恒興の乗馬に命中したものである。
馬は悲鳴を発し、棹立ちになった。
「むだな戦を仕掛けても、どうにもならぬわ」
とばかり、馬上に悠然とかまえ、百五十か二百の丹羽勢が立ち向かってくるのをながめていた池田恒興は、もんどりをうって馬から落ちた。
「おのれ！」

池田は、我を忘れて激怒した。
羽柴秀吉に念を入れられたことも忘れて、
「ひともみに、もみつぶせ！」
猛然として、丹羽勢へ攻めかかった。
丹羽氏重は、
「引けい」
兵をまとめて岩崎城へ入り、立てこもった。
これが、四月九日の未明である。
城兵は、勇敢に戦ったが、なんとしても六千と三百の戦である。
城兵の大半は戦死し、丹羽氏重も敵弾に斃れてしまった。
それにしても、丹羽氏重は岩崎城へ敵の大軍を引きつけ、数時間をもちこたえたことになる。
この間に、徳川家康と織田信雄は、小幡城を経て、羽柴侵入軍へ追いついた。
戦場に於ける数時間の遅れは、
「取り返しがつかぬ……」
ものなのである。
侵入軍が進む途々に住む土豪たちへは、いずれも徳川家康の息がかかっている。
彼らは、つぎつぎに侵入軍の進路を、家康へ知らせてよこした。
「これは、岡崎をねらっているにちがいない」

家康は、そう見きわめるや、追撃の足を速めた。
そして、この朝。
徳川・織田の追撃軍が、侵入軍の後尾へ接触したのである。
侵入軍は、先頭の池田部隊（六千）が岩崎城へ攻めかけたので、森長可の第二隊は生牛原のあたりで兵糧を運んでいた。
第三隊は、金萩原で小休止をとっている。
そして、総司令官・三好秀次がひきいる第四隊は、白山林のあたりに駐屯していた。
岩崎城は、現・名古屋市東面の丘陵地帯にあり、二万の全軍が一度に進むほどの道はついていない。
それに、六千余の部隊を指揮し、池田恒興が攻めかけているのだから、
「間もなく、城も落ちよう」
後続部隊は、さして気にとめなかったらしい。
そこへ追撃軍が、突如、襲いかかった。
追撃軍は、水野忠重・榊原康政に、岩崎城で討死をした丹羽氏重の兄・氏次も加わり、猛然と突撃に移った。
この結果、第四隊は完全に突きくずされ、三好秀次は本隊と共に逃走することになったのである。
死地を脱し、羽柴秀吉のもとへ帰った秀次は、秀吉に、きびしく叱責された。

秀次の実父・三好吉房の妻は、羽柴秀吉の姉である。
したがって秀吉にとり、秀次は甥にあたる。
のちに秀次は、いつまでも子が生まれぬ叔父・秀吉の嗣子となり、関白職の宣下をうけるという、幸運の宿命をもっているが、また、そのために、一転して悲惨な末路をとげることにもなるのだ。
さて……。
追撃軍が、三好秀次の本隊へ殺到したとき、第一隊の池田恒興は、岩崎城を落とし、討ち取った敵の首実検をしていた。
もはや、池田は羽柴秀吉の、
「わき目もふらずに岡崎へ進め」
の一言を、忘れてしまっている。
勝ちほこっていた。
そこへ、本隊や第三隊が追撃軍と接触した知らせが入った。
「な、なんと申す……？」
池田恒興は、
（とても、信じられぬ……）
という顔つきになった。
まさか、これほど早く、徳川家康が追いかけて来ようとはおもわなかった。

というよりも、三河侵入軍は、おそらく敵の追撃軍が小牧山を出たことさえも知らなかったかのようにおもわれる。

前へ進むことばかり考えて、背後への警戒が、まったくおこなわれていなかったと看てよい。

顔色を変えた池田恒興は、もう、首実検どころではなく、兵をまとめ、戦闘中の諸隊を応援すべく引き返して行った。

森長可の第二隊も反転し、応援に駆けつけた。

徳川家康は、富士ヶ根とよばれる小さな丘の上に金扇の馬標を立て、引き返して来る池田・森の敵軍と戦う構えをしめした。

家康は、みずから三千をひきい、出撃することにし、織田信雄へ、

「そこにござって、われらの勝ち振りを、ゆるりとごらんなされ」

と、笑いかけたものだ。

得意の野戦ではあるし、戦場の駆け引きについては、池田や森など、家康の眼中にない。

一流と三流の戦といってもよい。

四十三歳の、徳川家康は闘志と自信にみちみちていた。

しかも、このあたりの地形を徳川軍は熟知している。

家康は、

「進め」

とばかり、本陣を前山へ移動させた。
気迫がこもっている。
前面の三方に陣を構えた侵入軍の中へ、われから突入して行こうというのである。
巳ノ上刻（午前十時）ごろに、家康は突然、本陣を前方右手の丘陵へ移動させようとした。
これは、敵にさそいをかけたのだ。
前方へうごきはじめた金扇の馬標を見た森長可は、
「いまこそ！」
とばかり、突撃して来た。
前山の家康本陣は、灌木と草が茂っていて、森隊から見ると、あまりよく、うごきがつかめなかった。
にもかかわらず、
「本陣がうごく……」
と看て、突進して来た。
これを、家康は待っていた。
前方から長柄組をくり出し、敵を迎え撃つのと同時に、早くも丘と丘の間の低地や、灌木の中にひそませてあった鉄砲隊をもって、一斉に射撃させた。
そして、鬼武蔵などとよばれ、武勇をほこる森武蔵守長可は銃弾に額を撃ちぬかれ、馬から落ち、呆気なく戦死してしまったのである。

九

世に〔長久手の戦〕といわれる、この戦闘における徳川軍の鉄砲隊の活躍は、
「すばらしいもの……」
であったそうな。
単に、数量が多かったというのではなく、性能のよい鉄砲と、すぐれた射手をそろえ、鉄砲隊そのものの訓練が充分に為されていたのである。
この点、羽柴方の〔三河侵入軍〕は問題にならなかった。
徳川家康は、凹凸の多い地形を利用し、たくみに鉄砲隊を活用した。
家康本陣へ駆け向かった森武蔵守長可が、伏せておいた鉄砲隊の一弾に、呆気なく撃ち殪されたのも、このためである。
森長可を撃ちとめたのは、徳川方の水野部隊の足軽であった。
ちなみにいうと……。
この森長可は、武田家がほろびたのち、織田信長から信州四郡をあたえられ、川中島の海津城へ移った。
だが、信長の死後、越後の上杉景勝の侵入をささえきれず、本領の美濃（岐阜県）金山へ帰り、織田信孝に属していたのを、今度の戦争で信孝を裏切り、羽柴秀吉の招きに応じたのである。

この点、滝川一益の境遇に似ていないこともない。

長可の三人の弟・蘭丸とよばれた長定も、長隆・長氏も、本能寺で主・信長に殉じている。

さて……。

徳川家康は、鉄砲隊を縦横に駆使して森部隊を突きくずし、一方、織田信雄は、岩崎城から引き返して来た池田恒興の部隊と激突した。

このとき、すでに〔侵入軍〕の隊伍はみだれ、敗色濃厚となっていたらしい。

池田恒興の家来たちは、見る見るうちに主人を捨てて逃げてしまい、恒興は、わずか百五十人ほどの兵と共に戦ったが、ついに、討ち取られてしまった。

池田は、

「われを見捨てて何処へ退くのだ。引き返せ。もどれ！」

叫び、わめくうちに、乗馬までも何処かへ逃げてしまい、茫然と立ちすくんでいるところへ、徳川勢が殺到し、討ち取られたのである。

勝入と号した池田恒興は、ときに四十九歳で、二人の男子も父と共に戦い、長男の元助も討死してしまったが、二男の三左衛門は脱出し、後年、池田輝政となって秀吉から重く用いられるようになる。

長久手の戦闘が終わったのは、当日の午後一時ごろであったろう。

双方の戦死者は、羽柴方が約二千五百（四千などともいわれている）。徳川・織田方が約五

百、ということだ。

楽田の本陣にいた羽柴秀吉は、戦闘が始まったとの急報を受け、みずから大軍をひきいて出動しようとしたが、もう、間に合わぬことがわかった。

徳川家康が、素早く、小幡城へ兵をおさめてしまったからだ。

むかし、織田方の城であったが、のちに廃城となっていたものを、今度の戦に出陣するとき、家康が修理して、家臣・本多広孝に守備させておいたのである。

小幡城へ入った徳川家康は、すぐさま、諸国の大名へあてて、今日の戦闘の大勝利を告げる手紙を書きはじめたという。

その中には、むろん、上田城主・真田安房守昌幸もふくまれている。

文面は、こうしたときの通例によって、大分に誇張されている。

「このたびの大合戦において、われらは、森武蔵守・長谷川藤五郎・池田恒興父子などの部将二十余名をはじめ、敵軍一万余を討ち取り申した。羽柴秀吉は、いまや身動きもならぬありさまでござる」

などと書きしたため、自分に味方をさせようとはかるのだ。

この家康の手紙を持った使者が上田城へ到着する前に、真田昌幸は、戦場のありさまを見とどけた草の者の報告を受け取っている。

手紙の誇張宣伝的な内容はさておき、徳川家康は、長久手の戦闘において、まぎれもなく勝った。

双方の主力が押し出した大決戦ではなかったが、家康としては、まさに、
「会心の勝利」
であったといえよう。
このような情況になることを考え、あらかじめ用意をし、準備をととのえておいたことが、すべて、
「役に立った……」
からである。
長久手の戦闘の後、秀吉と家康は、ふたたび対峙したまま、うごかなくなってしまう。
後年になって、秀吉は、
「あのとき、自分が戦を仕かけなかったのは、家康にまず、地の利を得られてしまったからである」
述懐をしている。
真田昌幸が、
「こりゃ、おもしろいぞ」
と、期待をかけたほどの大戦にはならなかったけれども、この小牧・長久手の戦の中の一挿話をのべておこう。
挿話の主人公は、後年の真田家にとって、大きな影響をもたらすことになるからだ。
その人の名を、本多平八郎忠勝という。

本多忠勝は、徳川譜代の重臣である。
数十度の戦場へ出て、そのたびに、武勲をあらわし、世に、
「家康に、すぎたるものが二つあり。唐の頭に本多平八」
とうたわれたほどの、いわゆる徳川家の〔名物〕であった。
徳川家康が、敵軍の三河侵入を知って、みずから兵をひきいて駆け向かった折、小牧山の本陣を、酒井忠次と本多忠勝にあずけたことは、すでにのべておいた。
やがて、戦闘が始まり、急報を受けた羽柴秀吉は軍団をひきい、長久手へ向かった。
そのとき、ほら貝を吹き鳴らしつつ、金の瓢箪の馬標を押し立てて長久手の方へ進みはじめた羽柴軍を、小牧山から望見した本多忠勝は、
「これは、いかぬ」
と看た。
秀吉の八万におよぶ本軍に包囲されたなら、一万三千をひきいた家康も、兵力において圧倒されてしまうであろう。
このときの忠勝は、長久手において主・家康が、あれほどに小気味よい勝利を迅速におさめようとは、おもってもみなかった。
「ああ……殿は、討死なさるにちがいない」
忠勝は、そう断じた。
となれば、

「こうしてはおられぬ！」

決然として、忠勝は三河武士の本領をつらぬくことにした。

家康と共に討死しようと、決意をしたのである。

忠勝は、酒井忠次へ小牧山の本陣をあずけ、みずから五百の手勢をひきつれ、小牧山を発した。

「途中で、おれが秀吉と戦ってくれよう！」

これが、本多忠勝の作戦であった。

むろん、こちらは全滅するにきまっているが、おもいきり暴れまわれば、秀吉軍が長久手へ到着する時間を遅らせることができる。

そこで忠勝は、庄内川をへだてた秀吉軍の側面から、しきりに弓や鉄砲を撃ちかけ、射かけて挑みかかった。

羽柴秀吉は、

「さそいに乗るな」

馬上に笑いをふくんで、小勢の本多部隊などを相手にせぬ。

それより、一時も早く長久手へ着いて、徳川家康と決戦をせねばならぬし、そうなれば、

「かならず、勝つ」

との自信に、みちみちていたのである。

本多忠勝にしても、敵が大軍だけに、いきなり突撃するわけにはまいらぬ。

さそいをかけて敵を引き出し、機に乗じ、秀吉の本陣へ突き込まねばならぬ。
しかし、秀吉は、どこまでもさそいに乗ってくれなかった。
小競り合いはあったが、ともかく敵味方が並行して、長久手へ駆け向かったのだ。
長久手へも程近くなったとき、本多忠勝は川へ馬をすすめ、愛馬に水をのませた。これを、はるかに望見した羽柴秀吉が、
「あの、川端で馬の口を洗わせている武者は何者か？」
側にいた稲葉伊予守にたずねた。
稲葉伊予守は、美濃三人衆の一とよばれた老将である。
「いずこでござる？」
「ほれ、見よ。向こうの川の……な、ほれ。鹿角の立物をつけた兜をかぶり、われらを前に悠々と馬をいたわっておるではないか」
「あ……」
「わかったか？」
「わかりました。それがし、すぐる姉川の戦陣で見たことがござる。あれこそ本多平八郎にござる」
「ほう……」
秀吉は何度もうなずき、
「なるほど。さすがに偉丈夫じゃな。わずかな人数をひきいて、われらの大軍に戦を仕かけ、

ひるまずに討死する決心らしい。三河守は、さても頼もしい家来をもっているわい。なれど、あの本多平八には一筋の矢も射かけるな。戦陣は利運によって左右されるものじゃ。この場で本多平八を討ち取ったところで、三河守との戦に利運なくば負けるし、利運あらば勝つことよ」

こういって、それからなおさらに、本多忠勝を相手にしなくなった。

そのうちに、小牧山へ駆け向かう家康の使者が本多部隊と出合い、勝利をおさめた家康が小幡城へ入ったことを本多忠勝へ告げた。

「まことか。それは、よかった」

忠勝は大よろこびで、たちまち、羽柴軍の側面から離脱し、小幡城目ざして駆け向かったのである。

この本多平八郎忠勝のむすめを、のちに真田源三郎信幸が妻に迎えることになる。

上田の真田昌幸も、岩櫃をまもる源三郎も、そうした宿命が待ち構えてい、そのために自分たちが、どのような変転を見るか……いまこのときは、夢にもおもわぬ。

湯けむり

一

締まり所を破って脱走した樋口角兵衛は、完全に消息を絶った。

「ふしぎでなりませぬ」

と、角兵衛捜索の草の者たちを指揮している鞍掛八郎が、源二郎信繁にいった。

羽柴・徳川の戦が起こり、真田家の草の者も、岩櫃をはじめ諸方への連絡のため、角兵衛ひとりに多くの労力をついやすこともならなかったが、

「それにしても、ふしぎ……」

なのである。

なんといっても角兵衛は、十四歳の少年にすぎぬ。

それが、草の者の鋭敏な探索の目を逃れ、逃走の痕跡も残さぬというのは、鞍掛八郎にとって不可解なことにちがいない。

「だれかが、かくまっているのでござりましょうか？」

とまで、八郎はいい出した。

「いいや……」
源二郎はかぶりを振った。
「なれど……？」
「八郎。気ちがい力と申すが、角兵衛がそれよ」
「はあ……？」
「きゃつめ。常人に、はかり知れぬ力をそなえておる」
「それは、まさに……」
「いや、われらが日頃、見なれている角めの怪力よりも、いざとなれば、もっともっと、凄まじい力が出るということだ」
「ははあ……」
「必死になって、角めが、どこぞの山の中を、まるで得体の知れぬ獣のように突きすすんでいる姿が、いま、おれの目にうかんでいる」
「ははあ……」
「いざとなると、角めは、恐ろしい」
源二郎は、そういうと、はるかに遠いものを見るような眼ざしになった。
「源二郎様……」
「う……」
「いかがなされまいた？」

「いや……何でもない」

源二郎は、まだ、砥石の居館に住み暮らしている。

上田城内の、源二郎の居館は、まだ完成していない。安房守昌幸も、気にかかってはいるのだろうが、いまは、角兵衛のことのみに関わっているわけにはゆかぬ。

小牧山に対峙している羽柴・徳川両軍のうごきがどのように展開するか……それが、いまの昌幸にとっては最大の関心事であった。

それに、いま一つ。

真田家にとって、新しい事態が起こりつつある。

悪いことではない。慶事といってよいだろう。

岩櫃の奥ふかく、ひっそりと暮らしていた真田昌幸の長女・於国の夫が、上田へあらわれたのである。

小山田壱岐守茂誠であった。

壱岐守茂誠は、信州・高遠城に立てこもって討死をした小山田備中守昌辰の子である。

武田家がほろびたとき、信州・佐久郡の内山城をまもっていた小山田茂誠は手兵をひきいて甲州へもどって行った。城を捨てて、主人の武田勝頼と行動を共にしようと決意したのだ。

すでに、新妻の於国を実父の真田昌幸のもとへ送りとどけていた小山田は、勝頼と共に死ぬつもりであったが、いざ甲州へ入って見ると、織田の大軍がみちみちていて、どうにもならぬ。

武田勝頼が天目山で自害したことも知った。そこで小山田は、諸方を隠れ移りながら、ようやくに、真田昌幸をたよって、姿をあらわしたのである。

真田昌幸は、よろこんで、小山田茂誠を迎え、のちに小県郡の内の村松というところを領地としてあたえた。

これがために、茂誠の妻・於国は、

「村松どの」

と、よばれることになる。

昌幸は、小山田茂誠の屋敷を、上田城下に建ててやることにした。

それやこれやで、昌幸の日常は多忙をきわめている。

聟の壱岐守茂誠は、これで、真田の家臣となったわけだから、

「一時も早く、岩櫃から於国をよびよせてやらねばならぬ」

と、昌幸は小山田邸の普請を急がせた。

今度は、夢中になって小山田邸の工事の指図をはじめた真田昌幸について、源二郎は、

「佐平次。父上はな、姉上を岩櫃の母上の手もとへ置いておきたくないのだ」

と、いい、

「おれも、これからは、しばしば姉上へお目にかかることができる。うれしいな」

目をかがやかせ、さも、うれしげであった。

その於国が、岩櫃から上田へ移って来る前に、小牧・長久手の戦況が草の者によってもた

らされた。

真田源二郎が、砥石の居館で、長久手の徳川軍の勝利を耳にしたのは、その翌朝である。

すぐに、源二郎は残月に飛び乗り、上田城へ駆けつけた。

「父上。長久手で、徳川が勝ったそうで……」

「そのことよ」

真田昌幸が、つまらなそうにうなずき、

「羽柴が勝てばよいに、な……」

と、いう。

まだ一度も会ったことがない羽柴秀吉なのだが、信長亡きのち、秀吉の目ざましい擡頭ぶりを見て、昌幸は好感を抱いている。それに引きかえ、何事にも、自分に対しては、

「煮えきらぬ……」

徳川家康を、昌幸は、どうも好きになれない。

関東の北条父子の信州侵入へ対して、家康が自分を都合よく利用しようとしていることを、昌幸は看て取っている。

だから、

「いざともなれば、徳川三河守は、おれを紙屑のように捨て去ることであろう」

と、おもっているのだ。

もしも、家康が秀吉に大敗し、ほろび消えたときこそ、

「おれは、北条と競い合って、甲斐の国へ攻めこむつもりだ」
などと、昌幸は冗談めかして源二郎へもらしたことがある。

二

しかし、真田昌幸は、羽柴・徳川戦の帰趨如何によっては、甲州の一角へ進出することを、考えていないものでもなかったようだ。
後年になって昌幸は、源三郎や源二郎に、
「あの折は、秀吉公からも、ひそかに使者がまいってのう」
と、告げた。
おそらく、羽柴秀吉も徳川家康同様に、誇張宣伝的な親書を昌幸へとどけ、
「そこもとの助力を得て、自分が家康を討ち殪したあかつきには、そこもとに甲斐の国の内の……」
何処其処をさしあげよう、などと、いい送ってきたのやも知れぬ。
となれば尚更に、真田昌幸は、羽柴家の勝利を期待していたことになる。
「まだ、戦はこれからだ」
長久手の戦闘などは、単なる小競り合いにすぎぬと、昌幸は看ていた。
草の者の急報によっても、それが、よくわかった。
草の者が第一報をとどけた後に、徳川家康の使者が駆けつけて来て、家康の誇大な手紙を

昌幸へわたした。

一読して、昌幸は破顔し、

「三河軍も、あせっておるようだな」

つぶやいたものである。

家康が諸方へ戦勝を告げるために送った使者たちは、羽柴秀吉の大軍が到着する前に、小幡城を出て行ったわけだが、日暮れに至って羽柴軍があらわれ、小幡城の攻撃にかかろうとした。

そのとき、稲葉伊予守、蒲生氏郷などが、

「夜の城攻めは相なりますまい」

と秀吉に進言をした。

もっともである。夜戦は攻撃する側の犠牲を大きくするからだ。

そこで秀吉は、翌朝を待って小幡城を攻撃することにした。

そうなることを、徳川家康は予測している。

羽柴軍が、城内からの夜襲を避け、軍を半里ほど退いて陣を張った。

その大軍の、夜営の篝火をのぞみながら、家康は、織田信雄や本多忠勝と共に小幡城を脱け出し、音もなく西方へすすんでから、ひっそりと庄内川をわたり、小牧山の本陣へ引き返してしまったのである。

これは長久手から小幡あたりを探っていた壺谷又五郎指揮する草の者たちの、

「目にもふれず、耳にもきこえなかった……」
ほどに、機敏な行動であったらしい。
羽柴秀吉は、朝になってから、これを知った。
さすがの秀吉も、瞠目した。
家臣たちの中には、
「かくなれば、小幡城を、ひともみに攻め落としてくれよう」
激怒するものもいたが、秀吉は苦笑し、
「家康がおらぬ小城を一つ、自分が攻め落としたところでどうなるものでもないぞ。三河軍に笑われよう」
すぐさま全軍をひきい、これも、楽田の本陣へもどって行った。
こうして両軍は、またも、小牧山でにらみ合うことになった。
今度の徳川家康の、迅速果敢な行動と、あざやかな戦闘ぶりは、たしかに羽柴秀吉を圧倒した。
秀吉が大分に、家康への認識をあらためたことは事実だ。
（うかつなことはできぬ。何をされるか知れたものではない）
織田信長に仕えていたころの秀吉は、数度、家康を見ているし、語り合ってもいる。
そのときの温厚質実で、口数もすくなく、自分にもへり下った態度で接してきた家康を、才気煥発の秀吉は、いささか、あまく看ていたようなところがあった。

それだけに、秀吉がうけた衝撃はするどかったといってよい。

真田昌幸は、

「たがいに、大将が乗り出し、二里の近間で陣を構えているというに、何故、戦わぬのだ。まことにもって、ふしぎなこともあるものよ」

草の者の報告が、つぎつぎにとどき、小牧の様子がわかるにつれ、呆れ果てたように、

「おりゃ、羽柴筑前を見損のうていたやも知れぬぞ」

といい出したりした。

兵力の差が格段にちがうのだから、家康の方から攻撃を仕かけることはできない。

それは昌幸にもわかるのだが、大軍をひきいている秀吉が、どうして、小牧山なぞという小さな山にかたまっている徳川・織田軍を、

「もみ潰せぬのか……？」

不審にたえぬ。

両軍は、それぞれの本陣や、諸方の砦、陣地などを修築したりして、戦端をひらく気構えは見せているけれども、容易にうごかなかった。

「おれの目で、たしかめて見たいものだ」

と、昌幸はいったが、そうもゆかぬ。

そのころ、上田城の二の丸の外に建てられた小山田壱岐守の屋敷へ、いよいよ、於国が移って来た。

母の山手殿は、まだ上田に、姿を見せない。
そのかわり、源三郎信幸が、姉・於国の行列を指揮し、上田へやって来たのである。
於国が久しぶりで、夫の小山田茂誠に対面した夜、上田城内で祝宴がひらかれた。
祝宴といっても、戦時体制にあることだし、ごく質素におこなわれたらしい。
向井佐平次は、砥石の居館にいて、上田へは出て行かなかった。
そのかわり、妻のもよは、女たちと共に上田城へおもむき、いそがしく立ちはたらいたのである。
祝宴がすみ、砥石へ帰って来たもよに、佐平次が、
「どのような、お方だ？」
と、於国のことをたずねた。
「御屋形さまに、よう似ておいでした」
もよは、そうこたえた。
父の真田昌幸に、よく似ているというのなら、
（あまり、美しい顔だちではないらしい……）
ことになる。
「源三郎様の、お顔を見たか？」
「あい」
「どうであった。於国さまは、源三郎様に似ておわしたか？」

「いいえ……」
「ふうむ……」
「どうなされたえ？」
「いや、別に……」
佐平次が、於国の存在を知ったのは、折にふれて、源二郎が、
「岩櫃の姉上……」
と、いい出すのを聞いてからである。
はじめは、於国が、すでに小山田壱岐守の妻になっていることも知らなかったし、武田滅亡の際に、小山田が妻を真田昌幸のもとへ送りとどけ、岩櫃へ逃がした事情も、今度はじめて、源二郎から聞かされたのだ。知らなかった。
於国の出自についても、向井佐平次は何か割り切れぬものを感じるのである。
於国も、また、昌幸の正室・山手殿が生んだ子ではないのであろうか……。

三

信濃の春は短かった。
山桜が散って、朝夕は、まだ冬の名残のようにきびしい冷え込みがあっても、日がのぼると、陽光の輝きは、早くも夏の到来をおもわせる。
その日の昼近いころになり、鞍掛八郎が一人で、砥石の居館へあらわれた。

裏手の薪小屋のあたりで、もよと共に立ちはたらいていた向井佐平次が、これをみとめ、
「あ……八郎殿か」
「おお、佐平次殿。何をしてござる」
「女房どのの、手つだいをしている」
と、こういう言葉が難なくすべり出るようになった、このごろの佐平次である。
「仲よう結構」
「いや、なあに……」
「源二郎様は？」
「昼寝をしておられる」
「では……」
「何か、あったのか、八郎殿」
「いや、別に……」
行きかけたが、八郎は、
「聞きたくば、源二郎様のもとへまいられい」
そういって、裏口から居館の中へ消えた。
「佐平次どの。どうなされた？」
「もよ。何か、あったらしいぞ」
「何かとは？」

「わからぬ。ともかく、行ってみる。気になってきた」
「およしなされ」
「どうして？」
「源二郎さまの御用あらば、お前さまがよばれましょう」
「それも、そうだな」
こちらから、よばれもせぬのに源二郎の居室へおもむくのも、たしかに妙なことではある。
まさかに、鞍掛八郎から「聞きたければ来い」といわれました、ともいえぬではないか。
「もよ」
「あい？」
「これは、どうも、角兵衛様の行方が知れたのではないかな？」
「八郎どのの目の色が、すこし、変わっていました」
「そのとおりだ」
もよも、草の者のむすめだけに、こうしたところは他の女と、いささかちがうところがある。
佐平次夫婦の予想は、或る程度、あたっていたといえよう。
鞍掛八郎は、居室で身を横たえている真田源二郎に、
「虚空蔵山の山中で、才助が殺害されておりました」
と、告げた。

「何……」
源二郎が、半身を起こし、
「それは、まさに、角めの仕わざだ」
迷うことなく、いいきったものである。
虚空蔵山は、太郎山の西方の峰で、才助という草の者は、鞍掛八郎の下につき、樋口角兵衛の探索にあたっていた。
源二郎も八郎も、角兵衛は、
「かならず、領内にひそみ隠れている」
と、見きわめをつけている。
それも、砥石や上田から、それほど離れてはいない場所か……または、岩櫃城の近くへもどって行ったにちがいない。
岩櫃の近辺は、源二郎から知らせをうけた兄・源三郎が、
「心得た」
と、岩櫃の草の者をつかい、探索をつづけてくれているはずだ。
けれども、虚空蔵山で草の者・才助を殺したのが、もしも樋口角兵衛だとしたら、
「角めは、このあたりに、ひそみ隠れている……」
ことになるではないか。
才助は四日ほど前から、

「越後境のあたりまで、探して見ます」
と、鞍掛八郎にいい、砥石を出発したそうな。
「まる二日で、もどってまいる」
才助が、そういいおいて出て行っただけに、
「私も、何やら胸さわぎがいたしまいて……」
「ふむ。それで？」
「今朝、暗いうちに砥石を出で、太郎山から虚空蔵の草道をぬけてまいりましたところ……
そこで、才助の死体を見出しましたのでござります」
〔草道〕とは、別に草の生い茂っている道という意味ではない。草の者のみが知る抜け道、早道のことを指す。
草の者・才助は、虚空蔵山の山林の中に倒れていた。
山林の中にも〔草道〕は通っている。
才助の死に様は、仰向けに、ぐったりと倒れ、鼻腔からおびただしい血がながれており、それが乾いていた。
鞍掛八郎が見たところ、これは撲殺であった。
刃で斬られた個所は、一つもないのである。
「撲り殺されていたと？」
「はい」

「まさしく、それは角めだ。それで才助の死体は？」
「山づたいに、砥石の御曲輪内へ担ぎこみ、いま、米山曲輪の木戸へあずけておきまいた」
「気の毒なことをした……」
「なれど源二郎様。もし、角兵衛様が才助を殺害なされたとすると、いったい、どのようにして……？」
「わからぬ。おれにもわからぬようなまねを角めはするのだ。それでなくては、真田の草の者が、何でむざむざと十四の少年に殺害されようか……」
「そ、そのことでござります」
「感心している場合ではないぞ、八郎。角めは、きっと、このあたりにいる。おれは、このことを上田の父上へ知らせて来る」
「お知らせ申して、何となされます？」
「何……」
「これは、われらのみにて為すべきことでござります」
「ふうむ……」
そういわれてみれば、そうかも知れなかった。
草の者を撲殺するほどの角兵衛なのだから、真田昌幸へ告げてみても、それは、
（いたずらに、父上を心配させるだけのことだ）
と、源二郎はおもい返した。

それに、角兵衛探索のことは、
「源二郎。お前にまかせる」
昌幸から、そういわれていたはずである。
「ともかく、才助の死体をあらためて見よう」
「御供つかまつります」
「何気ない様子にて、出て行け。おれは、後から行く」
「はっ」
「だれにも、申すなよ」
「佐平次殿へも……？」
「いうたところで、仕方もないではないか」
「いかにも」
やがて、真田源二郎は米山曲輪の木戸へのぼって行った。
番卒が二人、小屋の中の才助の死体をまもっている。
この二人に、鞍掛八郎は、かたく口止めをしておいた。
「ごらん下されませ」
八郎が、死体にかぶせてあった筵を除いた。
死臭が、濃くただよっている。
殺されたのは、昨日の朝か、一昨日の夜であろう。

「才助に身寄りは？」
「ござりませぬ」
二十四歳の生涯を終えた才助の遺体に、源二郎は合掌し、
「ともあれ、このあたりの、しずかな場所に埋めておこう。どうだ？」
「それがよろしいかと……」
「角めを捕らえたのちに、あらためて、才助の供養をしてやろうではないか」
「かたじけなく……」
「では、たのんだぞ」
居館へもどってきた源二郎を、向井佐平次が出迎えた。
「御供もいたしませぬで……」
「よいわ」
「いずこへ、お出かけでございました？」
「おのれの知ったことではない。おのれは女房の腰に、まといついておればよいのだ」
源二郎は、十八の少年ともおもえぬ言葉づかいをする。
もっとも、そのころの十八歳の男といえば、もう一個の青年といってよかった。
源三郎も源二郎も、すでに元服（一種の成人式）をすませている。もう二年も前にだ。
源二郎は、そのときまで幼名の「於弁丸」を名乗っていた。
源二郎は、後年、真田左衛門佐信繁と名乗ることになるのだが、彼は、

「真田幸村」の名をもって、人びとに知られている。

幸村の名は、あまりにも人口に膾炙してしまっているので、この小説でも、親しみぶかい名をもって、彼を描きつづけてゆきたい。

したがって、これからは、彼を、

「源二郎幸村」

と、よぶことにしよう。

ところで……。

源二郎幸村は、草の者・才助の死体が発見された三日後に、樋口角兵衛を見た。

四

その日の朝。

砥石の居館で目ざめた真田源二郎の躰は、気味がわるいほどに汗ばんでいた。

（まるで、夏が来たような……）

暖かさ、というよりも、蒸し暑いのである。

空は、どんよりと曇っていたが、小鳥の囀りがしきりであった。

（鳥どもも、この暑さに魂消ておるらしい）

飛び起きた源二郎が、

「佐平次……佐平次」
大声で呼んだ。
すると、
「お目ざめでござりまいたか」
入って来たのは向井佐平次ではない。
これも、源二郎の側近くつかえている大滝伍平であった。
「佐平次は、いかがした？」
「はい。連れ立ちまして、真田の庄へまいりまいたが……」
「連れ立ってとは……もよとか？」
「はい」
「何をしにでかけたのだ？」
「存じませぬ」
「おのれ……」
源二郎は、怒気を発し、
「佐平次め。おれがことを忘れておるのか。けしからぬやつだ。ちかごろは女房の尻に敷かれ、いわれるままに、女どもの手つだいにはたらき、おれの世話を満足にせぬ」
「は……」
「そうであろうが。ちがうか」

「いえ……まったく、もって……」
「いま、おれがいうたことを、しかと佐平次につたえておけ」
「心得まいた」
「女とは、さほどによいものなのか、どうじゃ？」
「は……」
「どうじゃと尋いておる」
大滝伍平は三十五歳で、妻も子もある。
どうにも返事に困っている伍平へ、源二郎が、
「よし。佐平次に代わって手つだいをせよ」
と、髪を直させ、身仕度をととのえるや、
「かならず、佐平次へ申しつたえておけ。おれがもどったら、きっと成敗をすると、な」
「はっ」
「馬ひけい！」
「いずこへ、まいられまする」
「いずこでもよい。伍平の知ったことではないわ」
朝餉もとらず、源二郎は愛馬・残月へ飛び乗り、居館を走り出て行った。
どうも、
（朝から、おもしろくない）

のである。

佐平次のこともそうなのだが、それより樋口角兵衛が草の者・才助を撲殺したことをおもうと、

（忌々しくてならぬ）

のであった。

（角め。いったい、何故に、これほどまでにわれらを苦しめるのか……）

その理由がわからぬ。

いや、わからぬでもない。

岩櫃の母や兄の宿命を、角兵衛は自分が背負ってでもいるように気負い立っているのだ。

少年のくせに、あらぬ妄想をしてやまない。

源三郎・源二郎兄弟が、一分の隙もなくこころを合わせているのに、まだ一人前の男でもなく、真田家の臣でもなく、いうならば真田一族の、

「少年にすぎぬ……」

角兵衛が、真田家のためにとおもいつめたものか、前後の見さかいもなく、お徳を襲ったり、締まり所を破って草の者を殺したりする。いまはもう、角兵衛が才助を殺害したことに、源二郎は一点のうたがいも抱いていない。

（気ちがい犬のような角めを、父上や兄上は、何故、あまやかしておくのだ。きゃつめを生かしておいては、行く末、何が起こるか知れたものではないぞ）

どうも、真田昌幸や、源三郎信幸は、源二郎ほどに、
（角めのことを、よくよく、わきまえていないらしい）
そう、おもえてならぬ。
このごろ、源二郎幸村は、樋口角兵衛を、
（恐ろしいやつ……）
と、おもいはじめている。
源二郎の五感は、角兵衛をおもうとき、戦慄する。
（角めの恐ろしさを知っているのは、このおれだけなのか……）
おもうだに、居ても立ってもいられぬ。
草の者の、きびしい探索の目をくらまし、さらに、その草の者を人知れず殺した十四歳の樋口角兵衛であった。
（角を、生かしておいてはならぬ）
そのおもいは、いま、源二郎の胸につのるばかりだ。
（角めは……天魔が叔母上の腹に宿って生まれたのだ。人ではない）
とさえ、おもわれる。

源二郎が、上田城の門へ駆けこんだころに、向井佐平次ともよが砥石の居館へもどって来た。

「これ、源二郎様が、ひどく怒っておられたぞ」
大滝伍平が駆け寄って来て、佐平次へ告げた。
伍平から、源二郎の言葉を聞き、
「さようでしたか……それは、困った……」
さすがに、佐平次も顔色が変わったようである。
「な、佐平次。源二郎様はな、おぬしをもよに奪られてしまったのが、くやしいのであろうよ」
「まさか……」
「いや、そうにちがいない」
以前は、源二郎の側から片時もはなれなかった佐平次だが、もよと夫婦になれば、そうもゆかぬ。
なんといっても、そこには、もよとの生活が割って入るからで、それは源二郎もよくわきまえているはずだ。
なればこそ、大滝伍平などにも、身のまわりの世話を命じるようになったのである。
けれども、佐平次は、
（おれが、もよと夫婦になってから、源二郎様の、おれを見る目が変わられた……）
と、感じている。
努めて、源二郎の側へつき従おうとするのだが、

「お前は、もよのそばへ行け」

とか、

「おれよりも、もよのそばにいるほうがたのしいのであろうが……」

などと、佐平次をにらむように見て、皮肉めいたことをいうのだ。

そうなると、佐平次も、つい、おもしろくなくて、

（ならば、勝手になさるがよい）

ことさら、源二郎の居室へあらわれぬようになった。

今日も佐平次が、もよと共に出かけたのは、真田の庄にある蔵屋敷へ、布・針・糸・料紙など、居館で使用する備品を受け取りに行ったのである。

砥石城が廃せられてから、米蔵や武器庫は別として、納戸関係の蔵は真田の庄へ移築してある。

もっとも、これから上田の城や城下町が整えられてゆくにつれ、真田の庄の蔵屋敷も、上田城内へ移ることになろう。

「佐平次。これからすぐに、源二郎様のもとへ行くがよい。そうしろ」

と、大滝伍平がいった。

「どこへ行かれたのですか、源二郎様は……」

「たぶん、上田へおもむかれたのだろう。さ、早く行け」

「はあ……」

「馬を出してやる。乗って行くがよい」
伍平は、親切であった。
「源二郎様のもとへ行って来るぞ」
佐平次は、大台所へ走って行き、そこにいたもよへ、
「御機嫌がわるいそうな」
「源二郎さまが？」
「うむ……」
すると、もよは拗ねたように顔をそむけ、返事もせぬ。
「これ、もよ……」
「存じませぬ」
身をひるがえし、もよは奥へ駆け去った。
佐平次は、舌打ちをした。

五

源二郎が上田城へあらわれたとき、真田安房守昌幸は、尼ヶ淵にのぞんだ南面の石垣の工事を指揮していた。
士卒も、人夫にまじって石を運び、土を掘る。
昌幸自身も泥まみれとなり、四尺ほどの青竹の先に白布を巻きつけたものをつかみ、これ

を打ち振り打ち振り、声を涸らして指図をあたえながら、うごきまわっていた。
それを遠くから見たとき源二郎は、角兵衛について、父へ進言しようとした決意が鈍った。
「人数を出し、虚空蔵山から太郎山へかけて、山狩りをおこない、角めを捕らえるか、もし、捕らえきれなくば、その場で討ち取る……」
ことを、昌幸に説きつけるつもりであった。
だが、家来や人夫と共に、汗と泥にまみれ、上田城の完成を急いでいる父の姿を見ると、
（いや、父上には申しあぐるまでもない）
反省したのである。
樋口角兵衛の探索については、
「お前が、草の者を指図して、事にあたれ」
父に、そういわれたはずではないか。
草の者・才助が襲われたのも、
（もとはといえば、おれが行きとどかなかったからだ）
と、おもい直した。
草の者ばかりに探索をまかせ、源二郎は砥石の居館にいることが多かったのである。
（そうだ。おれが真っ先に、出て行かねばいけなかったのだ）
源二郎は城内・二の丸の馬屋へつないでおいた残月を引き出した。
「砥石へおもどりでございますか？」

馬屋をあずかっている足軽の一人が問うたのへ、
「いや……」
源二郎はかぶりを振り、
「日暮れまでには、上田へもどる」
いうや、残月に飛び乗って、城門から走り出た。
頭も胸も重い。
（別所の湯へ、ひたって来よう）
と、おもいたったのである。
上田の台を、いったん東へ下った源二郎は、やがて馬首を南へめぐらし、千曲川の浅瀬をえらび、
「それっ……」
残月の馬腹を軽く蹴って、川へ乗り入れた。
川をわたった源二郎は、勝手知った塩田平へ、まっしぐらに駆け進んだ。
このあたりから、別所の温泉けむりがたちのぼる天神岳の山裾までは十キロメートルほどであった。
しばらく行ってから、源二郎は馬をとめ、振り返って見た。
草の者に救われ、別所の安楽寺で傷ついた身を養っていた向井佐平次をはじめて見たのは、一昨年の、ちょうどいまごろであった。

そして佐平次をつれ、源二郎一行が塩田平を上田に向かったとき、千曲川をへだてた段丘を佐平次に指し示し、

「いまに、あの山へ、父上が城を築かれる。真田の城をな」

と、源二郎が予言めいたことをいったものだ。

あのとき源二郎は、このように早く、上田城が築かれようとはおもわなかった。

主家の武田家が滅亡したばかりで、天下の趨勢がどのようになるか知れたものではなく、真田昌幸も、岩櫃・沼田の両城を本拠に、

「しばらくは、戦つづきになろう」

などと、源三郎・源二郎兄弟に語っていたし、

「砥石の城も、いまのうちに修築をしておかねばならぬ」

とさえ、もらしていたのだ。

天下は、ほとんど織田信長に掌握され、昌幸も、信長へ屈服せぬわけにはゆかぬことになったが、信長がもし、武田家の有能な武将としてきこえた真田昌幸の存在を、

「ゆるさぬ！」

というならば、昌幸も、手をつかねて首をさしのべるつもりは毛頭なかったのである。

ところが、信長の変死によって情勢は、さらに大きく変わった。

その変転が、いまの真田昌幸に築城の余裕をあたえてくれたことになる。

（二年前には、尼ヶ淵の崖の上に、ただ深い木立のみがあっただけだ）

それがいま、いくつもの櫓がそびえ、曲輪の建物の屋根が、びっしりとならんでいる。源二郎は、夢を見ているようなおもいがした。

（おれが父上は、えらいな……）

自分を愛してくれている父親の側に、いつもつきそっている源二郎だけに、山手殿やお徳、それに角兵衛などの紛糾をもてあまし、ふとい溜息をもらしている父の顔を見ると、

（父上ともあろうものが……）

煮え切らぬ昌幸の態度を見るに見かねるようなことが多かった源二郎なのだが、しかし、徳川や羽柴や、関東の北条、越後の上杉などの大勢力の動向を素早く見きわめ、築城へ踏み切った真田昌幸の俊敏な決断を、いまさらながら、

「えらい！」

みとめぬわけにはゆかぬ源二郎であった。

「えらい。おれが父上は、えらい」

声にのぼせて、源二郎は、うっとりと、彼方の上田城を見入った。

城を築くことは、闘志のあらわれである。

そこも好きであった。

大勢力の間にはさまれ、おとなしく息をひそめているようなことをせず、新しい本城を築き、真田家の実力を誇示した上で、徳川・羽柴・北条・上杉へ立ち向かおうとしている父を、源二郎は、

（たのもしい、父上……）
と、感じたのである。
樋口角兵衛の脱走などは、いまの真田昌幸にとって、
（とるにたらぬこと……）
だと、源二郎はおもいたかった。
「それ、行くぞ」
源二郎は、やさしく残月にいい、馬首を叩いてやった。
ともかく、久しぶりで別所の温泉へつかり、汗を落とし、ゆっくりと上田へもどるつもりである。
今夜は上田の居館へ泊まり、父・昌幸の酒の相手でもつとめよう。しかし、角兵衛のことは口に出すまい。
（角めのことは、明日から、おれがやるのだ）
もしも、角兵衛を探し出したとき、その場の様子によっては、
（おれが、討てと命じればよい）
と、おもった。
（父上が角めのことは、おれにまかせるといわれた。なれば、おれが決めてよい）
そこへ、決意がかためられたのである。
源二郎は、いま、ゆったりと残月の背にゆられている。

砥石の居館を走り出たときの苛立ちは、嘘のように消えていた。
空に張りつめ、うごかなかった厚い雲の層が、すこしずつ、うごきはじめた。
風が出て来たのである。
今朝、目ざめたときの不快な蒸し暑さも消えていた。
風は、まだ微かに冷たい。
源二郎は、わざと木立の中の道をえらんで、馬を歩ませた。
蕗の香りが、なまぐさいまでに感じられる。
源二郎の顔に、少年らしい無邪気な表情が浮かんでいる。
宮ノ入とよばれる村里の外れの林の中を、源二郎は南へ抜けようとしていた。
別所の湯は、間近い。
「それ、それ……」
声をかけて、源二郎が、馬首を叩いた。
残月が、急に、足をとめたからである。
「これ……これ、どうした?」
残月は、うごこうともせぬ。
(妙な……?)
いぶかしげに、源二郎が腰をのばし、残月の目を見ようとした、その瞬間であった。
林間の静寂な大気を引き裂き、唸りを生じて矢が疾って来た。

腰をのばし、身をななめに乗り出さなかったら、この一矢は、源二郎の躰のどこかへ突き立っていたにちがいない。

「あっ……」

叫んで、源二郎は、われから身を投げ出すように残月の背から転げ落ちた。

弓弦の音と共に、二の矢が、源二郎の躰をかすめた。

源二郎は身をひるがえして木蔭へ隠れ、大刀を引き抜いた。

残月が棹立ちとなり、するどく嘶いた。

六

源二郎は、木蔭から木蔭を縫って走り出した。

走りながら、残月の嘶きを背に聴いた。

そのとき……。

横合いの木蔭から走り寄って来る足音に気づき、源二郎は足をとめ、大刀を構えた。

「いたぞ！」

わめいて、野臥のような牢人が飛び出して来るのへ、

「推参な！」

叫びざま、源二郎が猛然と切って出た。

「うぬ」

牢人は、突き入れた源二郎の刀を打ちはらい、飛び退いて、体勢を立て直そうとした。
つまり、それほどに源二郎の攻撃が迅速をきわめていたからであろう。
だが、飛び退いた牢人の躰は、目測を誤って赤松の幹へ打ち当たり、
「あっ……」
足もとが、よろめいた。
そこを、すかさず、
「やあ！」
源二郎が躍りあがるようにして刀を揮い、牢人の頸部を切り裂いた。
血が疾り、牢人は悲鳴を発し、転倒している。深く切られたのではないが急所だけに、
「う、うう……」
呻き、もがいて、それでも必死に逃げようとする牢人へ、
「おのれ、何者……？」
近寄りかけて、源二郎が振り向いた。
手槍を振りかざすようにして、別の牢人が背後から襲いかかって来たからである。
振り向いた源二郎の目の中へ、大きく口を開けた牢人の髭に埋まった顔が迫り、牢人の腕が大きくうごいた。
走りかかりつつ、牢人は源二郎へ手槍を投げつけたのである。
「む！」

源二郎は片膝をつき、頭上を疾りぬけて行く手槍が、うしろの赤松の幹へ突き立つよりも早く、土を蹴って牢人を迎え撃った。

手槍を投げ、これをかわされたと見るや、牢人は腰をひねって大刀を引き抜いたが、そこまでが精一杯のところで、約八メートルを一気に駆け寄った源二郎の刃を、もう、かわしきれなかった。

頭から顔、喉元へかけて源二郎の刃を受けた牢人は刀を落とし、両腕を突きあげるような姿勢で、ゆっくりと、仰向けに倒れて行った。

そやつにはかまわず、源二郎は素早く身を引き、木蔭へ隠れた。

二人の牢人の呻き声が、まだ、聞こえている。

そのほかには、人の声も、気配もなかった。

（だが、まだいるはずだ。すくなくとも、おれに矢を射かけたやつめが、どこかに隠れている……）

油断はできぬ。

（それにしても、何者なのか……？）

仕留めた二人の牢人の顔には、見おぼえがない。

野盗ならば、ただ一人で馬に乗っている源二郎を襲うわけもない。馬がほしいのなら、木蔭へ隠れた源二郎にかまわず、残月を奪ってしまえばよいのである。

（残月は、どうしたろう……？）

あれきり、残月の嘶きは聞こえない。
身を屈め、大刀を小脇に構えた源二郎は、すこしずつ木蔭から木蔭へ身を移して行った。
全身の神経を張りつめ、敵の矢の襲撃にそなえていたが、弦音もしなければ、人の気配もない。
（あっ……いた。残月は無事だったか……）
彼方の木の間に、残月がいる。
残月は馬首をうつむけ、何事もなかったように立っている。もし、近くに敵が潜んでいるなら、残月がもっと緊迫の様子を見せていなくてはならぬ。
それを見ると、源二郎はたまりかねた。
敵は、もう、いないのかも知れぬ。
あの二人の牢人のうちのどちらかが、矢を放ったのであろうか……。
「残月……」
低く呼びかけ、源二郎が木蔭から出た。残月が、こちらを見て、うれしげに嘶いた。
「おお……」
もう、大丈夫だとおもった。
背を伸ばし、血にまみれた刃をぬぐって鞘へおさめた源二郎が、二歩三歩と残月へ歩み寄った。
その瞬間である。

源二郎の頭上から、大きな石の塊が凄まじい勢いで落ちて来た。
いや、石の塊ではない。獣でもない。
人であった。
なんと、樋口角兵衛が樹の上に隠れてい、源二郎へ襲いかかったのである。
たちまち、押し倒されて声も出ぬうちに、源二郎の頸を、角兵衛のふとくたくましい腕が容赦なく締めつけてきた。
「か、角……」
辛うじて、源二郎がいった。
角兵衛の巨体は、異様な臭気につつまれている。野獣のように強烈な体臭であった。
「源二郎め！」
怒鳴りつけて、角兵衛は源二郎を仰向けにし、その躰へ跨がった。
十四歳の少年ともおもえぬ髭面の両眼が、爛々と源二郎を見据えている。
「か、角……退け。の、退かぬか……」
叫んだつもりだが、ほとんど、声にならなかった。
角兵衛をはね退けようと、もがいてみるのだが、磐石の下敷きになったようで、
（ああ……もう、いかぬ……）
締めつけてくる角兵衛の手指が喉へ喰いこんできて、源二郎は意識をうしないかけた。
「源二。おのれが死ねば、真田家は安泰だ。死ね、死ね、死ね」

と、角兵衛がわめいた。

だが、その声を源二郎は聴いたかどうか……両眼を白くむき出し、苦悶にゆがむ口を開けた源二郎の頸を、角兵衛は一気にしめつけようとした。

その角兵衛が、突然、咆哮をあげてのけぞった。

小暗い樹間を疾って来た小さな物体が二つ、角兵衛の肩と左腕へ喰い込んだのである。

「だれだっ！」

立ちあがった角兵衛が腰の太刀を引きぬき、身構えた。この太刀は武士が平常に帯びているものではない。あきらかに戦場へ出て甲冑に身をかためたとき、腰へつけるものであった。

角兵衛は弓矢を躰につけ、破れてはいるが袴も穿いている。髪は乱れほうだいで、手足も顔も日に灼けつくしていた。

「だれだっ！」

こたえはない。

真田源二郎は、ぐったりと倒れたままだ。

「うぬ！」

ともかく、こうなっては源二郎の息の根を完全にとめておこうと、角兵衛はあたりの気配をうかがいつつ、太刀の切先を源二郎の胸へ向けた。

ぴゅっ……。

と、また何かが飛んで来て、太刀をつかんだ角兵衛の右腕へ突き刺さった。

「むう……」

太刀を落とし、よろめいた角兵衛の左の太股へ、つづけて命中した。

それは人の手指ほどの太さの、尖端がするどい一種の手裏剣のようなものである。

しかし、いまの角兵衛には、その形状を見とどける余裕とてなかった。つづけざまに、この異様な手裏剣が角兵衛の前後左右へ飛んで来た。

さすがの角兵衛も、逃げぬわけにはゆかぬ。

手裏剣を投げて来る敵が何処にいるのか、見当もつかぬのだ。

歯を噛みならし、唸り声をあげつつ、樋口角兵衛は走り出した。

七

「もし……もし、源二郎さま……もし……」

女が自分をよんでいる。

源二郎の意識が、すこしずつ、よみがえってきた。

（お徳どのが、おれをよんでいる。してみると、おれは、名胡桃の城に来ているのか……）

と、おもった。

「お徳どの……」

「まあ、何を……」

自分を抱きかかえている女が笑った。

「あっ……」
はっきりと自分を取りもどした源二郎が、
「お江ではないか！」
「はい」
まさに、草の者のお江なのである。
「お前が、どうして……？」
「今朝早く、上田のお城を発ちましてござりまする」
「では、上田へ来ていたのか？」
「はい。昨日の夕暮れに、浜松からやってまいりました」
「父上に会うたか？」
「はい。壺谷又五郎どのよりの知らせを持って参じました」
「ああっ……」
「いかがなされました？」
「か、角兵衛が……」
「追いはらいましてござります」
「お前が、か？」
「はい。舞田峠の方へ逃げて行かれました」
「ここは、どこだ？」

「先刻と、同じ場所でござります」
「どうして、お江が、此処へ……？」
「上田を発ちましてから、ふと、おもいつきまして、別所の温泉に久しぶりに浸ってまいろうかと存じ、立ち寄りました。ゆるりとして、別所を発ち、もどってまいる途中にて、樋口角兵衛さまが野臥を二人つれ、源二郎さまを追うて行くのを見かけまいたので……」
「さ、さようか……」
お江は、角兵衛についても、ひととおりのことをわきまえているらしい。
「よく、追い退けたな」
「忍び道具を使いましたゆえなあ」
「さもあろう。したが何故、討ち取らなかった？」
「まあ……」
あきれたように、お江が源二郎を見入った。
残月がくびを振って足踏みをしている。
「角兵衛さまは、御屋形さまの甥御さまではござりませぬか」
「何を申す。危うく、おれは角めに締め殺されかけたのだぞ」
「なれど、こうして生きておられまする」
「それとこれとは別じゃ！」
大声で叫び、源二郎は喉に強い痛みをおぼえた。

「あ……う、う……」
「さ、肩へおつかまりなされませ」
「うむ……」
「いずこにまいられますのか？」
「おれも、別所へ、湯浴みに行くつもりであった」
「まあ、それはそれは……では、折角のことでござりますから、わたくしが御供をいたしましょう」
お江は、そういって、源二郎を残月の背へ乗せた。

八

温泉の硫黄の匂いをふくんだ湯けむりがたちこめる浴舎の中で、真田源二郎は湯壺へ身を沈めている。
（ああ……すんでのことに、死ぬるところであった……）
それにしても、いよいよ樋口角兵衛の恐ろしさを確認したことになる。
（おれの頸を締めてきた、あのちからは、人のものではない）
まだ、頸や喉が痛む。そのとき、顔まで浮腫がきて、何か自分の顔だという感覚がなかった。
浴舎の外で、お江が残月に飼葉を食べさせているらしい。
馬に語りかけるお江の声がきこえている。

往古には〔七久里の湯〕とよばれ、天神岳の山ふところに湯けむりをあげている別所の温泉は、いま、源二郎がいる浴舎のほかに、三カ所の湯源がある。

このあたりの、村の長をつとめている山田斎四郎の屋敷へ、すでに、お江は出向いて行き、

「源二郎さまが、此処におられますことを、上田の城へおつたえ下され」

と、たのんでおいた。

飼葉は、山田屋敷の小者が運んで来てくれた。

「もし……もし、源二郎さま……」

外で聞こえていたお江の声が、急に、耳もとでしたものだから、

「どうした？」

源二郎が、はっと閉じていた目をひらいた。またも、角兵衛があらわれたのかと、一瞬、そうおもったのである。

「あっ……」

湯壺の中で振り向いた源二郎が、あわてて、目を逸らした。

お江の、みごとな双の乳房が眼前にゆれうごくのを見たからであった。

「わたくしも、入って、よろしゅうございますかえ？」

「うむ……」

もとより、浴舎の中は混浴である。

怪しむには足らぬことだが、源二郎にとって、このように成熟した女の裸身を見たのは、

実にはじめてのことなのだ。
「さ、向こうをおむきなされませ。お躰を、もみほぐして進ぜましょう」
お江の両手が、源二郎のくびすじや肩、背、腕のあたりをもみほぐしはじめた。
「ああ……」
なんともいえぬこころよさに、おもわず源二郎は声をあげた。
「いかがでござります？」
「よい。まことに、よい心地だ」
「ところで、向井佐平次どのは、達者でおりまするか？」
「おお、元気だ。したが佐平次め、このごろは女房どもに籠絡され、おれが手もとへは、めったにあらわれぬ」
「まあ……」
源二郎が、佐平次への憤懣をのべたてはじめた。
お江の裸の腕や乳房の先が肩や背にさわるので、源二郎は気が気でなく、それをまぎらわすためもあり、夢中で佐平次をののしった。
お江が、ふくみ笑いをもらした。
「何が、おかしいのだ？」
「いえ、別に……」
いつの間にか、外は、霧のような雨になっていた。

お江の手が、源二郎の背中から胴へ、腹へとまわってきた。
「いかがでござります？」
「う……よい、心地……」
「源二郎さま……」
「な、なんだ？」
「あなたさまは、まだ、女の躰を御存知ではござりませぬな？」
「う……」
いつの間にか、源二郎は、お江の双腕に抱きしめられている。
「お、お江……」
「草の者の女は、おきらいでござりましょうや？」
「いや……きらいでは、ない」
「うれしいこと」
ふわりと源二郎の躰が横倒しになり、お江の太股の上へ乗せられた。湯の中のことで、男の躰も軽いのである。
「な、何をする……？」
こたえはなかった。
そのかわりに、お江の顔が源二郎の顔へ押しかぶさってきて、やわらかい唇が源二郎のそれをまさぐりはじめた。

源二郎は、惑乱している。
お江のするがままに、手足も、躰もゆだねるよりほかに仕方もなかった。
どれほどの時がすぎたろう。
ふりけむる雨の中に、暮色がせまってきた。
源二郎は、うつ伏せになって、湯壺の縁の板敷きへ身を倒していた。
お江は、その背中へ顔を押しつけている。
たくましいまでにもりあがったお江の臀部が、湯気の中に浮いていた。
「源二郎さま。今夜は、山田屋敷へお泊まりなされませ」
「お前はどうする？」
「わたくしも、共に……」
「まことか」
はね起きた源二郎幸村が、眩しげにお江を見て、
「よし。そういたせ」
と、いうや、いきなり、乳房をつかんだ。
「ま、痛い……」
「ゆ、ゆるせ。すまぬ」
「いいえ、かまいませぬ」
源二郎の顔を、おのが乳房へ抱き寄せつつ、

「源二郎さま。羽柴と徳川の戦は、やがて終わりましょうなれど……おそらく、来年は、真田の御家も大変なことになりましょう。しっかりとして下さらぬといけませぬぞえ」

と、お江がささやいたものである。

九

そのとき、真田源二郎は、三夜を山田斎四郎屋敷にすごした。

上田城へは、

「三日ほど、ひとりきりで別所の湯にいたいから、迎えをよこさぬよう」

と、山田屋敷の者を使いにやった。

これを聞いて、真田安房守昌幸は、

「可哀相に……源二郎には、かけずともよい苦労を、おれがかけてしもうたわ」

つぶやいたそうである。

「まだ、ひとり前の大人にもならぬのに、その苦労で、身も心も、疲れ果てたのであろう」

と、昌幸は、かつて見せたこともない深刻の表情をうかべ、憮然としていたそうな。

だが源二郎は、心身が疲れ果てたどころではなかった。

いや、疲れもしたろう。しかしそれは、別の理由によってである。

三夜を別所にすごし、上田へもどったときの源二郎幸村が、ふっくらとしていた頬も痩け、両眼が落ちくぼんだ姿で、

「父上。ただいま、もどりました」
上田城内の〔地炉ノ間〕へあらわれたとき、安房守昌幸は、
「おお。よし、よし」
幼童をあやすかのように、源二郎の肩を抱き、
「もはや、角兵衛めがことは放念せい。父が指図する。お前は上田にいて、しばらく躰をやすませるがよい」
「はい」
源二郎は、素直に、父のことばをうけいれた。
二日もすると、源二郎は以前のままの彼にもどり、砥石へ帰って行った。
お江と共にすごした、山田屋敷の三夜は、源二郎にとって忘れ難いものとなった。
お江は、人目をはばかり、夜に入ってから源二郎の寝所へ忍んで来た。
また、夜も明けきらぬ浴舎で、源二郎を待っていたりした。
ともかく、源二郎にとって、それは、
「目眩めく……」
ような日々であったにちがいない。
十八歳の若い肉体の、すべてのちからをふりしぼり、お江の愛撫にこたえたばかりではなく、最後の一夜は、雄々しく振る舞って、
「まあ、源二郎さまの大人振な……」

と、お江を瞠目させた。
「何をいう。何事も、お江がおれに教えてくれたことだ」
「なれど、おぼえが早うて……」
つくるところを知らぬ若者の精気を、しまいには、さすがのお江も、もてあまし気味だったようである。
翌年の秋に……。
真田源二郎とお江は、上田城で会うことを得たが、そのとき、
「去年の、あの折には、浜松へもどるのが遅れてしまい、壺谷又五郎どのに、ひどく叱られましたぞえ」
お江は、源二郎に、そういったものだ。
それはさておき……。
砥石へ帰って来た源二郎を、だれもが、
「お人柄が変わられたような……」
「いかにも、な」
と、ささやき合った。
では、どこがどのように変わったかといわれると、返事に困ったろう。
まず、源二郎は、草の者・鞍掛八郎をよび、
「角兵衛を探すことは、もはや、やめにいたせ」

といった。
「何故でござります？」
「なるようにしかならぬことよ」
「は……」
「こなたが追うからこそ、角めが怯えて、害を為すのであろう」
「したが、源二郎様……」
「よい。放っておけ」
源二郎は、角兵衛に襲われたことを、父の昌幸にさえもらしていなかった。
「もらしてはなりませぬ」
と、お江から念を入れられたからだ。
別所の三夜のうちに、源二郎は、お江の女体のすみずみまで知りつくしただけではなかったらしい。
もっとも、源二郎の変貌におどろいたのは、ほかならぬ向井佐平次であった。
砥石の居館へ、源二郎が帰って来た夕暮れに、佐平次は恐る恐る居室へおもむいた。
「お、佐平次か。入れ」
「はっ……」
両手をつかえ、顔を上げ得ずに、
「まことにもって、申しわけござりませなんだ」

「なんのことだ？」
「すぐさま、別所へ駆けつけ、おわびをいたし、お仕置きをうける覚悟でございましたが、何人も来てはならぬとのおおせだとうけたまわりまいて……」
「いうな。もう、よいわ。おれが病気だったのだ」
「えっ……？」
「だれもが、一度はかかる病気だったらしい」
「何と、おおせられます……？」
「久しぶりだ。二人して酒をのもう。仕度してまいれ」
「は、はい」
おろおろしながら、大台所へもどって来た佐平次に、蒼ざめたもよが擦り寄って、
「どうでござったえ？」
「う……な、何の、お咎めもなかった」
「あれ……よかったこと」
「どうも、源二郎様の様子、徒事でないぞ」
「何として」
「いや、何というたらよいのか……すっかり、落ちつかれて、物のいいようから、物腰まで、まるで十も年をおとりなされたような……」
「まあ。そのようなこと、あるはずがない」

「うむ。それはそうなのだが……」
酒の仕度をして居室へもどり、源二郎の相手をしているうちに、
「どうだ。もよは、お前にとって、よい女房か」
「は……」
佐平次は、いよいよ来た、とおもった。
「よい女房か、と、聞いている」
「は、はい」
「何を、ふるえている？」
「いえ、別に……あの、実は……」
と、このとき佐平次が、もよの妊娠を源二郎に告げたのは、腹に子をもった妻にあわれみをかけてもらおうとおもったからである。
佐平次は、源二郎が砥石を駆け出た際に、大滝伍平へ、
「おれがもどったら、きっと成敗をすると、佐平次に申しつたえておけ」
といったのを忘れなかった。
その〔成敗〕とは、源二郎に首をはねられることだと、おもいこんでいたらしいのだ。
せめて、我が子の顔を見てから死にたかった。
「何と……」
源二郎が盃を置き、

「もう、孕んだのか」
「は、はい……」
「さてさて、よほどに烈しく、たがいに振る舞うたものと見える」
佐平次は、赤面をした。
以前は、
（きっと、源二郎さまは女の肌を、まだ御存知ではないらしい）
と、おもっていた佐平次だが、このとき、その推測をあらためたのである。
（やはり、この若さで、何も彼も知っておわすのだ）
このことであった。
「佐平次。めでたい。盃をとらす。のめ。さ、のめ」
「は、はい」
盃をとらすというからには、成敗されることもないわけだ。
盃を手にしたとき、佐平次は、よろこびのあまり、泣き出してしまった。
「これ、何を泣く。あまり、おれをおどろかすな」
「は……かたじけなく……」
「うれしくて、泣いておるのか？」
「は、はい」
「よし、よし」

と、源二郎が、やさしく、
「おれが、悪かったな」
「いえ、それは、私めが……」
「もよのような、よい女房をもろうたので、おれはお前を妬んでいたらしい」
さらりといってのけるのである。
この夜から、源二郎と佐平次は、ふたたび、以前の親密さを取りもどした。

変転

一

月日が、ながれた。

樋口角兵衛は、依然として消息を絶っている。

そして天下の形勢は、また、新しい展開へ移りはじめた。

長久手の戦闘で、徳川軍が快勝してのち、羽柴・徳川両軍の決戦は、ついに、おこなわれなかった。

羽柴秀吉は、徳川家康が野戦に長じていることを、

「いや、というほど……」

に、見せつけられたといってよい。

決戦へもちこみ、兵力の差に物をいわせ、たとえ徳川・織田軍を打ち破ったとしても、徳川家康へ決定的な打撃をあたえることは、

「できまいな」

と、おもった。

家康は、裸になり、伸るか反るかの身構えで出て来ているのではない。
精強をほこる徳川の軍団は、まだ、家康の領国に温存されていて、たとえ、小牧の一戦に敗れたとしても、家康が首を討たれることは万一にもあり得ない。そうなったとき家康は、後へ引き下がって、二段にも三段にも新しい戦闘をおこなう能力を潜めている。
また、勝ったとしても、羽柴軍の損害は非常なものとなるであろう。
それに、本拠の大坂城から美濃・尾張へ大軍をひきいて出陣している羽柴秀吉にとっては、戦が長引けば長引くほど、兵站に無理が生じる。
だから結局、小牧で勝ったとしても、それは〔決戦〕ということにならない。
秀吉が家康を、
「もてあましている……」
かたちにしかならないのだ。
それは秀吉の信望をおとろえさせ、家康の実力が天下にみとめられることになりかねない。
俊敏な羽柴秀吉が、このことに気づかぬはずはない。
初夏になると、秀吉は家康と正面から戦うことを避け、軍を分けて、織田信雄の本拠である伊勢を攻撃しはじめた。
家康は、依然、羽柴軍と対峙しているので、小牧山からうごくことはできなかった。
しかし、織田信雄は、わが本国に敵が攻めかけて来たのだから、小牧山にとどまっているわけにはゆかぬ。

家康にはげまされ、急ぎ、伊勢へ帰った。

そのうちに家康も小牧山から出て、信雄と共に、伊勢の蟹江城を奪取し、秀吉に烈しく抵抗したのである。

秋になると、秀吉は、和議をもちかけて来た。

家康は、これをはねつけた。

晩秋になると、秀吉は、ひとまず、近江の坂本から京都へ入り、二条城へ滞留している。

家康は家康で、小牧山の本陣を修築し、これに榊原康政をとどめて、自分は岡崎城へ帰った。

両軍ともに、

「戦陣に倦む……」

だのである。

羽柴秀吉は、徳川家康との和平交渉がむずかしいと看て、今度は、ひそかに織田信雄のみへはたらきかけた。

秀吉は、家臣の富田知信と津田信勝をまねき、

「自分は、故信長公の御恩をうけて、これまでになったことゆえ、いまさら、織田信雄と兵を構うことは本意でない。二人して、ちからを合わせ、信雄に自分の意をつたえ、和睦の道を切りひらいてもらいたい」

と、いった。

二人は、よろこんだ。

ことに、津田信勝は、織田家の一族にあたり、故信長の怒りにふれて、信長のもとをはなれ、一時は徳川家康の庇護を受けていたこともあり、その後、秀吉にかくまわれていたのが信長に知れ、

「怪しからぬ奴。生かしてはおけぬ」

信長は激怒し、信勝の誅戮を秀吉に命じたが、その直後に、本能寺の変で信長が急死したので、津田信勝は一命を拾ったのである。

羽柴秀吉は、この津田信勝から、徳川家の強固な家臣団の結束と、長年にわたる苦しい戦時体制によってつちかわれ、ととのえられた領国の防備の完璧さを伝え聞き、無理な戦を重ねることをやめた、ともいわれている。

そこで、富田知信と津田信勝が、織田信雄へ秘密の会見を申し入れると、信雄は待ちかねていたように、これに応じた。

二人が秀吉の意を伝えるや、織田信雄は、一も二もなく、

「よろしい」

承知をした。

あれほどに自分を救援し、みずから戦場へ出て、共に戦ってくれた徳川家康へ、一言も、これを告げなかった織田信雄である。

だから異国人にまで、

「人の痴愚と呼做す、信長の次男は……」

などと、いわれているのだ。

この年、天正十二年（西暦一五八四年）十一月十一日。

織田信雄は羽柴秀吉と会見し、和談を成立せしめた。

このときの秀吉の態度については、

「礼を厚うし、言を卑うし……」

と、物の本に書かれている。

秀吉は、紙子二ツ、金二十枚、兵糧二万五千俵を信雄へ贈り、犬山城を信雄へ返し、北伊勢の四郡も信雄へ安堵した。

この知らせが徳川家康の耳に入ったとき、家康は、おどろきもせず、

「さようか。なれば、すぐさま、信雄殿へ祝いの使者をつかわそう」

微苦笑していったそうな。

むろん、腹の中ではあきれもし、怒りもしていたろうが、これほどのことに感情を激発させるような家康ではない。これまでに彼が体験してきた突発的な異変の数々にくらべれば、問題にならぬ事といってよい。

いずれにせよ小牧・長久手の戦で、徳川家康は、その実力を天下に問うたのである。

家康を無視して、秀吉が天下人となることはできぬということを、天下にも、当の秀吉にも知らしめたのである。

また、亡き主人の子を相手に戦を仕掛けた羽柴秀吉に対し、自分は、その信長の子を助けて戦ったという一事は、家康の実力のみか、その名をゆるぎないものにした。

戦って負けたのではない。

もてあまして、手を引いたのは秀吉なのである。

家康は、さらに石川数正を使者として、秀吉のもとへさし向け、講和を祝賀した。

秀吉は、

（おや……？）

と、おもったろう。

むろん、悪い気持ではない。

そこで、すぐさま、家康へ、

「そこもとと、正式に和睦をしたい」

あらためて、申し入れた。

すると、家康が、

「それとこれとは別である」

と、突き放してきたではないか。

織田信雄は和睦しても、自分は和睦などするつもりはないというのだ。

このあたり、秀吉は肚の内を家康に見透かされている。

だが、家康も、秀吉を相手に決戦するつもりはない。織田信長の遺子を救援するという名

目があってこそ、天下へ呼びかけられたのである。
家康と信雄の呼びかけに応じ、はるばる越中から極寒と積雪の立山の峰を越え、家康の下へ駆けつけた佐々成政に対しても、
「自分は何事も、織田信雄殿しだいでござる」
と、すべてを信雄の責任にして、佐々成政を冷静にあしらっている。
成政は疲れ果てた少数の兵をつれ、越中へ帰って行った。
のち、成政は秀吉に降伏し、その傘下へ入ることになる。
四国の長宗我部元親も、信雄と秀吉が和睦をしたと聞いておどろき、家康に、密使をさしむけ、
「あなたが秀吉と戦われるなら、自分は、いつでも海をわたって大坂城へ総攻めをかけるつもりでござる。時機を逸してはなりませぬ」
と、いってよこした。
これに対し、家康は、やはり、
「信雄殿が和睦をされたのではどうしようもござらぬ。時節を待つまでござる」
と、返事をあたえている。
長宗我部も佐々も、開戦に際しては、家康と信雄から強く煽動されていただけに、納得がいかなかったろう。
しかし、あくまでも信雄へ責任を負わせた家康の態度は、冷ややかであっても〔道理〕を

外れてはいない。
家康のみはなおも、秀吉に屈服していないのだ。
こうして、天正十二年は暮れた。

二

ところで……。
名胡桃城の鈴木主水にあずけられたお徳は、無事に出産をした。
その知らせが名胡桃から上田へとどいたとき、真田安房守昌幸は、まず訊いた。
「生まれたのは男か？」
「いえ、女の御子にござります」
「そうか……そうか、そうか」
見る見る昌幸の面に、喜色があらわれ、
「それは、よかった。まず、めでたい。お徳の身に別条はないか？」
と、ようやくに、お徳のことにふれたのである。
昌幸は、よほどに、男子誕生を恐れていたらしい。
すぐさま、昌幸は、お徳が女子を産んだことを、
（それとなく……）
岩櫃城の山手殿の耳へ入るようにした。

果たして、山手殿は安心したものと見え、
「このごろは、母上も大分に落ちつかれ、笑顔を見ることもあります」
と、長男・源三郎信幸からの書状を読み、
「これで、よし」
昌幸も、ほっとした。
山手殿は、天正十二年の秋になると、待ちかねたように、夫・昌幸へあてて手紙をとどけてよこした。
「わたくしも、上田へ移りたいとおもうております。御城も、すっかり出来あがったと聞きおよび、ひと目、見たいと存じます」
と、いうのである。
これに対して、昌幸は、
「源三郎と、そなたを一時も早く、上田へ移したいとおもうているが……なかなかに、むずかしくなった。そなたが上田へ移り、すぐさま、上田での戦が始まるようなことになっては、何かと面倒になる。真田家が真の苦難に見舞われるのは、これからである。いずれにせよ、源三郎には岩櫃を守ってもらい、いざともなれば、われらもそちらへ移るようになるやも知れぬ。このことについては、源三郎がよくよく、わきまえているはず。源三郎より、くわしく聞きとってもらいたい」
と、返書を送った。

山手殿は、以後、何もいってよこさぬ。

おそらく、源三郎が、天下の情勢が、どのようなかたちで真田家へ波及して来るかを説明したのであろう。

そして、昌幸は源三郎へ、

「丸岩には手を出すな。向こうから攻めかけて来ることは、もはやあるまいが、もし、さようなことがあっても構えて手を出さず、よいかげんにあしらっておけ」

と、いい送った。

上杉方の先鋒をつとめ、吾妻郡へ侵入した羽尾源六郎は、中棚砦の攻防で源三郎に敗北し、岩櫃城西方四里の山中にある丸岩城へ逃げ込んだきり、いまは、

「手も足も出ぬ……」

ありさまとなった。

越後の上杉景勝も、羽柴・徳川の戦が始まったので、日本海沿岸の防備をかため、羽柴秀吉に味方をし、北陸へ兵を出したりして、とても、吾妻の山城に立てこもった羽尾源六郎を応援するだけの余裕はなかった。

上杉景勝は、羽柴秀吉が賤ヶ岳の戦で柴田勝家を打ち破ってのち、秀吉と接近しつつあった。

おそらく、

「上杉が羽柴の傘下へ入るのは、間近いものと看てよい」

と、真田昌幸も断定している。

丸岩城の羽尾源六郎は、兵糧にも困っている様子で、そのうちに、十人二十人と城を脱け出し、岩櫃へ降伏して来る者もいて、中には単独で城を逃げ出し、行方知れずになる者もすくなくない。

こうなっては羽尾源六郎も、敵の国の山中で孤立してしまい、とても戦をいどむわけにはまいらぬ。

何度も密使をさしむけ、上杉景勝へ援軍をたのむのだが、景勝の返事はかんばしいものではなかった。

こうした羽尾源六郎を攻めつけて、丸岩城を落とすことは、いまや、

「わけもないこと……」

なのである。

それを、

「放り捨てておけ」

と、昌幸がいってよこした。

「父上には、ふかい、お考えがあってのことであろう」

源三郎信幸は、しきりに丸岩攻めを主張する城代・矢沢頼康をなだめた。

天正十二年の秋から年の暮れにかけて、真田昌幸は一息ついたかたちになった。

依然として、上田城の工事はつづけられており、昌幸が多忙な事に変わりはなかったが、

なんといっても正室・山手殿の怒りが解け、また、名胡桃へあずけたお徳が、自分の期待どおりに、女子を産んでくれたので、こころも安らいだのであろう。

天正十三年の年が明けると、真田昌幸は使者を名胡桃へ飛ばし、お徳が産んだ子へ、

「於菊」

という名をあたえた。

「わしが名をつける。それまで待て」

と、いい送ってから、半年もたってしまっていた。

いろいろと命名を考えていたのでもあろうが、つまりは、それほどに、この半年の月日のながれが、昌幸にとっては速く、あわただしかったのである。

後年になってからも、昌幸は、

「あれからも、さまざまな事あって、ずいぶんと強い目にも合うたが、上田の城を築いたときほど、無我夢中ではたらいたことはなかったぞよ」

よく、洩らしたものだ。

上田城は、さらに構えをきびしくととのえた。

城郭の東面に〔三の丸〕の曲輪をひろげ、そこを大手口としたのも、天正十三年の春であった。

天正十三年になると、徳川家康は三河の吉良に築城をはじめた。

これは、渥美湾の海岸防備のためである。
浜松・岡崎両城の備えも、さらにきびしくした。
ときに、家康は四十四歳。
羽柴秀吉とは、まだ和睦をしていないし、いつまた、秀吉と戦うことになるやも知れぬからだ。
秀吉は、家康にかまわず、年が明けるや、すぐさま、紀州の平定に乗り出した。
小牧・長久手の戦で、織田・徳川のさそいに応じ、自分に刃向かった者を、
「討つ！」
ためである。
紀州の畠山貞政や、根来・雑賀の党。それに、四国の長宗我部元親も、
「ゆるしてはおけぬ」
のである。
そこでまず、紀州の根来寺を攻めることになった。
根来寺には千五百余の僧兵がおり、千石堀という深い堀をめぐらした砦もあって、僧兵たちは頑強に抵抗し、秀吉も一時は攻めあぐねた。
だが、壺谷又五郎が真田昌幸へ報告したところによると、
「羽柴方は、伊賀の忍びをつかい、千石堀の砦の搦手から火矢を射かけさせましたところ、運よく、火矢が城中の蔵へ当たって……」

その蔵が燃えはじめたそうな。
蔵の中には、火薬が格納されていたから、たまったものではない。
たちまち引火し、爆発した。
これで、根来寺も焼け落ちたのである。
真田家の草の者は、紀州にまで飛び、動静を探っていた。
羽柴秀吉は、根来を落とすや、たちまちに雑賀の党が立てこもる大田村の城を攻め、これを降伏させた。
こうして秀吉は紀州を平定したが、夏に入るや、弟・秀長を総司令官に任じ、三万余をあたえて四国へ出陣せしめることになった。
秀吉は家康との講和をあきらめたわけではないが、何としても家康が承知をせぬので、紀州・四国の平定に成功し、天下人としての基盤を尚も強くかためておこうとしている。
そうなれば、家康も、
「自分の実力を見直すにちがいない」
からである。
壺谷又五郎は、徳川家康について、
「家康公は、近いうちに駿府（静岡市）へ本城を移されるおつもりらしい」
という報告を、昌幸のもとへ送ってよこした。
家康は、春になると甲州へ出向き、大がかりな巡視をおこなった。

物の本に、

「家康が、これほど長く甲州の地に滞在したのは、秀吉の魔の手が此地におよぶことを予想し、甲州の民心を一にし、守備をきびしくせん事をはかれるものである」

などと、記してある。

そして、いよいよ……。

真田昌幸がひそかに、そのときのための覚悟を定めつつあった事態が、現実のものとなった。

三

小田原の北条氏が、年来、沼田城を手に入れ、北上州を制圧すべく、真田家と争いつづけて来たことは、すでにのべておいた。

織田信長の歿後、徳川家康は北条父子に対し、沼田を引き渡すことを条件に和睦している。

去年の小牧・長久手へ家康が出陣した折も、北条氏直は、

「沼田を当方へ相渡される約束はどうなされた。すみやかに、引き渡していただきたい。そうしていただけるなら、われらもよろこんで出陣いたそう」

と、申し入れている。

家康は、このとき、はっきりした返事をあたえていない。

たとえ、北条家と婚姻の関係をむすんでいても、自分が本国を留守にして、大敵と戦う際

に、北条父子の野心を、そのままゆるすような家康ではなかった。

真田昌幸は、いま、徳川家康の味方をするというかたちで、上田と沼田を治めている。

家康としては、どちらにも味方ができぬ立場にあったし、両家の調停に乗り出すとなれば、戦どころではなくなってしまう。

真田・北条両家の、上州の沼田争奪の根深くて、むずかしい事情を、家康は、よくわきまえていた。

北条父子も、家康にとっては油断がならぬ相手なのだ。

北条父子の勢力が、これ以上、大きくひろげられることを、むろん、家康は好まぬ。

だから、むしろ、真田によって北条を牽制させておいたほうがよい。

自分が秀吉と戦っている間に、北条と真田が自分に無断で戦ってくれると、なおさらによかった。

だが、真田も北条も、睨み合ったままで、家康が戦場からもどって来るのを待っていたのである。

こうなってみると、徳川家康も、このまま両家の紛糾を放置しておくわけにはまいらぬ。

なんといっても、北条家には、

「沼田を、そちらへ引き渡す」

と、約束をしているのである。

羽柴秀吉は、当分の間、紀州や四国の平定に追われ、こちらをかえり見る暇がないだろう。

そこで家康は、かねてから、
「もてあましていた……」
上州・沼田問題を解決することにした。
北条氏直は天正十三年の春になると、またしても使者をさし向けて来て、
「上州沼田を、当方へ引き渡されたい。そうしていただけるなら、当方も、甲州・都留郡の内を、そちらへおわたし申す」
と、いってよこした。
家康は、これを承知した。
初夏になると、家康の使者が上田へあらわれて、つぎのような主人の言葉をつたえた。
「沼田の地を北条家へ引きわたすべし。その替え地は、いずれ、明所が出来次第、われらからさしあげる」
と、いうのである。
沼田のかわりにくれる領地は、いまのところ、どこにもない。どこか空いた領地ができたら、そのときに「あたえよう」というわけだ。
高圧的であった。
小牧・長久手で、羽柴秀吉を手痛い目にあわせた自信が、家康をそうさせたのであろう。
「ふふん……」
と、真田昌幸は冷笑した。

「このようなことは、かつて聞いたことがない。沼田は、われらが血と汗をながして奪い取った領地でござる。三河守殿も戦国の将ならば、この一事がどのようなものか、いわいでもおわかりのはずではないか」

昌幸にいわれて、使者は返す言葉もない。

それほどの城と領地の替え地をあきらかにせず、

「いずれ、明所があり次第……」

などといわれるのは、戦国大名の言葉ともおもわれぬ。

真田昌幸は、かねてから沼田城代の矢沢薩摩守頼綱に、このことをはかっておいた。

昌幸の老臣であり、叔父でもある矢沢頼綱は、

「沼田に代わる領地は、他に、ござらぬ」

と、いいきった。

「沼田を北条へわたしたならば、上田も、砥石も守れますまい。じりじりと、やがては岩櫃の山城へ真田一族が追いつめられ、心細く生きて行くがおのぞみなれば、沼田を引きわたしてもよろしゅうござるが……」

「よし。それで決まった」

昌幸が昼夜兼行で上田城の完成を急いだのも、今日のことにそなえてのことであった。

「沼田は、引きわたしませぬ。かように徳川殿へも北条家へも、おつたえ下され」

徳川の使者が上田を去ると、真田昌幸は、沼田の矢沢頼綱へ急使を飛ばした。

草の者の鞍掛八郎が、昌幸によばれて、砥石から駆けつけて来た。
「八郎。こなたにおる草の者は何名ほどじゃ？」
「真田の庄の草屋敷におります老人や女をつかいますならば、三十名ほどはおりまする」
「さようか。心強いな」
昌幸はまず、上田・岩櫃・沼田、それに鈴木主水が守る名胡桃城との連絡が、
「いつにても速やかにおこなわれるよう、草道をととのえておけ」
と、命じた。
草道とは、草の者が走る抜け道のことである。
八郎は、砥石へもどって来て、源二郎幸村に、
「御屋形様が、およびでござります」
「父上が……いよいよ、戦か……？」
「わかりませぬ。すぐさま、上田へ……」
「よし、馬を出しておくよう、向井佐平次に申しつたえろ」
「はっ」
「八郎。父上の様子は、どうだ？」
「元気が、みなぎっておわしますぞ」
「そうか。それならよい」
と、源二郎が勿体らしくうなずき、

「それでなくてはならぬ」
「源二郎様。私は、これより、岩櫃へ御屋形様の御書状をとどけてまいります」
「兄上へ……？」
「はい」
「よし、急げ」
立ちあがって源二郎が、
「佐平次、佐平次！」
と、叫んだ。
鞍掛八郎が居室を出て行くのと入れちがいに、佐平次があらわれた。
「佐平次。馬ひけい」
「はい」
「お前も、ついて来い」
「心得まいた」
「これからは、もよの傍で、鼻毛をぬいているわけにはまいらぬぞ」
「何となされまいた？」
「戦だ」
「いよいよ……」
「うん」

「相手は、あの……？」
「北条だ。きまっておる」

四

その日の午後……。
真田源三郎信幸は、岩櫃城内の居館の奥に住む叔母・久野をなぐさめていた。
わが子の樋口角兵衛が、去年の新春に砥石を脱走して以来、久野の憔悴ぶりは、だれの目にもあきらかであった。
「このままでは、もしやすると、久野は死んでしまうやも知れませぬ」
と山手殿も、妹のことを心配して、
「のう、源三郎。どうにかならぬものであろうか……？」
「どうにか、と、申されますと？」
「角兵衛がことじゃ。いかに躰が大きく、ちからが強いというても、まだ十五の子どもじゃ。探して見当たらぬということはあるまい。上田におわす殿は、本気で探していて下さるのであろうか……」
「そのとおりです。父上は、角兵衛を愛しくおもわれておりますゆえ……」
源三郎がそうこたえると、山手殿は、嫌悪のおもいをちらりと顔にうかべて、
「角兵衛のように奇怪な子どものことは、どうでもよいのですが……」

「何と、おおせられる」
「いえ、角兵衛がもどらぬと、久野の泪が絶えぬゆえ……」
山手殿は、夫・安房守昌幸と久野が密通をして、角兵衛が生まれたのではないかと、疑惑を抱いている。
しかし、源三郎は、気づいていない。
「砥石の弟も、先に立ち、角兵衛を探しております」
「源二郎がことなど、どうでもよろしい」
「草の者も出ております。なれど、どうしても見つかりませぬ」
源二郎幸村は、その後、角兵衛に襲われたことを、だれにも洩らしてはいない。
兄にも父にも、である。
ゆえに、源三郎も、
（はて……？）
実に、ふしぎなことだとおもっているのだ。
草の者が探索しているのに、
（見つからぬはずはない。母上の申されるとおりだ）
なのである。
（おれは、いささか、角兵衛を見あやまっていたのやも知れぬな……）
いつであったか、弟から、

「兄上。角めを子どもだとおもうてはなりませぬ。あれは、常の人間がおよばぬちからをそなえています。ちからと申しても、ただのちからではない。たとえば山野に棲む獣のようなちからです。物事を人なみに判断するというのではなく、その折々に、獣のような奸智をはたらかすのです。その恐ろしさを、まだ、兄上は御存じないようだ」

と、いわれたことを、このごろ源三郎は、ふっと、おもい起こすことがあった。

締まり所を破って逃げたときの様子は、源三郎の耳へも入っている。

（あのときの仕業も、十四や十五の子どものしわざとはおもわれぬ）

のであった。

この日の朝。

久野が突如卒倒した。

小柄だが、みっしりと、ゆたかな肉置きの叔母の躰は、このごろ、玩具の人形のように細く小さくなってしまっている。

くろぐろと大きかった双眸は、まったく光をうしない、食事もすすまぬようであった。

（叔母上を、見舞いに……）

と、おもいながらも、午前中はあわただしくすごし、源三郎は家来たちを指揮して、城の内外を馬で駆けまわっていたのである。

岩櫃城も、来るべき期にそなえ、兵糧をたくわえ、防備のための修築をおこないつつある。

徳川家康は、夏が来ても甲州の巡視をつづけており、真田昌幸が、

「沼田は、わたし申さぬ」
と、自分の命令をはねつけたときは、家康よりも家臣たちが激怒し、
「これより、甲州から上田へ攻めかけ、真田を打ちのめしてしまわぬと、天下の見せしめになりませぬ」
しきりに、家康へ進言をしたそうな。
家康は冷静に、これを押さえ、
「なすべきことはなさねばならぬ」
と、甲州巡視を、自分が納得するまではやめなかった。
だが、甲信の国境をきびしくかためると共に、小田原の北条父子とも連絡を密にし、目立たぬようにではあるが、上田へ攻めかけるときのための準備をすすめていることは、あきらかであった。
この間に、家康は、
「いま一度……」
真田昌幸を説きふせようとしたが、
「おことわり申す！」
昌幸の返事は、鮸膠（にべ）もなかった。
昌幸は、
（徳川と北条を相手に、戦わねばならぬ）

と、決意している。
上田・沼田・岩櫃の三城を、真田家のみで、
「守りぬかねばならぬ」
というわけだが、それが果たして可能であろうか……。
さすがの源三郎信幸も、
（こころもとない……）
おもいがせぬでもないのだ。
むろん、昌幸は、諸方へ手を打っているにちがいない。
四国攻めに乗り出した羽柴秀吉のもとへも急使をさし向け、真田家の立場をよくよく説明しているであろう。
五日ほど前に、上田から駆けつけて来た急使が、昌幸の手紙を源三郎へとどけた。
それによると、昌幸は、越後の上杉景勝へ援助を請うたらしい。
上杉との、これまでの確執を、いっさい水にながし、忘れてくれとたのんだわけである。
なんといっても、近隣の大勢力を背景にしなくては、戦えるものではない。
援助をたのむといっても、昌幸は、上杉景勝に対し、
「兵力をさし向けていただきたい」
と、いっているのではない。
戦うのは自分だけでやるから、黙って、見まもっていてもらいたいのである。

徳川・北条の両軍と共に、越後の上杉軍が上田へ攻めかけて来たら、いかに真田昌幸が奮戦したところで、ささえきれぬ。

昌幸は、源三郎へあてた手紙で、

「まことに虫のよいはなしゆえ、上杉が承服してくれるか、どうか、それはわからぬ。ただ、上杉の、徳川・北条を憎むこころに変わりはあるまいから、そこへ、わしはのぞみをかけているのだ」

といっている。

織田信長の死後、信州と甲州へ侵入しようとした上杉景勝を阻んだのは、徳川家康と北条父子であって、そのとき真田昌幸は、家康の味方となり、上杉軍の南下を防いだのである。つい先頃まで、そうであった。

吾妻郡へ侵入し、孤立したままの羽尾源六郎に対して、

「手を出すな。放っておけ」

と命じた父・昌幸の意が、いまこそ、源三郎にもわかった。

「……上杉が何と申してよこすか、それはわからぬが、わしは、上杉景勝へ従う証として、源二郎を上杉方へさし向けるつもりじゃ」

昌幸は、そこまで決意していた。

最愛の二男を、上杉景勝のもとへ、

「人質として……」

送るというのだ。

このあたりは、さすがに昌幸も正念である。

胸の底では、源二郎を手放したくないのだろうが、だからといって、長男・源三郎を〔人質〕に出すわけにはまいらぬ。

「もしも、そのようになれば、お前は岩櫃から上田へ移り、わしを助けて、はたらいてもらわねばならぬゆえ、よくよく、いまから心得ておいてもらいたい。もしも敵勢が上田へ攻めかくるときは、三十郎にも来てもらうつもりじゃ」

三十郎とは、岩櫃城代矢沢但馬守頼康の若名である。

矢沢頼康の父・矢沢薩摩守頼綱は、沼田城をまもっている。

上田攻めと同時に、敵は沼田へも攻めかけて来ようから、矢沢頼綱と沼田の兵力を、上田へ移すわけにはまいらぬ。

岩櫃城は、真田家にとって、

「最後の城」

であった。

上田と沼田が敵の手へわたらぬかぎり、岩櫃は、まず安泰である。

ために、岩櫃にある兵力のうち、

「五百をひきいて、お前が上田へ来てもらわねばなるまい」

と、昌幸はいってよこした。

また、万一のことを考え、
「岩櫃の備えをかためよ」
とも、命じて来たのだ。
吾妻郡の東端にある中山城は、小さな城であるが、ここには北条方の将兵が入っていて、こそこそと蠢動しているけれども、これは名胡桃城の鈴木主水が充分に注意をし、牽制してくれるにちがいない。

五

その日の午後になってあらわれた源三郎信幸を迎え、久野は、いつものように、くどくどと泣き言をのべた。
「このような、大事のときに、角兵衛が殿の御役にもたたぬことは、申しわけのうてなりませぬ」
などと、しきりにいうのだが、内心では、たった一人の男子である角兵衛の身を案じているにすぎない。
「叔母上。角兵衛は生きております。これは、私がはっきりと申しあげてよい。どこへ逃げたとて、おめおめ死ぬるような角兵衛ではありませぬ」
この前になぐさめたことと同じように、いいふくめてやると、その言葉へ、すがりつくようにして、

「まことに、そうおもわれますか？」
「はい」
「まことに？」
と、くどい。
「もしも、角兵衛がもどってまいったとき、深い罪を犯した角兵衛を、殿は、おゆるし下されましょうか？」
「まさか、死罪にするようなことはありますまい」
「まことに？」
「はい」
またも、同じことのくり返しになってしまうのだが、それでも、源三郎にこういってもらうと、久野はいくぶんでも希望がもてるらしく、やつれ果てた顔に血がのぼってくるのだ。
源三郎は、この叔母を気の毒におもった。
奥庭の深い木立に、蟬が鳴きこめている。
高原の山城だけに、夏もさわやかであった。
「叔母上も、しっかりとしていただかねばなりませぬ。真田の家も、容易ならぬことになりました」
「いったい、どうなるのでしょう？」
「わかりませぬ、明日のことは……」

「ま、心細い……」
不安げに眉をひそめたが、武田家滅亡前後の動乱を経験している久野は、むしろ戦が始まることについて、さほどに苦悩しているわけではない。
戦よりも、わが子の角兵衛なのである。
このとき、次の間に入ってきた侍女が、
「上田より、御使者がまいったそうでござりまする」
と、告げた。
「何事でしょう?」
久野が、うったえるような眼ざしになって、
「もし、角兵衛がことなれば、何なりと、おきかせ下さるよう」
「いや、角兵衛のことではありますまい」
苦笑をうかべ、源三郎は廊下へ出た。
大廊下へあらわれた源三郎は、そこにひかえていた家来に、
「何とだ?」
「御城代様が、すぐ、おこし下さるようにと……」
「よし」
矢沢頼康は、主殿の、板敷きの広間で源三郎を待っていた。
使者の姿は見えない。

「父上から？」
「さよう」
頼康が、真田昌幸からの書状を、源三郎へわたした。
書状の封を、頼康は切っていなかった。
「どれ……」
ひらいて読み下したとき、めったに動揺の色を見せたことがない源三郎信幸が、
「あ……」
低く、叫んだ。
「いかがなされまいた？」
「待て」
いま一度、読み返してから、源三郎が父の書状を矢沢頼康へわたした。
但馬守頼康も読み下して、顔色が変わった。
さらに、また読み返し、
「これは……」
「いかが、おもわれるな？」
「殿は、御承知なされたのでござろうか、上杉からの申し入れを……」
「承知なされた、と、書いておられるではないか」
「うむ、それは……」

主従であり、従兄弟どうしでもある二人は、眼と眼を見合わせ、暗い面持となり、しばらくは無言であった。

源三郎の顔には汗が浮いていなかったが、頼康の額のあたりは、ねっとりと汗に光っている。

「これは、危うい」

呻くように、矢沢頼康がいい出た。

「いかにも」

と、源三郎がこたえた。

「すぐさま、上田へ馳せつけ、殿を……殿を、お引きとめせねばなりますまい」

「いや、父上は、すでに、上田を発たれたろう。念のため、使者に訊いて見られよ」

「心得た」

矢沢頼康が、広間から走り出て行った。

真田昌幸が、源三郎へあてた書状によると……。

越後・春日山の本城にいる上杉景勝は、昌幸の和睦の申し入れに対して、

「そのこころがあるならば、安房守みずから春日山へあらわれて、誠をしめすべきである」

と、いってよこしたらしい。

源二郎幸村の〔人質〕については、一言もふれていないという。

それよりもまず、昌幸自身が、上杉の城へ来て、自分に申し入れをすべきである、と、い

うのだ。

　このような例は、めったにない。

　和睦の条件を双方が出し、合意があったのちに、双方の城主の会見がおこなわれる。それが順当なのである。

　源三郎や矢沢頼康が危険を感じるのも、当然であった。

　真田昌幸が、わずかな家来を従えたのみで、昨日までは敵であった人物の本城へ出かけて行き、そこで首を討ち取られたとしても、天下の笑い者になるのは、昌幸なのである。

　上杉景勝は、昌幸のために、いつも苦汁をのまされてきた。

　昌幸さえいなかったら、武田滅亡後の上杉勢力は、砥石から上田まで、大きく伸び、ひろがっていたろう。

　昌幸への憎しみと怒りは、なまなかのものではないはずだ。

　しかし、昌幸は、

「すぐさま、わしは春日山へ出向く」

と、書状にしたためてある。

「それゆえ、但馬守を上田へよこし、わしの代わりをつとめてもらわねばならぬ。ただちに、このことを但馬守へ申しつけられたい。岩櫃は、真田家にとって大事の城であるから、源三郎にまかせる」

　そのように書きしるしている昌幸の心底を推し量ってみれば、

（父上も、尋常の御覚悟ではない……）

ことが、源三郎にも、はっきりとわかった。

だが、おそらく、

（父上は、上杉のいうままにするよりほかに、いたし方がないと、おもいきわめたのであろう）

と、おもわれた。

矢沢頼康の足音が起こり、広間へ入って来た。

「間に合いますまいが、それがし、ともあれ上田へ駆けつけ、殿をお引きとめ……」

いいかける頼康へ、

「むだであろう」

と、源三郎が、しずかにいった。

「なれど……」

「いずれにせよ、但馬守殿には、上田へ行ってもらわねばならぬが……」

六

真田安房守昌幸は、二男の源二郎幸村をつれ、わずか二十騎を従えたのみで上田城を発した。

一行は、軽武装である。

「急げ」
昌幸は、やすむことなく馬を走らせた。
越後・春日山の、上杉景勝のもとへ急行するためであった。
昌幸は、景勝からの返書を披見するや、
「弾正少弼（景勝）の申されること、もっともじゃ」
ただちに、出発の用意にかかった。
上田城の家臣たちも、昌幸自身が春日山城へおもむくことには、強い不安をおぼえた。
昌幸のむすめ・於国の夫で、上田城・三の丸外に屋敷を建ててもらい、真田の臣として、ようやくに落ちついた小山田茂誠も駆けつけて来て、
「あまりにも無謀……」
すぎると、諫めた。
だが、昌幸は瞬時も迷わなかったという。
「これは、おれが上杉へ、勝手を申したことなのだ。一も二もなくはねつけられたとて文句はいえぬ。それを、おれが春日山へ出て行けば、弾正少弼は会おうというてくれた。行かねばならぬ。これよりほかに、いまのおれが……いや、真田家の生くる道はないと知れ」
と、昌幸はいいはなった。
砥石の居館から、向井佐平次をつれ、駆けつけて来た源二郎は、このとき、父の決意には一言も口をさしはさまぬ。

「お前も、わしと共に春日山へまいるのだ」
「はい」
「すぐに、仕度をいたせ」
「心得まいた」
「待て、源二郎……」
「何か？」
「何故、お前までが春日山へ行かねばならぬのか……それが、わかっておるのか？」
「はい」
「いうて見よ」
「人質でしょう、父上」
事もなげに、源二郎が、
「父上のお役に立てますこと、うれしく存じます」
「よう申した」
昌幸は、すこし青ざめていたが、それでも微かに笑みをうかべ、
「お前に出てもらうより、いたし方もないことじゃ」
「はい」
砥石へもどらずに、源二郎は身仕度にかかった。
そして、佐平次には、

「ついて来なくてもよい」
「何故でございます」
佐平次は、昂奮した。
「従者が、つきそうてまいるのは、当然でございますぞ」
「ま、急くな」
「なれど……」
「まだ、上杉と父上との談合が決着を見たわけでもない」
「なれば、なおさらに、私は、おそばにいたいと存じます」
「父上や、おれの身が危ういとおもうているのか？」
「は……」
「案ずるな。上杉弾正少弼は、身一つであらわれた父上を、騙し討ちにするようなお人ではない」
「なれど、源二郎様……」
「むかしは……むかしは、な。よく、そうした事があったようだ。おれの御祖父様なども、騙し討ちの名人だったそうな。父上もやっている」
「まさかに……」
「小さな戦が、諸国に絶え間もなく起こり、天下の模様も、はきと見さだめがつかぬころには、どのような手だてを用いても、討てばよい、勝てばよい、奪えばよい……盗めばよい、

と、いうことよ」

と、源二郎は落ちつきはらって、

「ところが、いまはちがう。上杉ほどの大名が、父上やおれを騙し討ちにしたとなれば、これは、たちまちに天下へひろまってしまうのだ。天下は、それほどに落ちついてきている。ちがうか？」

「はあ……」

「な、佐平次。そうなれば、上杉の評判は、たちまちに落ちる。しかも相手は真田安房守だ。羽柴や徳川を騙し討ちにするのなら、まだしもわかるが、いまここで、父上の首を取ったところで、上杉には何の益もない」

「なれど、真田の御家にとっては、一大事でございます」

「何の……」

かぶりを振って、源二郎が、おどろくべきことを淡々といい出した。

「もし、父上が殺害されたとなれば、岩櫃の兄上が上田へ移ってまいられる。そうなれば、上杉は、父上よりもっと恐ろしい男を敵にせねばならぬのだ」

佐平次は、あきれて声も出ぬ。

父の昌幸よりも、兄・源三郎信幸のほうが上田城主として、

「すぐれている……」

と、源二郎がいったのも同様のように、佐平次にはおもわれたからである。

すると、源二郎は、
「さすがに、父上だ」
と、つぶやいた。
今度は、昌幸をほめているらしい。
「上杉からの返書を見て、即座に、わずかな供廻りのみで春日山へお出かけなさる。これでなくてはならぬ。そうはおもわぬか……」
「はあ……」
「まことに、いさぎよいことだ」
軽武装を身につけて行くのは、敵中へ乗り込むという意味ではない。
いまにも、徳川・北条両軍を上田へ迎え撃たねばならぬという〔緊迫感〕を、表現したものである。
「いずれは、佐平次に春日山へ来てもらうことになろう」
「まことで？」
「おう。もよと共に来い。おれが上杉へ人質になることは、およそ、わかっている。だが、そうなると、真田の命運を賭けた戦陣に、おれもお前も出られぬことになる。それが、残念だな、佐平次……」
源二郎に、そういわれては、向井佐平次も、
「はい」

と、こたえるよりほかに仕様がないではないか。
昌幸・源二郎父子が平静なので、しだいに上田城内も落ちついて来た。
安房守昌幸は、前に砥石の城代をつとめていた池田長門守綱重と小山田茂誠をよび、
「間もなく、岩櫃から矢沢但馬守が馳せつけてまいる。三人で、上田をまもれ」
命じたが、池田も小山田も沈痛の表情を隠しきれぬのを見るや、昌幸は、にやりとして、
「おれも、すぐにもどるが……」
と、いいそえた。
信州・上田から越後・春日山までは、騎乗でも二日の行程である。
昌幸の一行に先立ち、二名の騎士が春日山へ、
「真田安房守伺候」
のことを告げるため、上田城を走り出て行った。

七

新潟県・直江津市のすぐ手前の、信越線・春日山駅に下車すると、海抜百八十メートルの春日山城址を、西方にのぞむことができる。
低い山なのだが、あたりに、これをしのぐ山がないためか、または、上杉氏本城の址とおもって見るためか、山容がなかなか立派におもえるのである。
駅から春日山城址までは約二キロメートル。この間に、上杉謙信以来の城下町が形成され

ていた。

城址には、一つの櫓も残っていないが、頂点に立つと、東から北にかけて展開する高田平野の彼方に、信越の山脈のみではなく、関東の連山まで、一望にのぞまれそうにおもえるほどだ。

それほどに、展望がひろびろとしている。

南をのぞめば、火打、灘波の峰々と、その向こうに、妙高山の頂が見える。

北面には直江津港と日本海が横たわっていて、米山の秀麗な山容をほしいままにすることができる。

春日山城の背後は、前面の広闊さにくらべると、いくつもの暗い谷間が複雑な地形をしめしていて、山岳が重畳として、城址をおおっている。

北陸道からの敵の攻撃は、この天険によって、不可能であった。

初夏のころに春日山をおとずれると、樹林が鬱蒼と茂り、その深い木蔭に、各曲輪の濠や、わずかな石垣の址を見ることができる。

こうして春日山をわが眼にたしかめたのちに、往時の古図をひろげてみると、この上杉氏の居城が、いかに堂々たる威容を誇っていたかが判然とする。

春日山城には、当時、御主殿と称された城主の居館が二つあった。

一は、山頂の本丸にある。

これは、城が敵に包囲されてしまったときに、城主が移り住むためのものであった。

いま一つは、春日山の東裾にある。
ここが城の正面、すなわち〔大手口〕であり、平時の城主は、この山裾の居館に起居していた。
春日山へ到着をした真田安房守昌幸・幸村父子が、上杉景勝に対面したのも、この平時の居館であったろう。

居館は、ふとい材木を切り組んだ剛堅素朴なもので、真田昌幸は、ふと、かつて古府中にあった武田信玄の居館を想い起こした。
（よう、造りが似ている……）
のである。
家具調度は、なかなかに贅沢なもので、一目で、京都渡りのものだとわかった。
先の春日山城主・上杉謙信は、絶え間もない戦陣の反復の中で、二度も京都へのぼり、天皇や朝廷の信頼を得ていたし、
「天下をわが手に……」
のぞもうとする直前に、病歿してしまった。
武田信玄が歿してより、五年後のことである。
謙信亡きのちの上杉家には、内紛が生じた。
上杉景勝の父・政景は、上杉謙信の従兄にあたる。

妻子をもたぬ謙信は、この従兄の子を養子に迎えたが、さらに、関東の北条家からも養子を迎え、これを景虎と名づけた。

それで、養子の二人が家督を争い、景虎は、ついに自殺してしまったので、景勝が上杉家の当主となったのだ。

故謙信は、どちらかというと小柄な体軀のもちぬしであったそうな。

しかし、三十一歳の上杉景勝は威風堂々たる体軀で、しかも越後の太守としての品格もあり、立派な顔立ちであったものだから、

「あの折は、二人を見くらべて、何やら、父上がたよりなく見えた」

のちに、真田源二郎が向井佐平次に、苦笑と共にもらしている。

安房守昌幸も小柄であったし、源二郎にいわせると、

「弾正少弼にくらべると、そりゃ年も上だが、何やら爺穢うてな……」

なのだそうな。

昌幸は、すこしの弁解もせず、率直に、いまの真田家の危機を上杉景勝へ語った。

景勝は、いちいちうなずき、

「安房守には、何度も煮え湯をのまされたわしへ、そのような申し出は虫がよすぎる」

と、いった。

昌幸は、返す言葉もない。

「なれど、戦国の世の常ともいえよう。ゆるしがたいこととはおもうが、こらえてつかわそ

う」

「まことでござるか？」

昌幸も源二郎も、これほど簡単に事が運ぼうとはおもっていなかった。

景勝としては、いろいろの条件を出すにちがいない、と、覚悟をしていたのである。

たとえば、真田家と同盟をむすぶかわりに、源二郎を人質に受け取るのはむろんのこと、

「砥石へ、上杉の城代をさし向けたい」

といわれても、

（仕方もないこと……）

だと、昌幸は、ひそかに考えていたほどなのだ。

景勝は、同盟をむすんでも援軍は出せぬといった。

もとより、昌幸は、そのことをわきまえている。

いま、四国を攻略している羽柴秀吉は、どこまでも徳川家康との和平をのぞんでいるのだ。

秀吉は、二度と、家康を相手に戦争はしたくない。

羽柴秀吉の傘下に入っている上杉景勝としては、したがって、上田へ攻めかけて来る徳川軍と、

「戦するわけにはまいらぬ」

のであった。

「蔭ながら、ちからになろう。存じ寄りもある」

景勝は、そういってくれた。
「かたじけのうござる」
さすがに、真田昌幸も、ほっ、としたらしい。
もとより、居館の内に、真田父子を暗殺しようとする気配などは、まったく感じられなかった。
源二郎も、感動していた。
真田父子の感動が層倍のものとなったのは、そのつぎに昌幸が、源二郎を人質として、このまま春日山へ残して行くことを、上杉景勝に告げたときであった。
景勝は、破顔し、
「それは、のちのことじゃ」
「何と、おおせられる？」
「上田の城へ立てこもり、徳川・北条の大軍を引き受けようというのだから、まず勝ち目はあるまい、と、さようにおもうが当然であろう」
「いかさま」
「なれば、父子が共に戦い、共に討死なされ」
「は……」
真田昌幸の顔が、紅潮した。
戦ってのち、もし生き残れたときにこそ、源二郎を人質として受け取ろう、と、景勝がい

ってくれたのである。
源二郎の躰も、燃えるように熱くなった。
（これは、偉い大将だ）
と、おもわざるを得ない。
「かたじけのうござる」
昌幸の声は、深い感動に、むしろくもっていた。
「おもう存分に戦われよ」
「はい」
「源二郎殿は、何歳になるか？」
「十九歳に相なりまいた」
「ふむ……」
うなずいた上杉景勝が、無造作に、たばさんでいた短刀を抜き取り、源二郎へ、
「つかわそう」
と、いった。
どうも、あまり調子がよく運びすぎるではないか。
父子は、夢を見ているのではないか、と、顔を見合った。
真田昌幸と源二郎が、無事に、居館の外へあらわれたのを見て、供をして来た家来たちは、むしろ茫然となった。彼らは、いずれも、死をまぬがれまいと考えていたのだ。

上田へもどる途々に、昌幸が、
「源二郎。今日のことを忘れまいぞ」
「はい」
「わしも、忘れぬ」
「弾正少弼が、あのようなお人だとはおもいませぬでした」
「わしも、よ」
うなずいた安房守昌幸が、
「もし、わしが今日の弾正少弼であったら、むざむざと、真田父子を帰したりはしなかったやも知れぬな……」
沼田城を奪還にあらわれた沼田平八郎を騙し討ちにすることなど、平気に仕てのけた真田昌幸だけに、今度の上杉景勝の大様なあつかいには、つくづくとまいってしまったらしい。
「わしは忘れぬ」
もう一度、昌幸はいった。
この、上杉景勝との対面で、昌幸・幸村父子が受けた影響は、意外に強烈で、深いものとなった。
それは、このときから十五年後になって、はっきりと、かたちになってあらわれるのである。
そのことを、昌幸と源二郎は、まだ、想ってもみなかった。
「父上。上田のものたちは、このことを聞いて、おどろきましょう」

「うむ、うむ……」
昌幸は、元気一杯に馬腹を蹴り、
「急げ、急げ！」
と、叫んだ。

八

上田城へ帰った真田昌幸一行を、真田家の人びとは歓呼をあげて迎えた。
すでに、先駆の騎士が吉報をもたらしていたけれども、小山田茂誠などは、
「殿の顔を、この目でたしかめるまでは……」
信じきれなかったらしい。
向井佐平次は、上田へ到着した源二郎の馬側へ駆け寄り、
「源二郎様……」
いったなり、泪がふきこぼれてくるのを、どうしようもなかった。
三年の間に、主従の愛情が、そこまで育まれていたことになる。
佐平次ともよの夫婦は、すでに、男の子をもうけている。
今年の正月十七日に、もよが、この子を産んだとき、佐平次の請いをいれ、源二郎が名をつけてくれた。
「佐平次の一字をとって、佐助はどうだ。向井佐助、よい名ではないか」

と、源二郎が満足げに、
「名づけ親になったのは、これがはじめてのことよ」
いろいろな祝いの品を、佐平次夫婦にくれたものである。
さて……。
上田へ帰城した真田昌幸は、岩櫃の源三郎信幸のもとへ使者を飛ばした。
これは、吾妻の山中に孤立してしまっている羽尾源六郎を、安全に、春日山へもどすためである。
昌幸は、上杉景勝からの書状を預かって来ており、源三郎にこれをもたせ、丸岩城に立てこもっている羽尾源六郎と交渉させることにした。
その日の夜更けに……。
草の者の奥村弥五兵衛が、上田へ馳せつけて来た。
壺谷又五郎の密使としてである。
安房守昌幸は、寝所へ入っており、泥のようなねむりに落ちこんでいたけれども、
「草の者が馳せつけてまいったときは、いかなるときでも、すぐさま会わねばならぬ」
かねがね、昌幸から申しつけられているので、侍臣が昌幸の寝間へおもむいた。
昌幸は、〔地炉ノ間〕へ出て来て、弥五兵衛に会った。
「苦労であったな」
「いえ、何の……」

「浜松からか？」
「はい」
「近頃は何かと、むずかしくなったことであろうな？」
「はい」
真田家と徳川家の間が不穏になってからは、昌幸の弟で、いまは徳川に仕えている隠岐守信尹も、うかつなまねはできない。
これまでのように、草の者が自由に出入りをするわけにもゆかず、壺谷又五郎も非常な苦労に堪えて、諜報活動をおこなわねばならなかった。
しかし、早くも、奥村弥五兵衛は、隠岐守信尹の屋敷へ入りこみ、小者となって奉公をしていたのである。
したがって、弥五兵衛が得た情報は、真田信尹から出たものであった。
信尹は、密書などをしたためずに、口頭で、この情報を弥五兵衛へつたえ、
「上田の兄上に、このことを告げたならば、二度と浜松へもどるな」
と、念を入れたそうな。
そこで弥五兵衛は、夜陰、信尹の屋敷を脱け出し、駿府に隠れている壺谷又五郎にこのことを告げておき、ただちに上田へ駆けつけて来たのだ。
で、その情報というのは、どのようなものであったか……。
実に、これは、真田昌幸の疲労も睡気も、一度に吹き飛んでしまうかのような、衝撃的な

ものであった。

徳川家康が、

「急死したらしい……」

と、いうのである。

死なぬまでも、

「死にかけていることは、たしかなことらしい」

と、隠岐守信尹が、ひそかに告げてよこしたのである。

それによると、徳川家康は甲州の巡視が終わりかけたころから、背中の急所に癰ができたらしい。

化膿球菌が体内に侵入して発生する、この悪性の腫物の恐ろしさはいうまでもない。いのち取りになることもめずらしくないのだ。

そこで、家康は急遽、浜松城へ帰って来た。

しかし、それは、家康が遺体になって帰還したのであるという風評が、浜松城下にながれているというのであった。

浜松城内外の警備は厳重をきわめている。

隠岐守信尹は、上田の兄と主人の家康とが手切れとなったので、みずから遠慮をし、屋敷へ閉じこもったまま、一歩も外へ出てはいないが、同じ城下の風評が耳へ入らぬことはない。

夜が更けてから、何度も、奥村弥五兵衛は屋敷を出て、城下を探りまわった。

浜松城内へは、到底、潜入できぬ。それほどに、警戒がきびしい。城内の奥深いところの実状は、徳川の家臣たちの大半が見ていない。かぎられた少数の重臣たちのみが、それを知っている。

唐人（中国人）の医師が、ひそかに招かれたとか、

「そのときは、すでに殿の息が絶えておられたらしい……」

とか、さまざまな憶測がなされている。

隠岐守信尹は、

「ともあれ、徒事でないことは、たしかでござるが、兄上にも早まって念慮なされては困ります。ただ、われらは浜松城下の風評をおつたえするのみ」

と、つたえてよこした。

徳川の家来になっていても、そこは、さすがに、真田の家のことが気にかかっているのであろう。

さらに信尹は、このたび、徳川家康が真田昌幸に対し、一方的に沼田返還をせまったことにつき、家康としては、そのようなことをしたくはなかったにちがいない、といってよこした。

だが、昌幸を納得させるだけの条件をととのえる間がなかった。

つまり、それほどに、小田原の北条父子からの追求が烈しく、強く、急であったからだ。

実のところ、いまの徳川家康は非常に、

「むずかしい立場にある……」

と、いえよう。

羽柴秀吉に痛打をあたえたといっても、それによって、秀吉の勢力がおとろえたというわけではない。

現に秀吉は、大軍を発して紀州を平定し、さらに四国を攻略しつつあるではないか。

秀吉の声望は、ふたたび、決定的にゆるがぬものと、なってきつつあった。

なんといっても、秀吉が天皇おわす日本の首都をおさめ、諸国大名の中心となる勢力を拡大しつつあるという点では、東海から甲州を手中におさめた徳川家康も、およばぬことなのだ。

北条氏政・氏直の父子は、家康の態度が煮え切らぬとあれば、秀吉と結び、ふたたび甲州へ侵入する構えをしめしはじめた。

このため家康も、急ぎ、甲州巡視をおこない、万事に遺漏ないことを期したのであろう。

隠岐守信尹は、

「兄上にも、まず、こうした三河守様の御心事をわきまえていて頂きたい」

と、つたえてきた。

その上で、いま一度、徳川家の存在と三河守家康を見直していただきたい、というのである。

だが、それも家康が存命であればのことである。

もしも、家康急死のことが事実ならば、
「自分も、すぐさま、浜松を引きはらい、上田へ駆けつけるつもりでござる」
と、信尹は告げてよこした。
「ふうむ……」
すべてを聞き終えたとき、真田昌幸は、あきらかに興奮していた。
「弥五兵衛は、何とおもうぞ？」
「さて……」
弥五兵衛も、うかつに返事はできなかった。
「三河守は死んだとおもうか、どうじゃ？」
死んだからといって、すぐに公表されるものではない。
家康の死を、でき得るかぎり押し隠し、重臣たちが善後の策をはかることは当然なのだ。
家康が、もっとも頼みにおもっていた長男の信康は、六年前に、武田勝頼に内応したという嫌疑をうけ、織田信長の命により切腹させられてしまった。
二男の秀康はまだ十二歳の少年にすぎぬ。
三男に生まれ、後年、徳川二代将軍となる秀忠は、このとき、わずかに七歳である。
結束が堅い徳川の家臣団にとっても、いまここで、主人を失えば、主家をこのままに、存続させて行くことはむずかしい。
奥村弥五兵衛は、

（三河守は死んだ……）

と、看ているが、いま、ここで、安房守昌幸の問いかけに対しては、

「しかと、はかりかねまする」

とのみ、こたえた。

あまりの大事ゆえ、草の者の自分が独断した返事をすべきではないと、考えたからだ。

このときの奥村弥五兵衛は、賢明であった。

駿府にいた壺谷又五郎さえも、弥五兵衛の言葉を聞いたとき、

「三河守は、おそらく、死んでいよう」

と、いったほどなのだ。

その又五郎の言葉を、

「上田の殿へ、おつたえしてよろしゅうござるか？」

と、弥五兵衛が尋くや、又五郎は言下に、

「死んだと申しているのではない。死んだのではあるまいか？……と、おもうているのだ。その、おれのおもいを殿に申しあぐるのなら、かまわぬ」

そういったのである。

九

真田昌幸は、

（たとえ、家康が死なぬとしても、いのちにかかわる重病にかかっていることは、たしかである）

と看た。

当分の間、徳川軍の来攻はないとおもってよい。

そのかわり、北条父子の沼田攻撃は早まるにちがいない。

徳川の援助がなければ、北条父子も上田まで攻めて来まい。

まず、彼らが強い執着をもっている上州・沼田へ攻めかけて来よう。

もし、家康が死んだとなると、羽柴秀吉が割って入り、北条父子の侵略を自由にはさせまい。

昌幸は、すぐさま、岩櫃の源三郎信幸へ急使を走らせた。

奥村弥五兵衛は、二夜を上田城に泊まるや、駿府へ引き返して行った。

この間に弥五兵衛は、壺谷又五郎から命じられた事を、草の者・鞍掛八郎へつたえている。

甲州境の忍び小屋にも、

「人を入れよ」

と、又五郎は指図してよこした。

それに、京・大坂から近江、浜松から駿府、小田原へかけて、又五郎が苦心して設営した忍び小屋の所在や、連絡の方法などを、弥五兵衛は八郎に、いい残して去った。

岩櫃城代の矢沢但馬守頼康は、すでに、上田へ到着していた。

頼康も、昌幸と同意であった。
「一時も早く、沼田の備えをかためねばならぬ」
このことである。
矢沢頼康を、上田へとどめておき、
「いざとなれば、おれが沼田へ行く」
と、昌幸は、気負い立った。
岩櫃を経由して、上田と沼田との間を、密使が何度も往復した。
夏の日ざしは、いよいよ耀(かがや)きを増し、昼夜の区別なく、あつめられた人夫や家来たちが、上田城内外の防備をかためるための工事に、はたらいている。
矢沢頼康の父で、沼田城代をつとめている薩摩守頼綱(さつまのかみよりつな)は、
「殿は、上田を出られてはなりませぬ」
と、いってよこした。
「殿が沼田へまいられても同じことでござる。それがしが殿と同じように、沼田を守りぬくことゆえ……」
老いて尚(なお)、矢沢頼綱は、沼田防衛に対して、絶対の自信をもっているのである。
そこで昌幸は、岩櫃から約五百の兵を、沼田へ移すことにし、これを矢沢頼康にはかると、
「それがよいとおもわれます」
「源三郎も、共に、沼田へさし向けようか、どうじゃ？」

「相なりませぬ」
きっぱりと、頼康がこたえた。
「源三郎様は、岩櫃の総大将におわします」
「む……」
「殿の、大切な御世嗣にござる。沼田ごとき、父の薩摩守で充分でござる」
「さようか……」
昌幸は、何故か、素直であった。
今年に入ってから真田昌幸は、何かにつけて、源三郎を重く見るようになってきているようだ。
羽尾源六郎を越後の上杉景勝のもとへ帰すことになり、源三郎信幸は、みずから丸岩城へ出向いて、交渉をおこなったが、羽尾は、源三郎と語り合ううち、自分の子のように若い源三郎がすっかり気に入ってしまい、
「越後と上田とが、このようになったからは、それがしも、上田なり沼田なりへおもむき、合戦の手つだいをつかまつろうか……」
などと、たとえ冗談にもせよ、いい出したりしたそうな。
上杉景勝は、羽尾源六郎が春日山へ到着するや、すぐに、使者を上田へ送り、真田昌幸が自分の傘下に入ったことを、早速、大坂の羽柴秀吉へつたえたところ、秀吉から、
「それは大変によかった。何事にも、ちからを合わせるがよい」

との返事がとどいたことを知らせてよこした。
秀吉は、四国へ出陣していない。
大坂城にいて、総指揮をとっているらしい。悠然たるものだ。
「まず、これでよい」
と、真田昌幸は、よろこんだ。
羽柴、上杉、真田のラインが確立されたからである。
信州から越後へ、越後から北陸道を経由して近江、京、大坂へ……と、この同盟ラインの間には、邪魔をする敵がいまは一人もいないのである。
真田軍の背面は、こうして、安全が保たれることになった。
（これで、三河守が本当に死んでいてくれたら、もはや、いうことは何一つないわ）
と、昌幸はおもっていた。
昌幸は、家康重病の情報を、上杉へ知らせていない。
上杉景勝もまた、昌幸への書状にはそのことにふれていなかった。
景勝の耳へ、そのことはとどいているのであろうか……。
壺谷又五郎からは、その後、何の情報も入って来ない。
昌幸は、上田の草の者を上州へ出して探らせて見ると、小田原の北条軍が諸方の城や砦に、すこしずつ集結し、戦備をととのえていることがわかった。
さて……。壺谷又五郎が突然、上田城へあらわれたのは、或る日の夕暮れで、烈しい雷雨

の最中であった。
　安房守昌幸は、〔地炉ノ間〕へ駆けて行き、又五郎の顔を見るや、
「待ちかねたぞ、又五郎」
「は……」
「三河守は、どうじゃ？」
「それが……」
　又五郎が、にやりとした。
「死んでいたのか、やはり……」
「いや……」
「何……？」
「生き返ってしまい申した」
「生き、返ったと……」
「いったんは、死にかけたのでござる。残念、いま一息のことでございましたそうな……」
「癒ったのか……」
「はい。唐人の医師が、異国渡りの膏薬と自慢の灸をほどこし、それが効いたのかして、腫物が吹っ切れ、膿汁が流れ出で、たちまちに快癒したそうでございます。浜松城下は、いま生き返ったようになりました」
「ふうむ……」

真田昌幸は何ともいえぬ眼(め)の色になり、天井を見上げていたが、ややあって、

「やれやれ……」

つぶやいてから又五郎と眼を見合い、それから二人とも、声をあげて笑い出したのである。

（第三巻につづく）

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは新仮名づかいに改める。

二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。

三、常用漢字表、人名用漢字別表に掲げられている漢字は、原則として新字体を使用する。

四、年少の読者をも考慮し、難読と思われる漢字や固有名詞・専門語等にはなるべく振仮名をつける。

池波正太郎著

忍者丹波大介

関ケ原の合戦で徳川方が勝利し時代の波の中で失われていく忍者の世界の信義……一匹狼となり暗躍する丹波大介の凄絶な死闘を描く。

池波正太郎著

男（おとこぶり）振

主君の嗣子に奇病を侮蔑された源太郎は乱暴を働くが、別人の小太郎として生きることを許される。数奇な運命をユーモラスに描く。

池波正太郎著

俠客

「お若えの、お待ちなせえやし」の幡随院長兵衛とはどんな人物だったのか——旗本水野十郎左衛門との宿命的な対決を通して描く。

池波正太郎著

食卓の情景

鮨をにぎるあるじの眼の輝き、どんどん焼屋に弟子入りしようとした少年時代の想い出など、食べ物に託して人生観を語るエッセイ。

池波正太郎著

闇の狩人（上・下）

記憶喪失の若侍が、仕掛人となって江戸の闇夜に暗躍する。魑魅魍魎とび交う江戸暗黒街に名もない人々の生きざまを描く時代長編。

池波正太郎著

上意討ち

殿様の尻拭いのため敵討ちを命じられ、何度も相手に出会いながら斬ることができない武士の姿を描いた表題作など、十一人の人生。

池波正太郎著

散歩のとき何か食べたくなって

映画の試写を観終えて銀座の〔資生堂〕に寄り、はじめて洋食を口にした四十年前を憶い出す。今、失われつつある店の味を克明に書留める。

池波正太郎著

闇は知っている

金で殺しを請け負う男が情にほだされて失敗した時、その頭に残忍な悪魔が棲みつく。江戸の暗黒街にうごめく男たちの凄絶な世界。

池波正太郎著

雲霧仁左衛門（前・後）

神出鬼没、変幻自在の怪盗・雲霧。政争渦巻く八代将軍・吉宗の時代、狙いをつけた金蔵をめざして、西へ東へ盗賊一味の影が走る。

池波正太郎著

さむらい劇場

八代将軍吉宗の頃、旗本の三男に生れながら、妾腹の子ゆえに父親にも疎まれて育った榎平八郎。意地と度胸で一人前に成長していく姿。

池波正太郎著

おとこの秘図（上・中・下）

江戸中期、変転する時代を若き血をたぎらせて生きぬいた旗本・徳山五兵衛――逆境をはねのけ、したたかに歩んだ男の波瀾の絵巻。

池波正太郎著

忍びの旗

亡父の敵とは知らず、その娘を愛した甲賀忍者・上田源五郎。人間の熱い血と忍びの苛酷な使命とを溶け合わせた男の流転の生涯。

池波正太郎著

日曜日の万年筆

時代小説の名作を生み続けた著者が、さりげない話題の中に自己を語り、人の世を語る。手練の切れ味をみせる〝とっておきの51話〟。

池波正太郎著

真田騒動
―恩田木工―

信州松代藩の財政改革に尽力した恩田木工の生き方を描く表題作など、大河小説『真田太平記』の先駆を成す〝真田もの〟5編。

池波正太郎著

男の作法

これだけ知っていれば、どこに出ても恥ずかしくない！　てんぷらの食べ方からネクタイの選び方まで、〝男をみがく〟ための常識百科。

池波正太郎著

剣客商売

白髪頭の粋な小男・秋山小兵衛と厳のように逞しい息子・大治郎の名コンビが、剣に命を賭けて江戸の悪事を斬る。シリーズ第一作。

池波正太郎著

剣客商売②

辻斬り

闇の幕が裂け、鋭い太刀風が秋山小兵衛に襲いかかる。正体は何者か？　辻斬りを追跡する表題作など全7編収録のシリーズ第二作。

池波正太郎著

あほうがらす

人間のふしぎさ、運命のおそろしさ……市井もの、剣豪もの、武士道ものなど、著者の多彩な小説世界の粋を精選した11編収録。

池波正太郎著

おせん

あくまでも男が中心の江戸の街。その陰にあって欲望に翻弄される女たちの哀歓を見事にとらえた短編全13編を収める。

池波正太郎著

男の系譜

戦国・江戸・幕末維新を代表する十六人の武士をとりあげ、現代日本人と対比させながらその生き方を際立たせた語り下ろしの雄編。

池波正太郎著

味と映画の歳時記

半生を彩り育んださまざまな〝味と映画〟の思い出にのせて、現代生活から失われてしまった四季の風趣と楽しみを存分に綴る。

池波正太郎著

剣客商売③ 陽炎の男

隠された三百両をめぐる事件のさなか、男装の武芸者・佐々木三冬に芽ばえた秋山大治郎へのほのかな思い。大好評のシリーズ第三作。

池波正太郎著

黒白（上・下）

―剣客商売番外編―

若き日の秋山小兵衛に真剣勝負を挑んだ小野派一刀流の剣客・波切八郎。対照的な二人の剣客の切り結びを描くファン必読の番外編。

池波正太郎著

映画を見ると得をする

なぜ映画を見ると人間が灰汁ぬけてくるのか……。シネマディクト（映画狂）の著者が、映画の選び方から楽しみ方、効用を縦横に語る。

池波正太郎著

真田太平記（一～十二）

天下分け目の決戦を、父・弟と兄とが豊臣方と徳川方とに別れて戦った信州・真田家の波瀾にとんだ歴史をたどる大河小説。全12巻。

池波正太郎著

編笠十兵衛（上・下）

幕府の命を受け、諸大名監視の任にある月森十兵衛は、赤穂浪士の吉良邸討入りに加勢。公儀の歪みを正す熱血漢を描く忠臣蔵外伝。

池波正太郎著

谷中・首ふり坂

初めて連れていかれた茶屋の女に魅せられて武士の身分を捨てる男を描く表題作など、本書初収録の3編を含む文庫オリジナル短編集。

池波正太郎著

まんぞくまんぞく

十六歳の時、浪人者に犯されそうになり家来を殺されて、敵討ちを誓った女剣士の心の成長の様を、絶妙の筋立てで描く長編時代小説。

池波正太郎著

剣客商売⑥

新妻

密貿易の一味に監禁された佐々木三冬を秋山大治郎が救い出すと、三冬の父・田沼意次は嫁にもらってくれと頼む。シリーズ第六作。

池波正太郎著

秘伝の声（上・下）

師の臨終にあたって、秘伝書を土中に埋めることを命じられた二人の青年剣士の対照的な運命を描きつつ、著者最後の人生観を伝える。

池波正太郎著

池波正太郎の銀座日記〔全〕

週に何度も出かけた街・銀座。そこで出会った味と映画と人びとを芯に、ごく簡潔な記述で、作家の日常と死生観を浮彫りにする。

池波正太郎著

黒幕

徳川家康の謀略を担って働き抜き、六十歳を越えて二度も十代の嫁を娶った男を描く「黒幕」など、本書初収録の4編を含む11編。

池波正太郎著

剣客商売⑦ 隠れ簑

盲目の武士と托鉢僧。いたわりながら旅を続ける年老いた二人の、人知をこえた不思議な絆を描く「隠れ簑」など、シリーズ第七弾。

池波正太郎著

原つぱ

旧作の再上演を依頼された初老の劇作家の心の動きと重ねあわせながら、滅びゆく東京の街への惜別の思いを謳った話題の現代小説。

池波正太郎著

ないしょ ないしょ
―剣客商売番外編―

つぎつぎと縁者を暗殺された娘が、密かに習いおぼえた手裏剣の術と、剣客・秋山小兵衛の助太刀により、見事、仇を討ちはたすまで。

池波正太郎著

剣客商売⑧ 狂乱

足軽という身分に比して強すぎる腕前を持ったがゆえに、うとまれ、踏みにじられる侍の悲劇を描いた表題作など、シリーズ第八弾。

池波正太郎著

剣客商売④

天魔

「秋山先生に勝つために」江戸に帰ってきたとうそぶく魔性の天才剣士と秋山父子との死闘を描く表題作など全8編。シリーズ第四作。

池波正太郎著

むかしの味

人生の折々に出会った〔忘れられない味〕。それを今も伝える店を改めて全国に訪ね、初めて食べた時の感動を語り、心づかいを讃える。

池波正太郎著

あばれ狼

不幸な生い立ちゆえに敵・味方をこえて結ばれる渡世人たちの男と男の友情を描く連作3編と、『真田太平記』の脇役たちを描いた4編。

池波正太郎著

ドンレミイの雨

パリの古き良き居酒屋〔B・O・F〕の老主人ジャンとの心のかよい合いを描いた短編「ドンレミイの雨」に、三つの海外紀行を収録する。

池波正太郎著

剣客商売⑤

白い鬼

若き日の愛弟子を斬り殺された秋山小兵衛が、復讐の念に燃えて異常な殺人鬼の正体を追及する表題作など、大好評シリーズの第五作。

池波正太郎ほか著

剣客商売読本

シリーズ全十九冊の醍醐味を縦横に徹底解剖。すりきれるほど読み込んだファンも、これから読もうとする読者も、大満足間違いなし！

新潮文庫最新刊

辻　仁成著

そこに君がいた

君と過ごした煌めく時間は、いつまでも僕のいちばんの宝物だ――。大切な人への熱い想いがほとばしる、書き下ろし青春エッセイ集。

江國香織著

神様のボート

消えたパパを待って、あたしとママはずっと旅がらす…。恋愛の静かな狂気に囚われた母と、その傍らで成長していく娘の遥かな物語。

柳美里著

男

時に私を愛し、時に私を壊して去っていった男たち。今、切ない「からだ」の記憶が鮮やかに蘇る。エロティックで純粋な性と愛の物語。

伊集院静著

海峡

―海峡　幼年篇―

かけがえのない人との別れ。切なさを噛みしめて少年は海を見つめた――。瀬戸内の小さな港町で過ごした少年時代を描く自伝的長編。

吉本ばなな著

キッチン

海燕新人文学賞受賞

淋しさと優しさの交錯の中で、世界が不思議な調和にみちている――〈世界の吉本ばなな〉のすべてはここから始まった。定本決定版！

北村薫著
おーなり由子絵

月の砂漠をさばさばと

9歳のさきちゃんと作家のお母さんのすごす、宝物のような日常の時々。やさしく美しい文章とイラストで贈る、12のいとしい物語。

新潮文庫最新刊

おーなり由子著

きれいな色とことば

心のボタンをすこしひらくだけで見えてくるもの——色とりどりのビーズのようなエッセイ集。文庫オリジナルカラーイラスト満載。

銀色夏生著

ひょうたんから空

ミタカ シリーズ 2

家出中のパパが帰ってきた。そこでみんなでひょうたんを作った——「ミタカくんと私」に続く、ナミコとミタカのつれづれ日常小説。

小林恭二著

カブキの日

三島由紀夫賞受賞

世界注視のカブキ界を巡る陰謀とは？ 舞台裏の「闇」に迷い込んだ美少女・蕪の行方は？ 巨大船舞台で運命の「顔見世」の幕が開く。

重松清著

日曜日の夕刊

日常のささやかな出来事を通して蘇る、忘れかけていた大切な感情。家族、恋人、友人——、ある町の12の風景を描いた、珠玉の短編集。

塩野七生著

ハンニバル戦記

ローマ人の物語 3・4・5

(上・中・下)

ローマとカルタゴが地中海の覇権を賭けて争ったポエニ戦役を、ハンニバルとスキピオという稀代の名将二人の対決を中心に描く。

山本夏彦著

オーイどこ行くの

—夏彦の写真コラム—

日本をダメにしたのは誰か。そりゃ大蔵省、ゼネコン、日教組に文部省。巷は日本語も怪しい親子ばかりになった。名物コラム絶好調。

新潮文庫最新刊

嵐山光三郎著

追悼の達人

文士は追悼に命を賭ける。漱石から三島まで、明治、大正、昭和の文士四十九人への傑作追悼を通し、彼らの真実の姿を浮き彫りにする。

和田迪子著

万能感とは何か
「自由な自分」を取りもどす心理学

人付き合いの悩みには、必ず万能感の罠がある！　臨床心理の視点から日本人の行動力の弱さを指摘、真に自由な生き方を提案する。

大槻ケンヂ著

オーケンののほほん日記
ソリッド

死の淵より復活したオーケン、しかし目の前に新たな試練が立ちはだかる――。ロックに映画に読書に失恋。好評サブカル日記、第二弾。

高橋大輔著

ロビンソン・クルーソーを探して

『ロビンソン漂流記』には実在のモデルがいた！　三百年前に遡る足跡を追って真の〝ロビンソン〟の実像に迫る冒険探索ドキュメント。

石原清貴著
沢田としき絵

「算数」を探しに行こう！
「式」や「計算」のしくみがわかる五つの物語

算数が苦手な子供とおとな、そしてすべての世代の数学好きに贈る算数発見物語。現役の小学校の先生が処方した、算数嫌いの特効薬。

D・ケネディ
中川聖訳

幸福と報復
（上・下）

赤狩り旋風吹き荒れる終戦直後のマンハッタンを焦がす壮絶な悲恋――。偶然がもたらす運命に翻弄される男女を描き切る野心作。

真田太平記（二）秘密

新潮文庫



い－16－35
全12冊

昭和六十二年九月二十五日　発行
平成十四年六月十五日　三十八刷

著者　池波正太郎
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六―五四四〇
読者係（〇三）三二六六―五一一一

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

印刷・二光印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
© Toyoko Ikenami 1975　Printed in Japan

ISBN4-10-115635-2 C0193


9784101156354


1920193006674

定価：本体667円(税別)

天下統一を目前にした織田信長が本能寺に討たれたことから、諸雄は再びいろめきたつ。上・信二州に割拠する真田昌幸は、関東の北条、東海の徳川、越後の上杉と対峙しつつ、己れの命運を上田築城に賭けた。一方、昌幸の二人の子供、兄の源三郎信幸と弟の源二郎幸村、そして従兄弟の樋口角兵衛をめぐる真田家の複雑に入り組んだ血筋が、小国の行方に微妙な影を落としてゆく。

ISBN4-10-115635-2

C0193 ¥667E